
Ist Kalan ~ 虚空に羽ばたく少女 ~

内臓破裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I s t K a l a n 　　虚空に羽ばたく少女

【Nコード】

N 6 2 2 7 U

【作者名】

内臓破裂

【あらすじ】

ハイジャックに巻き込まれ、一人だけ命を落とした主人公（男）は神の計らいで生前GMを務めていたオンラインゲームにそっくりな世界に送り込まれてしまう。

魔王を倒して世界を救え？ 知らないな、そんな事より俺のw k t kを返せ！ 女体化したらハーレム作れないだろ！？

G M パワーを手に入れた元・G M の主人公が全身全霊で救世する、
(魔王にとって) 夢も希望も微塵も無い異世界転生ファンタジー。

最終更新日 10月2日——インヴェルノ・リメイク（前書き）

ネタバレしないように細心の注意を払っていますが、それでもネタバレする危険性がある極めてデンジャラスな2974文字です。

最終更新日 10月2日——インヴェルノ・リメイク

このページは（表向きの）キャラ設定とイメージ画像を載っけておく為の空間です。

ですがコレはあくまでも書いた人のイメージですので、皆様のイメージと違う可能性がおおいにあります。

ですので、このページに載せられた粗末な出来の図形を見て「俺が妄想した。。。はこんなじゃねーよ！」と嘆かれても責任は一切おいかねます。

クロニカ「そうですか、見たいのですか、見たいのですね——では、衝撃の真実を一挙にご覧下さい」

カラン・フェミス——クロワール

> i 3 2 3 6 5 — 3 5 4 6 <

享年：20歳 外見年齢：15歳

GM + バグ職 + 不死身 + レベルカンスト レベル 255 の規格外。

本来の姿はフッサフサな無限竜だが、エターナルドラゴン 人間形態を取るとみてくれだけは可愛いハーフエルフの少女になる。

本能のまま行動しても事態が悪い方に転ばない、恐ろしい勘と強運の持ち主。

その為只者ではないと周りから誤認されるが、当の本人は余り深く考えない呑気——もといぶっ弛んだ思想の持ち主である。

炎に多大なトラウマを抱えると同時に家族と言う単語を聞くと激しい自己嫌悪に陥る。

転生早々無意識に人間を捨ててる、非常識の権化。

インヴェルノ・カラヴェーナ

> i 3 2 2 7 3 — 3 5 4 6 <

年齢：15歳

感情表現が乏しい、身寄りのないハーフエルフの少女。

見る分には無害だが、近寄ったり、触れようとするとも猛反撃してくる上、誰に対しても拒絶的な態度を取っているので、周りからは完全に孤立されている。

極力人との関わりあいを避ける反面、恩義を感じた相手には命がけで恩返しをしようとする、ひたむきな一面を持つ。

戦いを好まない——だからと言って平和主義でもない——性格で、ギルドには顔を出さず、本屋などでアルバイトをして生活費を稼いでいるが、その実力はずば抜けて高く、特に魔法の才能は大魔導師アーケメイジに迫るという。

バレスト・カイン・フェミス

> i 2 9 5 9 1 — 3 5 4 6 <

年齢：外見30代

魔導都市ベオルイル最強の魔導師で、ヴェナトワーディ【炎竜殺しの炎】の異名を持つ

つハーフエルフ。

彼の元で働いてると、いきなり生物兵器を渡されたり、人体実験の実験台にされたり、爆弾を持たされて敵陣に送り込まれたりするが、よくある事なので、気にしたら負けである。

高圧な言動と正気のさだとは思えない行動様式のせいでベオルイル市民から総じて恐れられている。

が、それは人を遠ざけるためにあえてやっている事で、今の情況は彼が自ら望んだ物といえる。

クロニカ

> i 2 9 5 8 8 — 3 5 4 6 <

年齢：外見20代前半

成りたい訳でもなくヴァルディガ魔導学園の校長に選抜された（外見上）エルフの女性。

フェロモンムンムのムチムチボディに明眸皓齒な顔立ちが印象的なすらりとした美人だが、体中に隙間なく刻まれた紫の紋章のせいで全部台無しに。

エターナルドラゴン

真正正銘の無限竜で、永生の代償に『得失』の概念を失い、人並みに嬉しさや悲しさを感じる事が出来なくなった。

そのため見ず知らずの他人に救いの手を差し伸べる事で自分の存在意義を見出そうとするが、死神の様な見た目のせいで初対面の人からほぼ100%警戒される。

そして、あまりにも優しいので実はかなり腹黒ではないかと知り合いかからも総じて警戒されている。

リア・フェミス

> i 2 9 6 9 3 — 3 5 4 6 <

年齢：外見16歳

カランがエウルースで初めて出会った少女。

バレストの娘——つまり貴族令嬢であるため、どっかの野良無限竜と違い、社交の場では父の名に恥じない淑女ぶりを見せ付ける。

ゲームで言う『漢の一本振り』をした、炎魔法特化のメイジで、そのせいか体温が異常に高く、季節に関係なく清楚な感じのワンピースを着用する。

家事全般に強く、おせっかい好きで親切、その上容姿端麗で成績優秀という、ケチの付けようが無い理想的な花嫁。基本的にインドア

派であるが、何故か家を空けている事が多い。

レオニダ・ブローケントウース

> i 2 9 7 5 2 — 3 5 4 6 <

年齢：18歳

獣の様な尻尾に栗色の毛が生えた、狼の耳を持つ獣人の少年。

一度懐に入れた相手は決して裏切らない典型的な獣人であり、獣人である自分を差別せず普通に接してくるカランに好感を持つ。

物質生命体^{エレメント}星霊と心を通わせる事ができる極めて珍しい能力を持ち、場合によってはその力の一端を行使できたりする。

野性味溢れるワイルドな容姿を持つ文字通りの一匹狼であるが、閑があればトーテムを彫り上げてニヤニヤするなど、見かけによらず器用な所があるようだ。

ミラ・ヴェネストウーラ

> i 2 9 8 2 4 — 3 5 4 6 <

年齢：外見17歳

健康的な小麦色の肌と無神経な言動が目立つエルフの少女。

インヴェルノの傍に立つても魔法をぶっ放されない、数少ない人物傍若無人で自由奔放なじゃじゃ馬娘——というキャラを意識して演じており、その素顔は額の痣のせいで疎外され、ベオルイルに亡命したエルフ国家・世界樹アラシャトの第三皇女である。

対象に暗示をかけ、操るエルフの秘術【呪言】^{ウェスパー}の使い手で、自身を持つ、エルフ特有の長い耳に暗示をかける事で1キロ先で落ちた針の音を明確に聞き取れる地獄耳に改造できる。

白い花の人で、インヴェルノ一筋だったが最近はお互いにも百合い感情を向けてる模様。

ノストラ

> i 3 2 3 0 5 — 3 5 4 6 <

年齢：外見25歳

冷静沈着で、礼儀を重んじる青年。

闇討ちを嫌い、どんな相手にでも正面から勝負を挑む戦闘狂——^{バトルマニア}ではなく、武士道精神の持ち主。

しかしそれはあくまでも相手が武器を構えるまでであり、一度戦闘が始まれば時間遮断による「ずっと俺のターン」チート殺法で一方的に勝負をつける。全然フェアじゃない。

時の流れを守る琥珀竜族の一員で、自分に都合のいいように歴史を改竄する魔導師達を裁く内に人間に絶望し、自分達が生きて来た時の流れこそが唯一真理だと信じるようになった。

が、全ての命が魔王によつて蹂躪される定めにある今の時間流に疑問を抱いている節もある。

年頃の少女の裸を見てもなんとも思わない、強靱な精神の持ち主。

ジーク・ハイド

> i 2 9 8 6 9 — 3 5 4 6 <

年齢：24歳

竜殺しの英雄と謳われる、顔の半分が火傷した青年。

元々は人間国家ローデスの奴隷剣士だったが、傭兵団『エイルシエーロ』に買い取られた。

奴隷当然だった自分に傭兵と言う自由を与えた傭兵団団長ヴァンゴーとエレナ夫妻に恩義を感じており、忘れ形見であるアイシャを生涯護り抜く事を誓う。

自身を奴隷にした上、ハーフエルフであるアイシャを奴隷に売り出した人間に深い憎しみを抱き、人間の死ぬ姿が何よりも面白いと言う、捻じ曲がった性格になった。

1・突然ですが、ハイジャックです

Side:ネ申

『日本成田空港行ユキノAA135八間モ無ク出航イタシマス。
マダゴ搭乗デ無イ方ハ……』

「やばいつ！ 乗り遅れる！！」

英語のアナウンスに混じる、微妙に間違ってる日本語を何とか拾い上げると、青年は預ける暇も無く引きずってきた重量オーバーのトランクを忙々とカートに移し、やたら広いジョンエフケネディ空港を全力で疾走した。

曲がりなりにもアメリカ国立大卒。

その後、米国企業に就任し、居を構え今に至る……

と聞きは良いがその実、務めているのはレプトルと言うゲーム会社で、彼の仕事はその会社が運営する「インフィニティ・ウォーズ」と言うMMORPGの運営管理及びバグの解消、そしてチートの弾圧、とどめにプレイヤーのサポート。

一言で言えばゲームの管理者、俗に言うGMで、本人曰く在宅で働け、(バイトの収入を足して)食っていけるほど稼げる楽な(イージョブ)仕事！だそうだ。

そんな青年でも日本生まれの日本育ちだ。

ホームシック
秋葉原にだって行きたい。

クリスマスイヴに合わせ帰国した彼だが、それが後に【ブラッディ・イヴ】と呼ばれる惨事に成る事等、今の彼には知る余地も無かった

……

S i d e : 主人公

ハイジャックは突然起きた。

やることも無く持参したPSPをピコピコやってるいると、隣に座っていた筋肉隆々の男から声を掛けられた。

「ヘイ、ジャパニーズボーイ、これが何だかわかるかい？」

「すみません、解りません。」

丁度ボス戦だった俺はゲームに熱中する余り素っ気無い返事を返してしまう。

「おい、こいつを見てくれ。」

……どう思っつ？」

カチャ、乾いた金属音と共にこめかみに突きつけられた大口径の拳銃。

「物凄く……マカロフPMです」

知識にある物と目の前に突きつけられた物の名を照らし合わせ、わなわな震える唇で言葉を紡ぐと、筋肉男は微かに口元を緩めた。

「ほお、この改造銃をワイルドキャット一発で言い当てるか。

センスあるな、小僧。

所でこんな物騒なもん突きつけられた感想はどうだ？

俺なら迷わず叫ぶね。」

「ハイジャックだ！！！！……とね。」

ハイジャック。

その一言にキャビンの中が静まり返った。

まさかまさかまさか、万歩譲ってハイジャックが発生したとしよう、何でその実行犯がこうして俺の隣に座ってるんだよ？

いや、エンカウント率自体0%じゃないよ？

ただどあいづが座ってるのは動きにくい窓側の席。

ハイジャックするなら通路の方に座るのが定石だろ？

「アンタに恨みは無いが、人質に成って貰うぞ。
さっさと動け。」

……そうか、人質^{おれ}が逆らえないと踏んでの行動なんだ。

未だに実感が湧かず、現実逃避していると、ハイジャック宣言をした時点から立ちっぱなしの筋肉男はブーツで俺のスネを蹴る。

ハッ、と我に帰った俺は無論、慌てて立ち上がるうとしたけど、こう言う時に限ってシャツが絡まったりしてシートベルトが外れない。

マジか。

「ちょっと待ってくれ、シャツが絡まって……！
今外すから！ 待ってくれ……！」

とにかく外す。 焦らず騒がず冷静に外す。

でも外れなかった！

それを見かねたのか男は俺の米神に当てた拳銃の引き金を引いた。

「アバヨ、間抜けなジャパニーズ」

撃鉄と共に下された最期の言葉

バン！！

脳内に冷たく響く騒音と共に俺の意思はブラックアウトした……

体が軽い。

動くたびに軋み、ポキポキと音をたてる骨格や崩壊寸前で凝りに凝りまくった全関節の苦しみから開放される、まるで胎水の中に居るような不思議な浮遊感。

俺は生きてるのか？

……そもそもどうしてこうなった……？

ああ、思い出した。テロリストに脳天ぶち抜かれたんだっけ——それにこの感覚——俺は死んだのか？

いや、案外生きてるかもしれないぞ。

銃で右脳を打ち抜かれても平然と生きてるタフガイがフロリダにいたぐらいだし。

……もう何も考えるな、俺。

下手に知恵熱何か出したら鉛弾が埋まった脳味噌がイカレて今度こそお釈迦だ。

目を覚ますと、辺り一面、蒼白の世界の中に俺はいた。

『おう、起きたか』

日本語——？ ああ、日本の病院か……真っ白なのは、噂に聞く完全無菌室だからか？

という事は目の前でスマイルを浮かべてくるこの朱色の羽織をはおった日系強面巨漢が俺のドクター……の筈無いッ！

「あ、あんた誰……デゴザイマス力？」

口を開いた途端真剣な表情になる巨漢。

ネットを通してヲタ文化しか日本の文化に接触して来なかったため、素で敬語が喋れない俺でさえ鈍った敬語に強制シフトされる——本人は悪気が無いのだろうけど——マジで怖えーよ！

というか皮膚の色がおかしい、ビリジアングリーンだよ？

しかも良く見ると頭から鬼のような角を生やしてるし！

——まさか、閻魔大王か？

シット！ よもや俺は地獄に落ちたとも言うのか？

『誰が閻魔大王だ！』

あんなヨボヨボじいとお間違えるな！

良く見る、この鍛え抜かれた肉からだ体美、天を突く雄々しい角！

軍神タケミナカタとは俺の事だ！！』

「タケミナカタ……」

『おう、タケミナカタだぜ！』

「って誰？」

ずてーん、と効果音がしそうな勢いでずっこけをかます自称軍神。タケミナカタ

『軍神たる俺様の事を知らぬとは、貴様それでも日本男児か！？
シュワちゃんがホワイトハウスの自室で泣いてるぞ！！』

「泣かねえよ！

しかも何でシュワちゃんがアメリカ大統領に昇進してんだよ！
そんでもってさり気無く俺の心読むんじゃねえ！！』

妙なテンションに乘せられて突っ込むタイミングを逃していた俺は
一気に、押し寄せる怒濤の如く、突っ込みを返した。

が、突っ込まれた本人は今までのハジケぶりが嘘の様に真剣な表情
になる。

『あのさーお前、そんな事は如何でも良いんだよ。

カレーパンに霜降り和牛が使われてる位如何でも良いんだよ』

真剣に成ってそれかー！！

「いやいや、絶対良くないから！
ていうか如何でも良いんなら俺にくれ」

『閑話休題、それはさておきお前をここに呼んだ理由をしってるか？』

「さておくな！

……ん？ 俺をここに呼んだ理由……？
確か俺はハイジャックに遭ってそれで……」

『ヘッドショット脳天爆破おつ喰らって死んだ、そうだろ』

「ああ……うすうす気づいてたけど俺ってもしかして死んだのか？」

そうだ、と言わんばかりに手で十字を描くタケミナカタ。

いやいやいや、仮にも大和神話に出てくる神がキリスト教の流儀をやって如何する！？

と突っ込もうとして、気づく。

この神もひとしかして俺に気を使ってるのか？

事故なんかじゃなくあからさまに他殺された俺に気遣って、馬鹿の振りをして、テンションをあげてたのか？

『H A H A H A、やっと気づいたか、明智君。俺様の器のでかさに震えやがれ』

ファック、俺の感動を返しやがれ

『で、本題に戻るがな、お前にはとある世界に転生してもらう。』

「それってつまり、テンプレか？」

『うーん、違うんだなあ、コレが。』

テンプレっつーのは俺様が暇つぶしの為に生きてるお前から魂を抜き取って異界に飛ばして観賞する事を言うんだが——』

何気に酷でえ……

『今回は向こう側の神様が英雄の魂を要望してきたから、正解は俺様の^{テンプレ}娯楽と勇者召喚が合体した新感覚シュミレーション糞ゲーなんだよ、これが。』

いや、実に惜しい！

一千万円まであと少しだったのにね？』

俺はク。ズミリオネアに出場した覚えは無いぞ

「ちょっと待ってくれ、英雄の魂って何で俺が？」

『お前、ハイジャックに遭ったろ？』

そんな時お前が殺られたお陰でテロリストの銃が故障しちゃってな、

お陰で全員助かったわけよ。

自己犠牲^{いぬじに}して他人を救う、っつー条件を満たしたお前は今英霊扱いな訳』

英霊ね……喜んで良いのか複雑すぎるだろ……

「いや、と言うか俺が英霊になったのって単なる偶然だろ？
こんなんで良いのかよ？

だいたいもつと送れそうな、日本を代表する英霊がいるだろ？
宮元武蔵と佐々木小次郎とか」

『いや、駄目だ。これからお前が行くのはファンタジーの世界だ
ぜ？

魔法の概念がない御先祖様たちを向わせても混乱するだけだ。
だからわざわざあっちの事を良く知ってるお前を選んだんだぜ？』

「確かにそうだな……って待て待て待て、あっちの事を良く知って
るってどう言う意味だ？」

ピピッ、

『ぬおおお！もうこんな時間か、とある魔○の禁書目録を観なけ
れば！

とにかくお前異界逝き確定な後の事は向こうの神にでも聞きやがれ、
俺様の面子の為に全身全霊で救世しやがれ、後俺様を知らなかつ
た罰でお前女体化確定！

おらおら、さっさと逝きやがれ！』

果てし無く不調和な機械音と共に腰袋からケータイを取り出したタ
ケミナカタはスクリーンを見て急な用事を思い出したのか胡坐をか
いていた状態からスクツと立ち上がった。

何故にケータイ！？

しかも何故にインデ。クスのストラップがぶら下がっているんだ！？

それより

「ちょっと待て！ 女体か——」

「ごちゃごちゃうるせえー！！」

何処からか盾を取り出して掲げたタケミナカタの一喝を最期に、俺の視界は闇に沈んだ——

今日二度目の浮遊体験。

真っ白な空間と思ったら、今度は宇宙の真っ只中だった。

しかし先ほどと違い、近くに人の気配を感じない——まあ、相手は神だけ——このままじゃ話が進まないし、こっちで待ってるらしい神様を呼んでみる。

「おい！

誰か！ 誰か居ませんかあー？」

うおっ！ ファッキンプリティー ボイス なんだこの糞可愛いな女声は！？

…… ああ、そう言えばタケミナカタ軍神が最期ら辺で抜かしてやがったな、罰として女体化……

何が面白くて俺を女にしたんだよ？

——まさか、ハーレム防止！？

異界転生の醍醐味とも言うべき要素を俺から奪うためにわざと女体化させたのか？

……くそ、今度あつたらアイツのマツチヨなケツを蹴り上げてやる。

それはさておき
閑話休題

「誰も居ないのか？」

直感時間一時間。

何度か呼んでみたが誰も来ない。

流石にこれは無いだろ……英雄召喚なんだろ？

召喚早々宇宙の中で放置プレイかよ……

そう言えば女体化ってどんな体になった？

うんざりしながら心の隅で密かに期待して視線を下に向ける。

そこには丸みを帯びて可愛らしい体、手を当てればプニプニした感触が伝わってくる胸――

「……OK、破壊神に成れと言う事ですな解ります。」

それは何故かと言うと、光を吸い込む漆黒の羽毛、肘や膝から先が稲妻が走ったように白く脱色した肉球付きの手足と、同様に脱色した、宇宙その物を体現した、羽毛に覆われた見ようによっては天使の翼にも見える、優雅な竜の翼

そう、竜だ。

鱗ではなく羽毛が生えてる所をみるとイレギュラーな個体らしい。

拳句の果てに雌竜。
ムンムン

因みにプニプニなのは肉球の方だ、残念だったな。

こんな格好で出来ることと言ったら燃える空に翼をはためかせ、破壊の限りを尽くすこと位だ。

こうなったら自棄だ。よし、殺ろう。　今直ぐ殺ろう。　迷わず殺ろう。

『待つてくれええええ!!』

破壊しちやならん!　断じて成らんのぢやああ!!』

ゴオオオ!

空気の無い真空空間で何故か轟音を殷々と轟かせ、メテオの如く飛

来たそれは、身長50メートルは有ろうかと言う巨大な竜だった。
光を吸い込む漆黒の鱗と稲妻が走ったように白く脱色した四肢と翼、
ついでに尻尾。

想像力次第ではモヒカンのようにも見える、眉間から縦に伸びた三本の角と四肢の先に付いたプニプニ肉球——ではなく鋭い爪。

今度こそ真正銘のドラゴンだ。

……ドラゴンの基準は人それぞれだろうけど、それでもステレオタイプ
のドラゴンなのだ。

「あんたは……クロノラドン、だよな？
それよりも、俺もあんたと同族かよ……」

「ハアハア……そうじゃ、ワシがクロノラドンじゃ。
待たせて済まなかった、距離があり過ぎたのぢや……」

年なのか、目の前で大きく肩を上下させるドラゴン。

彼の名前はクロノラドン。

俺が生前GMを務めていたMMORPG、【インフィニティ・ウォ
ーズ】に登場する無限竜族の長老だ。
エターナルドラゴン

「俺を呼んだ理由ってもしかして……」

「頼む、お前さんの力で世界を救ってくれ！！
と言つか原作ブレイクしてくれええええ！！」

予想ぐらいはしたけど、やっぱそう来たか……

【インフィニティ・ウォーズ】、その名の通り『無限の戦争』な訳だが。

ゲームの舞台となる『エウルース』の世界では、ファンタジーでお馴染みの定命種族——人間、ドwarf、エルフ、獣人、ハーフエルフ以外にも不可抗力と成る5種の竜が存在する。

生命と愛情を司る紅玉竜族、

自然と調和を司る翡翠竜族、

時の流れを守護する琥珀竜族、

水と神秘を司る蒼穹竜族、

そして死と破壊を司る冥界竜族。

基本的にはこの5種の竜は五大竜族と呼ばれ、神に変わって色々な意味で世界の調和を保っていたが、訳も分からず墮落した冥界竜達が冥界への扉を開き、大量のゾンビ軍団をエウルースに召還してしまう。

この世なぞらぬ存在達は疫病と死を引き起こし、遂には人間の一大国であったウルムガットを滅ぼしてしまった。

圧倒的な暴虐に文明が破壊されつつある中、あくまでも世界の調和を司る、神の代行人である五大竜族達は『滅ぶのなら黙って滅べ』、と言わんばかりに人類の手助けをする所か今まで通り強すぎる力を

持つ定命種族の個体を弾圧していく。

もともと勝ち目が薄いと言うのに救世主に成れるかもしれない勇者を次々に殺されていった定命種族達がアンデッドの軍勢にかなう訳が無い。

繁栄を極めた世界が徐々に滅びる過程をプレイヤー達に体験させるのが味噌と言う、洋ゲーならではの鬼畜っぷりだ。

しかし、それだけで売り出せるほど、ゲーム業界も甘くは無い。

バージョンアップを重ねるたびに色々な要素が追加された結果、誕生したのが超少数派、希少動物指定を受けても尚余る無限竜族である。エターナルドラゴン

ある程度時間を渡れる能力と、無限に蘇る能力を持つ彼らはいたずらに滅びの運命を決め付けられた定命種族の未来を救うべく冥界竜族ゴブによって捻じ曲げられた歴史を変えるべく暗躍するが、

どんな理由で有れ、歴史の流れを乱す存在を許さない、時間の流れを死守する頑固派の琥珀龍族イエロードラゴンに妨害され、その上定命種族の社会に紛れ込んでいた琥珀竜イエロードラゴンに唆された定命種族達からも迫害を受け、世界を救おうとしているのに逆に悪者扱いされると言う悲しい種族である。

と言う事は要するに

「冥界の門開門事件を無かった事にすればいいだけだろ？」

そうすればバイオハザードは起こらなくて済むし、ゲームのストーリー

リーを根本的に否定した見事な原作ブレイクだ。

我ながら名案だと思ったけど、クロノラドンは渋い顔で首を横に振る。

『いかん。』

時間が流れすぎたのぢゃ、もうあの時に帰る事はできん』

つまりアンデット軍団の侵入は確定事項ということか？

ゲームの^{おわり}レプトルの倒産を見届けてない俺はこの世界が最終的にどうなるか知らないけど、魔王軍を倒すのは無理っぽい。

何故かというと、無限竜族^{エターナルドラゴン}じゃないけどゾンビも一応蘇れる。

ただし総数8匹しかない誰かさんと違って向こうは巨大群勢だ。

死体を燃やそうとしたらエウルース中の空気が足りなくなるだろうって程いる、と公式設定に書かれるほどだ。

水中で呼吸しなくても【ヒール】を連打すれば窒息死は無いアバタ―たちにそんな設定押し付けても無意味だと思うが――

「じゃあ無理だな。冥界の門を如何にか出来ない以上、俺を入れても無限竜族^{エターナルドラゴン}は9匹、対して向こうはほぼ無尽蔵。

一応無限竜^{エターナルドラゴン}だけど、本当に不死身かどうか分からない今、むざむざ死に逝く気は無いからな」

『もう一つ方法があるのぢゃ。』

アンデット達の王、魔王を倒せば呪いが消え、アンデット達は消滅

する。だから、頼む、力を貸してくれえ!!」

うわ、魔王退治キター完全に勇者召喚のフラグだろ、これ。

「でも無理だろ、俺一人で魔王倒せるほど戦闘力高く無いし」

「確かにワシらは無力ぢや……ぢやが、お主は違う。

ただ居るだけで、このワシが尻尾を巻いて逃げ出したくなる程の、圧倒的な力をお主から感じるのぢや。」

そう言つて俺の目を覗き込むクロノラドン。

名前：クロノラドン

種族：エターナルドラゴン

レベル：99

職業：no data

- - - G M i n f o - - - -

C r e a t u r e t y p e : N P C

S p a w n t i m e : 3 6 0 0 m

M o d e l i d : 2 3 2 1 5

F l a g : 5

R e p : 3 2 5

F a c t i o n : E t e r n a l W i n g

C l a s s : B o s s M o d

つてちよつと待て!

今一瞬視界にゲームみたいなステータスが表示されたんだけど?

しかもアカシックレコードって——もしかして、俺のクラスって「

世界^G_Mの管理者なのか？

いや、まさかな……しかし、物は試した

「あのさ、鏡とかある？」

『鏡？……ああ、あれか！あるぞ、ほれ！』

そういつて至極自然に手鏡を差し出してくるクロノラドン。

何処から取り出したのか激しく疑問だが、直径2メートルの鏡を受け取る。

一歩間違えれば握りつぶされる、俺とあいつの絶望的な体格差に嘆きながら、鏡越しに自分の姿を見てみる。

やっぱり竜だ。

紛う事なき雌竜^{メス}だ

鬱だ……とか思っていると先ほどの様にステータスが表示された

名前：クロワール

種族：エターナルドラゴン

レベル：255

職業：カオスサマナー

- - - G M i n f o - - -

C r e a t u r e t y p e : P l a y e r

M o d e l i d : 2 3 2 1 6 / 2 8 3

F a c t i o n : R e p t o r E n t e r t a i

nment

Class:

Game Master

GM rank:

7

ゲームでメインに使ってたキャラ（漢）と同じステータスだな。

カオスサマナーと言うのはテストプレイも兼ねたGM専用クラスで、魔法が使えて接近戦に強く、後衛に回せばメイジをも凌ぐ高火力砲台、前衛に置けば難攻不落の壁役、フォートレスとどめに個人治療に限るが、超持久回復役として使える完全なバランスプレイヤーだ。

もともとはログイン時間が限定され、ギルド活動に参加できない会社員等がソロでインスタンスダンジョンを楽しめるように、と開発されたクラスだけど、βテストで開放した結果そのスーパ。サイア人並みの戦闘能力をPKに悪用するユーザーが続出し、文字通り混カ乱を招いた。
オスサマナー

その為βテストは僅か三日で強制終了を余儀なくされ、元凶であるカオスサマナーもGM職として留まった。

因みにGMランクは1から7で、俺はサポートチームのリーダーだったからランク7だ。

違う所といえば名前か……多分この体の名前だな。

model
形態が2種類と言うのも気に成るな

23216はかなり後ろのコードだからエターナルドラゴンの物で間違いないとして、283は……

……

俺の記憶が間違い出なければ女性のハーフエルフじゃなかったか？

確か竜は二種類の形態、竜形と人形があったからな……

シット、タケミナカタ、結局女にしゃがった！

鬱だ……

しかし、これなら

「殺れるかもしれない……」

インフィニティではレベル圧制と言う概念があつて、レベルが30も離れていれば高い方が低い方を一方的に殴り倒せる。

プレイヤーのマックスレベルは70で、ボスクラスの最高レベルは99だ。

だからその魔王……もといダークロードも例に漏れず99レベルな訳だが、このステータスが本当なら何とか成るかもしれない。

『おお！ それは真か？』

「あくまでも『多分』だからな！

変に期待されても何も出ないぞ」

『それでも十分ぢや！』

おお、遂にワシの悲願が叶うのぢや……！』

「じゃあ、今から魔王ぶつ殺しに行けば良いのか？」

『駄目ぢや。』

「何でだよ？」

『この世界を形成する概念の一つに時間と言う物がある。

その中で自然に生まれた存在であればどんな行動を起そうが世界の調和を乱す事は無いが、時の流れから外れた存在であるわしらは違うのぢや。

時の中に存在しないワシらが行き成り歴史に関わろうとすれば時列が歪み、最悪世界が滅びてしまうぢやろっ』

「……じゃあ如何すれば良いんだよ？」

『ぢやから、おぬしにはこれから一人の凡人として歴史に存在を刻み、本来ある力を振るえる様に人々に存在を知らしめて貰う必要があるのぢや……ワシら神が信仰心を集めるのもその為ぢや』

ああ——何か引つかかるけど、確かあんた神だったな……

「……何か良く分からないけど、つまり俺の能力には規制が掛かっていて、レベルアップで規制解禁！

みたいな事をしないといけないのか？

……面倒くさいな……」

『そう落ち込むでない、若いの。』

まだ時間はたっぷりあるのだから、異界観光の気分で気軽にレツツトライぢや』

「ああ……わかったよ、でも具体的にはどれぐらい時間が残ってるんだよ？」

『33億年ぢや』

「人類が一度滅亡して猿から進化しなおせる時間だ——ッ！」

というかそれって自然滅亡じゃないのか？

まあいいや、時間制限が無いならクロノラドンがいうようにゆっくり異界生活してみるのも悪くないかな。

未知なる世界への希望を胸に俺は本能的に感知できたエウルースに向って羽ばたいた。

1 突然ですが、ハイジャックです（後書き）

どーも歩く化学公害こと内臓破裂です

初めての投稿ですので、35 ぬるま湯の暖かい目線で見守ってくださると嬉しい限りです

2・ある日♪ 森の中……

Side:????

ざっざっざ、腰の丈もある雑草を掻き分けながら進む一人の少女。

ストレートに伸ばしたブロンドの髪から覗く、先の尖った耳はピンと立っており、ルピーをそのまま嵌めこんだ瞳は辺りの状況を間逃さず観察している。

「大丈夫、大丈夫よ。

危なく成ったら逃げれば良いのよ、私の任務はあくまでも現場の確認なんだから。」

微かに赤い光を帯びている白銀の杖を指先が白く成る程強く握り締め、自分に言い聞かせるように絶えず繰り返す少女。

彼女の名はリア・フェミス。

魔導都市ベオルイルの魔法学園に通う見習い魔法使い^{メイジ}だ。

【ベオルイル近郊の森に突如発生した高い魔力を秘めた光源体の調査及び原因の解明】

魔術学園のギルドで張り出された調査依頼を喜んで受けた彼女だが、近づけば近づくほど濃厚になる、底知れない魔力に形容しがたい不安を覚え始める。

「魔力がまた一段濃くなった……この丘の向こうね……」

Non Puo' Divedere La Mia Facciana
anche Il Mio Corpo 【インビシブル】

気休めか、リアは自分に呟きかけると、そつと身を屈め、透明化の魔法を自分に掛けて慎重に進みだす。

純粹すぎる魔力に、途中で何度も眩暈を起こし、倒れそうになるが、齒を食いしばって何とか踏みとどまった。

発生源らしき泉の付近に辿り着いたリアは、視界を遮る草木を慎重に掻き分けていく。

もう冬だというのに魔法のおかげで、紅葉の状態を保つ雑木の間から覗く目の前の光景に、彼女は思わず目を疑った。

——そこには妖精がいた。

……いや、正確には泉の畔で両膝を抱かえて蹲る、妖精と見紛う程美しい少女がいた。

強化用のプレートが備え付けられた黒いローブの間から覗く、小さく可憐な手は色素が抜けきって雪のように白く、艶の良いスノーホワイトの銀髪は左右の長さが違うの奇妙なツインテールに束ねられている。

自分と同族である事を示す尖った耳は力なくうな垂れており、遠くでよく聞こえないが何やらぶつぶつ呟いているようだ。

と思ったら少女の体から突然光が溢れ、それが収まると少女は「はあ、」と深い溜息をつく。

(一体何やってるのかしら?)

理解不能な行動に眉を顰めながら、もう少し様子を見てみようとり
アは息を潜ませた。

S i d e : 主人公

C o m m a n d R e f o r m M o d e l 1 1 2

ほわぁっ、と辺りを包み込むように広がる暖かい光。

視界を真っ白に染めた光は暫らくすると弱まっていき、何も起こら
ずに、むなしく消えた。

「やっぱ駄目か……」

形態変換系のGMコマンドは全部回復系の効果に書き換えられてい
るな……」

エターナルドラゴン

無限竜の姿のままだと何時襲われてもおかしくない。

ファッキンブリーダー

そんな訳で、人間形態に変化してみたら案の定糞可愛いなハーフエ
ルフの少女だった。

ドラゴン形態は元から異形だから気にも成らなかったけど、人間に
近いハーフエルフと成ると話は別だ。

恥ずかしい、悶絶する、タケミナカタ市ね。

最悪な事にドラゴンの人間形態と言うのは固体毎に姿が決まった、所謂もう一つの姿で、幻術とかで外見を変えてる訳じゃないから、術式を弄って姿を変える事は出来ない——そもそも魔法の使い方知らないし。

幸いGMコマンドは使えるようで、『ドット』何ちゃら読み上げれば文脈に関わらず効果を発揮する。

そこでGMコマンドでModを変えてしまおうと思って、記憶にある男性Modを片っ端から叩き込んでみたが、コマンドの効果が何故か全部回復魔法や結界術の効果に書き換えられていた。

もしかしてゲームと違ってGMコマンドは他の意味を持つんじゃないかと思って【Cast Spell】系のコマンドを幾つか試したら、こっちは問題なく発動した。

あとアイテム製造【Item Spawn】系のコマンドも普通に使えるみたいだ。

もっともアイテムを製造する際にはアイテムのIDが必要で、たまに暗記していた未公開の混沌召喚師の専門装備を製造してみたけど、他のIDは知らないなので、むやみやたらに使わない方がいいだろう。

下手なID入れてカウント0の时限爆弾を製造したら笑い事じゃ済まないからな。

アイテム製造と同じように魔法習得【Spell Learning】系も使えるけど、上と同じくIDを知らないなので、やっぱり使

わない方が身のためだ。

GMコマンドで覚えるのは何も魔法だけじゃない。

ゲーム内の全てのエフェクトが習得出来てしまうので、下手に使って【照明効果】ライトエフェクトが掛かって全身ライトアップしたら変人扱いされる、何てこともあるのだ。

その他のGMコマンドもあらかじめ試してみたが、普通に全部使える。つまり自分の姿を変えるGMコマンド、魔法以外は全て問題なく使えるというのが現状だ。

明らか過ぎるな……こんな事をする奴は宇宙広しといえどたった一人しかない。

タケミナカタ
あの軍神、俺をこんな体にして何を楽しみにしているんだか。

こうなったら宣伝キャンペーンで装着したレプトルのマスコットキヤラ——目つきが怖いうさぎ君——【トニー君】の着ぐるみを装着するしかないな。

……そんな事したら不審者扱いされる。つか魔物扱いされて問答無用で攻撃されそうだ。

もついい、人間、何事も慣れって言うだろ。

こんな体になっても、中おれの人は漢おれだ、魔王を倒すまでは我慢してやる。

それよりも、さっきからリーダーに引っかけてるハーフエルフの事が気になるな……

実際にリーダーは無いけど心配っていつの？

とにかく何となくそこにいるのが分かる。

害意は感じられないけど、ずっと観察されていい気分じゃないな……

…よし、話しかけてみるか。

「何か用か？」

……隠れなくてもいいぞ、バレバレだから」

しーん、と沈黙。

えー、もしかして俺の勘が外れた？

これって「気のせいか……！」ってやつ？

返って来た静寂に頂垂れてると、紅葉の茂みがガサツ、と動き、杖に魔力を纏わせたブロンドの美少女が現れた。

ストレートの髪から覗く、そんなに長くないけど尖った耳が彼女がハーフエルフである事を告げる。

「……こんな所で何してるの？」

こっちを刺激しないように、というか怖がらせないように猫撫で声で尋ねてくる少女。

どうやら彼女は俺を森に迷った子供と認識しているらしい。

鬱だ……もう一度少女を良く見てみると、俺の視線は彼女の端正な顔——じゃなく、その胸に付けたブローチに止まった。

精密なバランスで書かれた七芒星。種族の偏見により争いが絶えないエウルースの世界で中立を保つ数少ない勢力の一つ、魔導都市ベオルイルのエンブレムだ。

もともとベオルイル目指して着地した訳だが、魔法結界が張られてどうやって入ろうかと悩んでた所に向こうから来てくれるなんて、願っても無い幸運だ。

「何って、魔法の開発だけど？」

思わず顔が緩みそうに成るのを何とか押さえ、落ち着いて返答する。
信じてないのか、少女は「へえ？」と半信半疑の視線を送ってくる。

まあ、実際違うしね……

でもここは信じてもらうしかないな。

「CastSpell 76392」

【零度凍結】スリーストーム

【CastSpell】、それは覚えていない魔法を発動するためのGMコマンドだ。

本当は【Spell Learning】で魔法を覚えて使ったけど、覚えた所で呪文を知らない——つまり使えないので、手っ取り早くこれで代用する事にした。

コマンドの発動と同時に視界の中央にゲームの時のようにカーソルが現れ、焦点を合わせた草むらから突如吹雪が巻き起こる。

紅葉の森を駆け巡る白い風。

かなり離れた場所で発動させたのにもかかわらず、鋭い刃物で切りつけられたように肌がチクチクと痛む。

遠く離れた俺でさえこんな感じた。

発生地点は尚更、半径10メートルに渡って白いゾーンが形成している。

……力加減間違えたな

「凄い……！」

聞いた事も無い魔法だけど、あんな短い詠唱で広範囲殲滅魔法を発動するなんて……」

「いや、これただの足止め魔法なんだけど……」

ダメージもないし。

「でも斬れてたわよ？」

そういつてまるで伐採されたように丸太が並ぶ雪の平原を指す少女。

「まあ……何というか、やつちまったぜ

そんな事より、お前こそこんな所で何やってんだ？」

「——ハッ！？ わ、私は……」

俺にうつとりした視線を向けていた少女の表情が一転して何かを言い掛けたが、何故か急に口ごもる。

大体察しはつくけどね、エライ内容に書き換えられた形態変換コマンドを連発したせいで森の魔力が乱れてるからな……『森の魔力が乱れてたから調査に来ました』とかそんな所だな。

つて事は早くも犯人^{ッロ}じゃん、俺。

まずいな、ベオルイルに入れて貰える様に無害性をアピールしないと。

「何だよ、口ごもって……後ろめたい事なら聞かないぞ。

俺は争い事が大嫌いな平和主義者だからな。」

「本当に……？」

うん、リアルで喧嘩はするけど。

「ああ……戦争で故郷を失ってから各地転々として来たけど、何処も彼処もハーフェルフと見れば危害を加えようとする。いい加減疲れた。」

やれやれ、と首を振ってみせると、ハーフエルフの表情がぱつ明るくなった。

「ねえ、あなた、ベオルイルに来ない？」

と言っかいきなり！？

『おい、デュエルしろよ』の某記憶合金ヘアー並に言葉のキャッチボールが出来てないぞ！？

ここは敢えて知らないフリして、

「ベオルイル……？」

聞いたこと無いけど、何それ、食べられるのか？」

「……食べ物じゃないわよ。

ベオルイルは魔法の素質がある者なら種族を問わず迎え入れる中立都市なの！

……で、私はその生徒で、ギルドの依頼で森の調査に来てたのよ……まあ、尤にその原因はあなたつばいけど。」

悪かったな。

「いきなり誘ってくれてる所悪いんだけどさ、ハッキリ言ってお前胡散臭いんだよ。

ついた途端捕まえに来ない？」

「しないわよ、そんな事！

あなた平和に暮らせる所に行きたいんでしょ？

ならついて来て、その魔法の素質ならきつと迎え入れてもらえるわ、

私が保証する。」

「……見に行くだけだからな。」

俺がそう言つと、少女は何故か嬉しそうに耳を立てた。

「良かった！」

私の名前はリア・フェミス。

あなたの名前は？」

「俺は……ッ！？」

……クロワール！　クロワールって呼んでくれ。」

どう言つ事だ？

名前が思い出せない……！！？

まさか記憶喪失？

……いや、違う、ニューヨークにいた時の事も、ハイジャックされた事も全部覚えてる。

つまりこれもタケミナカタの仕業か……野狼、余程俺を女にしたいらしいな……

「うん、よろしくね、クロちゃん！」

「ちょっと待てコラ、何故にちゃん付け？」
なにゆえ

「だってどう見ても私より年下でしょ？」

と、年下……！

反論しようと口を開きかけた俺の心に『年下』と言う言葉が重々しくのっ掛かる。

ああ、そうさ。どうせロリだよ、今の俺の見た目は。

だがここは敢えて開き直ってやる、見た目は子供、中身は大人、その名は……！

……言つてて恥ずかしくなつて来た。

鬱だ、死にてえ……

転送魔法で不時着した森がベオルイルのすぐ傍だったり、どうやって乗り込もうかと真剣に悩んでいたところに魔導都市あちいなまから斥侯むかえが送られて来たりと、恐ろしいほどの幸運が重なって、リアと言うハーフェルフの少女と共に今現在ベオルイルに向って絶賛移動中の俺。

道中何度か魔物と遭遇したみたいだけど、リアが魔法で片っ端から消し炭にしたらしい。

『らしい』というのは、時々リアが理解不能な言語で呟いてると思えば、遠くから魔物の断末魔が聞こえ、気付いた俺がその方向に向くと、焚き火を消した跡みたいに黒く焼き焦げた大地以外、何も残って無いからだ。

まあ、戦闘シーンを飛ばしてくれたお陰でかなり助かってるんだけど。

それにしても、燃費が悪く、その上制圧力に欠け、ゲームユーザー達から絶賛非難される炎魔法——あえて言うなら俺が炎魔法嫌いなだけだが——よりによってリアはその炎特化メイジらしい。

ハーフエルフなら相性がいい魔力属性を極めろよ。

というか——

「なんで手繋ぐんだよ？」

「こうした方が怪しまれないからに決まってるでしょ？
自分で言うのも何だけど、私、ベオルイルじゃ結構有名だから手を繋いでれば顔パス出来るわよ？」

「だからって今から繋いでる必要はないだろ？」

「あ、あるわよ！

だってほら、ずっと繋いで無いと体温が違いすぎて温度測られたら手を繋いだばかりだってばれるじゃない！」

全く持って理解不能、ばれても問題ないし、そもそも手の温度をわざわざ測りに来る門番なんて何処の世界に居るんだよ？

別に美少女と手を繋いで嬉しくない訳じゃないけど、このリアって言う少女、炎使いだからか手の温度が異常に高いんだよ……

とは言っても入城する際通行証とか要求されたらアウトだから、非常につざつたいけど、今は我慢するしかないな。

本人は実に嬉しそうだけど、こっちとして悪夢の様な散歩の末、ようやくドーム状の魔法結界に囲まれた魔導都市、ベオルイルに辿り着いた。

門番とかは無いみたいで、結界を抜ければ良いらしい。

抜ける際、少しチクチクしたけど、堪えて抜け切るとゲームよりも遙かに大規模な町並みが目前に広がった。

見た事も無い、白い大理石のような材料をベースに作り上げたギリシア風の白い円筒状の建築群が群立し、見上げた空には無数の魔法の球体が宙を漂っている。

丘の上に建てられた町並みは奥に行くほど高く成っていて、その中心には宙を浮く七つの円盤から成り立つ雲に届きそうな塔が聳えていた。

半透明な青い石が敷き詰められた地面は清浄魔法も掛かっているの
でゴミが微塵も無く、森の紅葉からして季節は秋だというのに、太陽の熱を保存する魔法のお陰で寒すぎない程度に温度を保っている。

ギリシア風の建物に程よい温度と時々吹き抜ける爽やかな風。その全てが地中海のリゾート地を連想させる——というか元からサントリーニ島がモチーフだ。

液晶スクリーン越しに見慣れていた風景でも、リアルで見ると迫力と言つか、スケールの違いに改めて自分はファンタジーの世界に居るんだ、って思い知らされる。

「凄え……」

「ふふつ、始めて来る人は皆そう言っわ」

思わず漏れた感慨を敏感に聞き取ったリアはそれなりの胸を誇らしげに張る。

それにしてもさつきからチクチクと視線を感じるけど、やはりこの格好はまずかったか……

ベオルイル——またの名を魔法使いの町。

メイジやプリーストが主な住民であるこの町では重装備はかなり珍しい。

珍しいだけならいいんだけど、この町は種族差別をしない代わりに職業差別をする。

魔法職以外は100%よそもので、そのよそものがこの町で問題を起こすからだ。

でもカオスサマナーは立派な魔法職なんだけどな……

いや、魔力を使う職業が魔法職なら違うか。

カオスサマナーにはそもそも他の職業——物理系なら【気力】、魔法職なら【魔力】——のような『消費できるエネルギー』が無いんだよな。

つまり何かというとカオスサマナーにはMPバーが無い、魔法を使うのにMPを必要としない——言ってみれば永久機関なのだ。

まあ、仮にもGM職だしね。

とにかく元凶はわかった。

このガーディアンテンコマの装備に見える【神が遺した十の戒めソドメンツ】のせいだな。

後で洋服店にでも寄って普通のローブに買い換えるか。

状況が状況だけにこれを着るしかなかったけど、装備のせいで立ちたくないんだよな……

それにしても、町に着いたというのに、このハーフェルフは一向に手を放そうとしない。

「リア、俺達って今どこに向ってるんだ？」

「オエムリヒエト
無限の塔よ。」

「え……！？」

帰って来た返事に俺は思わず絶句した。

リアに手を引かれるまま辿り着いたのは町の中心に聳え立つ円盤の塔だった。

ゲーム通りならば町の指導者達——七賢者が居を構える所だ。

確かにゲーム内でも始めてベオルイルに着いた冒険者はギルドよりも先にここに顔を出さないといけないんだけど、流石に緊張するな

……

天使の装飾が施された真っ白な天井は見上げれば首が痛くなるほど高い、そんなエントランスを通り抜け、魔力属性の魔法を固めて作ったリフトに乗ると、さっきまで蟻のように小さい天使達が間近に見える、天井に近い高さまで上がりきった。

そして幾重の扉を——何故か——リアの顔パスで全て通り抜けると、読めない文字で書かれた看板を下げたやたら豪華な扉の前に着く。

読めない文字だけど、良く見るとアルファベットのようだ——【開発部部长室】なぬ！？日本語に変換された！？

しかも何か妙に違わないか？ 町の最高責任者でも【部長】って……

「どうしたの、クロちゃん？
大丈夫よ、ついて来て」

妙に生々しい文面に衝撃を受けている俺の手を引いて扉をくぐり抜けるリア。

扉の先はアメリカ大統領の事務室をブラウンのペンキで塗り直したような仄暗い部屋だった。

部屋の一角でまるでゴミのように乱雑に積み上げられた勲章に目を凝らしていると、息が詰まるほど威圧が籠った視線を感じ、慌てて振り向くと、その先で俺を待ち構えていたのは――

デスクに両手をつき、手に顎を乗せて眼鏡越しに鋭い目つきでこちらを睨む碓司。官――じゃ無くて、ベオルイル7賢者が一人、大隠居者 バレスト・カイン・フェミス。

隠居したくせに大だったり、一番目立つ勢力の一番目立つ建物に居を構えたりと突っ込み所満載な人物だけど、全身から発する覇者の威圧がそれを許さない。

視線で押し殺されそうになる俺とは正反対、未だ手を繋いだままのリアは緊迫した空気をぶち破るように

「父上様あ――！！」

と黄色い声を張り上げながら大隠居者の胸に飛び込んだ、が見えない壁……結界に弾かれ、尻餅を着いた。

え？ 父上様？

つまりお父さん？

……全然似てねえ……

「ああ……良く生きて帰ってきたな。
そちらのお嬢さんは？」

「この子はクロワール、魔力の乱れを起してたの、どうやらこの子
みたいよ。」

さり気なく酷い事を言われたのに嬉しそうにはにかむリア。

頭、大丈夫？

というか、ゲーム内でも主に殺戮系クエストばかりだす気狂いなバ
レストだけど、身内にもそんな態度かよ……

しかもリアもリアでそんな気狂い親父にぞっこん……あいつに原作
知識があるなら別におかしい話じゃないんだけどさ、無いんだよな
？ 無い筈だよな？

「そうか」

耳をピンと立たせ飼い主に褒めて貰えて喜んでる子犬のようなリア
にバレストは簡潔に返すと、今度は俺の目を覗き込んでくる。

名前：バレスト・カイン・フェミス

種族：ハーフェルフ

レベル：75

職業：アークメイジ

- - - G M i n f o - - - -

C r e a t u r e t y p e : N P C

S p a w n t i m e : - - -

M o d e l i d : 1 1 3 2

F l a g : 3

R e p : 6 8

F a c t i o n : V e o l u i r

C l a s s : L e a d e r

さり気なく表示されたパラメータ。

ゲーム通りなら S p a w n t i m e が 7 2 h——つまり三日にな
つてる筈だけど、流石にリポップしないよな……ゲームじゃあるま
いし。

そんな事を考えていると、バレストは突然ふつ、と鼻で笑った。

「成る程、面白い！

私の名はバレスト・カイン・フェミス。

クロワールと言ったな？

ろくに気配も隠せない雌幼竜メイビュアリーが何の目的でベオルイルを訪れたのか
知らんが、私の目が黒いうちは大人しくしている事だ。

新しい魔術の実験材料にされなくなかったら……な」

予想通りの言い回し。威圧感を通り越して寧ろ微笑ましい。

さすがバレスト様、リアルに成っても、良い具合にイカレ狂人っ
ぶりだなあ……

「メイビュアリー 雌幼竜!？」

「目で俺の正体を見破ったのか!？」

「え? メイビュアリー……?」

「お前は黙ってる。」

「はい」

「いや、何嬉しそうに応えてんの？」

「深追いして来ないのは嬉しいけど、落ち込む所だろ、今の。」

「安心しろ、貴様の正体を口外す気は無い……今のところは、な。」

「そう言っただけを微かに緩めるバレスト。」

「俺に至っては背中が冷や汗でダラダラだ。」

「人間が何故パンにバターを塗るのか知ってるか？」

「それはバターはパンに塗る物だと言う常識に縛られているからだ」

「ごめん、アンタの例え、全然理解できない。」

「ハーフェルフ だから此処は敢えて常識に捕われず、エターナルド 一介のラユニ 下等生物と全種族の公敵で話し合おうではないか？」

「なっ!？」

……なんで解った……？」

「それはいい。

もつと大事な事について話し合おう、例えば……世間体を気にせず好き放題暴れまくったと言うのに冥界の門が開いた途端歴史の舞台から姿をくらました貴様らの目的とかな」

「……………」

「どうした？」

言葉に出来ないほど後ろめたい事ではないだろうか？」

「……言った所で信用しないだろ？」

「それは誰が決めた常識ルールだ？

いいか、小娘。

ここは私の島だ、外の常識は通用しない。

……まあ良い、口から言えないのなら私が当ててやろうか？
ブラックドラゴン

冥界竜達への少数奇襲を始め、彼らの指導者【黒翼のアクラリウス】の暗殺未遂、今は魔王軍の手に堕ちしウルムガットでの無差別殺戮、後に全滅し生ける屍と成り下がったクルセイダーの進軍妨害……そのどれもが冥界の門開門事件にまつわる。

そして時を守護すると言イェロートドラゴンう琥珀竜達が貴様らに対して抱く異常なまでの敵対感。

これらの事実から導き出される答えは一つ、無限竜キリキリは冥界の門開門事件その物を無かった物にしようとしているのだらう？」

凄……只者じゃないのは十分承知していたけど、アンデッドの出現より前の、全く関連性が見当たらない事件から推測で俺達の目的を当ててるなんて……

「ああ、全部アンの推測通りだ……」

バレストは驚く俺の表情を満足げに眺め、ふん、と鼻で笑い、

「何だか解らないけど流石父上様」

と目を潤わせるリア。

「なら話は早い。」

ここは一つ取引と行こうではないか」

「取引？」

「私が権力で貴様らに肩入れし、魔王を倒す代わり——」

変わりに……？

「貴様らが知る未来の情報……」クロニクルオブザエデン「禁じられた未来」を吐いてもらおう。

……からだ…
ついでに貴様の軀を実験材料にさせて貰う、どうだ、安い物だろう？」

バレスト
気狂いはそう言って意味深げに微笑んだ。

2・ある日♪ 森の中……（後書き）

ベオルイルの町並みはサントリーニ島がモチーフです。

何故明言するかと言うと、単に自分の乏しい文才では完全に表現できなからだったり……

3・獅子の誘惑と炎竜の脅威と

Side:クロワール

「貴様の軀からだを実験材料にさせて貰う。安い物だろう?」

そういつて意味深げに微笑む基地外バレスト。

……やっぱそう来るか……

大隠居者バレストと言ったら本人発のパシリクエストを順を辿ってやって行くと何の前触れも無く突然

『よし、では新作の種族感染ウィルスで。。を根絶やしにして来い』
とか抜かして種族殲滅系任務をさも当然に出題してくる事で有名だ。

営業初期なんかコイツの出したクエストのせいでグリンプスというモンスターが実に3日間に渡ってリポップされなかったし、その後も更新の都合でモンスターを削除する際はコイツに罪を被せてクエストにし、

俺ら実動隊の間では自然の生態系を躊躇なく破壊するその本能に因GMんで「外来生物ブラックバス」と呼ぶ程に全壊なぶつ壊れ科学狂人マッドサイエンティストなんだけど、それはあくまでも世を欺くための仮面だ。

その実態は己の野望——もとい理想の為にわざと悪役を演じ続け、世界の平和を願って魔王軍に自爆特攻を仕掛け、壮絶な最期を遂げたアンチヒーローで、どっかの魔法少年物語で出た蛇寮の寮監をそのままパクったキャラだと開発部の連中は公言している。

そんな彼の最期のクエスト・愛国者は知らなければモグリと言われるほどの感動もので、かく言う俺も例に漏れず、彼がお気に入りキヤラだ。

——あくまでもゲーム内では、な。

というか、こんな奴の実験に付き合ったら幾ら不死身の竜でも持たない、蘇った傍から再感染して死にそうだ。

全身全霊を込めて断りたい所なんだけど、無限竜だとバレた以上、下手な事言つて奴の機嫌を害すると正体をバラされて一巻の終わりにして事もありえる。

ここは慎重に行かないと……幸いバレストは話の分かるハーフェルフだ——あくまでも内心は、だけど——何とか説得してこの場を切り抜けないと……

「それはあんまりよ！ 父上様！
同じハーフェルフなんですよ？」

実験材料なんて、どうしてそんな酷い事を平然と言えるのよ！？

「人間が我々の聖域を蹂躪した日の様に、王の裏切りも我々の心を踏みにじる事はない。

こんな時でこそ、死んだ者たちの為にも、我々はしっかりせねばならない。

我々の血の絆は今までの様に、そして今まで以上強固なものと成ろう」

つて、そう言ったのは父上様のはずよ！？」

思考をめぐらせる俺より先にさっきから完全に空気と化していたリアが声を張り上げた。

何時もは順従な娘の予想外の言動に一瞬驚きの表情を浮かべるバレストだが、直に威厳に満ちた表情を取り戻し、深い溜息をつく。

「話を聞いて無かったのか？」

こいつは我々の同類ではない、無限竜だ。それに……」

「同じよ！」

メイピュアリーだかエター何とか知らないけど、まだこんな小さな子供よ！？」

この子に何か酷い事をするなら、私が代わりに受けるわ！

だからこの子を巻き込まないで……この子はただ、平和に生きていたいだけなのよ」

こんな小さな子供、と言う単語にピクリと来たけど、代わりに受ける、と言うリアの予想外の言動に思わず目を見開く。

何で？

まだ会ったばかりの、赤の他人だろ？

極道を突っ切ろうとしている親父を止めたいなら『馬鹿な事言っくんじゃねえ』って普通に怒鳴ればいい。

なのに代わり？

それは俺を庇うって意味だぞ……一体何考えてるんだ？

バレストは自分の話に割り込んだ娘に一瞬渋い顔に成るけど、直にふっ、と表情を緩める。

「成る程な、こいつにノザリーの面影を見出したか……確かに似てるな。」

生きていたら、丁度この位だ。」

「……父上様は何とも思わないの？」

「ノザリーはもう死んだ。」

どれだけ似ていようが、こいつは別人だ……始めて見た時は私も目を疑ったね。」

バレストは自嘲気味に肩を竦めせると、そのまま席を立つ。

フープランドと言う衣服を纏ったバレストは、ゆったりとした垂れ袖越しでもわかる逞しい手で、目深に被ったフードを取る。

オレンジ色の夕日に晒される、獅子を思わせるオールバックの黒髪と顎鬚。

獅子翁と形容するに相応しいワイルドな容姿なのにハーフェルフ特有のスラリと伸びた鼻筋とキリリとした口元が気品の高さを伺わせる。

かっこいい……不本意ながら、そう思ってしまった。

それに体が熱い。

……魔法か？

ゲームではもっぱら生物兵器バイオニスト使いだっただけ、娘リアの事も有るし、こ

いつも実は炎特化なのか？

……いや、もしかして既に奴の開発した疫病に感染しているのか？

急上昇する体温に混乱する俺を奴は満足そうに眺め、口元を緩めた。

「まあ良いだろう。」

養子は何人居ようが大差ない——クロワールと言ったな？

今日からお前は私の養子だ、これからはカラン・フェミスと名乗れ。
どんな事が有っても絶対にクロワールと名乗るな、解ったか？」

どう言う論理で行き成り養子という結論に至るのか激しく疑問だが、
有無を言わさぬ絶対的な威圧感と、上昇し続ける体温にあらゆる最
悪の事態を想定し、オーバーヒート気味の脳の所為で俺は頷く事し
が出来なかった。

S i d e : バ レ ス ト

大陸中の凄腕魔導師が集う絶対中立都市、魔導都市ベオルイル。

無数の白き塔が天を貫くように乱立するこの都市の中心に聳え立つ、
円盤を積み上げた様な巨大な塔、魔導師の頂点に君臨せし者達が居
を構える至高の領域、【無限の塔^{オエムリヒェト}】。

その頂上から3つ目の円盤は七つの大罪の内憤怒の名を冠する炎の階層^{カルバ}。

形容しがたい、見る物に炎を連想させる神秘的な術式で彩られた階層^{ルカ}の中で一人の男が静かにワイングラスを傾けていた。

オールバックの髪に見事な顎鬚、獅子を思わせる野性味溢れる外見なのに尚感じる気品の高さ。

彼の名はバレスト・カイン・フェミス。

全ての魔導師の頂点に立つ七賢者の一人であり、【炎竜をも焼く炎^{ヴェナトウーディ}】の異名を持つ数少ない純血のハーフェルフである。

魔力を帯びた月光をその身に浴び、最高級のワインを口に流す彼の視線は、自分の居る層には遠く及ばないものの、丘の上に聳え立つ一際高い円柱の一室に向けられていた。

明かりは点いていない、もう眠っているのだろうか？

あの女、あの娘をノザリーに似せて一体何のつもりだ？

……柄にも無く養子として迎えてしまったではないか。いや、これは私自身の問題だな。

それはいい。

それよりも、森の魔力の乱れは他の6人にも感じられただろう。

あの娘に納品させた【^{スターダストディア}星屑の涙】で表面上あっさり引き下がってくれたが、今頃裏で色々嗅ぎ回っているはずだ。

……あの娘は単純過ぎる、考えている事が直ぐに顔に出てしまう。

そんな少女を選らんでどうしようというのだ？

何か考えがあつての事か？

……いや、あの女の考えにロクな物はない。

今度こそ奴のシナリオ通りには進ませない。

そのためにはまず、室に群がる^{ハイエナ}七賢者を追い払わねば。

……ふん、忙しくなるな。

月明かりの下、怒りの大隠居者はワイングラスをぐつと傾け、中身を一気に飲み干した。

S i d e : ^{カラン}クロワール

向こう側が透けて見えるシルクのような素材で紡がれたカーテンが開けっ放しの窓から流れ込む風に吹かれ、

サアサアア、と心地良い音を上げる。

辺りを見回せば微かに仄暗い清潔な室内。

シャワー浴びようと装備を外したら鏡に映った、髪を脱色したブラツクロ。クシューター様な糞可愛い少女を見てしまった所為でオーバーヒート寸前な頭を冷やすには丁度良い。

と言っても俺は元から熱がりで、寝るときは何時も窓を全開にしている。

例えばそれが体感12月の真夜中でも。

ギイイイイ

「ねえカランちゃん一緒に……って寒っ!!」

音を立てて扉が開いて何事かと思えばどこかで聞いた声と共にバタンと音を立てて叩き付けられる扉。

「……何なんだ？」

訳がわからず首だけ動かして扉の方を見ると分厚い木製の扉の向こうから小声で呪文を唱える声が聞こえ、それがやたら長い物だと気づく

……攻撃魔法か!!

・CastSpell 42731

【サロインシールド鉄霧の結界】

何気に覚えてたIDが不吉な防御魔法を口早に唱えると、金色のルーン文字が体の周囲を交差して回り、緑色のシャボン玉の様な結界が俺を中心に展開される。

これは創造神エミナの亡骸アックと言うインスタンスダンジョンに登場する創鋼ヘツの神と言うボスモンスターの防御魔法だ。

ボス技というのは必ず欠点がある。この魔法の場合、効果はダメージレジストではなく、あくまでも99%カットだ。

プレイヤーが弾き出す百単位のダメージに対しては効果的だが、ボスクラスが敵だったら笑い事じゃ済まない。

百万単位のダメージを食らえば幾ら99%カットでも防ぎきれないからだ。

だったら念には念を入れて、カオスサマナー本来の防御スキルも発動するまで

『ネッサーブロック
虚無の羽衣』

念じると同時に空間がぼやけ、白い霧から掠れた女の呟きが漏れ出し、白い羽の形をした【虚空の空気】がヒラヒラと舞い落ちる。

ネッサーブロック
虚無の羽衣——無限虚空その物を召喚し、身に纏うカオスサマナーの防御術。

ブロックの癖に効果は相変わらずダメージ軽減だけど、無いよりはマシだ。

防御魔法を二重に掛け、衝撃に備えベッドを立ててバリケードを作り終えた頃、敵の詠唱も完成した。

「……Allora Il Fuoco scalda Lo Spazio
Con La Sua Potenza, 【灼熱の領域】！！」
アトミックフレイム

ゴオオオオツ

詠唱の完成と共にと轟音を轟かせながら部屋を駆ける、炎の竜達。

「——ッ！」

何でよりによって炎魔法なんだよ！」

ボス技は敗れるためにある。サローンシールド鉄霧の結界も例に漏れず、その実態は【鉄霧】が示す通りの鉄であり、炎を受ければダメージが軽減するところか五割り増ししてしまう。

そして虚無属性ネッサーの魔法——正確に言うとも秘術は全て光と氷の複合属性であり、こちらは増す事こそ無いがダメージカットが出来ない。

しかも寝巻き姿では装備の恩恵を受ける事も出来ない。

目前に迫る無数の炎竜。戦慄が迸る。

マカロフと違って炎は本能的な恐怖を煽る。

そう、恐怖ヲ……キョウフヲ……キョウフ……

すとな、腰の力が抜け地面に垂れ込む

「うわあああああ！！！！」

S i d e : リア

「うわあああああ！！！！」

部屋の中から響く耳をすんざく悲鳴に火加減を間違えたのかと心中舌打ちしながらすぐさま詠唱を止め、部屋に駆け込むリア。

親睦を深める目的で一緒に寝ようと新しい妹の部屋を訪れたらそこは保温魔法の掛かってない廊下とは比べ物に成らない程寒かった。

このままじゃ風を引いちゃう——部屋を暖めなければいけないと思う責任感と、驚く反応を見てみたいと言う悪戯心に駆けられ、私はオリジナル
アトミックフエーン
自作魔法の中でも特に自慢な灼熱の領域を掛けてしまったのだ。

悪気は無かった、威力も最小限に抑えている。

万が一触れたとしてもストーブの金網に手が当たった時程度の痛みしか感じないし、傷も残らない筈。

——実際、無傷だったようだけど。

部屋に駆け込んだリアが目にしたのは白い霧に身を包み、蹲ったまま小刻みに震えている蒼白の少女だった。
カラン

何処からとも無く現れる白い羽毛は霧から少しはみ出した所で霧散し、明らかに少女の声ではない掠れた女の呟き声が聞こえる。

「誰なの!？」

居るなら出てきなさい!」

と威嚇するが、すぐにその声の元が少女を包む霧である事に気づき、警戒を解く。

神秘的だが何処か虚しい白い霧を身に包んだ少女はさながら穢れた^{ルグラン}
^{ドエンジェル}世界に堕とされた天使——見ていただけなのに、形容し難い罪悪感が心の底から湧き上がる。

だからと言って放って置く事なんて出来ない。

カランと視線を合わせる様にしゃがみ込むと、長い前髪に隠れていた、虚ろなサファイアの瞳が目に入り、整いすぎて生気を感じさせない顔もあいまって硝子細工の人形の様に儚い彼女の姿に、心が抉られた激痛を伴う錯覚を覚える。

「だ、大丈夫……?」

傷つけないように、慎重に、そっと、優しく声を掛ける。

「……リア……?」

放心しきつた天使の瞳に光が戻る——良かった。本当に良かった。

別に親しくも無い、会ったばかりの赤の他人。

それなのに三日三晩昏睡状態に陥っていた妹が看病の末やっと目を醒ました時の様な、言い様の無い感動が胸底から湧き上がり、目が熱くなる。

「大丈夫、大丈夫だから!!」

あの炎は私が起したのよ…… カランちゃんを驚かそうとして、ごめん!」

「……え？ ホノオ……？」

……うああああ!!」

一瞬落ち着きを取り戻したカランはリアの赤い瞳をその蒼い瞳に映すと、再び発狂した様に叫びだす。

とっさの事に、反射的にカランをギュツと抱きしめたリアだが、力が強すぎたのではないかと恐る恐る手を離していく。

リアの抱擁から離れた小さな天使は、先ほどと同じように小刻みに震えだす。

……一体何が起きたというの？

最初に部屋に入った、その刹那——寒さに気を取られてよく覚えてないけど、カランちゃんは確かにベッドの上で寝息を立ててたわ。

そして私が駆け込んだ時にはベッドを立ててまるでバリケードの様にしていた。

その間起きた事と言えば私の魔法による見掛け倒しの炎竜の舞ぐら

い……

さっきまでは気付かなかったけど異常に冷たい霧、カランちゃんに相応しい、いえ、カランちゃんにだけ許された防御魔法ね……ってこんな事考えてる場合じゃないわ。

……これらの情報から導き出せる結論は一つ。

「炎が、怖いよね……」

再び抱きしめたカランの振るえが、少しばかり弱まった気がした。

S i d e o u t

全てが燃えていた。

家族と一緒に囲んだ食卓も、ペットの猫とくつろぎながら体を預けたソファーも、そして、誰よりも自分を愛してくれた両親も。

人の形を辛じて保つ、燃え栄える二人の大人は、まだ小さな少年を、二人掛かりで護るように抱きくるめ、見に覚えの無い地獄の業火に、その身を焼かれていた。

突如発生した原因不明の火災。

深夜と言う時間帯もあいまって住民の避難は困難を極めた。

高層マンションの9階に住んでいた少年の両親は異変に気付き、病気で寝たきりだった息子を護るために、自分達が助かるチャンスを躊躇いも無く逃した。

逃げ道は炎に埋め尽くされ、迫り来る無慈悲な炎は親子三人を壁際に追い込んでいく。

この絶望的な状況の中で少年の両親は言葉を交わした訳でもなく極自然に少年を抱きこんだ。かけがえの無い、自分の命よりも大切な宝物を護るために。

勇敢で偉大なる両親は、炎に身を焼かれ、苦痛に歪んだ顔を強引きき攣らせて笑顔を作り、焼き焦がれ、焦がれた肉の間から覗く喉を絞って、掠れた声で少年に「生きなさい」と告げた。

……その後、奇跡的に救出された少年は看病の為アメリカに送られ、何とか一命を取りとめた。

彼は両親の最期の言い付けを守り、懸命に生きた。

……テロリズムの犠牲者となる、その日まで。

S i d e : リア

「……炎に、良い思い出が無いから……」

今にも掻き消されそうな声で誰に言うでもなくカランはそっと呟いた。

3・獅子の誘惑と炎竜の脅威と（後書き）

設定でも魔王の様なグラフィックのバレストですが、実は善人です。人道外れた行動を取りますが、善人です

主人公のトラウマ発覚、少しくらい話になりましたので、次話からすこしハジケル予定です。いや、不謹慎か……

4・死神の来襲

S i d e : カ ラ ン

黎明と呼ぶには未だ早すぎる、仄かな陽光と夜の闇がせめぎ合う部屋の中で、穢れ無き雪の妖精は澱んだ空気に息苦しさを覚え、目を醒ます。

窓が閉まっている。

…… リアが閉めたのか？ とどめに暖房が掛かってるし。

最悪だ。

暑いのに、苦手なんだよ……

頬に感じる不快な感触は、柄にもなく涙を——それも会ったばかりの女の子の前で情けなく流した拳句、赤ん坊の様にあやされた事を思い出させる。

余りの恥ずかしさに削除コマンドを自分に使って今直ぐ消えたい気分になった。
Cr e a t u r e l e t t e

鬱だ……あの親子に出会ってから不幸のオンパレードだ。

正体はバレるし、実験材料——は免れたけど、訳もわからず気狂いの養子にされてしまった。

バレスト自身嫌いじゃないし、むしろその男気溢れる生き様に憧れるけど、だからと言って養子に成りたいって訳じゃない。

クロノラドンが提案してきた【レベルアップで制限解禁作戦】はもう使えないな……どうでもいいけど。

そこまでして全身全霊で救世したい熱血主人公じゃないし。

救世したらこの神様に褒美として男の体に戻して貰おうって思ってたんだけど、よくよく考えてみると肝心な【神様】はあのクロノラドンなんだよな……俺に泣き付いてくる辺りから、失礼だけど格下だと思う。

あれだけやって出来なかった性転換ことをあの爺さんことに出来るんだか……

いや、クロノラドンご老体に頼ろう何て他力本願な考えじゃ駄目だ。

ここはファンタジーの世界じゃないか、姿を変える魔法何て幾らでもある筈。

もし、万が一、日頃の行いが（無意識に）悪すぎて本当に無かったらその時は自分で開発すれば良いんだ。

ベオルイルがソーサレスベインじゃなく、アイゼンファルド大陸にあるって事は魔王軍は今の所北のノーゼライズ大陸に封印されてる

——ゲームで言うならパッチ1.0.24辺りの状況だ。

その魔王軍が結界を破ってこのアイゼンファルド大陸に進出するのがパッチ4.2.35で、その間に人間国家とエルフ国家がドワーフ国家とハーフェルフ国家に仕掛けた戦争を挟むから、魔王群の侵攻までかなり時間があるはず。

出来れば戦争の方も止めたいんだけど、国家規模の問題は俺一人じゃどうしようもない、

幸いベオルイルは無関係だから魔王軍が解禁されるまでに男に戻る方法を模索してみよう。

【気力】を使うスキルに形態変化のヤツはないからスルーして、【魔力】を使う職業は【魔導師】に【聖職者】に【言霊使い】と【魔剣士】及びその上級職だ。

その中で幻術とかじゃなくて物理的に体を変形させる魔法を扱うのは……プリーストだけかな、傷を物理的に治す回復魔法な意味で。

回復魔法ならカオスサマナーも使えるけど、こっちは『時間を巻き戻して傷を受ける前の状態に戻す』時魔法だから物理的变化じゃないんだよね……プリーストやってる人に直接聞いてみるしかないか

プリーストと言ったら七賢者の【大宣教師】ハウエルグイが代表格だけど、あいつは過激というか何と言うか……バレストと並ぶ人気者だけど伊達狂人以上に人格がヤバイから苦手だ……

それに後でとんでもない事しかすから関わりあいには成りたくない——もっと普通のプリースト、でもって腕が立つヤツが理想的だ。

教会の神父……は駄目だな、傷を治す程度の魔法なら教えてくれそうだけど、人体改造の魔法なんか聞いたら異端扱いされて魔女審判にかけられそうだ。

って【魔女審判】……？

くっ、体に流されるな俺！

体は女だけど、心は漢だ！

来たるべきハーレムの為、男の心を——忍道じゃないけど——真っ直ぐ絶対に曲げねえ！

とにかく【魔漢審判】なんて事に成ったら笑い事じゃ済まない。

ここは神に仕える身でありながら背徳の行為に手を染めたハウエル
グイ以外のまともなプリーストを……矛盾してるな、背徳した時点でまともな訳ないし。

いや、あるぞ……！

要は教会の掟に縛られない、フリーなプリーストだろ？

杖で元気にモンスターを撲殺してる冒険者なら問題ないわけだ。
プリースト

しかも金で動く冒険者ならGMコマンドで生成した金貨を積み上げれば領いてくれるはず。

そうと決まれば次の目的地はギルドだな。

それに元から冒険者に成るつもりだったし一石二鳥だな、期待に胸を踊らせながら俺はベッドから身を起こした。

S i d e : リア

コッコッコッ

湯気が立ちこむ台所から包丁で食材を刻む心地良い音が響く。

背中まで伸ばしたブロンドの髪はバンダナで纏め上げられ、何時もはお淑やかな顔に真剣な表情を浮かべ料理と格闘するのはハーフエルフの少女——リア。

調査に出かけた森で出会った、町の結界を乱すほど強い魔力を秘めた不思議な少女。

彼女が魔法を発動する際に唱えた不思議な呪文——後で調べてみたら何とそれは何万年も前に失われた【古代神界語^{イングリッシュ}】だったのよ。

信じられない、あの触れただけで消えてしまいそうな、雪の様に儚い少女が古代神界語^{イングリッシュ}の使い手だなんて……でも、それは紛れも無い事実だわ。

受け入れるべきよ。そして、もう使わないと誓わせるわ。

だって、そう、彼女は私の家族なんですもの。

あの子は何も考えずに使っている——代償として魂が死神の手に落ちたり、内臓が消えたり、寿命が半分に成ったりする禁じられた言葉^ユを。

危なすぎるわ、このままじゃあの子は……魔法の代償で死んでしま
うわ……

何としても止めないといけない。

でも、私の言う事を聞いてくれるかしら？

もし昨夜の事で嫌われたら、言う事を聞いてくれなかったら、私は
如何すればいいの？

傷ついて欲しくない。

まだ逢ったばかりだけど、彼女の事はまだ何も知らないけど、護つ
てあげたい。

どうやって謝ればいいの？ どうやって受け入れて貰えるの？

誰か、教えてよ……

早起きまでして調理し、やっと完成した、焼きたてホヤホヤの千年^{キング}妖樹^{トリユツ}のカパエラをトレイに乗せ、リビングに運ぶリア。

自分がカランの常時発動スキル^{バッシュ}、魅了^{カリスマ}に掛かっている事など知る余地も無い。

青と白の宝石を繋ぎ合わせた垂れ幕を捲り、リビングに顔をだしたリアの目に映ったのは椅子に腰をかけ、何かを食べてる最中の雪の妖精^{ラシ}だった。

「おはよう、リア。」

というか、凄い量だな……朝からそんなに食べてたら太るぞ？」

リアの気配に気付き、愛らしい頬をもぐもぐと動かしながら声をかけるカラン。

「お、おはよう、カランちゃん。」

……何食べてるのかしら？」

早起きしてまで作った料理をさり気なく拒まれたリアは顔を引き攣りながらもカランが頬張ってる、思わず口から涎が垂れる良い匂いを放つ物体の正体を尋ねる。

「……あ、これ？ 食神^{アルクマイオン}の誇り……何ていうか、魔法パンみたいなもんかな？」

聞いた事も無い名詞に首を傾げるリアだったが、魔法パンと言われ、目を見開く。

魔法パンと言うのは魔法を凝縮させて具現化したいわば非常食で、

基本的に無臭無味、誰かが咀嚼してから吐き出したお粥の様な味なのである。

例外としてバレストが作った魔法パンは一応食パンの様な味がするが、お世辞にも美味しいとは言えない。

これを食べるのは精々落ちぶれて食料を貰う金すらない乞食い当然の魔術師ぐらいだ。

何処も彼処も戦争で乏しいこの乱世のなか、ベオルイルの街道に乞食いの死体が溢れかえないのは、全てこの魔法パンの功績といえる。

だから『魔法パンみたいなモノ』というカランが頼張っているケバブの様なそれはリアの魔法パンに対する常識を覆すには十分だった。

このクオリティの高さ……この魔法パンは、もしかして古代神界魔法で作られたの？

「……食べたいのか？」

まあいいか、すぐに作れるし…… Add Item 4649、ほら」

トレイをテーブルに寄せ、目を見開くリア。

そのリアクションをどう受け取ったのか、不思議なフレーズの呪文を唱えたカランは空いた方の手に製造された魔法パンを彼女に差し出す。

「駄目よ、カランちゃん！

もうその魔法を使わないで！

古代神界魔法はそんな気軽に使っていない物じゃない、命と引き換えに発動する禁断の魔術なのよ……！」

「……は？

って泣くなよ……どうしたんだよ！？」

止め処なく溢れ出す涙で赤い瞳を濡らして泣き叫ぶリア。

情況について行けず、完全に置いてけぼりのカランは呑気な返事を返してしまう。

身を乗り出したカランの視線が涙を拭い去ったリアの視線と合った瞬間――

ガシッ

「とにかくもう古代神界魔法を使わないで使わないよね使っちゃ駄目よ使わないって言って使わないって約束して使わないって……」

カランの顔をガッチリ抑え、息が重なり合う程の距離から震えた声で必死に訴えかけるリア。

壊れたレコードのように延々と繰り返されるその言葉を啞然と聞いていたカランだが、やっとその意味を悟ったのか、頬に当てられたリアの両手に自分の手を重ねる

「大丈夫だよ、俺はその代償を受けない体質だから――だから大丈夫

夫だ。

「心配してくれて有り難うな」

え？

「体質、それってどういう事かしら……？」

カランの言葉に一瞬キョトンとなるリア、そして真っ直ぐカランの瞳を見据え、言葉の真偽を探る。

そんな彼女に口元をニイと持ち上げ——本人はキザな心算だが、容姿が容姿だけに——愛らしく微笑むと

4	4	m	t	d	4
6	6	4	e	d	6
4	4	4	m	I	4
9	9	6	e	t	9
		4	m	e	
	A	9	4	4	I
	d	A	6	6	t
	I	d	4	4	e
	t	I	9	9	m
	e	m	A	A	4
	4	4	d	d	6
	6	4	e	I	4
	4	6	m	t	6
	9	4	4	e	4
	A	9	6	m	9
	d	A	4	4	A
	I	d	9	6	d
	t	I	A	4	4
	e	m	d	9	6
	4		I	A	4

さっきのお返しと言わんばかりにGMコマンドを連呼、リアが言う古代神界魔法で13個の魔法パンを一気に製造した。

もはや度肝を抜かれて言葉も出ず、絶句するリアを他所に、一仕事を終えたカランは再び可愛らしく——じゃなくキザに口元を持ち上げ、

「君の為にテーブルを魔法パンで埋め尽くしたよ」

本人が思った格好良い台詞を可愛い声で紡いだ。

「う、こんな事……！
あ、あなたは神様なの……？」

目に涙を滲ませ上目遣いで見てくるリアにカランは困ったように髪を掻いて見せ、

「いや、そうじゃなくってさ……実は門外不出、一子相伝の秘術があるんだよ。

どんなにコダイシンカイ魔法を使ってもリスクが出ないヤツだ。そのせいで悪い魔導師に命を狙われてね……この事は誰にも言わないでくれ」

真顔で大嘘をついた。

嘘つきは泥棒の始まり、何て言ってはならない。

これはとんでもない所にたどり着きそうな義姉を引き止める、あくまでも善意の嘘なのだ。

とてつもなく胡散臭い内容だが、規格外の行動をして尚平然としているカランが物言わぬ証拠となり、震える声で「よかったあ」と呟いたリアは肯定の意味を表す様に力強く頷いた。

「それよりもリア、食べないのか？
勢いで作ったけどさっきで腹いっぱいだ」

カランの言葉にテーブルを埋め尽くす魔法パンモドキに視線をもどすリア。

食べるか、食べないか、激しいせめぎ合いの末、食欲と好奇心と、

何よりカランの手作りに負けたリアはカランが無意識に触れていた
食神アルクマイオンの誇りを大事そうに両手で抱え、顔の近くまで持っていく。

薄い、が驚くほど弾性に富んだ皮ナシに包まれた、程よく火が通った何かの肉。

一口食べれば口腔を満たす幸福の味

「……！」

美味しいっ！！」

思わず洩らしたリアにカランは微笑みを浮かべ

「後で冒険者ギルドに行きたいんだけど、案内してくれる？」

サ克蘭ボを捻じ込めばそれだけで塞がってしまいそうな小さな口から紡がれたその言葉に至福の表情を浮かべたまま固まるリア。

「駄目かあ……？」

某魔界脳喰怪人の様に人差し指を唇に当て、いかにも可愛い仕草で断れば殺すと本能に訴えかけるカラン。

「わ、解ったわよ……」

生命の危険を感じる前にその仕草に折れたリアは渋々承諾した。

Side: カラン

「……………」

「……おほほほ」

イライラドツカン寸前の俺の傍で口を手で隠し、上品に笑うリア。

美食と脅迫でリアを丸め込み、ギルドに連れて貰う事を承諾させてから約5時間。

俗に言う10時に成ってやっと通る魔導列車とやらに乗車し、冒険者ギルドに着くと昼の休業時間と激突してしまい、一言【CLOSE】とだけ書かれたプレートに門前払いにされた。

しかも魔導列車のチケットが何故か駅では無く酒場で売られていると言う。意味不明と言う。

だったら一旦引き返そうと思ってチケットを買っていく酒場に向った
らこちらも昼の休業中。

なら公園で時間を潰すか、と思ったら決闘と言う名の魔法の試し打ちを繰り広げる魔導師集団に占拠されており、下手に近寄ろうものなら果たし状を送り込まれない。

そんな訳で俺達は今公園から数十メートル離れた小さな広場でする事も無く、ただただ立ち尽くしていた。

「この町って毎日こんな感じ？」

「うん、皆ゆつたりしてて良い感じでしょ？」

しれっとした顔のリアの返事にカランは見えない角度でこめかみを押さえ込む。

「……どんな政策で町が回ってるのか激しく疑問だ……」

「其処はほら、他国から来た学生の学費とか地元の学生の学費とかで――」

「結局全部学費かよ！」

確かベオルイルはアイゼンファルド大陸で唯一魔導師養成機関を持つ都市だったな……

それなら魔導都市と言うより学園都市の方がしっくり来る。と言うのが改名しろ。能力開発してる訳じゃないから著作権問題には引っ掛からないはずだから。

『やっと見つけました、ドラゴンのお嬢様ですね？』

この町のあり方について真剣に考える俺の脳内に突然響く声。

丁寧ながら、圧倒的な威圧感が含まれた女の声に、思考の海を泳いでいた俺の意識が固まった。

Side:???

パライイイン

掌にのせた琥珀色の結晶に魔力を流し込むと、滑らかな表面に亀裂が走り、軽い音をたてて砕け散った。

金系による繊細な刺？が施された、一枚で平民の一年分の稼ぎが軽く飛ぶ厚手のカーテンに外界の光を遮られて、昼間だというのに薄暗い部屋の中に砕け散った結晶の破片は闇に溶けてゆく。

「やられましたな」

悔しさを通り越して腹立たしい私の傍で椅子に腰を掛ける、フードを目深く被ったドワーフ老人は掌に残った結晶の破片を払い落としながら落ち着き払った声を室内に響かせます。

「……ええ、やられましたね。」

流石バレスト様、と言うべきですね。」

昨日森で起きた魔力場の異常にいち早く反応し、その原因であると称じてこの星屑の涙を送り込んできた大隠居者様。
スターダストティア
バレスト

なめやがらないで下さい。この程度の魔力で碎ける不完全物質があるの魔力場の乱れの原因であるはずがありません。
まがいもの

「はーあ、やーっぱり何か隠してるわね、あの坊や」

「……ちつ、また密偵たちに探らせるか？」

「その必要はないじやろう。」

原因ならわかっておる。……この少女じやろう。」

苛立ちを隠す事無く言葉を荒げる他の皆を鎮めたドワーフの老人は緑色の光を帯びた指先で宙に円を書いてきます。

彼の指がなぞった空間に緑色の光を放つ炎が現れ、色が偏ってますが、風景と認識できる画像が浮上しました。

「これは……ルアルフ様、恐れ多いながら、バレスト様の娘——リ
アさんをお疑いですか？」

ドワーフの老人、大鍛冶師ルアルフが発動した、空気中を漂う砂粒を魔力で風景を記録する視覚魔法によって映し出された、無邪気に微笑を浮かべる生徒の顔に、私は知らない内に呟いていました。

彼女があの子の養女である事は知っています。

でも、まさか、私と似たもの同士であるあの子がこんな事件に手を貸すなんてありえるのでしょうか？

彼女の考えなら読まなくても解かります、だからこそ信じられませ
ん——

「そう慌てるでない——無関係とは言いがたいが、肝心なのは彼女ではないのじゃ。」

画面の端に、ぼやけて見づらい人影が映つとるじやろう？

……この映像は城門の記憶結界がとらえた物じゃ。

高精度の記憶結界をこれほど乱す魔力、これは恐らく……竜ドラゴンじゃ。

それもただの飛竜トリュンでは無く、人の形を取る事が出来る高位な竜人ドラゴンじやろう……」

感情の起伏が無い声で淡々しくつげるルアルフ様。しかし、人の心を読む術を持つ私には解かります。

平然を装って、心の障壁も築き上げていますのでその詳細まで読み取る事は出来ませんが、彼の内心は焦りを表す赤色にそまっています。

仕方の無い事です。

千人の兵士をたった一瞬で灰に変える程の力をもつ人知を超越した存在、それが竜人ドラゴンです。

こんな定命生物へいぼんな町に、一体何しに来たと言うのでしょうか？

「ドラゴンか……それは厄介だね、なんなら使者を送ってみるかい？」

「ハウエルグイの意見は最もじゃが、人間の礼儀は竜人ドラゴンにとっては屈辱であるかもしれん。

……溢れ出す魔力を制御する術を知らぬ幼竜バビイなら尚更じゃ。」

「待つていただきたい、竜人ドラゴンである事は認めざるをえないが、何故それが幼竜バビイだと断言できるのだ？」

「良く見るのじゃ、リア嬢の顔を。」

……楽しい表情を浮かべておるじやろう、笑顔というのは浮かべる相手がなければ自然に浮かばない物じゃ。ぼやけた人影が同年代

の者である事は賢者たるお主なら容易に推測できるじゃろう？
それに成年竜シロリツであれば無闇に力を晒し、混乱を招くような事はせんからのう」

そう言われて見れば、画像に映るリアの表情にいつもの憂いがありません。

それどころか、2年間も師を務めてきた私にすら見せた事の無い、作り物ではなく心からの笑顔を浮かべています。

「我々がドラゴンとの交流を経て久しい。

偶然迷い込んだのか、はたまた我々に対しての何らかのメッセージか……見極める必要があるのう。

相手は子供じゃ——クロニカよ、読心術に長け、校長を勤めるお主以上に相応しい者はおらんじやろう。」

そう言う事ですか……七賢者でもない私をこの場に呼んだのは、この事が目的という訳ですね。

「……彼に接触すればいいのですね？ 解りました」

「くれぐれも慎重にのう……」

立ち去る私に念を押してくるルアルフ様。

解かっています、私も今の居場所を失いたくはありません。

竜……何百年振りに聞く単語でしょうか？

私の記憶ではこんな事はありません。懐かしさに浸ってる場

合じゃないですね……

胸底から湧きあがる底知れない不安……と思いたい、麻痺した手に触れた時のような、現実味の無い感覚。

こんな気持ちに成れたのは久しぶりです。

S i d e : カ ラ ン

『やっと見つけました、ドラゴンのお嬢様ですね？』

直接心に響く声——テレパシー念話に、反射的に振り向くとそこには死神が立っていた。

目深に被ったフードから白銀の髪が流れ出し、包帯に包まれた顔部から表情をうかがう事は出来ない。

ピンと伸ばした背筋に全身を包む漆黒のローブも相まって一目見ただけで今まで生きてきた経験が彼女を死神だと結論付けてしまう。

「お久しぶりです、先生！ よかった、病気が治ったんですね？」

場違いにおぞましいその姿に固まるカランを他所に、リアは空気を

読まずに陽気な声を上げた。

……は？ 先生……！？

リア、お前が伊達狂人^{ダテキチ}の娘だってついさっきまで信じられなかったけど……今なら頷ける。

流石に外来生物^{ブラックバス}の娘だけあってただ者じゃないな……まさか見習い死神だったとは……！

「ええ、お久しぶりです、リアさん。

心配を掛けましたね、でもこの通り復帰しましたよ。

明日から授業に正常復帰出来そうです」

「本当に良かったあ！

だって先生の授業じゃないとレベルが低くてつまらないんですもの！」

「ふふっ、言いましたね？

明日の抜き打ちテストには魔法理論の複合概念を出しますから、覚悟していて下さいね？」

「もう先生つたらあ！

抜き打ちって、言っちゃったら意味ないじゃないですかあ！」

……何デスカ、このほのぼのとした日常談話^{ダイアローグ}……キャラが全然違イマスヨ、キャラ崩壊デスカ？

「でもあの店、食用オイルを繰り返し使ってるって噂よ？」

「そうなんですか？」

「非道いです、自治会にクレームを送りましょう」

予想外の展開に完全に置いてけぼりのカランを他所に師徒二人は和やかに世間話を始める。

「……あのさ、親しそうに会話している所悪いんだけど、俺に用が有って声掛けたんじゃないのか？」

「そんな事より聞いてくださいよ、この前セシルなんか……」

駄目だ、この二人聞いてないよ。

ガン無視されたカランは呆れ果てて「はあ、」と溜息をつく。

一向に終わらない師弟談話を繰り広げる2人をじー、と眺めていると、さつきからリアの先生という死神がその氷の様に透き通った瞳でチラチラと見てくる事に気付いた。

その真意を探るように睨みを返すカラン、冷酷な死神の凍て付いた氷の瞳に驚きの色が浮かび上がった。

『ひよつとして、^{ナカマ}同族さんですか？』

突然心に響く女の声。

とつさの事に言葉の意味を理解しかねていると、リアの話を適当にあしらいながら此方を向いていた死神の顔が緩む。

「所でリアさん、そちらの素敵なお嬢様は貴女のお友達でしょうか？」

「やだあ先生、素敵なんて直球過ぎじゃないですかあ！でも違いますよ、この子はカラン、私の妹なんです！」

「え？」

リアさんには妹様がいらしたのですか？」

「実は——」

「おほほ、そうなんですのよー私ずっとイストネアガードで生活していたんですよ。」

ベオルイルに來たのは初めてですわ、ねー、アネウエサマ？」

女のペースに乘せられて危つく口を滑らせそうなりア。

カランはそんな彼女の胸に飛び込む振りをして喉を抑さえ、バレストの娘らしい、お嬢様口調で嘘情報を洩らす。

喉を抑えられてなぜか嬉しそうなりアと、余りにキモイ演出に喋ってる傍から鳥肌がゾクゾクと立ったカランは義姉を解放し、シルクのような滑らかな銀髪をくしゃくしゃに成るまで搔きたてて悶絶した。

「ああ、そうでしたか。」

始めまして、私はリアさんの教師を担当させて頂いてます、エルフのクロニカと申します。」

まるでメイドみたいに90度腰を曲げながら自分の名前だけ一文字一文字はつきり読み上げて名乗ったクロニカは何か訴えるようにその氷結した瞳でカランの瞳を覗き込む。

綺麗だが、無数のサーチライトで心を照らされてるような錯覚に、思わず目を細めるカラン。

そんなカランに首を傾けるといって、全く似合わない仕草を見せたクロニカは再び念話で

『少々伺いたい事が有るのですが、時間を戴けませんか？』

とカランの心に訴え掛ける。

……何だか良く解らないが、この人はヤバイ。

最初に【ドラゴン】と断言して来た時点から怪しい。

だめだ、この死神——バレストと同類だ。

深く関わったら取り返しが付かない事に成る、そんな気がする。

今度こそ先手を打って——颯爽に逃げ出す！

そう思って踵を返そうと足に力を込めた矢先——

「久しぶりだな、クロニカ。」

丁度娘の事で貴様に会おうと思った所だ。
纏めて一箇所に湧いてるとは探す手間が省けた。」

力強い大きな手に頭をガシツと固定され、反射的に振り払おうと手を動かした瞬間、気狂いの声が耳元で響いた。

「……………！」

ええ、お久しぶりです、大賢者バレスト様。」

「こんな所で立ち話も何だ、貴様らまとめて私の焼却炉に招待してやろう。」

包帯越しにもはつきりと解るほど顔を引き攣らせたクロニカを気に留めることなく、伊達狂人は指ばち^{ダテキチ}で転送魔法を発動させた。

4・死神の来襲（後書き）

機能崩壊気味な町、戦いに明け暮れる戦闘民族、執着に主人公を付回すハンター！！

果たしてカランはこの死の町から無事生還できるか！？

次話：世紀末救世主カラン、モヒカンに死す！

モヒカンの力、侮るなかれ！！（→嘘

対象のIDを覚えてないと使い無いGMコマンドですが、

本人は42731（死になさい）4649（夜露死苦）とか覚えやすい（爆）

IDは何気に覚えているようです。

5・初戦闘の相手は――

Side：クロニカ

指を鳴らす乾いた音と共に闇に落ちた視界が光を取り戻した時、炎を連想させる幾何学紋章が所々に刻まれた真紅の空間の中心に彼女達はいた。

「ようこそ私の焼却炉へ。

ああ、警戒しなくて良い。

幾ら私でも必要も無く愛娘達を焼き殺すつもりは無い。

ここに連れてきた理由は私が落ち着くからだ」

転送魔法の所為でまだクラクラする頭に響く男の声に思わず眉を顰めるクロニカ。

『必要も無く』……？

つまり必要に成れば自分の娘でも焼き殺すんですね、あなたは。

そんな事よりも、気になるのは”焼却炉”という単語を聞いた途端、身近にいたリアにしがみ付き微かに震えるカランと言う、心の読めない少女です。

別名【インテラメント月読みの魔女】の異名を持つクロニカは読心術に精通しており、秘術と言うよりは生まれつき備わった本能に近いその能力は如何なる相手の心をも見通す。

ただ一つ例外を除いて。

それは繰り返される歴史の中、無限に蘇る同族達、無限竜族。エターナルドラゴン

8体居た同族の中で唯一雌竜であつた彼女は自称老紳士の気くばりで、竜族同士の戦いに身を投じる事無く人の世に紛れ、何千年もの時をひっそりと生きていた。

私の記憶に、こんな幼い雌竜は居ません。メイビュアリー

後裔という事はまずありません。

何故なら無限竜族は死ぬ事が出来なければ、子孫を残す事も出来ないのですから。わたしたち

イエロードラゴン琥珀竜族と違い、総ての時を通して唯一の存在である無限竜族に、わたしたち未来もしくは過去の自分が同じ時軸に存在する現象——パラタイムロス時列錯誤が起こるはありません。

他にどんな原因があるのか、私には想像も付きません。

それに同族なら解る筈の名前に何故か警戒心を深めるといふ謎の行動を取ってますし、単に私の気のせいでしょうか？あごじやい

……いいえ、気のせいなんかじゃないですね。銀髪に青い瞳、そして何より体から溢れる『蒼白』の魔力——その全てが、彼女が無なか限竜である事を示しています。

「何、簡単な話だ。

カランをヴァルディガ魔導学院に編入したい……勿論教師として、な。」

「待った！ 異議あり！

何で教師なんだよ？

……と言うか何で俺が学校に行かなきゃいけないんだよ？」

空間を満たすバレストの威圧。

一般人なら足が竦んで動けないというのに、カランさんは気後れする事無く敢然と反論します。

「ほう、折角私が示してやった栄光への道を拒むか？

よろしい。リアが恵まれない才能で徐々に名誉を上げ、歴史を動かす存在に成る中、私が分け与えた別荘の一室で一人寂しく腐ってるが良いわ。」

「歴史？

——っ！

解った、やる、と言うかやらせてくれ！」

「……だそうだ。

異議は言わせないぞ、校長？」

「バレスト様、恐縮ですが魔導学園を舐めやがらないでいただけますか？

まだ成人すらしていない、ハーフェルフとは言え少女を教師に迎え入れる事は出来ません」

「ほう、ヴァルディガ魔道学園の校長ともあろう者が、見た目で相手を判断するとても？

それはいい。貴様が見た目でしか人を判断できない器の小さき物でも私には何ら関係ない事。

ただ由緒正しいヴァルディガ魔道学園の伝統を忘れないで頂きたい。

「実力があれば、誰でも受け入れると言う素晴らしく野蛮な伝統をな。」

「……面白い事を仰られますね、ならば試してみると良いでしょう。私をこの場に呼んだのも、最初から彼女との手合わせが目的なのでしょう?」

不敵に微笑むバレストに冷やかな視線を向けたクロニカは懷から魔導書を取り出し、記された呪文を口早に唱えると、2メートルは有ろうかと言う巨大な鎌が虚無から生み出される。

緑色の光を放つオリハルコンの刀身が三つ並んだそれは鎌というよりも、何かの生き物——例えば、ドラゴンの爪と形容した方がしっくりくる。

「ちょっと、何言ってるのよ父上様!?
それにクロニカ先生も落ちて着いて下さい!」

事態の異常さに気付いたリアが懸命に引き止めるが、時既に遅し。

「後はお前しだいだ」

リアを呼び寄せ、防御結界を展開させながら、言葉で促すバレストに頷き、小さな声で呟くと同時に鎖が何重も巻きついた巨大な鍵を生成し構えるカラン。

「カランちゃん!」

「……悪い、リア。だけど、こっちも譲れない事情があるんだ。」

「降参なら今の内ですよ。幾ら子供と言えど手加減はしませんよ？」
媒介も無しに生成された奇怪な鍵に警戒しながらも大鎌を構えるクロニカ。

その表情にリアと会話していた時の穏やかさは無く、青い瞳を燐と輝かせ、両手で鎌を構える姿は命を刈り取る無情な死神その物だった。

Side：カラン

鎖を幾重に巻きつけた鍵、【絶望の鍵】^{ベ・イルダンテ}を構えなおし、もう一度クロニカの瞳を覗き込むカラン。

……やっぱ見えないか、ステータス。
リアや公園で魔法の試し^{スタン}打ちをしていた魔導師達もそうだけど、ゲーム内^{NPC}でどうでも良い人のステータスは見れないのか？

ヴァルディガ魔導学園なんてプレイヤーにとってぶっちゃけどうでも良い場所だったから……教師どころか校長ですら汎用Modだ
この死神校長のステータスが見えない理由は分かったけど、仮にも魔導都市の中心とも言える組織のリーダーが実は雑魚だった！……って事は無さそうだ

「お先にどうぞ」

自分の背丈よりも長い大鎌を両手で構え、優雅に一礼する死神。クロニカ

洗練されたその動きに無駄はなく、実力の高さが垣間見える。

いきなり魔法使い、それも上級者とエンカウントかよ……

でもここは退けないな。

死神校長このひとに勝てばヴァルディガとコネが出来る。

生徒じゃなくて先生にするって事はバレストも何か企んでるみたいだけど、俺としてもメリットはある——あそこなら元の性別に戻る為の方法があるはずだ。

ついでに魔王軍屯地の封印がどうなってるのかも知りたいし、情報はあるに越した事がないからな。

やるなら今しかない……問題はとう倒すか。

魔法を使う相手には魔法で対抗するのが定石だけど、俺が使える魔法はGMコマンドと虚空魔法だけだ。

……GMコマンドは使えないな

リアの反応からして——ゲーム内でもそうだけど——この世界でGMコマンドは禁術っぽい。人前で使ったら騒ぎになりそうだ。

——相手が伊達狂人タテキチと死神校長クロニカなら尚更、使ったが最後、代償が無い理由を徹底的に問い詰められそうだ。

じゃあ虚空魔法はどうかって言うと――

詠唱無し＋媒介不要＋超速連射＋永久機関＝チート同然

当たり前か……そもそもGM職なんだし、カオスサマナーって。

ジャラジャラ

リアルファイト……

人生初の決闘。

緊張の余り握りなおした獲物――ロングソード位の大きさもあるゴシック調の装飾が施された巨大な鍵――に幾重に巻きついた鎖が擦れ、静まり返った空間の中で乾いた音を木霊させる。

どうする……？

物理的に叩きのめすしか方法が残ってないんだけど、魔導師に正面から突っ込むなんて無茶を通り越して無謀だ、命が幾らあっても足りない。

もし、運良く、あいつが予想以上に弱くて、何とか接近戦に持ち込めても、やれるか？

――無理だな。

幾ら死神みたいな格好でも生身の人間を――それも女を殴るなんて出来ない。

考える、ノックダウンしない前提で勝つにはどうすればいい……？

「……貴女から来ないのなら、こちらから行きますよ。」

Il Vento o Ch'est a Lib……」

ベ・イルダンテ

【絶望の鍵】を構えて相手の出方を窺うカラン——いや、構えと呼べるほど形の入った物じゃない、背丈の半分もある巨大な鍵を握り締めてるだけ。

一応腰を落としていつでも動ける体勢を取っているが、股を開けすぎて重心が極めて不安定だ。

戦い方を知らない素人である事は一目瞭然。

そんなカランの姿を感情の宿らない、凍て付いた瞳に映したクロニカは、翡翠の竜爪を掲げ、挑発するように一文字ずつ呪文を読み上げていく。

詠唱と共にエメラルドグリーンの大鎌に纏わり付く緑色の光の粒子。

魔力が躍動し、うなり声を上げるなか、雪の妖精はその小さな唇を愛らしく歪めた。

「何を笑っていらっしゃるのですか？ ——ッ！」

予想外の表情に一度詠唱を中断し、首を傾げる死神。

その言葉は最後まで発し得ない、白き雪の妖精が、肉眼では到底追いつかないスピードで一瞬にして目の前に迫ったからだ！

相手は接近戦に弱い後衛の魔法型……だったら発動条件の媒介を奪ってしまえばいい！

「——早いんですね、ですがっ！」

己の慢心が招いた反撃に悔やみながら掲げていた大鎌をそのまま振り下ろすクロニカ。

緑の残影を残し、空間を切り裂く死神の鎌！

ジャラジャラ、ガキイーン！

ぎこちないながら、人間離れた敏捷な動作で縦の一閃を回避したカランは何時の間にか鍵に巻き付いた鎖を鎌に絡めていた。

そして繊細な手からは想像も付かない怪力で鍵をなぎ払い、絡みついた鎌を持ち主ごと宙に投げ出す！

「なるほど、魔法を使う相手に媒介を奪う事で無力化を狙うわけですね、良い判断です……が、Vent oGli e l oS p a z z a
！【エメラルドスワロー】！！」

やむを得ずに媒介を手放し、空中で器用に体勢を立て直したクロニカは とん、と軽い音を立ててカランの背後に着地すると、短い呪文を早口で唱えた。

呪文の完成と共に現れる、緑色に輝く魔法の刃達。

「嘘でしょ！？——先生！？」

カランの前後左右を囲む、絶望的な量の刃の壁——その一つ一つが、ガーディアンのの鎧をも引き裂く凶刃だ。

防御結界の中で額に汗を浮かべたバレストと傍で悲鳴をあげるリアが見守るなか、見た目以上に質量のある絶望ベ・イルダンテの鍵を力の限り振るった反動で体勢を崩したカランに刃の壁が一斉に襲い掛かる！

——だが、それらの凶刃がカランの体を切り裂く事はなかった。

吹き荒む刃の嵐のなか、白い残影を残して舞い狂う雪の妖精——カランは襲い掛かるおびただしい量の風の刃を、紙一重でかわしきった。

一体どうなってるんだ……？

平和の時代を生きていた彼女にこんな卓絶した戦闘技術はない——
全ては無意識の内に取った行動——そう、本能なのだ。

レベル^{22.5}ストレベルともなれば、その天文学的な数値のAGIにより意識に関係なく自ずと防衛本能が働く……殺しを生業とする某東洋系男が背後に立つ者を——時と場を選ばず——反射的に殴り倒してしまうのと同じ原理なのだ。

至近距離で放った回避不可な筈の魔法を完全に見切られ、目を見開くクロニカとバレストを他所に ほっ、と胸を撫で下ろすリア。

「MeLoCollpa、【フォローウィンド】——！」

自分の意思に関係なく——まるで意識を持った体に操られたような、不気味な感覚に背筋がゾツとするカラン。

その隙を逃さずに魔法を発動させたクロニカは、バックステップで彼女から距離を取った。

「恐ろしい身体能力ですね。あの至近距離で【エメラルドスワロー】を完全に見切るなんて……」

「……メイジの癖に媒介無しで魔法を使うアンタのほうが凄げーよ」

「フフツ、化け物なのはお互い様と言う訳ですね。

A C h e N o m e D i ……」

カランの返事に書物に書かれた「フフツ」をそのまま読み上げて見せ、手を掲げ再び詠唱を始めるクロニカ。

もう一度接近戦に持ち込むべく駆け出すカランを嘲笑うように、小型の竜巻に身を包んだクロニカは軽く地を蹴っただけで十数メートルの上空に飛び上がった。

「S u l l a B a s e D e l P a t t o M i O r d i n e G l i e
l a T a g l i a L a C o r p o T e m p e s t a、【ハザードサ
イクロン】——！」

ブオオツツ！！！！

攻撃の届かぬ上空で完成された呪文と共に巻き起こる、災害を撒き散らす狂風。

縦横無尽に吹き荒れる狂風の中で激しく舞い狂う銀の艶髪をなんとか押さえ込み、フードを被るカラン。

何でこの死神ひとが翡翠クインサレナの竜姫の殲滅魔法——【ハザードサイクロン】を使っひとてんだよ!?

さっきの【エメラルドスアロー】もそうだけど、この死神ひと本気で俺を殺す気か……?

『先ほどから物理攻撃ばかりですね。もしかしたら魔法が使えないのですか? 幾ら身体能力が高いとは言え、魔法を扱う素質が無いのであれば教師として認める事は出来ませんよ?』

よくこんなえげつない攻撃しかけておきながら、ケロツとした声で念話を飛ばせるな……挑発にしたって下心丸見えなんだよ。

巻き上げた小石を、ガーディアンの鎧をも貫く凶弾に変える広範囲殲滅魔法、【ハザードサイクロン】。

その真の恐ろしさは範囲内の全ての攻撃を包み込み、術者自身に弾き返し自滅させる事にある——何も知らない素人はどうか知らないけど、俺にそんな作戦は通用しない。

要するに術者から射出する放出系の魔法が使えないだけで、

カオスサモニング ファイレンディリエット
【虚空召喚：屍喰い鳥】

こうすればいい!

歌のようにも、呪言のようにも聞こえる、掠れた女の呟き声が何処からともなく響く。

声の元を目で追ったクロニカの視界に映ったのは、吹き荒む狂風の遙か上空——燃え上がる炎の色を宿した空間で白い羽毛を撒き散らす蒼白の霧だった。

ひどく物悲しい、無色素な光を放つそれは、空間を蝕みながら急劇に広がり、やがて死んだ魚の目の様な、生気を感じさせない雲海を覗かせる異界への扉——【ポータル】に変化した。

「アッハハハハハ！！！！　ア——ハッハハハハ！！！！」

突然繋がれた【異界への扉】^{ポータル}から溢れ出す女達の奇声に、神々しくも物悲しい異界の光景に見入っていたクロニカの意識が呼び戻される。

余りに異様な状況に本能的に危険を感じて身構えるクロニカ。

だが、時既に遅し。

無限虚空の猟奇な狩人達は既に彼女に狙いを定めていた。

「——！！」

彼女の視界が捉えた物——それは無限虚空に繋がる【ポータル】^{アラバスタ}から無数に湧き出た、真紅の空間を白く染め上げるほどの雪花石膏で出来た天使の生首達。

おぞましい神の芸術品達にクロニカは声にならない悲鳴をあげ、耳

の代わりに生えた蒼白の翼を羽ばたかせながら迫りくるそれらに風の刃を乱射する！

死せる彫刻品達は殺戮の刃に整った顔を醜く砕かれながら、恐怖から動きを止めた死神に群がり、甲高い叫びと共に一斉に牙を剥いた！！

レベル255

絶対強者のカオスサマナーが召喚した堕ちし天使の樂園の住民達はその圧倒的な力と量で、哀れな死神に悲鳴を上げる暇も与えず、その体を文字通り喰らい尽くした

「……何なんだよコレ……」

予想を完全に裏切った一方的な虐殺に腰の力が抜け、その場に座り込むカラン。

死せる神の世界、

カオスサモニング

無限虚空から異形の存在達を召喚するカオスサマ

ナーの秘術——

【虚空召喚】。

フィレンティリエット

カランが召喚した【屍喰い鳥】は無限虚空でありふれた小鳥達だ。

数こそ圧倒的に多いものの、非力である故に攻撃よりも敵の牽制に使われる——筈なのに——目の前で起きたのは、その小鳥達による残虐な捕食。

ポタツ、防御結界へばり付く、一滴の赤い液体——それはクロニカと言うエルフがかつて存在した、名残。

「嫌あああああ……！」

湧き上がる罪悪感に感覚が曖昧になったカランの鼓膜に、親しんだ師の死に泣き叫ぶ義姉リアの声が焼きついた。

真紅の空間を満たす悲痛な叫び。

人を殺してしまった罪悪感が、少女の小さな胸にいつぱいに広がる。

俺は何をした……？

「人を、殺した……」

何を？ 何で？ 何の為に？ 理由？ どんなに理由？ 理由がどうした？ 理由を並べた所で人を殺した事実は変わらない。人を殺した行為が正当化される事はない。許して。赦して。何を？ 誰を？ 同じだ。あいつ等と同じだ。変わらない。お前は加害者。お前も加害者。才前八人殺シ。オマエ八ヒトゴロシ。オマエ八――

何 何故 した？ 罪

で 殺 人間 失 格

殺 人 殺 し

し わ ある の か

た か バ ケ モ ノ

? ら 図 々 し い

な 赦 し て 欲 し い

い 死 ぬ 筈 だ っ た

「返してよっ！」

先生を、うええぐっ、クロニカさんを返して、よお……」

涙と鼻水で綺麗だった顔をぐじゃぐじゃにして、結界が消失したと同時に駆け出したリアは空間の中央で地面に尻付き、項垂れたカランの肩を掴み、自分に向けさせる。

振り向いた人形の顔に嵌め込まれたサファイアの瞳はただただ虚ろで、小刻みに震える唇から紡ぎだされる言葉はもはや意味を宿さない。

強く触れただけで音を立てて崩れ落ちそうな、硝子細工のような少女の姿は見る者の胸を締め付け、苦しみを分け与える。

失われた師、壊れた義妹。

悲しい感情だけがリアの心を締め付ける。

「父上様、教えて……私は誰を恨めばいいの？
誰を憎めばいいの？

誰も恨めないよ…… 誰も憎めないよ…… カランちゃんの事が大

好きだから、先生の事が大好きだから、……私はどうすればいいの？」

震える声で、全てを諦めた、絶望の音色で誰に言うでもなく一人呟くりア。

「いい加減蘇つたらどうだ、エターナルドラゴン無限竜？」

それとも泣き喚く生徒と崩壊寸前の同族を置いて逃げ出すほどの薄情者か？」

そんな養女を横目で捉え、拳を握り締めたバレストは忌々しげに声を荒げた。

『……聞きたい事は山ほどありますが、今は男である貴方にだけ、ご退場願えませんか？』

何処からとも無く聞こえるクロニカの声に俯き、震えていたカランが勢い良く顔をあげる。

「ああ、そう言う事か。いいだろう、私も紳士だ。

ここは大人しく引き下がってやろう」

言い終えるのと同時に パチン、と指を鳴らして姿を消すバレスト。

その意味を理解しかねたカランとリアがお互いの顔を見合わせていると、何も無い空間から黒い霧が染み出す。

もやもやとしていた黒い霧は青白い光を放ちながら人の形に集まっ

ていき、それが晴れた頃にはプラチナブロンドの髪を背中まで伸ばした、体中に紋章がびっしりと刻まれた、長い耳を持つ——エルフの女性が全裸で立っていた。

「先……生……？」

先生！ 本当に先生なのね！？」

「ええ、そうですよ。」

心配掛けさせて申し訳ありません、リアさん……所でカランさん、どうして両手で目を覆うんですか？」

「……だ、だってアンタ裸だろ？」

「だから何ですか？」

「何って……俺に言わせるのかよ！

……恥ずかしいんだよ、服着ろって」

「？ 別に良いじゃないですか、女同士ですし」

「良くない！

そもそも俺は だ！」

「え？ 何ですか？」

「だから俺は なんだよ！

今は ■。のせいで □ にされてるだけだ！」

「……聞いた事もない発音ですが、イストネア語ですか？」

「うつん、違う。」

こんな発音聞いた事ないわ。」

男である事をカミングアウトするカランの傍らで真剣に首を傾げる二人。

もしかして、通じてないのか？

「……どんな発音だよ？」

「オ・ト・クウオとか、タ・ケ・ミ・ナ・クウア・タ、あとオン・ヌウア——どれも聞いた事の無い発音です。」

どう言う意味なんですか？」

両手で顔を覆い被さって俯くカランのと視線を合わせるようにしゃがみ込み、妙に鈍ってるカタコト発音で男やタケミナカタの発音をするクロニカ。

目を閉じていながら、何故かその行動が手に取るように解かったカランは慌ててクロニカに背を向ける。

普通に言葉が通じてたから今まで気付かなかったけど、喋ってる時の口の動きと言葉があってない。

理由は分からないけど、この世界の住民と言葉が通じるように自動通訳されてるんだ。

じゃあ、何で「俺は男だ」がそのまま通訳されないんだよ？

……考えなくても軍神あいつの仕業だな——罰として女体化——神だつて知らなかった事、そんなに根に持ってたのかよ……

っていつかここまでするか？

見た目だけでも十分鬱陶うつといののに、本当の事が言えない何てどんな羞恥プレイだよ……

「一体どう言う意味ですか？ 物凄く気に成ります」

「……もう良い、忘れてくれ…… . Add Equipment 10001、ちょっと重いけど取り敢えず着といて、話はそれからだ」

クロニカが無限竜なかまである事が解かり、警戒が緩んだカランは存在を伏せていたGMコマンドで「神テンが遣ユした十の戒めと言う名のカオスサマナー専用装備を製造して投げ渡す。

「ちょ、危な——」

「きゃああああ!!!!」

何か潰れる音とリアの悲鳴が閉ざされた空間に木霊するが、カランは目を閉じたままそれをスルーする。

が、その少々垂れ気味の耳は途切れ途切れに響く ジャラジャラ、ビリビリ、と言った音をしっかりと捉え、一体何事だと眉を顰めるが、目を開けて確認する事も出来ず、これ以上変な音が聞こえないようにカランは耳を押さえた。

しばらくすると変な音が止み、

『もう目を開いても良いと思いますよ』

落ち着いた女性の声がカランの心に直接響く。

ゆっくり目を開かれたカランの視界に映ったのは――一面に散らばる鎖の欠片とスラリと伸びた、紫色の紋章がビッシリと刻まれた足。

そのまま視線を上にとっていくと――

「勝手に解体して申し訳有りません。

でもこれは重装騎士ガーディアンの装備ですよね？

私ではとても……何でまた目を瞑るんですか？」

「もう良い……この服貸すからちゃんと着てくれ、お願いだから。」

「最低限の部分は隠してるんですから、もう良いでしょう？　そもそも女同士なのにどうしてそこまで気にするんですか？」

つたない動きでローブを脱ぎだすカランの細い腕をガシッと掴んで制止するクロニカ。

その拍子に辛じて胸を隠していた布切れが滑り落ち、はちきれんばかりの巨大な丘とその先端にある桃色の突起が外界の空気に晒される！

……大きいな

感想はそれだけ。

ローブで隠れて解からなかったけど、こんなバツストライクボンキュッボンなナイスバディを普通に直視したら無い物でも勃つぞ……体中——顔も例外なく——紋章を刻んでくれたお陰でそうは成らなかったけどな。

っていうか体はともかく、顔に紋章刻むか？ かなり美人なのに勿体無い、芸術への冒涇だ……相変わらず紋章術師ルンメイジの考える事はわからないな、体に紋章を刻んで媒介代わりにする位なら腕輪とかに変えた方が断然良いのに。

「もう良いよ……それよりリアは？」

「これから話し合う内容を考慮し、そとに転送させて貰いました。
……単刀直入に聞きます、貴女も無限竜エターナルドラゴンですね？」

「……ああ。

そういうあんたは——聞くまでもないな」

「ええ、先ほども名乗りましたが、私はクロニカといいます……どこかで、お会いしたでしょうか？

失礼ですが、貴女のような強い魔力を放つ存在は記憶にありませんでした——物忘れなんて、私も年ですね」

覚えてないも何も、俺がイレギュラーだからだろ？

なかま無限竜っぽいし、『クロノラドン』に召喚されたって、本当の事を

言っても良いのか……？

それより『私も年です』って……

「そんな事ないって、俺もあんたに会ったの今回が初めてだからさ。」

「え？ 私だけ仲間外れ……ですか？」

「そうじゃなくって！

クロノラドン以外に誰とも会ってないんだよ、俺は」

露骨に落ち込むクロニカ。

慌てて誤解を解こうと口ずさんだカランに、今度は目を細める。

「あの竜人^{ひつ}以外、誰とも会ってないんですか、今まで？

……貴女はもしかして——」

——マズイ、無限竜^{エターナル}はつい最近のパッチで追加された新種族だ、原作知識が圧倒的に足りないぞ……それにクロニカ^{クロニカ}の反応、どこかでボロが出たのか……？

「クロノラドン様に監禁されていたのですか？」

「……はあ？」

「とばけなくても良いですよ、誰にも言いませんから。」

……それにしてもあの老骨、異種族の若い子にちょっかいを掛けてまわるだけでは飽き足らず、こんな夢げな少女にまで手を出すなん

て……

今度あった時みっちり話し合う必要がありそうですね……！」

返ってきた突飛な返事に思わずカランは肩透かしを食らった気分になり、まの抜けた声をあげた。

その反応をどう受け取ったのか、紋章が走った顔を忌々しげに歪めたクロニカの背後から黒いオーラがメラメラと立ち昇る。

「違う、そうじゃなくって……！」

「あんな賤陋な老骨に監禁されて、さぞ辛かったでしょうね……でももう大丈夫ですよ。」

彼は今何処の時代にいますか？

おばあさんがこの手で正義の制裁を加えてきます！」

「だから違うって言ってんだろ！」

何が『おばあさん』だよ、どう見たって二十歳そこそこじゃないか！

って呑気に突っ込んでる場合じゃないな、実は――」

「……そう言う事でしたか、だから先生になる、とか荒誕な話に乗ったんですね」

クロニカはそういつて顎に手をあて、うんうんと頷く。

「でももう必要ないかな、あんた校長だし」

「どうしてですか？」

「どうしてって……俺が教師に成ったとして、」

サムズアップした手を自分に向け、

「こんな子供のいう事、信じる奴居る？」

「私は信じますよ」

「……………」

励ましの視線を送られても嬉しくも何とも無い、虚しいだけだ……

「そもそも情報と言うのは自分で見つけてこそ意味がある物ですよ。世界の存亡が掛かっているとは言え、みすみす教えちゃったら面白くないじゃないですか」

「……………あんた悪役だろ？」

「さあ、どうでしょう？」

それはさておき
閑話休題、合格です。特別に臨時教師として採用しましょう」

眉間を顰め、険しい表情になるカラン——相変わらず容姿のせいで威圧に欠けるが——にクロニカは顔の皮だけを動かして笑顔り、意味ありげに微笑んだ。

5・初戦闘の相手は――（後書き）

書いた自分が言うのもなんだがかなりエグイな……ちなみに無限虚空と言うのは無限に広がる雲海の上に広がる蒼白一色の美しくも虚しい、守護すべき神が死んだ無機質な世界、と言う設定。
クロニカに腹黒属性を付加、やっぱり大人はこうでないと

6・黒き禁造書

S i d e : イ ン ヴ ェ ル ノ

「——ってな訳で、また担任が代わるってさ。
っていうか、聞いてんの？」

教室についた途端、低血圧でまわらない頭にカンカンと響く人懐っこい少女の声。

「それがどうしたというの？
担任が代わるなんてよくある話、今更聞いても何とも思わない」

そんな声の主とは正反対に、黒髪の少女——インヴェルノ・カラヴェーナ——は素っ気無い返事を返すと、その切れ長の瞳を忌々しうに細め、宝石のように透き通った赤い瞳を声の主に向ける。

彼女の目に映ったのは小麦色の肌に乳白色の髪を持つ長身なエルフの少女だった——長身と言ってもそれは彼女から見た場合であり、エルフとしては平均的な高さであるが。

「確かにそーだけど！
だけどやっぱ、『えっ？　そうなの？』みたいな可愛いリアクション取って欲しいわけ！
あたしとしては！」

「『えっ？　そうなの？』……これでいい？」

そういつてエルフの声をそのまま棒読みでリピートする。

感情が微塵も籠ってないその返事にエルフの少女は前髪を？きあげ、周りの事など気にもせず、「だあーっ！」とはた迷惑な騒音を撒き散らす。

「そうじゃなくって！

もっところ！ こう……！ あー！ もう何っていうか！

とにかく！ ヴェルには愛想が無さすぎるわけ！

——愛想よすぎて変な虫が付いても困るけどさ——もうちょっと愛想よくしないと、何だかんだ言って幸せが逃げ出さずぜ？」

一応生物学的には女であるエルフの少女はその弾力に富んだ胸をインヴェルノの体に密着させ、愛想良く振舞う事の大事さについて力説する、が

「いらない。

それよりもう良い？ それ以上くっ付いたらミラでも撃つよ？」

返って来たトーンの低い声に渋々体を離す。

周りの男子が嘔血して倒れてるようだが、傍若無人なエルフと自分を含め全てに興味索然なインヴェルノには関係のない話である。

「……いいじゃん、ケチ。

……でさ、今度の先生なんだけど、あの校長を倒してきた猛者らしいぜ？」

「……今朝何食べたの？」

「あ？ 食堂のパンだけど…… って疑ってんの？
本当だって！」

あたしがガセネタ流す訳ないじゃん！」

溜息と共に言葉を吐き出されたインヴェルノの言葉にミラと呼ばれたエルフの少女は顎に指を当てて考える仕草をしてみせ、しかしその真意に気付くや否や、再び声を張り上げた。

疑ってる訳じゃない。覗き魔…… じゃなく地獄耳ミラ・ヴェネスト
ウーラ。

何の取り得もないこんな私と違って、彼女は言葉で全てを思いのま
ま操る【呪言】^{ウェスパー}の使い手だ。

それを情報収集に悪用して新聞記者をやっている彼女はベオルイル
ではそこそこの有名だ——報道規制を無視して発行する意味で。

そこら中から恨みを買いまくってるから、本当は関わり合いに成り
たくないんだけど

「っていか、最近どこでバイトしてんの？
料亭に行っても居なかったし…… もしかして、またクビに成ったわ
け？」

——関わらない訳にも行かない。

「うん」

「大丈夫？」

大丈夫はないよな？

やっぱあたしんち来なって、路上生活とかマジでありえないし！」

「路上生活じゃない、ちゃんと時計塔にすんでる。

だから私に構わないで」

「構わないでって、出来るわけないじゃん！

大体あたし達2人は一蓮托生だろ！？」

私とあなたは一蓮托生なんかじゃない、私が一方的に借りを作ってるだけなのだから

「うん、だから私に構わないで」

「訳わかんないし！ 大体——」

話を流されたミラは思わず声を張り上げるが、インヴェルノの真紅の瞳で睨みつけられて竦んでしまい、ツンと言葉が途切れる。

「私に構わないで、じゃないと撃つよ？」

Side: カラン

両端に石像が並ぶ長い回廊を短い足で通り抜け、何とか『2年X組』と書かれた扉の前に着いたカランは盛大に溜息をついた。

何が『吹き抜けをそのまま進んで右手に曲がれば教室に着きます』だよ、学生寮に教室ある訳ないだろ？

エントランスの地図見ておいて正解だったな

——といってもクロニカの言葉を信じたカランは実際にその狭い歩幅で学生寮まで行ったりする。

異変に気付いて慌てて引き返したカランだが、自分の担当になる『2年X組』についた頃には廊下には既に誰も居なかった——授業がすでに始まっていたのだった。

真顔でたぶらかされた恨みをそのまま白塗りの扉にぶつけ、押し開く。

ボタン、予想を裏切って重量がまるで無い扉は壁に打ち付けられ、キョトンとした表情で立ち尽くすカランに全生徒——と言っても9人だが——の視線が集中する。

「え、えーと——」

予想外のアクシデントに、予め準備していたスピーチの内容が記憶

から完全に吹っ飛んで言葉が詰まるカラン。

「……………」

もしかしくなくても迷子だな……一年は下の階だ——階段遠いから大変だろうが、もう授業始まつてるぜ。さっさと行きな」

扉に一番近い席に座った学生とは思えない、緑色のポンチョを身にまとい、赤いバンダナを付けた少年はカランの姿を見ると一瞬固まるが、すぐにぶつきら棒に言い放ち、視線を手元に戻す。

「なんなら僕が送ってあげようか？」

「いや、ここは俺が……！」

赤みがかかった少年の髪から覗く茶色の毛に覆われた獣のような耳に思考を巡らせてるカランを他所に、他の男子達が席から身を乗り出し、誰が送り届けるかに関してもめあいを始めてしまう。

それに気付いたカランは慌てて教卓の前に駆けつけ、訝しげな視線が集まる中クロニカから手渡された教師バッジを取り出して見せ、

「今日からおま——君たちの担任を務める事になったカラン・フェミスだ。」

担当科目は歴史、先生するのは初めてだから、色々分からない事があると思うけど、宜しく頼む——何だよ、見ても何も出ないぞ？」

「いや、そうじゃなくってさ、事務員バッジなんだけど、あんたの持ってるそれ」

え？ 事務員バッジ？

教師バッジじゃなくて？

——あのクロニカ^{しにがみ}、絶対確信犯だな……

「しかしこんなに愛らしいお嬢さんが事務員だったとは、今から僕とカフェテリアで一杯、どう？」

「色男は黙ってろ！

とにかく、今日からおれ——私が君たちの担任だ。

信じられないのはおれ——私も同じだから、とりあえずホームルームを始める。

その前に……」

金髪碧眼のイケメンハーフエルフの誘いを即座に蹴り飛ばし、授業開始を宣言したカランはクラスを見回して一息置き、

「カーテン弄るな！ 窓攀じ登るな！ ^{ファイアーボール}火玉飛ばすな！ あとトーム彫るな！」

目の前で現在進行形で起きている奇行の数々を一つ残らず指摘していく！

注意された生徒たちはバッが悪そうに笑って誤魔化すが、ただそれだけ。

カーテンを結びあげてサンドバッグにしている栗頭の少年（人間）は相変わらず窓掛け殴りに没頭してるし、某蜘蛛男よろしく窓にへばり付いてる眼鏡の少年^{エルフ}は相変わらず爬虫類標本のように窓の上に

貼り付けてある。

後ろの方で魔法の飛ばしあいをしている双子らしいドワーフの少女達は更に過激な魔法弾を練りだす。

唯一反応らしい反応を見せてくれたのは、最初に声を掛けてくれた獣耳の――獣人の少年だった

「てめえ！……何でトーテムの事を知ってる？」

「ああ、これでも一応歴史教師だから各種族の文化には手広く手を染めてるんだよ」

「それを言うなら手を出してる、だろうが……だが……いや、それもありか……」

ぶつぶつと独り言を言いながら渋々と頷く獣人の少年。

それも違うと思うぞ……まあ、俺は国語教師じゃないし訂正するのも面倒くさいけど、何なんだこのクラス？

授業中だつてのに教科書も開かないでやりたい事をやってるし、ちつとも悪びれてる様子がない。

……お、あいつ真面目に本読んでるぞ。

……っていうか、あの子東洋人？

珍しいな、あまりにも見かけないからてっきり全員西洋系かと思っ

たよ、エウリースこの世界の住民。

「とりあえず今日のホームルームは皆の自己紹介にしよう、まずはその獣人君から」

「ああん、何で俺からなんだ？」

……ケツ、分かったよ。俺はレオニダ・ブローケントウス。これでいいか？」

カランに指名され、ぶっきらぼうに吐き捨てると、再びトーテム彫りに集中するレオニダ。

あまりにも機嫌が悪そうな彼にそれ以上要求する気にもなれず、次の生徒を呼ぶカラン。

そのせいでレオニダの返答が基準返答になってしまい、他の生徒たちも面倒くさそうに名前だけ名乗っていく。

2人だけ例外を除いて

「次、そこのおかつぱの女の子」

「……………」

呼び方が悪かったか？

東洋人^{こきょうのひと}が相手だと何か緊張するんだよな……

「……えー、その艶の良い黒髪と赤い瞳が魅力的な女の子？」

「……………」

それでも駄目か？　なら――

「……その子はインヴェルノ・カラヴェーナ、でもってあたしがミラ・ヴェネストウーラ、^{カベリシ}了解？」

言葉に魅力が無いから無視された、と完全に見当違いな認識をし、頭を回転させるカランの耳に少しダルけた少女の声が届く。

その方向を見ると、長身なエルフの少女がその琥珀色の瞳で睨みつけて来ていた。

何であんなに睨んでくるんだよ、恨まれるような事したか、俺？

とりあえず名前は分かったな……疲れる。

そろそろ一時限っぱいし、次の先生にバトンタッチして休もう。

そう思つてクロニカから渡された教師のリストに目を通すと、教師欄が全て横線で消されている事に気付く。

「そろそろ一時限目の授業が始まるんだけど、誰が先生なんだ？」

「ああ、あの先生ならもう逃げたぜ。
名前は……覚えてねえ」

「は？ 逃げた？
何があつたんだよ……？」

彫り上げたトーテムを満足そうに見つめながらニヤニヤしているレオニダにカランは眉間を寄せる。

「何もねえよ、逃げ出したもんはしょうがねえだろ！
大体前の先公も、その前も、さらにその前のその前も、とどめにその前のその前の更にその前も、全員逃げてるぜ」

「今このクラスで教鞭を振るっているのは、美しき雪の妖精、君だけなのさ」

俺だけ、だと……？

S i d e : クロニカ

カーテンで外界の光が遮られた暗い室内を地面に並べた無数の蝋燭の光が明るく照らす。

ゆらゆらと揺らめく幾千の灯火は闇に堕ちた室内をオレンジ色に染め上げ、吹き荒む世間の吹雪に冷え切った心を暖めてくれる。

部屋の中央に備え付けられた祭壇の様な台座の前、漆黒のローブで身を包み、空気に触れる部分を全て包帯で覆い隠した死神が立ったまま書類に目を通していた。

——ガングァン

(相対論的に) 控えめにドアを叩く音に、死神は目を通していた書類を祭壇の上に置き、身構える。

何が起きているのでしょうか？

この部屋の扉はアダマンダイトで出来た嚴重なものです——それこそ魔導師が至近距離で破壊魔法を発動してもビクともしない代物だというのに、この轟音は何事でしょうか？

……考えられるのは、七賢者の差し金ですね。

バレスト様の事は伏せていたため、クロワールさんをこのヴァルデイガ魔法学園に匿う事は私が独断で取った行動になります。

報告の際は異論を唱える思念を読み取れませんでした……人の考えは代わる——一時的の感情が全てでは無いと言う事でしょうか。

アダマンタイトの扉を音が反響するほど強い力——攻城槌で叩くなんて、とても友好的な態度ではありませんね。
何時でも【翡翠^{つめ}の竜爪】をたてれるように、魔導書をよういしたほうが良いみたいです。

室内を見渡し、他に誰もいないの確認するとクロニカは懷から緑色の表紙の魔導書を取り出し、袖の中にしのばせる。

そして扉に向きなると——

「入るぞ」

ギギイ……

金属が擦れる重々しい音を立てて開かれる3メートルもあるのアダマンタイトの扉。

「……………！」

クロワールさん……！？

そんな………いったいどうやって？」

結界魔法をかけられたこの扉は専用の解除魔法を発動しない限り、滅多の事では開かれない——というのに、目の前の、サイズが合わない黒いローブを地面に引き摺った雪の様に白い少女はその少し捻れば折れてしまいそんな細腕で押し開いた。

自分でさえ、竜化しなければまず開かない重鋼の扉を、だ。

あまりにも常軌をそれた行動にクロニカは目を見開く。

「何って、普通にノックして普通に開いただけだけど？」

それより何なんだよ、あのクラス——いや、それ以前に何であんな事した？」

「何の事ですか？」

本当に分からない、と言わんばかりに首を傾げるクロニカ。

しれっとしたその態度にカランの眉間が寄る。

「とぼけるな！」

わざと間違った場所おしえたり、教師バッジと事務員バッジを摩り替えたり——そして何より、あのクラスに俺以外の先生が一人も居ないってどう言う事だよ？」

「ええ、全員逃げてしまいましたから」

「……それは知ってる。何で？」

「心当たりはありますよね、貴方自身が見てきた事ですから——理由は、あの子達があまりにも優秀すぎるからです。」

劣等感に耐え切れず教師の方が逃げ出してしまうぐらいに」

「……もう学生じゃないぞ、それ。」

何で卒業させないんだよ？」

「何で卒業させる必要があるのですか？」

ここは学ぶための園、学園。

彼らの知識への探究心が尽きないかぎり私達に彼らを追い払う資格

はありませんよ」

「いや、真面目に勉強してるの一人だけだったけど？」

嫌な事を思い出したのか、更に眉間を寄せるカラン。

この勢いだと後数年もしない内に皺が出来そうだが、ぷにぷにな幼児肌エターナルドに走る深い皺——なんてとても想像が付かない、そもそも無限竜ラゴンに老化現象なんて起きる筈もない——馬鹿な事を想像し、無駄な事に脳力を浪費したとクロニカは米神を押さえ込む。

「勉強の仕方なんて人それぞれです。

人前で勉強して優越感に浸りたい人も居れば、人前で散々遊びほうけて競争相手ライバルを油断させ、一人になった途端猛勉強して出し抜くタイプライバルの人も居るでしょう」

「……妙に生々しい話だな」

「閑話休題、それはさておきどうして貴女を彼らに差し出したのか分かりますか？」

「差し出したって、まるで生贄みたいな言い方だな！」

「……分からないのですね？ 分からないのはいい事です。ではこのまま彼らの教師として務めてください」

何のつもりだ、と眉間を寄せるカランにクロニカは意味ありげに『フフツ』と発音した。

「貴女を鍛えるためですよ。リタイアは許しませんよ、強くなってください、生き残ってくださいクロワールさん」

「俺は今分かった……あんたがラスボスだ」

S i d e : イ ン ヴ ェ ル ノ

カランカランカラン

来客を知らせるベルの音に視線だけ扉に向けると、半開きの窓から吹き込む風が原因だとわかり、無表情の少女は視線を再び魔導書に落とす。

微かにかかび臭い本棚と所狭しに並ばれた、薄っすらと埃が被った本が占める静寂な空間。

一々客に媚びなければならぬ料亭のウェイトレスに先天的に不向きで、ランク制限のせいで手軽なクエストを請けられない彼女はバイト先を転々とした末、このすこし特殊な書店に転がり込んだ。

普通の書店なら暇を持て余して立ち読みする閑人で賑わっていただろう。

だがここで立ち読みしようという客はまずいない。

立ち読み禁止の注意書きがされてる訳ではない、単に出来ないから

だ。

所持者の魔力を流し込む事で扱える魔法を反映する白紙の本、魔導書……スケッチブックとして使うなら話は別だが、自分の持ち物でもない商品に落書きをするような子供染みた客はこの店を訪れない。

この書店は魔導書の専売店。

魔導師が魔法を発動するのに必要な条件は三つ——魔法を発動するための魔力とその魔力を溜めるための媒介、そして集まった魔力で【魔法】という現象を起こすための発動キー、【呪文】。

魔法自体は体で覚えるものなので、覚えていない魔法の呪文を唱えても何の意味も成さない。

ではどんな魔法を扱えるのか。それを知るための方法として魔導書がある——魔導書とは即ち、術者の扱える全ての魔法を反映する魔^イ術^ン目録^{デックス}なのだ。

魔力を流しなおせば幾らでも上書きが効く性質上、大抵の魔導師は生涯を通して一冊しか魔導書を手にしない。

新米魔導師が集中する新学期でもない今、こんな店を訪れるのは運^{ぐくせい}悪く魔導書を紛失した冒険者位だ。^{メイジ}

この仕事は——今までの仕事で一番性に合っていると思う。
気味悪い営業スマイルを強要される事もないし、こんな私^{もの}に絡む物好きな人間もいない。

誰も居ない、私しか居ない。

それがどうしようもなく嬉しくて、ひどく落ち着く。

曇ったガラス窓の向こうに覗く灰色の空を見上げ、うつとりと目を細めるインヴェルノ。

カランカランカラン

再び響き渡る、安っぽいベルの音。

静寂をぶち破る不調和音にインヴェルノは細めた双眸を更に細める。

「すみませーん、魔導書を買いたいんですけど……」

身に滲みる心地良いの静寂のなかでツンと響く、鈴を転がすような少女の声。

カウンターに俯せたまま泳がせた視線の先に居たのは先ほどガラス越しに見た蒼白な空の色をそのまま複製したような白い髪を左右不均等に束ねたハーフェルフの少女と、その手を引いてる艶の良いブルンドの髪を腰まで伸ばした、ルピーの様に赤い瞳が印象的なハーフェルフの少女だった。

特にブルンドの方は——寒風が吹き抜けるこの季節で——空色のワンピース一枚というなりで、見てる方が寒気を覚える。

あの人、どこかで見たことがあるような気がする。

——強いて言えば白い髪の人を。

ミラや校長のような、白に近い銀髪ではなく、純粹に白い髪。

ベオルイルを——アイゼンファルドを見回してもほんの数人しかない髪色で、何か特別な意味があるとミラが教えてくれたけど

「営業妨害？

今直ぐ帰って」

それが私と何の関係がある？

「いや、本を買いに来たって最初に言ったから」

「本ならそこ等辺に並んであるから、散らかさない前提で手早く漁って、さっさと会計を済ませて颯爽と立ち去って」

「ねえ、キミ、それでも店員なの？

カウンターでだらけてないで手伝ってくれないかな？」

「何故？

腰に魔導書をかけてるあなたが選べば良い。

私の仕事はあくまでも金銭管理、購入の手助けをする義理は何処にもない」

感情が微塵も籠ってない、相手を突き放すためだけに紡がれた言葉にリアの眉間に力がこもる。

「ちょっとキミ！」

愛想が悪いのは個性で仕方ないにしても、せめての礼儀というものがあるのよ？

もつと——」

一発説教を喰らわせようと、袖を——無いので、動作だけ——捲り上げながら大股でインヴェルノが俯せてるカウンターに近づこうとするが、カランが慌てて制した。

「本がありすぎて何処から手を付けたら良いか分からないんだ、だから本に詳しいおま——キミに手伝って欲しいんだけど……駄目？」

今にも制止を振りほどいて相手に掴み掛かりそうなりアを身長差分背伸びして制しながら、真っ直ぐインヴェルノの瞳を見つめるカラン。

駄目と言う事は無い。

ただあなた達と関わりたくないだけ——これは私の我儘だ。

それよりもあのふさふさな髪の毛……撫でたいな……でもそんな事したら——もういい、考えたくもない。

さっさと本を買わせて帰ってもらおう。

「……解った、でも本とは別料金をとるから。
この紙に魔力を流して」

「魔力を流すって、こう？」

差し出した魔用紙を珍しそうに眺め、人差し指を立たせた右手を伸ばすカラン。

その繊細な指先は魔用紙に触れた瞬間、

「——！」

手鞠をつついた子猫のように引っ込んでしまった。

可愛い…… 待て、私は何を考えてる。
彼女はこんな私ものと関わってはいけない。

だから魔導書でも何でも買って、早く消えて欲しい。

魔用紙に映った魔力の性質は——

「確認しておくけど、本当に買うつもり？」

「ああ」

そういわれても困る。

あなたの性質は白——魔力は純度が高ければ高いほど白に近くなるけど、だからと言ってそのまま純白になる事はありません。

良くて——七賢者レベルの魔導師で限りなく白に近い何かの色だ。

人は元々有色。

一度異色に染まった白紙はどんなに白を塗りこんでも決して白にはなれない。

なのに彼女のこの色は何？　こんな色を受け入れる魔導書なんて——禁造書ぐらいだけど……

「……なら外で待つてる事ね。　倉庫から取り出してくるから」

「ちょっと待ちなさい、何で外で待たなきゃ行けないのよ？」

「私が居ない間に本を盗まれるかもしれないから」

「な、何ですって!？」

もう怒った、店長呼んできなさい、キミじゃ話にならないわ!

——キミは私が合つて来た中で最悪の店員さんよ!」

ぼそりと呟かれたインヴェルノの言葉に堪忍袋の緒が切れたリアは、カウンターに身を乗り出し、掴みかかろうと手を伸ばす、がインヴェルノはそんな彼女から一歩下がる事で回避した。

その後ろからカランが低い体を必死に伸ばしてリアを制する。

「落ち着けリア!」

「でも……！」

「おやおや、どうされました、お嬢さん達？」

背後に響く声に、振り向くまでも気色悪い営業スマイルを浮かべる小太りの男――店長――がのが脳内に浮かぶインヴェルノ。

「どうしたもこうしたも無いわ！」

その店員さんの所為で大変迷惑してるのよ！」

背伸びして口を押さえようとしたカラン、だがリアはその手を払って声を張り上げた。

一瞬の沈黙。

背中に寒気が走る。

「そうでしたか、それは大変申し訳ありませんでした。礼儀を弁えない店員に代わり、詫びさせていただきます。」

「え……ええ、次からは注意してあげて」

「ええ、勿論です。」

ところで此方の魔用紙はもしや……？」

カウンターに放り出した脱色しきつた魔用紙を拾い上げルーペの焦点を合わせ、目を見開く店長。

「悪い……俺がやったんだ、もしかしてマズかった？」

……弁償代、幾ら？」

小太りの店長は罰が悪そうに見上げてくるカランに目を細め、

「いえいえ、弁償なんてとんでもありません！

むしろこれほど純粋な魔力を持つ神話級導師に私めが仕入れた魔導書を買って貰えて光栄です。

おい、倉庫から【黒き聖書】を持って来い！」

店長に言われるがままに倉庫へ向うインヴェルノ。

転送陣で繋がれた先はかび臭い店内とは正反対、衛生維持の魔法を掛けられ、清潔を保つ商業ギルドの倉庫である。

「見ない顔ですね……どういったご用件でしょうか？」

転送魔法の影響で少し眩暈を起こしたインヴェルノの耳に冷たい男の声が響く。

「アイルンボッド魔導書店から、【黒き聖書】を仕入れに来た」

「あの【禁造書】を……ですか？」

眼鏡のはしをクイと持ち上げ、ボロ雑巾の様なローブに身を包んだ目の前の少女を訝しげに値踏みする倉庫の管理人。

無理もない。

ベオルイルの商業ギルドでさえ2冊しか所有していない【禁造書】。何故に禁造なのかと言うと、その材料が世界樹の若葉^千だったり、五^千大竜族の鱗や羽膜^{シエントドラゴン}だったり、収集の為に戦争が起きそうな材料ばかりだからだ。

一冊でベオルイルの中央図書館を買い占めれる値段であるが、そもそも扱える者がいないので、どうせ売れないだろうと『持つ資格がある者に無償で譲る』と言う事に成っている。

「これが店長のサイン」

「……確かに本物のようですね。
いいでしょう、あなたに預けましょう」

管理員は意味深げにククツと笑うと、三重の防御結界が張り巡らされた倉庫の封印を解き、黒い皮袋に包まれた長方形の何かを持って奥の方から戻ってくる。

そして、インヴェルノの前でその包装を剥がす。

ランプの光に照らされる表紙も、ページも、全てが黒一色の魔導書。

黒竜の羽膜で作られたそれは、目に見えるほどの魔力を放っている。

「——ただし、持てたら、の話ですが」

その言葉にインヴェルノは目を細める。

目の前の男は皮袋越しに魔導書を掴んでいるが、自分に差し出されたのは、そのままの本。

魔導書は持ち主を選ぶ、より強い力を秘めた魔導書なら尚更、資格の無い者が持てば魔力を吸い尽くされ、最悪命を落とす。

「わかった」

何のためらいも無く、差し出された魔導書を手取るインヴェルノ。ほとばしる魔力に一瞬ビクツと震えたが、それ以上の痛みはやってこなかった。

「ありがとう」

啞然とする管理人を他所に、インヴェルノは素手で本を持ったまま静かに踵を返した。

「……………でしてね、それが『持って来た』」

名も知れない——名も知れないが、神話級の魔導師に自分を売り込もうと躍起になってる店長に帰って来たインヴェルノはそのまま本を押し付ける。

「ぎやつ!？」

体を襲う、神経をヤスリで削られるような激痛に小太りの中年男は奇声を上げ、魔導書を取り落としてしまう。

自らの失態に気付き、慌てて笑顔を作り上げて誤魔化し、地に落ちた【黒き聖書】を拾い上げようとする。

「あぎゃあああ!！」

だがそれは叶わない。その漆黒の表紙に指先が触れた途端、全身の神経をヤスリで削られるような激痛が再び襲ったからだ。

地に落ちた魔導書はこれ以上落ちれるわけもなく、触れたままの姿勢で固まり、魔力を吸われる店長。

それをただ漠然と見つめていたインヴェルノの傍に、自分の背の高さもあるカウンターを軽々と飛び越え、トン、と軽い音を立てて着地したカランはその元凶である魔導書を持ち去った。

「大丈夫か？」

「……ええ、申し訳ありませんでした。どうやらその本は持ち主を選ぶようでして……」

「ふーん、何か良く解んないけど凄いな……普通に持てたインヴェルノって」

魔導書に付いた埃を叩き落としながら呟かれたその言葉に、その場にいた者全員が固まった。

「知り合い？」 「知り合いなの？」 「知り合いのですか？」

「俺だよ、俺。」

「カラン・フェミス」

「……カラン？ 誰？」

「覚えてないのか？」

「一応今日あったばかりなんだけど……」

「……ああ、会ったね」

眉間を寄せるカランに先ほど教室であつた白い髪のハーフエルフの姿が重なり、その少女が今、自分のすぐ傍にいますという状況にどう反応したら良いのか分からず、そっぽを向くインヴェルノ。

彼女の照れ隠しをどう受け取ったのか、カランは店長に向き直り、

「気難しい奴だけど、根は真面目だから、今度の事は責めないでくれよな。」

「ところでこの魔導書、いくらなんだ？」

「その本でしたら無料でございますよ、七賢者の命でございます、適合者が見つかった暁には無償で譲れよ、と」

「そうなのか……ありがたく貰つとくな、今度また友達連れて魔導書買いに来るよ。」

「え、はあ……」

言葉に『インヴェルノを解雇しないように見張っておく』という意味を込めて釘をさしたカランはそう言って連れの少女の手を引き、

「行こう、姉さん。」

……姉の手を引いて店を後にした。

「ふんっ、次は無いと思え！」

2人が店から出るのを見届けるとそれまで浮かべていた営業スマイルが一変、先ほどの彼からは想像も付かない敵意の籠った物になる。

……塩を送ったつもりなのだろうか？

こっちもまた仕事を探すのは面倒だから、今度は感謝するけど。

それにしても友達か――

早く誤解を解かないと。

6・黒き禁造書（後書き）

見る分には無害、近寄ったり触れたりすると猛反撃してくる少女インヴェルノ・カラヴェーナ。

当初の設定と結構変わってます（相変わらずキツイけど）他人を見下すような言動を取らなかったり、可愛いものに目がなかったりと当初の妄想ではかなり後の方でカランと百合ルートに落ちるわけですが、これなら早いうちに出来そうかも？

7・暴力哲学

Side：カラン

【空白領域】
ノスフェラード

蒼いベールが掛かった豪華なキングサイズベッドがポツンと置いてあるだけの殺風景な室内。

その一角を無数の白い羽毛が侵蝕し、掠れた女の呟き声と共に無限虚空への【ポータル】が開かれる。

しかしそれは一瞬だけで、無限に続く蒼白の雲海は朧けに揺らめくと、霧散して消えた。

「発動キーはイメージ——大体掴めてきたぞ」

小鳥のように澄んだ声でさえずると、色素が抜け切った雪の妖精はその蒼い瞳をかざした右手に向け、白い羽毛が溢れ出す蒼白の霧——【虚空の空気】——を纏わせる。

「オツケー、これもイメージ通り……他にどんな魔法が——」
スベル

白い雪の少女——カランは肘から先に白い霧を纏ったまま、表紙に留まらずページ全てが黒一色の魔導書・【黒き聖書】に視線を落とす。

【エターナルフォースブリザード：一瞬で相手の周囲の気候ごと氷結させる。相手は死ぬ】

痛い、痛すぎる……どこから湧いて来るんだよ、こんな中二な黒歴くろま史ほう……

【バラク・フセ。ン・オバマ・ジュニア：1961年8月4日生まれ、アメリカ合衆国の政治家。第44代大統領。上院議員、イリノイ州上院議員を歴任する。所属政党は民主党。現職アメリカ合衆国大統領として2009年度ノーベル平和賞を受賞した。アフリカ系として、史上3人目の民選上院議員であり、米二大政党から指名を受けた初の大統領候補かつ初の大統領である。また、1960年代以降生まれとして、ハワイ州出身者としても、それぞれ初のアメリカの大統領である。身長187cm。左利き。相手は死ぬ】

——というか【カオスサマナー】のデフォ魔法以外まともな魔法がない。

黒いページに白い字で書かれた余りにも痛すぎる——むしろ政治的に生々しすぎる——魔法スベルの内容を読み進めるに連れ、カランの眉間に力がこもっていく。

これ以上読み進めたら精神的に折れそうなので、詳細を飛ばし、魔法名だけを斜め読みしていく。

……【鼻毛大会】 【大砲の達人】 【炎竜殺しの炎】
お前を殺して俺も死ぬ 【パッシブスキル：回避率375
64%】 【掴もうぜゴールデ。ボール】
転送：GMの塔】
ヴェナトゥーディ

「これはもう駄目かもしれない……」

——待てよ、【転送：GMの塔】？ あるのかよ、アレが——あの
かくしダンジョン
立ち入り禁止領域が！？」

ありえないぞ……ゲーム内ならまだしも、ここはあくまでも『ゲームに似た世界』だろ？

存在しないよな、存在しないでくれ、あんなおぞましい場所……実
エウリス
在したら世界が滅ぶ！

——でも専用の転送魔法があるって事は……にわかに信じがたいが、
実在するっばいぞ……

パタン、漆黒の魔導書——【黒き聖書】を閉じ、深く溜息をつくカ
ラン。

GMの塔——文字通りGMの為に用意された塔であり、塔内にはGM
専用アイテムを売るNPC達が配置されている。

それ以外にもエウリスの全地域を観察できる【マスターアイ支配者の眼】や名
前を入力しただけで相手を殺せるできる【マスターハンド支配者の手】などが存在
するが、問題はそこではない。

目を閉じたまま眉間を寄せるカラン。

これは彼女が物事を考える時のくせなのだが、物事を深く考えない
——つまり余り悩まない彼女がこんな表情を見せるのは極めて稀で
ある。

GMの塔を調査すべきか。天秤にかけるのは、自分の命とエウルスの運命。

「放って置けないな、GMとしては……」

【転送：GMの塔】

キィイイイン、念じると同時にカランの周りに幾何学の魔法陣が無数に浮かび上がる。

大小様々な灰色の魔法陣達はまるで歯車のように回転しながら加速していき、限りなく黒に近い灰色が真っ白に染まった刹那――

パリイイイン

ガラスのように砕け散った――スベルジャミング詠唱妨害。

「そう言えばベオルイルって転送禁止区域だったな……冒険者に成る理由がもう一つ増えたな」

――翌日

「……しかし竜脈の魔力を集める性質を持つ植物――世界樹を媒介にした魔法によって世界のバランスは崩されてしまう。ブルードラゴン

この事に危機感を抱いた蒼穹竜達はエルフ達の国家【リアヴィラ】
【ネルダント】そして【イギレイア】を海に沈め、生き残った【ア

ラシャト』のエルフ達から永生の力を奪う事で世界のバランスを保った——これが千年前に起きた『月神の離別』の真相だ」

教卓の後ろに立つと首から下が隠れて生首のように見えてしまうので教卓の前に立って講説するカラン。

魔法の知識も錬金術の技術もない彼女はオフィシャルサイト受け売りの【アカシックレコード歴史の真相】で学校という煙硝の無い戦場を今日も何とか生き延びている。

「ふざけるな！」

長い講義を終え——無自覚に——愛くるしい仕草でほっと胸を撫で下ろすカランにエルフの少年が声を張り上げた。

「我々エルフが永生の力を失ったのは貴様らハーフェルフが原因であろう！ その責任を蒼穹竜ブルードラゴンに擦り付けるといのか！」

「いや、『月神の離別』——人間と子を設けたエルフの皇女に大星霊ルネージュが激怒して永生の力を没収したというのはあくまでもおとぎ話で——」

「歴史を偽造するだけでは飽き足らず我々の守護神を星霊等と同一視し、拳句の果てに伝説をおとぎ話呼ばわりだと！？ 忌々しいハーフェルフめ……！」

「ストップ！ そっから先禁句だから！」

ガタツ、と椅子を倒して席を立ち、魔法の媒介である【一角獣の角】をカランに突きたてようとするエルフの少年の前にお下げのエルフ——ミラが立ちふさがった。

「そこをどけ、ハーフェルフと馴れ合う逆賊風情が！」

「逆賊う？ ……なに格好つけちゃってんの？ ……ここはあんたのアラシヤトじゃねえんだよ！ それ以上種族差別発言したらぶっ滅すぞ！」

「はんつ、やれるものならやってみるがいい！ ルネージュの教えに背いた貴様ごときに私が負ける訳が無い！ L a v e n t o s v a z——ぐぼらへッ！？」

「……耳元でギヤアギヤア喚くんじゃねえよ、鬱陶しいだろうが」

【一角獣の角】の矛先をカランからミラに変え、詠唱を始めたエルフの少年。

だがその呪文は完成しえない。それまで黙々とトーテムを彫っていた『^{レオニダ}トーテム職人』に顔面を殴られ、襟元を掴み上げられたからだ。

「き、貴様！ 邪魔をするな……！ これはエルフとハーフェルフの因縁、獣には関係の無い話だ！」

「ああ……関係ねえな、獣人の俺には」

「だったら……」

「てめえを殴るのに理由はいらねえ、俺がそうしてえからだ」

殴られた頬を押さえ、言葉で自分を正当化しようとするエルフの顔面に口元を歪ませ鋭い牙を覗かせたレオニダの拳が迫る！

ガシッ、

「やめろレオニダ！」

空気を切って振り下ろされたその拳はしかし、何時の間に教卓から駆け下りたカランの手にガッチリと掴まれ、エルフの少年——アヴィルの顔面に埋まる直前で止まった。

手加減こそしているものの割と本気だった拳を軽々と受け止められたレオニダは驚きの余り目を見開く。

「アヴィル、おま——君の信仰を馬鹿にした事は謝る」

そういつてペコリと頭を下げるカランをフン、と鼻で笑い、満足そうに口元を緩めるアヴィル。

「——だけど一つ訂正しろ、レオニダは獣人だ、獣なんかじゃない。だから君もレオニダに謝れ」

「ふざけるな！ 何故私が獣ごときに謝罪しないといけない！？」

「種族の事を馬鹿にされてムカつくんだろ？ だったらレオニダも同じだ。」

「だからどうした？ 下賤で汚らしい獣に種族を誇る資格はない！

アレらは生まれながらの奴隷、こんな所にいる事自体何かの間違いだ！」

「なんでそこまで差別したがるんだよ……同じ言葉を持って同じ考えが出来る、同じ人間なんだろう？　一緒に歩む事だって出来るのになんで種族の壁で隔だてるんだよ？」

「同じだと！？　この私が、貴様ら忌まわしいハーフエルフと、この汚らしい獣と同じだと！？　それも全部同じ『人間』だと！？　ふざけるな！」

顔を俯せ、震えを堪えながら訴えるカランにアヴィルは顔を歪め、
【一角獣の角】を突きたてる！

螺旋状に成っているそれはカランの頭部を貫いた

——貫くはずだった。

「いい加減にしろ、殺すぞ……！」

俯いたカランの耳元から呟かれる、息の温もりが籠った声。

彼女の頭部を目掛けて振り落とされた凶器は粉々に碎け散っていた。
いや、碎かれた。彼女を庇うように前方に立った獣人の少年——
レオニダの手によって。

「貴様！　よくも私の媒介を！　こ、ここの校長がエルフだと知っててやったのか！？」

……おい獣、あの術式が見えるか？　言い逃れは出来ないぞ、その汚らしい手でこの私を殴った事後悔させてやる」

天井の片隅を顎でしゃくるアヴィル、その先を目で追うと規則正しく点滅する蒼い術式が目に入った——エジプト神話にでてる太陽神^{ジャド}の目の模様に酷似したそれは監視カメラの役割を果たす視覚魔法である。

自分の事を柵に上げてレオニダが校内で暴力を振るった事を咎めるのは滑稽を通り越しておこがましい。

だがそのおこがましい行為はレオニダになら通用すると、エルフの少年は確信していた。

幾らハーフエルフとエルフの関係が険悪な物であっても、それぞれが領土を持つ国単位の大勢力。政治的な後盾があるのだ。

それと比べ奴隷扱いの獣人に後盾などある筈もなく、エルフの校長を始めとするエルフ寄りの上層部の事も相まって、アヴィルが暴力を振るわれたと訴えれば処罰されるのはレオニダの方だ。

「知らねえよ　ンな事……　やっぱてめえは殴らねえと気が済まない。
止めんなよ担任」

恐怖の余り声が震えているアヴィルにレオニダは低い唸り声を上げると、背中越しにカランに語りかけ拳を振り上げた！

ガシッ！

「お前ら、やめろって言ったよな」

背筋が凍るような、圧倒的な威圧感がこもった少女の声——怒りがトリガーと成って発動したパッシブスキル『威圧』に、その場に居

た者たちの動きが一瞬で止まる。

指先を動かしただけで、その逆鱗に触れてしまい跡形もなく消されるような恐怖に身動きが取れないレオニダは目の前のエルフの青白い光を放つ瞳を越して自分の背後に居る無表情な少女を見た。

「アヴィル、お前は最初俺がエルフの歴史をネジ負けたといって突っかかってきたよな？」

種族を侮辱されてムカついてんなら何でお前もレオニダの種族を馬鹿にするんだ？

生まれながらの奴隷……？

ふざけるな……人から尊敬されたかったらまずは他人を敬え。」

まるで吟遊詩人が歌った詩のように美しい、しかし、有無を言わさぬ絶対的な威圧がこもったその言葉に先ほどの威勢の良さがまるで嘘のように跡形もなく消え去ったアヴィルは、ぎこちなく首を縦に振るだけで精一杯だった。

午前の授業はあのあと恐ろしいほど順調だった。

いつもは冗談半分でダメだしてくるドワーフの女の子も、ただひたすらトーテムを彫る職人^{レオニダ}も、堂々と机に突っ伏して寝る東洋系混血エルフ^{エルフ}も——勿論極端民族主義のアヴィルもピンとした姿勢のまま、瞬き一つもせずに授業に聞き入っていた。

やり過ぎたか。　　だけど後悔はしていない。

幼い頃に両親を失い、その上異国で育ったカランにとって人種差別は他人事では無かったのだ。

魔法で宙に浮かぶレールに沿って移動する Gondola サイズの魔導列車。^{ミニメ}

窓から差し込む暖かい日差しに睡意を誘われながら、白と青に輝く町並みを見下ろしたカランは深く溜息をついた。

「これでアヴィルのヤツが死神に^{クロニカ}チクって教務解任、何て事に成ったら……いや、別にいいか。　　むしろそっちの方が自由だしなあ……」

ゆっくりと速度を落とし始める魔導列車^{ミニメトロ}の窓から見えた建物にカランは現実逃避気味に呟く。

赤いレンガと急劇な斜面を持つ黒い瓦の屋根が眼を引く、明らかに周りの建物と一線を画すその建物の上空には【冒険者ギルド　ベオルイル支部】と書かれた大きな看板が魔法で浮いていた。

先日着た時と違い、ギルド内は冒険者で賑わっていた。

その大半が分厚いプレートアーマーやリングメイルを付けた、筋肉隆々な物理職の冒険者であり、そんな彼らに混じって胸に七芒星の

エンブレムが刻まれたブローチを付けたヴァルディガ魔法学園の生徒達もちらほら見かける。

冒険者育成機関ではないが、魔法を伝授する学園があるのは全エウルースでこの魔導都市ベオルイルだけだ。

そのため学んだ魔法知識を実践で試す意味も兼ねてベオルイルの冒険者ギルドには学生向けの簡単なクエスト——所謂「日帰りクエスト」が多数発注されており、他の町の同ランククエストと比べると難易度が低い。

政府が金を出して発注してるもっぱら学生の為のクエストなのだが、中立都市と言う事でそのローリスクハイリターンなクエストに目を付けた他国の冒険者が多く集まる。

ちらほら感じる好奇の視線をカランは全てシカトして、空いてるカウターの前に立った。

「冒険者ギルド ベオルイル支部へようこそ！ クエストの発注ですな？」

「いや、冒険者登録がしたい。 どうすればいいんだ？」

その返事に髪の毛を7：3分けたサラリーマンの様なハーフエルフの青年は一瞬キョトンと成るが、仕事柄が直ぐまた営業スマイルを取り戻す。

「で、では冒険者登録の前に説明をさせていただきます——そういう決まりです。」

冒険者の登録は基本的に無料です。

このように、始めての方には無償でこのギルドカードを発行いたします。」

そういつてハーフエルフの青年は『どうぞ』と言ってクリスタルに似た材料で作られた半透明のカードをカランに差し出す。

「お客様の場合は魔導師タイプのもので、ギルドカードはリジアカリスタル製の魔法カードと成ります。

そのカードに魔力を込めれば名前、性別、年齢、種族、職業が自動で書き足されます……尚、名前と性別以外は本人が魔力を込めないと表示されませんので、ご安心下さい」

種族、と聞いて露骨に顔を顰めるカランに受付けは慌てて説明を付け足した。

胡散臭い……胡散臭いけど、気味悪いスマイルを浮かべたまま無言で見ているのは『オラオラさつさと魔力流せや』って意味なんだろうな……

このままじゃ話が進まないと判断したカランは渋々指先に魔力を込めた。

透明のカードから滲み出すように名前と性別が浮き上がり、そして

デイスインティグレイド
【瓦解零度】

種族の所に【エタ】と浮かび上がった途端、半透明の魔法カードは

絶対零度以下まで温度を下げられ、分子同士を結びつける【力】を凍られて粉々に低温分解された。

シット、ずっと【カラン】って呼ばれて忘れたけど、俺の本名——この体の本名はクロワールなんだ。

あの後クロニカが教えてくれたけど、ドラゴン竜人にはそれぞれ命名の癖があつて、【クロ×××】は無限竜特有の命名法則らしい。エターナルドラゴン

人間形態を取つてゐる時は魔力が抑えられてるから余程の事がなければ気付かれないけど、俺の場合不幸にもその【余程の事】に魔力が駄々漏れで、見る人が見れば竜人である事は筒抜けらしい。ドラゴン

バレストが丁度その【見る人】で、そこら辺の事情を知っていたから俺にカラン・フェミスと名乗るように命令した事になる。

相変わらず抜かりの無い……

「あれれ？ 魔力を流したら壊れたぞ？ 相性が悪いのかな？ という訳で魔法カードじゃない方、他の町で使われてるような普通のカードをくれ」

「あ、そ、そうですね！ ではこちらのカードにペンで名前と年齢、種族そして職業を記入してください。」

そう言われ、カランの掌で粉々に砕けた魔法カードを目を丸くして見ていた受付けは慌てて引き出しの奥から取り出した、金属の板に羊皮紙を貼り付けた、普通の冒険者カードをカランに差し出した。

カランは筆立てに立てられた羽ペンを引き抜くと、渡された頑丈な

作りのカードに情報を書き足していく。

名前：カラン・フェミス

性別：女

年齢：20

種族：ハーフェルフ

職業：メイジ

性別のところで一瞬手が止まったカランだが、どうせ【男】と書いてもふざけてると思われるだけなので、実に気が進まないが【女】と書き、年齢の方はハーフェルフは休眠期という、熊の冬眠を年単位で行う習性があるので、実年齢を書き込んでも問題ないと判断し、20と書き込んだ。

「では説明を続けます。ギルドに登録された冒険者にはギルドランクという物が与えられており、ランクはEからAまであります。冒険者に登録したばかりの方は皆Eで、この場合単独ではD、Eランクのクエストを請け負う事ができません。

尚クエストランクは自分のランクと同等、ないしは上のクエストを前者なら10回、後者なら5回こなして頂ければ、一つ上のランクへランクアップします。

請けられるランクは自身のランクより上の物に限りますので、Dランクに成ってからEランクの任務を請ける事は出来なくなりますので、ご注意ください」

「オッケー、解かった。で、このカードを持っていればこの町をベオルイル自由に入出入り出来るんだよね？」

「ええ、本来ならそうですが……」

「本来なら？ 何か問題でもあるのか？」

「ご存知の通り、この町には幾重の防御結界が張り巡らされています。」

お壊し——最初にお渡ししたカードなら結界を通過する魔法がエンチャントされていますが、魔法カードではないそのカードで結界を通過する事は出来ませんので、クエストの時だけ、持続時間制限付きのエンチャントを施させていただきます。

それとも一つ、お客様が作られたカードは一般カードですので、この町では自身より一つランクが一つ上のクエストしか請けられません。

クエストを受ける場合はご注意ください。」

「……何か待遇非道くない？」

眉を顰めたカラランに受け付けは申し訳なさそうに苦笑いすると、ギルドの中に備え付けられた酒場で騒音を立てるガタイの良い冒険者達を冷ややかな視線で捕らえ

「日帰りクエスト狩りをする野良冒険者対策ですので……」

申し訳なさそうに頭を下げる。

「他の仕事と違って冒険者は命がけだからな、リスクの低いクエストを選ぶのは普通だと思うぞ」

とにかくクエストを請けないとこの町からは出れないって事が

請けられそうなクエストを探そうと掲示板に目を向けると、どこか

で見た軍団が——平たく言えば二年X組の神童軍団が掲示板の前を占領していた。

発してるオーラから違う、神童軍団。

観察する事体感10分。

特にクエストを請ける様子も無く、掲示板の前に椅子を集め、何やら論議を、つまる所ただ駄弁っているだけの様だ。

周りを見れば他の冒険者が迷惑そうに彼らを見ている。それでも誰も声を張り上げないのは彼らに喧嘩を売って勝ち目が無いと解かっているからだろう。

つまり何かというと、神童共よ、談笑するのなら他所でやってくれ。

果てし無く人様の迷惑なのだ……かくいう俺も非常に迷惑している。

アレだけ派手に威厳を振りまいておきながら、彼らの目の前でドリンクのクエストをむしり取るなんて教師の威厳もあつたもんじゃない。

だからと言ってこのまま待ち惚けを喰らう訳にも行かない。

何が面白いのか、今晚死神が家庭訪問^{クロニカ}に来る事になっているのだ。

その前にGMの塔まで行き、無ければ良し、あれば相応の処置を施してから返って来ないといけない。

まだ日は高いけど、塔の中身を考えると時間は幾らあっても足りない。

……もう強行突破するしかないな。大丈夫だ、今は私服の黒い口
ーブでフードが付いてる。

目深にかぶればそれだけで掲示板が見えなくなるが、適当に何枚か
むしれば一枚ぐらいDランク任務が混じるはずだ。

カランはそう自分に言い聞かせ、歩き出す。

沈黙。

見られてるな……大丈夫、顔は見られてない。精々変なヤツと思
われるぐらいだ。

問題ない、このままむしり取れば――

「なあ、担任……さつきから何コソコソやってんだ？」

「ひゃあわっ!？」

耳元から発せられたどこかワイルドな匂いが漂うその言葉に、カラ
ンは奇声をあげて驚いた。

7・暴力哲学（後書き）

物凄くお久しぶり、歩く公害ことリアルで内臓が破裂してる内臓破裂です。

色々と事情が重なり、半月間もパソコンに触れませんでした。今日から更新再開です。

この半月間で今までのストーリーを見直し、訂正しましたので、ストーリー全体にかなり大きな変動があります。

どこかで見たような話がしばらく続きますが、良かったら読んでみて下さい。

8・GMの力は極悪です

Side：カラン

「なあ、担任……さつきから何コソコソやってんだ？」

「ひゃあわっ!？」

耳元から突然発せられたワイルドな匂いが漂う言葉に、声に成らない悲鳴を上げ、身を翻すなり猛ダッシュで逃げ出そうとするカランだが、何とタイミングの悪い事。

丁度ギルドの玄関から大斧やら大槌等を担いだ冒険者の大男達が入ってくるところで、両開きの扉は完全に占拠されていた。

「もしかしてリアねえさんの為にクエスト確認に来たとか？ あいつランクBだからこの板じゃないっしょ？」

反対側からする声に驚いて視線を向けると、褐色のエルフが椅子の背もたれに顎を寄せ、気のせいかなやいやしながら見てくる。

「何でリアの事してんだよ？」

こいつらの前で家族関係を明かした覚えはないぞ？　と言うかバレストの養子だって知られると色々面倒だから誰にも言っていない……

学校で会っても素知らぬ他人のフリをしてくるほど気遣ってくれるリアがばらすなんて事はないと思う……また死神クロニカか……

涌きあがる殺意を堪えて震えるカラン、それがトリガーと成って【威圧】が発動しそうになり、悟ったミラは慌てて手をアタフタさせる。

「そうじゃなくて！ あー何てゆーか、あたしそーゆーゴシツプな情報に敏感だからさ——っつか、別に良いじゃん？ 知られてマズイ事じゃないしさ。

それに……イテッ！」

「人のプライベードべらべら喋っという『別に良いじゃん？』はねえだろ！」

……コイツこんな事ほざいてるが、根は意外にも良いヤツなんだ。だから、その……ギルド内でそんな殺気たてんな、ど突かれるぞ」

ぽかっと頭を叩かれ恨めしそうに睨んでくるミラを気にも留めずカランに振り向くレオニダ。

注意され、辺りを見回すとさっきまで掲示板前の暖炉でグツタリしていた神童軍団は何時の間にかカウンターまで撤退しており、他の冒険者達もいつでも逃げ出せるように席から腰を浮かせていた。

残った神童は二人——先ほどアヴィルが突っかって来た時に体を張ってカランを庇った、レオニダとミラだ。

またやつちまった……と頭を抑え悶絶するカラン。　そのギャップにギルド内が騒然とする。

「……悪い、怒ってないから。　こういうのって制御が利かないんだよ」

「へー でもさ、制御が利かないって、危なくね？」

「仕方ないだろ、勝手に発動するんだから。 というか、こんな所で何やってたんだ？ クエスト？」

「んなもんじゃねえよ、単に溜ってただけだ。」

大体ランクBの俺らが受けられる依頼なんて【雪山の飛竜討伐】ぐらいだよお日帰りクエストチャリテイの範囲を出てんだよ……こんなクソ寒い中誰が雪山なんか行くかってんだ」

ぶっきら棒に吐き捨て、ガツと荒々しい動作で椅子に腰を下ろしたレオニダ。

「ランクB……」

彼が発したその単語に信じられない、と顔に浮き上がったカラン。ランクBというのは原作ゲームの中でも高いほうである。

レベルで言うなら50〜60レベル代の事を指し、40人用巨大ダンジョンでモンスターがドロップした【アーティファクト】という化け物装備で身を固めた70レベルのユーザには遠く及ばないが、それでもエウルースのほとんどのエリアを渡り歩ける実力だ。

歴戦の戦士という筋書きを持つアバターでさえいい年して1レベルなのに、目の前の神童軍団は戦場に出る前からレベル55の勇者予備軍と言う事か。

「つつてもみんな飛び級だけだよ。 アレーナでポイント稼いでると案外早いし」

そんなカランにミラはランク上げの秘訣を伝授する。

ああ、アレーナね……リアルで言う地下闘技場ね。

閑を持て余したヘビー^{ゆづしや}ユーザ達が集まって陣営に関係なく賭博っぽい裏ファイトを繰り広げる暴力の楽園^{バラタイス}、通称アレーナ。

勝利すれば賞金が手に入るわギルドポイントが加算されるわ舌戦争が終結するわ、爺さんのギックリ腰が治るわ三丁目の山田さんがサマージャンボあてるわ良い事づくめだ

「じゃねーよ!!」

明らかに学生が行く所じゃないだろ」

「別に良いじゃん？ 未成年立ち入り禁止って明記されてる訳じゃないんだからさ。

そんな事よか、先生も冒険者つしょ？ 情報交換しようぜ、これあたしの」

ミラはそういつてスクツと椅子から立ち上がり、半透明の魔法カードをカランに差し出した。

名前：ミラ・ヴェネストウーラ

性別：女

年齢：非表示

種族：エルフ

職業：カースウェスパ

ランク：B

カースウェスバー
魔法職殺しか……懐かしいな、魔王人間形態やる前は俺もそうだったよ。
カオスサマナー

魔法職に強いけど物理職と当たったら人生OVER、果物ナイフ+パンツ一丁のアサシンでも遊び半分でぶち殺せるっていう、【個がどんなに足掻いても何も変わらない、無力さを知れ凡人共よ By 魔王】——もといチームワークが物を言う【インフィニティ・ウオーズ】を体現した様な職業だ。

「なあ、センサーのも見せてよ」

懐かしい同郷の徒にシンパシーを感じていたカランにギルドカードを要求するミラの無邪気な声が届き、ドツと汗が流れ出す。

見せられる訳ないだろ……ランケEだぞ？ しかも一般冒険者カードだぞ？
ジュニアカー

そんなカランの心の葛藤に気付いたのか、レオニダは椅子の背もたれに乗ったミラの頭をぽかっと殴った。

「タマクソ、冒険者にとって個人情報^は死活問題だろうが、節操も無く個人情報^をばら撒くお前がそんなもん聞いてんじゃねえよ」

「ちょ、節操もなくって何気に非道くね？ あたしだってむやみやたらにプライバシー漏らさないし」

「はいはい、それで御座いますね。んな事はゴミ箱に捨てて
『捨てるな馬鹿レオニダ!』ずっと引き籠もって体が鈍った。
担任、パーティー組んでクエストしねえか?」

二人の会話を啞然と眺めていたカランは突然話を振られ、どう返
したらいいか解からずレオニダの視線の先を目で追うと

【アイーンジユラ山脈の飛竜討伐 ランクB】

と書かれた張り出しが一枚だけ、他に何もないだっ広い掲示板に
一枚だけポツンと張られていた。

ワイバーン
飛竜退治キター!

期限は三日って書いてあるから例の結界すり抜けエンチャントも三
日ぐらい維持する強力なヤツになると思うけど———ただどランクB
……確か俺っていまランクDの依頼しか請けられないんだよな……

「悪いけど俺はパス……明日から休みでもこんな何日掛かるか解か
らない任務を———」

「おっ、良いじゃんそれ! あたしは行くよ」

「おっ、じゃあお前の名義でな」

「へ? なんで?」

「……家に置いて来ちまったんだよ、ギルドカード」

そういつて頭の後ろで手を組み、そつぽを——カランの方を向いたレオニダはミラからは見えない角度でウィンクした。

「俺も忘れたから、よろしくな、ミラ」

ウィンクの意味に思考をめぐらせながら、何か促すような表情で見ってくるミラにカランはニツコリ笑って見せた。

クエストの請け負いを済ませたカラン達はギルドから借りたカンバル（手の代わりに羽っぽい物が生えたカンガルみたいな生き物）に跨ってアインージュラ山脈を目指していた。

アインージュラ山脈はベオルイルから一番近い山で、徒歩なら三時間程度、カンバルなら三十分とかからない。

画面越しに見てもブルブル揺れて眩暈を起こしそうなカンバルにリアルで跨ったカランの調子は先ほどから余り宜しくない。

ゲームの映画版で本物のカンガルを3D加工してカンバルを作ったらしいが、そんなちゃっちなもんじゃ断じてないとカランはありのまま証言した。

「悪いいな、担任。ギルドランクのせいでDしか請けられない所
空気読まず声かけちいまってよ」

「何で知ってるんだよ!？」

「おいで解かるんだよ、獣人のアドバンテージってヤツだ」

そういつて自分の鼻を指してみせるレオニダ。

予算の都合上一匹しかカンバルをレンタル出来なかったので、カン
バルの操り方を知ってるミラが首のアブミに、カランとレオニダが
本来一人用のカンバルのお腹の袋の中でおしくら饅頭をしていた。

だから二人の会話はミラには聞こえない

「えー!？ 先生ってDだったの？ あー、だからかあー
何っーか、強引に誘ってゴメン？」

いや、聞かれていた。 どんだけ地獄耳だ

「いや、いいよ。 大体ランクEだし……ダサイよな、偉そうに先
生とか名乗ってる癖にこんなランクでさ」

「ってかそこで落ち込まないでよ先生！ 町から出たくて冒険者に
成ったって感じじゃん？」

…… ああ、受付けとの話しかから全部聞いてたから、【何で知ってる
!？】とか野暮な突っ込みは無しね」

「それに教師で冒険者を副業にしてんの、実戦訓練の教師だけだし
よ。」

ほとんどの教師はランクE未満——敢えて言うならランクFだぜ」

「でもそいつらはれっきとした教師だろ？　ロクに授業も出来ない上に校内暴力まで起こす俺なんかとは訳が違うよ」

そういつて俯くカラン。　長いツインテールが風に揺られ、レオニダの鼻先を掠める

「アンタがどう自己陰湿しようが、俺は担任の事を教師だと認めるぜ……」【レオニダは獣人、獣じゃない】そんな事言ってくれたのお前が始めてだぜ」

後半から発音のトーンを落としたレオニダの表情に陰がさしす。

そう言われてカランは今まで会ってきた種族の中で獣人が一際少ない——というよりレオニダだけである事に気付く。

今のエウルースはエルフとハーフエルフが始めた3年戦争よりも前、ゲームで言うパッチ1・0・24の状況だ。

そして獣人は戦後のパッチ3・3・5で巨人と一緒に解禁された新種族で、今は人間国家ローデスで奴隷として捕われているはず。

だからアヴィルがそこまでレオニダに突っかかってたんだ——最悪だ。

何でそこまで差別したがるんだよ、見た目が違うだけで、同じ事で笑え、同じ事で悲しめる同じ人間なのに……

「悪いな、聞いてもねえのに不幸自慢なんかしまつてよ……」

「いいんだ……と言うかごめん、もっと早く気付いてやれなくて」

「えーオッホン！ シリアスな所失礼だけどさ、ちよつと良いかなあ？

もうすぐ峠に着くからさ、着いたらギルドで貰ったこの【魔寄せのお香】を焚いて飛竜を呼び寄せるけど——そろそろ戦闘用装備に変えたほうが良いよ。

冗談抜きで強いから、飛竜」

直接心に響くような声——カースウェスパ^{ウエスパ}ーの【呪言】で語りかけてくるミラ。

戦闘用装備、と言われてミラとレオニダを見ると、レオニダはインディアン^{イン}の民族衣装の様な緑色のポンチョと手を守るガントレットが、ミラは首に下げたブローチと媒介のナイフが強化魔法をエンチャントされた装備である事に気付く。

装備自体大した事ないが、レベル5、60台という基準から見れば中々良い方だ。

それに比べカラン自身はというと、黒い生地^黒に白い刺繍が縫いこまれた普段着のローブを着てるだけで、パラメータは装備による恩恵を受けていない。

「俺はこのままで大丈夫だから、そのまま焚いていいよ」

装備による恩恵がなくても素手で魔王を殴り倒せる規格外^{GM}のパラメーターを持つカランは自分に構わずそのままクエストを始めようと

言うが、

「焚けるわけねえだろ！ 自然を舐めてんじゃねえぞ！

自然は怖いぜえ……！ 何だって歩いてる傍からメテオが雨のように降るわ、空飛ぶククルドンが炎吐いてくるんだからよ！」

どこから来たんだ己は！

隕石が雨のように降るって2012かよ、それにククルドンって毛深いサイミたいなアレだろ？

メガトンクラスの巨体が宙に浮く訳ないし、炎も吐ける訳ない！

シールドすぎる、生態系が崩壊する！

というか――

「声大きすぎだろ、香を焚く前にワイバーンが飛んできたぞ。

……景気良くクエストモンスター呼び寄せるのはいいけどさ」

レオニダの後ろを見据えるカラン、蒼空の瞳に映ったのは甲高い金切り音を上げながら飛来する二体のワイバーン。

ドラゴンの亜種であるワイバーンは知能が低く、寿命も短い――ドラゴンと比べて、だが――それにドラゴンと違って体がコンパクトな彼らは圧倒的な威力を誇るプレス攻撃こそして来ないが、体が小さいので、小回りの効く体をフルに活用した空中戦を得意とする。

特に相手を掴み上げて上空から投げ落とす攻撃はレベルや防御力に

関係なく落下ダメージを与えるので、歴戦の冒険者でもモロに喰らえばそのまま墓地に居る天使系お姉さんとか対面する事になる。

「二匹かよ……問題ねえ、こっちは三人だぜ？ ミラ、担任！」

集中攻撃して一匹ずつ倒す！ 俺が火力を引き付けるから後衛は任せたぜ」

「却下、というかレオニダ三点減点」

「ああん！？ 何だよ！？」

「ワイバーンって単独で生活する生き物だろ？ それが二匹一緒にいるって事は番か何かって事だ。

一匹だけ集中攻撃してるともう一匹に掴み上げられて空中投下されるから、連携を取らせないようにそれぞれの注意を引き付ける必要があるんだよ」

攻略サイトの受け売りだが、正論であるカランの言葉にレオニダは『なるほど』と頷き、ミラに目を配る

「うん、接近戦はあんま得意じゃないけど、何とか成るっしょ」

腰から媒介のナイフを抜き出し構えるミラ、その前にカランの小さな背中が映った。

「こっちは俺が引き受けるから、ミラはレオニダのサポートに回れ」

「はあっ！？ ってセンサーみたいな子供に一人でワイバーンの相手させられるわけないじゃん！ あたしがやるって、どいて……」

声を荒げるミラだが、『子供』という単語に反応して小刻みに震えるカランにただよらぬ気配を感じ、言葉を詰めらせてしまう。

「いいから、後衛職は後衛職らしく下がってる」

「わ、解かったよ……」

キシャアアアア！

甲高い叫びを上げ、急降下^{エアレイド}を仕掛けてくる真紅の鱗を持つ陽炎飛竜^{ゲルドワイバーン}とつさに回避すると、さつきまで立っていた岩場が跡形もなく消滅していた。

手強いな……

雪山特有の強い日差しをバックに空中で旋回し姿勢を整えるゲルドワイバーンを横目にレオニダ達の方を見るカラン。

「荒れ狂う雷の星霊達よ！ 古の盟約に基づき束縛されし力をここに解放せよ！」

レオニダはポンチョの裏に忍ばせた楔の様な細長い、木製のトーテムを叫ぶと同時に宙に放り投げた。

宙に舞ったそれらのトーテムは重力に従って落下する——その瞬間、

バチチチチチ

トテム
媒介から青白い電光が迸る！

複数のトーテムから迸る電気はお互い引かれ合い、空中で電磁ネットを形成すると、先ほどと同様にエアレイドを仕掛けてきたワイバーンを受け止めた！

「今だミラ！」

「解かつてるって、LaBufferSoftiaVaFredo
CoreIce?IlMondoscesseSuQuestol
ugoOralResistenza?Inutileosse,
ダイヤモンドダスト！」

詠唱の完成と共に媒介のナイフをワイバーンに突き出すミラ。

細かい装飾が施された白銀のナイフが青い光を放ち、次の瞬間

ブフォオオオオオ！！

太陽の光を受けて光り輝く粉雪の嵐がワイバーンを包んだ！

極少数のドラゴンを除いて大抵のドラゴンは氷が弱点である。

それはこの炎属性のワイバーンも同じで、体内の熱よりも遥かに冷たい粉雪に当てられ、見る見る動きが鈍っていく。

あつちは大丈夫そうだな、じゃあこつちからも仕掛けるか。

馬鹿の一つ覚えと言ふべきか、二度目のエアレイドをかまそうと急降下してくるワイバーンにカランは右手をかざす

アシェンスヴァード
【灰界の使者 Level 1】

カランのイメージに従つて空間を満たす色彩が一筋の光に凝縮され、小さな掌に不健康な光を放つ光の刃が形成される。

触れた物全てを素子分解してしまう凶悪な刃をカランは、色彩を奪われ、一瞬で白と黒だけに成った世界に動転するワイバーンに目掛けて投げつけた！

キイイイイイン、ドツカアアアアン！！！！

魔力の束縛から解放された光の粒子はその強烈なエネルギーで哀れな犠牲者の体を素子分解しながら拡散していき、灰色の世界を再び彩った。

レベル45対レベル255。圧倒的な力量差を前にワイバーンは断末魔を上げる暇もなく、完全に消滅した。

ドロップアイテムすら遺さない、過激なまでのオーバーキル。

自分が発動した虚空魔法にカランは眉を顰めた。

桁外れの威力は勿論、一番問題なのは今発動した灰色の徒のスキルレベルが"1"と言う事だ。

これでマックスレベルであるレベル16を発動したらどうなっていた事か……世界を滅ぼすのは本当に魔王なのだろうか？ その魔王を倒すべく召喚された自分ではないのだろうか？

真剣に悩んでもラチが開かないので———というか彼女自身深く物事を考えたくないで、気を取り直して未だに猛一匹の飛竜の相手をしているであろうレオニダ達の方に目を向けると———

「うん、お前ら実は結構気が合うんじゃない？　一緒に顎なんか伸ばしてさ」

ギャース！？

思わずジト目になるカラン。

本能的危険を感じたのか、番を殺された怒りよりも恐怖の念が勝ったワイバーンは一目散に逃げ出した。

まずい、これじゃ倒した証拠が回収できないぞ。

「追うぞ！」

「無理に決まってるんだろ！！
……それより、何だったんだよ今は？　媒介も使わなかったし詠唱もしなかったよな？」

やっぱそこで突っ込むか……

「ただの詠唱魔法だけど？ 戦闘で気が回らなかったんじゃない？」

「はい、それ嘘

ウェスパー

あたし【呪言】で耳を強化してるって言わなかった？

センサーが詠唱すれば直ぐにわかるっての」

「……系統が違っただよ」

真っ直ぐ目を覗き込んでくるミラにカランは半ば観念した風に溜息を付き、指先で空間を裂き、目を見開くミラとレオニダの前で無限虚空から【黒き聖書】を取り出して捲ってみせる。

「虚空魔法っていう系統の魔法だ……魔法って言うよりスキルって言った方がしっくりくるけど」

「何だよこのページまで真っ黒な魔導書は？」

これって古代神『触るな！』いでででっ！！？」

表紙からページまで全て黒一色の奇妙な魔導書に手を伸ばすレオニダ、慌てて呼び止めるカランの声も虚しく、獣人の指が本に触れ、案の定魔力を吸われて感電の様な状態になったので、慌てて本を引っっこ抜いた。

「きゅくう……」

元々ツンツンな髪の毛は感電したせいで更にツンツンになり、目を回して声にならない声を漏らしてピクピクしているレオニダ。

「アハッ、可愛いなー」

普段の不良っぽさが抜けたレオニダを心のどこかで『可愛い』と思ったカランは無意識に彼の頭を撫でてしまう

なでなでなで

……はっ！？ 俺は今何をした、というか何を言った！？

可愛い、だと……！？

自分の手をおぞましい物でも見る目で凝視するカランの傍らで、

「……っーかセンサー、これって間違っても古代神界語じゃね？
何書いてんのか全然に理解不能だけどさ」

何時もの不真面目さが完全に抜けたミラが眉間に力を込めていた。

8・GMの力は極悪です（後書き）

カラン「よもや俺が野郎を【可愛い】等と……！ 鬱だ、死のう」
タケミナカタ「待ちやがれ、この生ゴミ野郎が！ いいか、転性ネ
タつてのは世間全体こうでないといけないんだ！

朝起きたら女の子に変身、きゃーと可愛いらしい悲鳴を上げる！

しかし家族は【前から女の子が欲しかったのよー】と大喜び！

慣れない体に戸惑いつつも次第に中身まで引かれていき、見も心も
完全な女の子に！」

カラン「黙らっしやい！！ お前の忌々しい幻想を押し付けてく
るな！ 俺は絶対に女なんかに成らんぞ！」

タケミナカタ「お前さー、自分の状況解かって言ってるの？ オ
トナノ都合に巻き込まれた以上観念するしかねえんだよ クックッ
ク」

→今話で精神の女体化が確認されたカラン（実は3話辺りでバレス
トに微笑まれた際熱く感じたのもこの為）

本人は全力で否定してるようですが、果たして何時まで持つ事やら
――ハーレムなんか言ってる場合じゃないですね、気を抜くと直ぐ
に逆ハーが出来る構図だこりゃ

9・世界の片隅で救世した者

Side: カラン

「……つかセンサー、これって間違っても古代神界語じゃね？
何書いてんのか全然に理解不能だけどさ」

何時もの不真面目さが完全に抜けたミラは眉間に力を込めてカランを見つめていた。

無理もない、古代神界語がこの世界でどんなポジションにあるのか、リアの反応から一目瞭然だった。

迂闊だった、と後悔しながらカランは辺りに視線を走らせる。

地面に突っ伏したままピクピクと震えるレオニダ、真っ直ぐ見つめてくる不相応に真面目なミラ、そして傾きつつある残陽

——残陽？ シット、もうすぐ死神^{クロニカ}が家庭訪問に襲来[・]する時間だ！

オマケにバレストも返ってくるらしいし、このままいがみ合ってた
ら折角ベオルイルから出れたのに全部台無しになる、こっとなったら

「く、くそつ代償が……！ だめだ、今直ぐベオルイルに戻らない
と——って訳だから俺は先に転送魔法で帰ってるぞ！ Cast
Spell 40722（転送：GMの塔）Go Target
A9 X:330 Y:741 Z:12」

痛そうに右手を押さえ、中二病の末期患者のように苦しみもがく（フリ）をしたカランはミラが一瞬たじろくを見逃さず早口で転送魔法をGMコマンドで発動した。

キイイイイン、コマンドの実行と共にカランの周りに無数の魔法陣が浮かび上がる。

まるで歯車のように噛み合ったそれらの黒い魔法陣は高速で回転しながら白く脱色していき――

パリーイイイン

カランの姿もろともガラスのように砕け散った。

「……………す、っえ……………」

つてか、古代真界魔法使^{きんじゅつ}って体調崩してんのに転送魔法まで古代真界魔法使^{きんじゅつ}したら本末転倒じゃん！

……………おのれえセンサー、はぐらかしたな……………！」

本月最大のスキャンダルを目の前で取り逃がしたミラは悔しそうに地布団を踏んだ。

「オマケにその上拳句の果てに……………！」

目の前に広がる真っ白な城壁キツと睨みながら一呼吸置き、

「まだクエスト終わってないのにあたし達までベオルイルに送ってどーすんだよ！

あたしに違約金払わせる気かー！！」

直ぐ近くにいたカンバルが驚いて逃げ出すほどの大音量で叫んだ。

目の前が暗転したと思ったらそれはほんの一瞬で、次の瞬間切り立った崖の上にカランは立っていた。

眼下に広がるのは紅葉の赤に染まった果てし無い大地、振り向けば雑草が生えた石造りの一本道が赤い森の奥に続いている。

竜脈の影響で永遠の秋が続く忘れ去られた森。

金色の木漏れ日に照らされ、暖かい色に染まる白い大理石の路地とその上を覆う分厚い落葉の絨毯は美しくもどこか物悲しい雰囲気醸し出し、見る者を感傷的な気持ちにさせる。

かつてこの地で生活していた人達はどこに……つか、居た！

それも直ぐ目の前に。

樹木の間から覗く石造りの塔の前で四階建ての塔と等身大の黒い巨人が真っ直ぐこっちを向いていた。

黒い巨体に脚はなく、高速で渦巻く雷雲が物質化したような円錐型の体に太い腕と頭が生えただけの【人】と呼べるのか微妙な生物――霹靂の大星霊・シンドラだ。

「本当に実在した——ッ!？」

右手に稲妻を纏った巨大な音叉の様な奇妙な剣を握り、背中に青い紋章が刻まれた6メートルオーバーの巨大なマントを羽織ったゲーム通りの姿にカランは思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

名前：シンドラ・霹靂の霸王

種族：大星霊

レベル：200

職業：no data

- - - G M i n f o - - - -

Creature type：NPC

Spawn time：—

Model id：62837

Flag：0

Rep：0

Faction：Reptor Entertainment

Class：Guardian

久しぶりに視界の端に現れたゲームの様な情報にカランは思わず眉間を寄せる。

Flag：0

Rep：0

Class：Guardian

この三行が表す意味を簡潔に説明すると、

【攻撃範囲に入ったGM以外のあらゆる生物を徹底的に排除する局地防衛型殲滅兵器】という意味である。

本来は普通のユーザが塔内に侵入してGM用アイテムを買ってしまわないように置いた門番なのだが、この【局地防衛型】の【局地】とはあくまでも本体から半径800ヤード内の事であり、範囲内にGM以外のクリーチャーが存在する場合はそこまで突進して瞬殺し、更にそこから半径800ヤード内のクリーチャーを排除↓発見↓排除と本当の意味で周りにクリーチャーがいなくなるまで延々と繰り返すのだ。

元々はただのプログラミングミスなのだが、この性質を悪用してクラウン単位で敵対陣営の首都まで列を並べ、理不尽火力を誘き出して壊滅させるエクストリームスポーツが流行ってしまった。

しかもユーザから大好評だったので、開発部側も妥協し、そのまま定着してしまったのだ。

このNPCが今のエウルースに存在した場合どうなるかということ：冒険者がこの塔を発見する↓潔く全滅する↓噂が流れる↓討伐隊が送り込まれる↓ゲーム通りに討伐隊を辿った理不尽火力が人里に着く↓着いた所から無人地帯化という滅びの方程式が成立してしまうのだ。

こんな物が実在してたなんて、ここに来て正解だな。

幸いまだ冒険者に発見されてないみたいだし、隠蔽^{ハイド}を起動すればもう問題ないよな。

というか、こんな近くに居るのに殲滅兵器が攻撃して来ないって事はやっぱり、俺の陣営はGMって事なのか？

「えーっと、お久しぶり？ シンドラ」

渦巻く雷雲の前に立ち声を張り上げるカラン。

一步間違えれば魔王軍や五大竜族^{エーシェントドラゴン}もろとも滅ぼしてしまう最終兵器を前に少なからず緊張しているようで、思わず丁寧な言葉になる。

『ゴゴオオン……ゲゴゴ……？』

足元にいる小さな白い妖精^{ハーフェルフ}を見下ろしたシンドラは何か言ってるようだ、体中から発する雷鳴の音に掻き消され何も聞こえない。

「何？ よく聞えなかった！ もうっ回言ってくれ」

『ゴゴガ……ゴロゴロゴロゴロ！』

「何言ってるのか全然わからなかったけど、中に入れてくれる？」

カランはそう言っただけで彼の背後にある3メートルはあろうか巨大な金属製の扉を指差し、ボディジェスチャーで『中に入りたい』と伝えようと、ようやく通じたのか、ゴゴゴ……と轟音を響かせながら門番^{シンドラ}がその場を退いた。

3メートルもあるこの金属扉は耐久度【∞】の特殊仕様であり、大人しく時間をかけて解錠する以外開ける方法はない。

それがトンネル状になってる塔の入り口に合計10つ並んでいて、Rep^{GM}0以外のプレイヤーが開けようとすれば解錠してる間にシンドラに倒される事になる。

——そもそも門を作らなければいいだろ？ という突っ込みはしては成らない。

これは全ての上級ダンジョンを攻略し終え、所謂最強装備で身を固めやる事が無くなったへビーユーザ達に夢と目標を与えるためのシステムなのだ。

丁度三枚目の扉を解錠し終えた頃だった。

何の前触れも無く後ろから扉がバタンバタンと音を立てて閉まりだす！

「いや、ちょっと待って、ストップ！ タンマ！ ザ・ワールド！
！」

扉の間に隙間はない、このまま閉じたら確実にミンチにされる！

器物破損してるみたいで気が進まないけど、アレをやるしかないか

「G o b j e c t D e l e t e N e a r 1 0 ！」

『サアアアアアクウアレイイシド』

唱えたコマンドと共に目の前に羽毛を撒き散らす蒼白に霧が現れ、掠れた女の声が一瞬耳を掠めた次の瞬間、10層もあつた神鉄オラクルの扉は跡形も無く消え去っていた。

どうなってるんだよ……？

目の前の光景にカランは思わず眉を顰める。

彼女が発動したコマンドは物体を消すためのコマンドで、入力された対象は何のエフェクトも無くシヨボンと消える定めにある。

なのに今目の前に映った光景は誰がどう見てもカオスサマナーが呼び出した虚空の空気——無限虚空そのものだ。

「そういえば、無限虚空ってカオスサマナーと同じ打ち止めになってGM専用の属性に成ったんだっけ」

だったら目の前の光景も納得いく、とカランは自分に言い聞かせた。10メートル程の長いトンネルの先には、広い踊り場が広がっていた。

外からでは想像も付かない程広い塔の内部は全て金で出来ており、塔の中心部に浮かぶ球体が放つ光で吐き気がするほどキンピカリンに輝いていた。

塔内に人の気配は無く、ガランとしていて、変わりに円形の台座がそこら中に備え付けられているだけだった。

紋章が刻まれたそれらの台座を全て素通りし、螺旋階段を登って球体の所までいくとカランはそれに手をかざした。

「Modify Aula GM ON」

コマンドの詠唱と同時にそれまで金色の光を放っていた球体からフツと光が消える。

唯一の光源を失った塔の内部を闇が蝕む

しかしそれは一瞬だけで、光を失った球体から白い光が溢れ出し、室内に再び光が点った。

白い光を放つ球体——この塔全体がGMモード、つまりプレイヤーの目に映らない隠蔽状態ハイドに入った事を示すシンボルだ。

「これでもう問題なし……それよりもあれってアレだよな？」

アレがアレでアレなカランはそういつて近くにあった台座の前に立つ。

ヴ……ヴ……ヴォン

「才帰りナサイマセ、マスター。

今日八何ヲ才求メデショウカ？」

ブラウン管テレビをつけた時の様な音と共に現れた、微かにノイズソリッドヴィジョンが掛かった立体映像、GM専用アイテムを売る商人だ。

「……恐縮デスガマスター、触ラナイデ頂ケマセンカ？ 訴エマスヨ」

科学が発達した生前の世界でさえまだ実現されていないオーバーテクノロジー。

好奇心が赴くままに、抑揚の無い音声で決め台詞を発する立体映像ソリッドヴィジョンの体に触ってみたら、案の定すり抜けて——いきなり怒られた。

「……悪い、珍しかったからつい……」

本当に申し訳なさそうにペコリと頭を下げるカラン。

「ソノ愛クルシイ仕草ハ同性トシテ見タ場合鬱陶シクナルダケデス
ノデ、控エテ頂ケタラ幸イデス」

「はあっ！？ 愛くるしい？」

そんな訳ないだろ、俺はただ……そうか、そくだよな
おのれえタケミナカタ……！」

「——訳モ解カラズ無様ニ地ニ手ヲ突ツ伏シテルトコロマコトニ申
シ訳御座イマセンガ、オ買イ求メノ方ハドウシマスカ？」

愛くるしいと言われ、全力で否定するカランだが、先日鏡で見たど
う見ても妹系の今の自分の姿を思い出し、失意の余り地に手を突っ
伏してしまふ。

そこへゆったりとしたローブを着た、性別がわからない立体映像
の商人が追い討ちを掛けるように冷たい言葉を投げかけた。

「……買い物って、何売ってんの？」

「本店ガ扱ツテイル商品ハ以下ノ通りデス」

そう言っソリットビジョンて手を広げた立体映像の前にゲーム内と同じようにショッ
ピングウィンドウがノイズと共に浮き上がる。

【復活の十字架】に【トムソンの超絶ポーション】それに【ギャバ
ジーの仰天定食】……

「そのトムソンの超絶ポーション——『毎度アリガトウ御座イマス』

」

『そのトムソンの超絶ポーション幾ら?』と聞こうとしたカランの掌に白い霧と共に赤いクリスタルの瓶が現れる。

やっぱり【ただ】か……商人と名乗ってるくせにお代も取らないなんて、太っ腹と言っつか何というか……

そんな事を考えつつ手渡されたポーションを一口飲むカラン。

「ぶっ！」

ジュワツと口の中に広がる甘い液体——なんて事ない、ただの【コーラ】だ。

予想外のポーションの実体に勢い良く噴き出したカランが役目を終えてノイズと共に消えた商人が居た台座に掛かったコーラ（仮）をローブの袖で拭い去ると、飲み干した筈の薬瓶は再びコーラで満たされた。

「やっぱり使用回数∞か……って事は他のもそうなのか？」

じゃあアレも買っという方がいいな

あとアレは絶対に買わないと、アレとアレも必要だ」

何も無くただガランとしている塔の内部を見回しながら今まで起きた事を振り返り、必要なアイテムを思い浮かべるカラン。

傾きつつある夕日の事など、今の彼女はすっかり思考の彼方に追いついていた。

S i d e : バ レ ス ト

窓から差し込む夕日にアイボリーホワイトの室内が仄かに赤く染まる。

厨房で勤しむ養女^{むすめ}が食材を切り刻む音が耳に入る。

そのどれもが非日常で、バレストは無意識の内に眉を顰めていた。

「せっかく家に帰られたのですから、そんな顰めた顔をしないで、もっと楽にしたらどうでしょうか？」

向かいの席に腰をかける死神の様な女に促されたバレストは猛禽類を連想させる鋭い両目を彼女に向け、

「ここは私の家屋、主である私がどうあるかと貴様には関係の無い事だ。

それはいい。 そんな下らない話をするために来たのではあるまい？ あの小娘が森で仕出^{しだ}かした事は私が不問にした。

これで貴様らは七賢者^{やっしや}に怯える事無く堂々と目的をはたせるな？」

空気が震えるほど威圧のこもった声を発した。

「ええ……貴方の協力あつての事です。感謝してもしつくせません」

相変わらず包帯に隠された、感情の読めない口から紡がれるクロニカの言葉。

「この私がただ感謝される事を望んで行動する善人に見えるか？

思い上がるな、これはあくまでも取引だ。

貴様ら無限竜が知る禁じられた未来と私が持つ権力のな………まったく持つて対等な取引だと思わないか？」

「思いませんよ」

感謝という言葉に眉間を寄せたバレスト、周りの空気が重みを持つた様な錯覚を覚えるほどの高圧なプレッシャーを放ちながら告げられた利益のせめぎ合いにしかし、クロニカはケロツとした返事を返す。

「権力だけでは満足しないか、強欲な女だ。よろしい、ならば交渉は決裂だ」

「取引とはお互いに利益を持つて始めて対等と言えますよね？」

これはそもそも取引ではありませんよ………私たちが一方的に益するなんて………」

目の前で俯く死神のような女にバレストは一瞬目を見開く。

隠し切れない動揺を苛立たしげにワイングラスを傾け、赤い液体を喉に流し込む事で紛らわす。

そんな彼をクロニカは感情を宿さない透き通った氷の目でただ静かに見つめていた。

「……読心術か、下らん」

「そうですね、人の考えを知ったところで、その痛みまで解かりはしませんから」

「何の事だかサッパリ解からんな。

貴様の加害妄想に付き合うほど私も閑ではない、ここに来た主要な目的はあの小娘が問題を起こさぬよう釘を刺しておく事なのでな。

……ところでその紅茶は口に合わないのかね？ 先ほどから口を付けてないようだが」

指された先にあるティーカップを目だけ動かして捉えたクロニカは静かに首を横にふる

「……至死量の毒を盛られた紅茶など、いくら死ねない体とは言え好き好んで飲むつもりはありません」

「そうか。ドラゴン 竜人に効くよう、疫病に蝕まれて死んだ原始竜のエキスを調合した自信作だが、試す機会が無くて残念だ。」プロトドラゴン

手で顔を覆い、クッククク と乾いた笑い声を上げるバレストにクロニカは労うようにポツリ、と独り言を呟く

(どこまで、自分を傷付ければ気が済むのですか……)

S i d e : カ ラ ン

オーケー、ナレーターとかいる？ 目の前のこの果てし無く理不尽な状況を懇切丁寧に説明して欲しい訳だが。

地平線の向こうまで続く白い雲海、見上げれば寒気を覚える様な白い空。

重力という概念が無いのか、無数の巨岩が宙を漂い、時折「クキヤアハハハッーギヤアアハハッー」と奇声を上げながら飛んで行く耳の所に羽が生えた生首達を霹靂の大星霊が片っ端から雷を纏った巨大な音叉で撲殺していた。

砕かれ、粉々に成った屍喰鳥フイレンティルハットの残骸は直ぐにくっ付きあつて新たな生首を生み出し、それを理不尽火力が叩き割つて回る——まさしくエンリミデット・ヘッドワーク
無限の生首製

トンネル抜ければ夏の海ならぬ虚空ど真ん中。

「よし、落ち着け。俺がした事は塔をハイドした事と、商人N P Cからちよつとイイ物を買った事、それだけだ。

何も悪い事はしていない。

なのに今の俺は明らかにエウルースじゃない、ギャアギャア五月蠅い生首が飛んでる無限虚空にいる。

……これってどーゆー罰ゲー？」

勿論答えてくれる者は居ない。

先ほどから耳元で呟かれる掠れた女の声に答えが混じってたとしても完全に理解不能である。

虚しくなったカランは無限虚空から出る術を探すべく【黒き聖書】を取り出そうと手をかざした――が、良く考えてみれば無限虚空に仕舞ってる物をどこから取り出せば良いのか。

「仕方ないな……座標移動でエウルースに戻るか試してみるか。でも念のためにここの座標を覚えといた方がいいな

Look up GPS」

【Current GPS I1 X:k499d232s137
c232 Y:j828a367s621t231 Z:u583
z231f023s214】

「……どこから突っ込めばいいのやら……」

ステータスを見る時と同じように視界の端に現れた天文学的数値、こんな物を暗記できる筈がない。

颯爽と踵を返して塔の中に戻ったカランは非営業商人から【世界エンデの終わりの顔】という、【黒き聖書】が落書き帳に見えてしまうほど凄まじい魔力がこもった最高級アーティファクトの魔導書と【千のサウザンド

惨劇を書き綴りし者』と言う、どう見ても血が滴ってる人間の指にしか見えない【万年筆】を無料でひったくると、消失しかけているログから座標を書き写した。

「……s214、と。」

よし、これで座標移動に失敗して無限虚空のどこかでぶかぶか漂うつつーオチは無いな

G O T a r g e t A 9 X : 3 3 0 Y : 7 4 1 Z : 1 2

座標移動の際間違つて落としてしまわないように世界の終わりの顔を大切そうに胸に抱きかかえ、呼吸を整えたカランは先ほどミラ達を転送させた場所の座標をコマンド入力した。

エンドオブザワールド

相変わらずというか、素のコマンド転送はあつけないものである。

エフェクトも視界のフェードアウトもなく、気がつけば何時の間にか月明かりに照らされた白い城壁の前に立っていた。

それだけ。

「ふう、戻ったか……」

所々に青い紋章が刻まれた高い城壁越しに魔法のイルミネーションを見上げたカランは
ほっ、と胸を撫で下ろす。

コマンド一つで呆気なく解決したから良かったものの、下手したら一生無限虚空を彷徨う羽目に成っていたのだ。

傍人からは想像も付かないような運命の賭けに勝ったカランの今の心境はさながら戦場から生還した戦士と同じだ。

「というかある意味、これからが本当の戦いだよな……」

すっかり天高く昇ってしまった月を見上げ、家で待っているであろうリアと死神——そして魔王を思い出した、たった今エウルスを救って来たカランは

はあ——

と深い溜息を付いた。

9・世界の片隅で救世した者（後書き）

いつぞやの創世神座が消え、変わりに超便利グッズを売る非営業団体が登場しますた。

もはやチート一方通行なシンドラですが、それを打倒魔王に利用する事を思い付かない主人公も主人公で十分ヘタレてますね（笑い）
前回のストーリーでは訳も解からずインヴェルノやミラたちとフラグを建てまくって何かと不自然だったので、今回はその過程やら魔導都市での日常を少し描写したいと思います。

10・家族の重み

S i d e : カ ラ ン

この世界の文明はカランがいた世界の中世に相当するもので、照明や娯楽が発達していないこの時代で人が夜間出歩く事は滅多にない。

どこもかしこも小規模な争いが続くエウルースの治安はお世辞にも良いとは言えず、警備が行き届いた王都でもない限り、夜町を出歩けば強盗や人さらいに襲われるかもしれないからだ。

そんな時代の中で異彩を放つ中立都市があった。

ベオルイルの町は永遠に眠らない

眩い光を放ちながら不規則にゆらめくオーロラの下、一日の仕事を終えた魔導都市の住民達は街頭に備えられた露天席で豪華な料理に舌を鳴らせ、他愛の無い会話を交わす。

街灯などの照明は一切無く、地面一面に敷き詰めた【青輝石】という青い光を放つ鉱石と魔法で召喚されたオーロラが唯一の光源である。

他国の住民からすれば楽園か天国のような光景でも、都会暮らしに慣れた現代人のカランにとっては特に珍しい物ではなく、むしろ足元から発せられる青い冷色系統の光に違和感を感じていた。

人通りが多い所では『綺麗だ』、なんて呑気な考えで受け入れられ

ただろう。

だが、人通りの少ない夜の住宅街を一人で歩くと成ると、この冷たい光は——幻想的ではあるが——余りにも寂しすぎる。

例えるなら、からっぽの水族館の深海エリアを一人で歩く、そんな感じだろうか？

恐怖感は何論無い、ただ寂しい、心細いのだ。

まるで世界に一人だけ取り残されたような、そんな感覚。

湧きあがる孤独から逃げ出すように、小走りで青く光る上り坂を登りきったカランはその先にある、丸みを帯びた四角い窓から温かい光を漏らす円筒状の建物の中に駆け込んだ。

「お帰り！　待ってたわ、カランちゃん！」

「リア！　……いや、何でもない
帰り遅くなってごめん。」

しに——クロニカ達はもう帰ったのか？」

暖かい暖色系の光に照らされたリアの顔を見た瞬間、表情を綻ばせたカランだが、直ぐにいつも通りのどこか強気な表情に戻り、季節不相応で涼しげな格好をした目の前のハーフエルフから一歩下がった。

「その言い草ですと、私達と会いたくないが故にわざと時間を潰して来たように聞えますけど、そうなんですか？」

「え？ クロニカ……？」

天井に放射状に広がるアーチを支える柱の後ろから死神が座ったまま幽霊のように顔を覗かせた。

ちょうどリアと柱の後ろに隠れて見えなかったが、だだっ広いリビングの中央にテーブルがあつた事を思い出すカラン。

恐る恐る背を伸ばし、リアの背越しにテーブルの方を見ると――

「……………」

黒い獅子が白玉を彫り上げて作られた椅子に座ったまま無言のプレッシャーを放っていた。

「えーと、その……………」

「この私を待たせるとは良い度胸だ。

極刑は免れない物と思え。

……永遠の眠りに堕ちるまでの間、リアがお前の為に作った料理を平らげるがいい」

きよ、極刑！？ ちょっと待ってくれ、確かに何も言わなかった俺が悪いけどさ、だからって極刑とか普通に宣告してくる？

「もう父上様ったら！

大丈夫よカラン、父上様は『早く食べないとご飯が冷めちゃう』っ

て言いたかったのよ」

嘘ぶっこげ、誰がどう見ても殺る気満々だぞあの目！

「食事に毒が仕込まれています……なんて事はありませんので、これ以上冷めないうちに潔く完食してください」

傍から見ても解かるほど大粒の冷や汗を額からダラダラ流すカランに振り返ったままのクロニカはニツコリと笑みを作って見せ、円形のテーブルを囲む白玉の椅子を引っ張り出す。

その目は笑っていない。

踵を返して逃げ出そうと足に力を込めた瞬間――

「さ、いきましょ？」

今晚の主役はあなただもの――私の妹、カラン・フェミス」

え？　と言う間もなく手を引かれ、連れられるがままにバレスト達の前に着いてしまったカランにリアは『ね？』と微笑んでみせる。

明らかに作り物のクロニカの笑顔とは違う、心の底からの笑み。

飾り気のないその笑顔に彼女いない歴〃年齢のカランが思わず見入ったのは無理もない話だ。

「まずはそれを飲め」

時計回りにカラン↓リア↓バレスト↓クロニカの順でテーブルを囲んだカラン達。

作ってから時間が経ち、湯気が立たなくなったロースト・ポーク・タツキーの向こうからバレストが指差した目の前のグラスに目を向けると、銀の装飾が嵌め込まれたクリスタルのグラスに赤い液体が注がれていた。

「案ずるな、それは紅茶だ。」

本来は酒にするべきだが、ハーフェルフは30が成年なのでな」

グラス一杯に注がれた赤い液体を訝しげに見ていると、中々飲まないカランに痺れを切らしたバレストがやや苛立たしげに付け足す。

「飲んで、どうするんだよ？」

「というか、何で俺だけなんだ？」

テーブルに載ってるグラスは全部で一つ、カランの前にある物だ。

「飲め。」

「……解かったよ」

有無を言わさぬバレストの低い声に渋々頷くと、カランはそれを喉の奥に流し込んだ。

「よろしい、これにてカラン・フェミスを我らフェミス家の者と正式に認める」

「……え？」

「本当は父上様と二人でカランちゃんの歓迎会を開こうと思ったんだけどね

父上様が「歓迎会は賑やかな方がいいからクロニカ先生も呼んで皆で祝おう」「クロニカと話を付けるついでに祝ってやろうと私は言ったのだ！」

……つまりこれで私達は本物の家族になったのよ！」

キョトンとした表情のカランの手を取り、目を輝かせたリアの話
をバレストが強引にぶった切った。

普段冷静沈着な彼らしからぬ言動にリアは思わず苦笑し、クロニカも『ハハハ』とカンペを読み上げたような機械的な笑い声を発した。
それに対し、クツ、と拳を握り締め視線でその場の者全員を射殺せんとするバレスト。

しかし彼傲慢の【威圧】もこんな状況では効果を発し得ない。

頑固親父の可愛い一面を暴かれ、それを家族のみんながとりなす、
ほのぼのな構図の完成——の筈だった

「……やめろよ」

「え？」

「俺はただの居候だ……家族って、呼ぶなよ、
大体バレストが強引に養子になれて迫ってきたから仕方なく頷い
ただけだろ？ どうせまた型だけの家族なんだろ！？」

パンツ、テーブルに掌を叩きつけ、その勢いで立ち上がったカランは無表情のまま見上げてくるバレストを睨みつけ、

「……勝手に話し進めてんじゃねえよ！」

耳をすんざくような鋭い声で叫ぶカランに、バレストは目を細め

「思い上がるな小娘」

今までとは比べ物に成らない、空気が凝結して身動きが取れなくなるようなトーンの低い声で唸り声を上げた。

「何が面白くて貴様のようなガサツでぶしつけな小娘を本気で家族に迎え入れねばならんのだ？」

契りを結んだ所で我々が型だけの家族である事に変わりはない。居候？ 随分と自身を過大評価してるようだな。

地位も能力も何もない貴様は居候以下、チェス盤に並ぶ駒と同等、利用して捨てる程度の価値しかない」

「ちよつと父上様！？」

某碇司令のように組んだ両手に顎を乗せ、延々と告げる父の言葉に耐え切れず、反抗の声を張り上げるリア。

しかしその声は二人には届かず、不敵に微笑む赤い魔王に挑発された白い妖精はテーブルを抑えたまま更に姿勢を低くし

「ガサツで悪かったな！」

訳もわからずアンタの養子なんてこっちから願い下げなんだよ！家族として受け入れる心算なんて微塵もないくせに【家族】なんて

単語、白々しく言っな！

……こんな所今から出てってやる！」

バレストに負けenいぐらい立派な【威圧】を振りまき、そのまま踵を返した。

「ちょっといいですか、カランさん？」

荒らんだ場の空気とはそぐわない、感情味が一切失せた——まるでガラスが砕け散ったような無機質な女の声がその場にいた全員の注意を引き寄せる。

「お二人が【家族】という単語に強い思い入れがあるのは良く分かりました。

が、このまま微笑ましく熱弁されたら料理が完全に冷めて台無しです。

一生懸命作ってくださったリアさんに対する最低限の敬意の表れとして今は仲良く完食してください」

『ご自分達の我侭にリアさんを巻き込むほど人でなしじゃないですね？ バレスト様も、カランさんも』と付け足され、しぶしぶ席に着くカラン。

同じようにバレストも顎を乗せていた手を解き、ナイフとフォークを構える。

「ち、父上様……？」

「ただこつ」

「……いただきます」

ほぼ同時に声を発したバレストとカラン。

あんな壮絶な舌戦をしたすぐ直後だけに笑顔を浮かべる事は無かったが、不機嫌を表す様子も無く延々と料理を口に運ぶ二人を気に掛け、何度も手を止めるリア。

しかし突然 ビクツ、と震えたと思うと、自分の向かい側に座っているクロニカを見つめ、何か気付いたように黙々と食事を続ける二人の家族に目を向け、口元を緩めた。

【 22：31：03 クロニカが リア に ウェスパーチャットを送信しました 】

視界の端に現れたログにカランは一瞬眉を顰めるが、嬉しそうに目を細めるリアと意味ありげに口元を緩めるクロニカから彼女達が秘密裏に交わした会話の内容を何となく悟った。

「解かったよ、残ってやる

……勘違いするな、アンタに利用されるためじゃない、型だけの家族として嫌がらせするためだからな！」

「家族風情で偉そうな口を叩くな。

私の家屋に留まる代償は決して安くないぞ」

相変わらず高圧的な口調で発せられたその言葉はしかし、先ほどの空気を凝結させるような冷たさは無く、『一日でも早く勘当されるように精一杯頑張らせて貰いますよーだ！』と中指を突き立てる力

ランにリアとクロニカは顔を見合わせ、再び舌戦に発展した二人に
気付かれない程度で小さく微笑んだ。

Side:インヴェルノ

キンコンカーンコン

朝一番の鐘の音に夢と現実の境界線を漂っていた少女の意識が無理
やり引き戻される。

「――！」

反射的に両手で耳を塞ぐが、町全体に響き渡る鐘の音がこれしきの
事で防げる訳も無く、3メートルは有りそうな巨大な鐘が往復する
たびに少女の小さな胸を締め付けられるような痛みが襲う。

やがて8回の往復を終えた鐘が完全に鎮まると、黒髪のハーフェル
フー——インヴェルノは両手で口を押さえながら、体をくるめていた
麻の布から這い出た。

いつもの彼女ならこんな惨めな目覚め方はしない。

もつと早い時刻で目を覚まし、鐘が鳴る前に時計塔を後にするからだ。

時計塔の下に広がる青と白の町並みに目を細めながらインヴェルノは思考を巡らせる。

夢を見ていた——どんな夢を？

……思い出せない

どうでも良いか……どんな夢を見ても、私には関係のない話しだから。

天高く突き出した時計塔を包む冷たい朝の空気に思考を中断されたインヴェルノは寒さに震える体をねぎらうように足早に階段を下りた。

今日は礼拝日。

エウルースで最も信仰されている教派・エルイスト教の信者が教会に集まり、天に召される彼らが神に祈りを捧げる神聖なる日だ。

魔法により司祭達が口にする『神の奇跡』と呼ばれる現象の実体を知るベオルイルの住民は他の国の住民ほど熱狂的に信仰する訳では

ないが、それでも一種のトレンドとして休日に教会に通う魔導師は多い。

それが私と何の関係がある？

すれ違う通行人を視界の端で捉えながら人々の流れに一人だけ逆らって歩いていくインヴェルノ。

彼女が行動する原理は至ってシンプル——金だ。

楽して生活するための大金じゃなく、簡素な食事にありつける為の金。

彼女がその気に成れば金貨の一枚や二枚、数時間単位で稼ぐ事も出来る。

できるのだが、あえてそれをしない。

「おう、来たか！　じゃあ早速だが井戸から水を汲んでこい。
浅いやつじゃダメだ、深いのから汲め！

日に照らされた生ぬるい井戸水でいい鉄が鍛えられるかってんだ！」

空气中を漂う煙硝のお陰で昼間から薄暗い工業区の路地を通り抜け、時計塔の中に組み込まれた【歯車】とかいう鉄の塊が積み上げられた店内に入ったインヴェルノに、直径50センチの橙黄色の毛玉——もとい毛むくじらの長い髭を伸ばしたドワーフがぶつきら棒に声を張り上げる。

「解かった」

それだけ言うと、インヴェルノはたたら炉の傍にかけてあった木製の水筒を持って街道に出た。

私が望んだのはこんな簡単な仕事じゃない。

もっと危なっかしい、何かの拍子であっさり死ねる仕事だ。

私は死にたい。

でもクエストで殉職する事は出来ない。自殺も出来ない。

痛いのも苦しいのも慣れている——でも出来ない、そんな事したらきつと、ミラが悲しむから

彼女には『仕方がなかった』——そう心の底から納得して貰って、私の事を忘れて生きて欲しいから

「ぬおおっ！？ もう戻ってきただと！？」

予定狂っちゃったじゃねえか！……悪かあねえけどな。

その細腕で疲れたろ、邪魔にならねえようにそこら辺で休んでろ」

両手で差し出した水筒を片手で軽々と受け取ったドワーフの職人はそれだけ言うと鍛冶の仕事に戻った。

冷え切った井戸水に熱で赤く変色した鉄塊が突っ込まれ、狭い鍛冶屋の中に水蒸気がたちこめる。

「疲れてなんか、ない」

カッーン、カッーン と鉄槌敲击付けるドワーフ、立ち昇る水蒸気越しに呟かれたその言葉は届かない。

「てつきり、他の連中みてえに！ 他所で 油売ってんの！ かと
思ったがよ、女の子にしちゃ！ 中々感心な心構え、ってもんだ
！」

鉄槌が振り落とされるリズムカルな音に合わせて途切れ途切れに伝わってくるドワーフ特有の陽気な声。

鉄棒の窓から覗く灰色の空をぼんやりと眺めていたインヴェルノはその言葉に反応し、ドワーフの鍛冶師に振り向く。

「……感心、する物なの……？」

「……ああん？ 何か言ったか？
集中して聞えなかったもんでな、悪いがもっつかい言ってくれや？」

本当に聞えなかったのか鉄槌を振り下ろす手を止め空いた方の手を耳に当てるドワーフは聞き返す。

「言われた通りに水を汲んで来た事が、そんなに感心する事なの？」

「つたりめーだろうよ！

近頃の若者と来たら真面目に仕事しやがらねえ癖に給料だけは一人前にかっぱらいおって、何だって真面目に仕事しねえ親離れ出来ねえ甘ったれ共に金を出さなきゃいかん、って話よ！

それに比べたらおめえはちゃんと仕事をこなしてらあ、これで男だったら弟子にしてたんだがな……」

鉄網が張り巡らされた天井をしみじみと見上げるドワーフの鍛冶師にインヴェルノは、『そう』と、感情のこもってない声で返した。

甘ったれ、か

残念だけど、私も甘ったれだよ

甘えられる相手がいたら今にでも甘えだしてしまいそうな、救いようのない甘えん坊だ。

でも

私には甘えられる友達がいらないから

私には甘えられる仲間がいらないから

私には甘えられる家族がいらないから

甘えられないだけ。

できる事ならこのガッツだけと人の良さそうなドワーフに助け、と泣き付きながら甘えたい。

でもそれは出来ない——望んではならない。

じゃないと、彼もいなくなってしまうから

再び響き始めた鉄槌の音。

相変わらず元気に鉄槌を振り落としているであろうドワーフの事を
思考から追い出すようにインヴェルノは鉄枠の窓から覗く灰色の空
を再び仰いだ。

S i d e : カラン

『礼拝日だから定期船も休み』

という内容の張り出しに呆れ果てて物も言えなくなったカランはゲ
ーム内の感覚で【凍結氷路】^{フロストレーン}を発動し、運河の上を足元の水面ごと
凍らせて渡った。

これはもともとメイジの魔法なのだが、レベル不足なのかそれとも
単に思い付かなかった魔導師^{メイジ}達は、運河を渡りきったカランを取り
巻き、先ほどの魔法の詳細を問い詰めていた。

「だーから！ 本当に教えられないんだよ！」

裏技で発動しただけだから魔導書にも載ってないんだよ、この魔法

押し寄せる質問の波を懇切丁寧に断っていくが、人ごみは減るどころか野次馬まで集まって来て、いい加減面倒臭くなったカランはグツ、と足に力を込め――

「……と、飛んだ！……」

数十人のメイジの視線が集まる中、一気に十数メートル上空に飛び上がり、港と工業区を隔てる建物を軽々と飛び越えて工業区の内部に着陸した。

「というか、メイジの癖に水上歩行も出来ないってどうよ？」

……まあいいか、それよりマグレーン商会って確かここら辺だよな？」

鼻を突く煙硝の匂いに眉間を寄せながら、記憶にある工業区のマップを思い浮かべたカランは爆薬や蒸気戦車が山積みになった平和な工業区を見回した。

10・家族の重み（後書き）

喧嘩するほど仲がいい！　と言われてるように、カランとバレストは表面上あんな喧嘩してますが、どちらも家族関連でトラウマがあるからです。

どんなトラウマかはその内に

何気に電波発言してるインヴェルノですが、この時代自体が電波なので余り気にしないで下さい。

というか他人を突き放すのはちゃんとした訳があり、中二病とかそんなもんで断じてありません。

どんな秘密があるのかはその内に（全部それかい）

11・時代はオーダーメイド

Side：カラシ

空気中を漂う微かに熱を帯びた煙硝が体に纏わりつき、ベッタリとして気持ち悪い。

寒い筈なのに掌には汗が滲み出っていて、寒くて熱いという、得体の知れない不快感が体を襲う。

他の区画は一風変わった、黒鉄のレンガを積み上げて建てられた低い家屋が所狭しに詰め込まれた工業区。

全体的に清潔な雰囲気、ベオルイルにそぐわない、薄暗くて息苦しいこの区画を訪れるのはほとんど他国の冒険者だ。

特にドワーフと対立関係にあり、彼らの首都・ストールヴィガに入れない人間やエルフの冒険者達はドワーフが鍛えた魔力の籠った装備を求め、この中立都市に足を運ぶ。

その反面、魔導都市の住民がここを訪れる事はほとんどない。

店の外まで行列が出来ている鍛冶屋【パーフェクト武装】や【タンクのお仕事】と言ったゲーム内でも名の知れた名店に目もくれず、素通りする。

彼女がここを訪れた目的は武器ではない——厳格に言えばあながちそうでもないとは言えないが、他の冒険者が質の良い武器を求めるのなら、彼女はその正反対、限りなく質が悪い武器とも呼べない代

物を捜し求めていた。

昼夜問わず吐き出される煙によって黒く変色した白い城壁に面した人通りの少ない狭い路地に辿り着いたカランは左右の長さが違う奇妙なツインテールを揺らし、黒ずんだ枯れ木の枝の間から覗く看板に目を凝らした。

【マグレイン商会】

飾り気のない文字が刻まれた黒鉄の建物。

玄関の前で薄っすらと埃を被った歯車やネジといった、武器とはおよそ無関係な金具の山を踏み越えたカランは息を整え、重々しい金属の扉をノックした。

「んんっ！？ 客か？

今手が離せねえってんだ！

おい 新入り、扉を開けてやって来い！」

開け放たれた鉄枠の換気窓から響く陽気なドワーフの声、少し間を空けて ギギイイ、と金属同士が擦れ合う嫌な音と共に扉が開かれた。

扉を開けたのは見習いのドワーフ——ではなくカランより少しだけ背が高いハーフェルフの少女だった。

「イ、インヴェルノ？

何で、こんな所に居るんだよ……？」

「……また営業妨害しに来たの？ 帰って」

僅かに上目視線で見上げてくる雪の妖精に素っ気無い声を返すと、そのまま扉を閉めるインヴェルノ。

黒鉄製の扉が勢い良く閉まるその瞬間、ドアの隙間から白く繊細な手が滑り込んできた。

『危ない——』 そう思った矢先、あり得ないほどの力に閉じかかったドアが押し返された。

「だーから！

営業妨害じゃないつつつてんだろ、買い物に来たんだよ俺は大体なんでお前が鍛冶屋に居るんだよ」

「あなたには関係ない。

買い物に来たんじゃないの？ 商品はあっち」

バン、と音を立てて壁に叩き付けられるように開け放たれた玄関から飛び込んだカランはそのままインヴェルノに食い掛かるが、帰って来た素っ気無い返事に眉を顰め、しぶしぶインヴェルノから離れた。

そんな二人のやり取りをただ啞然と見ていたドワーフの鍛冶師に白と黒の内、白いほうの少女が振り向き、白い霧と共に手に現れた羊皮紙を差し出した。

「マグレーンさん、だよな？

ちよっと作りたい物があるんだけど、こういう部品とか売ってる？」

差し出された羊皮紙を受け取り、目を通したドワーフの鍛冶師、マ

グレーンは『ううむ』と唸る。

乾いた質の良い羊皮紙に手書きで書かれたのは設計図と呼んでいいのか微妙な絵柄で、その隣には部品名らしき文字が付け足されているが、【ギア】や【バレル】、【ジェット】と言った聞き覚えのない物ばかりで、その奇抜な絵柄もそうだが、ハッキリ言っ て意味不明であった。

「んにや、聞いた事もない部品名ばっかだな。

嬢ちゃんはこんなもんで何を作る気だっ てんだ？」

「【科学】の力を利用した、武器？ とにかくそんな感じ」

【科学】【武器】という単語に、毛むくじやらの髭に隠されたマグレーンの両目が鋭く光を放つ。

「科学の力を利用した武器だあ！？」

……聴き捨てらんねえな！

科学がどんなもんなのか、嬢ちゃんは解かってて言っ てんのかあ！？」

「魔法と同じ、【力】っ て思っ てるけど？」

「おめえ……！ 素人の癖に！

……解かってんじゃねえか！

おうよ、科学は直球で言っ と力よ！ 外に詰まれた爆薬や戦車を見ただろ？

魔法が使えねえど素人でも【エクスプロージョン】みてえな爆発を起こせる！

それが科学の力っ てヤツだ！ 大体どこのドイツだ！ 科学が……ぐたぐたぐたぐた」

知己の士によろやく巡り合えた感動からか、嵐のように止まないマシガントークを一方的に披露し始めるマグレイン。

全身全霊で科学のあり方、科学の便利さ、科学の素晴らしさを熱弁する目の前のドワーフにカランは愛想笑いを浮かべるしかなかった。

そう言うと思ったよ——ゲーム内でクエストに成ってたんだからさ、アンタの情念が。

でもやっぱり売って無いのか……ギアとかジェットとか。

まあ、非営業商人non-sales personに無かった時点でこんな事だろうと思ったから、こうしてオーダーメイドに来てるんだけどね

延々とマシンガントークを続けたせいですっかり息が上がってしまったマグレインを落ち着かせると、カランは自作の設計図をテーブルの上に広げ、マグレインが意味不明と嘆いたパーツの説明を始めた。

彼女が作ろうとしているのは【武器】だが、ただの武器じゃない、STRやAGIに関係なく、固定した威力を弾き出す物だ。

牽制するつもりで発動した【虚空召喚：屍喰鳥】フイレンティリエットで敵を骨の髄まで喰らい尽くす凶鳥を召喚したり、弱らせるつもりで放った【灰界の使徒】グランドで敵を素子分解してしまったりとアクセントが続いたカランは相手を殺してしまわない手加減のきく力を求め、パラメータに影響されない【科学】の力に行き着いた。

【科学】とは【錬金術】や【鍛冶】と同じ商業スキルの一つで、

低レベルなプレイヤーでも高威力の攻撃を出せる』がコンセプトなのだが、レベルが高くなるに連れ存在感が薄れていき、最終的には放棄される定めにある所謂【レベル上げ専用副業】である。

『原理が解からない部分は全部魔法で代用しちゃえ』な投げやりテイスト思考で完成させた設計図の説明が終わると、

「おおっ！ 何だこれは、普通に素晴らしいぞ！

武器なんてちゃっちなもんじゃ断じてねえ、これは革命だ！
レボリューションだーっ！！」

マグレインは鍛冶用の鉄槌を掲げ、大声で革命宣言をし、こうしている時間さえも惜しいのか小走りで鍛冶場の奥に消えていった。

大丈夫、だよな？

一応あれでもマスター級の科学者だし……
エンジニア

歓声を通り越して奇声に近い声を上げながら危なっかしい手つきで鉄槌を振り下ろすその仕事ぶりに、依頼した事をちょっぴり後悔するカランであった。

歩いてるだけで煙硝が体に纏わりつき、べた付く工業区から抜け出

したカランは運河の畔にあるカフェテリアでインヴェルノとテーブルを挟んで向き合っていた。

「何の用？」

仕事中だというのにカランからの誘いを受け、彼女と意気投合したマグレーンからあっさりと外出許可を下されたインヴェルノは不機嫌そうに目を細める。

「別に……ただ学校に本屋、それに鍛冶屋で大変そうだって、たまには息抜きも必要だろ？」

「あなたがしつこく営業妨害に来なければ至って平和よ」

「それは悪う御座いましたよ！
つていうか、毎回買い物してるんだから営業妨害じゃないだろ？」

「何しに来たのか関係ない、あなたが来る事自体迷惑なの」

「おいおい、営業妨害の話しじゃなかったのか？」

滅茶苦茶な理由で突き放されたカランは溜息を紛らわすように笑顔を浮かべるが、『だからなに？』と冷たい目で訴えてくるインヴェルノに、『完敗です』と手を上げて首を振ってみせた。

それっきり言葉は途絶え、二人の間に静寂が流れる。

太陽の光を反射してキラキラと輝く水面を興味無さそうに眺めるインヴェルノ。

そんな彼女に連れられカランも同じように運河の方に目を向ける――
―気付かれないように、コッソリ視線を向けて来るインヴェルノを
視界の端で捉えながら。

「ところでインヴェルノ」

「――！」

な、何？」

「飲むもの決めた？」

……このまま座ってたら店員さんが文句言いに来そうだからな」

「いい――いいない」

何の前触れも無く、わざとらしい大声を發したカランにインヴェルノは一瞬ビクッと反応するが、すぐにいつも通りの素っ気無い態度を取り戻し、抑揚の無い声で注文をキツパリと断った。

「私は――いいないって、明確に言っただけ？」

「ん？」

ああ、言っただけ。

……でも腹が鳴ってる女の子の前で俺だけモグモグ食う訳にもいかないだろ？」

白いテーブルクロスの上で甘い香りを放つグラス一杯のパフェに不

愉快そうに目を細めるインヴェルノ。

そんな彼女とは反対に、今まで気付かなかったパフェの美味さに魅了されたカランは容姿相応の無邪気な子供のようにモグモグと頬袋を膨らませていた。

「……あれ、食べないの、パフェ？」

もしかしてお代の事気にしてんのか？

「大丈夫、俺のおごりだか『必要ないから』」

返って来たトーンの低い返事にカランは鼻の先にクリームが付いたままインヴェルノを見上げた。

じつと見つめてくる宝石のように赤い瞳はただ虚ろで、カランの目を捉えていない。

「あなたに哀れまれる筋合いはない。
こんな物のせいで舌を肥やしたく無いだけ——」

感情を宿さない瞳の奥に見え隠れする強い感情に思考を巡らせるカランにインヴェルノは抑揚の無い声で呟く。

幸せを知らず、幸せを恐れ、幸せを拒み、幸せに背を向けいく——

一体何のために？

「ヴァカじゃねえの？」

気がついた時にはカランはパフェを千切り、インヴェルノの小さな口に捻じ込んでいた。

予想外の行動に目を見開くインヴェルノ。

無意識の行動に目を見開くカラン。

柔らかい唇と冷たい指先は触れ合ったまま、まるで時間が止まったように動かない。

だがふとした拍子で時は再び流れだす。

指先に感じるぬめぬめとした不快な温もり——赤い血がカランの手を伝って白いテーブルクロスに滴る。

ポツツ、生々しい音を立ててテーブルに崩れ落ちた赤い欠片、

「……私に、関わらないで」

それがインヴェルノの口から血と共に零れたパフェのかけらだと解かった時には、彼女はすでに席を立っていた。

「おごらなくていい、年下におごって貰うほど私は惨めじゃないから」

口の中に広がる甘い味を、頬の内側を噛み千切って流した血のお

いで強引に掻き消したインヴェルノは乱雑に掴み出した銅貨をテーブルに叩きつけるとカランが引き止める間もなく走り去っていった。小さな山を形成した銅貨がパフェの値段と同じ銀貨1枚分であるという、どうでもいい情報を視界の端に浮かび上がったログが教えてくれた。

「……今度こそ本気で嫌われた、か」

「違うつしょ、本気で嫌いな奴には魔弾ぶち込む主義だしさ、アイツ。」

小さくなつていく少女の後姿にポツリと呟くカランは至極普通に返つて来た返事に当然のように驚く。

振り向いた先には厚手のウィンターコートに身を包んだ褐色のエルフが――ミラ・ヴェネストウーラがポケットに手をつ込んで立っていた。

「はあうわっ！？ ミラー！？」

「……何時から、居たんだよ？」

「んー？ たまたま通りかっただけ。

それよかセンサー、ちよつと

聞きたい事があるんだけど」

相変わらずニツコリと笑みを浮かべたミラだが、その目は笑っていない。

危険を感じて椅子から腰を浮かせたカランを肩を押さえて制すると、

ミラは二人の額が触れ合う距離まで顔を近づけた。

「あー、先に言っとくけど、あたしこれでも記者の端くれだから、これからセンサーにする事はあくまでも取材の一環なわけね」

「は、はあっ!？」

「とゆー訳で取材開始。

昨日、古代神界魔法使って気分悪くなったとか言って逃げおおせたよね、センサー？

なのに何で古代神界魔法を発動して帰れるわけ？

しかもあたし達まで巻き込んで、だよ？」

何とか言い逃れようと思いを巡らせるカランにミラは更に顔を近づけ、

「で、あたしなりに推理して辿り着いた結論だけどさー

ぶっちゃげ、センサーって【イストのカミサマ】でしょ？」

「……は？」

ミラの口から紡がれた言葉にカランは目を細め、半ば呆れたような返事を返す。

【イストのカミサマ】——文字通りエルイスト教の神様だが、そんなご大層な存在では断じてないと自身で熟知しているカランからすれば滑稽な質問である。

「うん、そうだ！　そうに違いない！　

白い髪に白い魔力、何より代償なしで古代神界魔法を使ってる事が

その証だ！

これはスクープになるぞぉ」

真顔で言われた意味ピラフな内容の話しに肩透かしを喰らった気分のカランを他所に、ミラはジャーナリスト宜しくと手帳と万年筆を取り出し何時でも書けるように構えた。

「訳も解からず一人舞い上がってる所悪いけどさ、取り合えずプライバシー侵害で訴えるから署まで行こうか」

「ええっ！？

そこで逃げちゃうわけ！？

ここまで来たからにはガセでも書きとおすから、変な事書かれたくなかったら素直に全部吐いた方が身のためだぞ」

…… って全然クールじゃん、仕方がない、このあたしが直々にセンサーの体から聞き出そう！」

悪役っぽい笑顔を浮かべたミラはそういつて指をくねくねさせ、カランに迫る！

「いでっ！？」

丁度いい位置に来た広いデコにカランはテーブルに置かれた万年筆でデコペンをかましてやった。

「パパラッチごっこなら他にあたれ、

俺はインヴェルノの事で真剣に悩んでるんだよ」

「いててて……いきなりペンでデコ引っ叩くとかないよ、センセー！！

っーか、ヴェル？

……………！

もしかしてアレか！ センサーも同志、いや、ライバルか！？」

デコペンを喰らった頬を手でスリスリしていたミラはインヴェルノと言う単語を聞いた途端目を輝かせ、しかしすぐに警戒心に満ちた目をカランに送る。

「何の同志だよ！

っていうか、あんなドM女普通に放っておけないだろ？」

「へいへい、清楚ぶらなくたって解かってるって、キメ細かい滑らかな肌！

反抗的だけどそそられる赤い瞳！ シルクのような艶やかな黒い髪！
そして決め付けはローブから伸びるスラリとした美脚！

いいよな、いいよな！

まさに暗闇に咲く一輪の花！ 放って置ける訳ない！

志同道合する者どうし……イテツ！！」

「生徒の未来を案ずる俺の思いやりをお前のエロ親父思想と一緒にするな！」

「だからってペンで喉突つつく？ 普通ー！？

あー、もー、何でセンサーがこっち側なのさ、勿体無い！

美術への冒涇だ！」

割と力を込めて喉をど突いたのに相変わらずハイテンションなミラにカランは頭痛を覚える。

見た目は可愛いのに中身がまるで中年の親父だ。
クロニカやインヴェルノもそうだけどこの世界の美人って中身が残念な人しかないのかよ……

「そう言えばミラってインヴェルノと仲良いよな、何で？」

リアとインヴェルノならありえそうだけど、性格が180°違うこいつらが何でそんなに仲良いんだ？

「あつたり前じゃん、何だつてあたし達は運命共同、一連託生だからさ！ センサーが付け入る隙はどこにもないってわけ」

何時の間にかインヴェルノが座っていた席に腰を掛け、さも当然にパフェを頬張り始めたミラはその質問に、ウィンターコート越しに存在感主張する胸を誇らしげに張った。

「そんな事しないから！

でもそんなに仲良いんだつたら何であいつを止めないんだよ？

……あいつが何してるか、知ってるよな？」

彼女のざつくばらんな性格がそうさせるのか、決して嫌味を感じさせないその傲慢な振る舞いに思わず頬を緩めるカランだが、すぐにまた視線を俯せ、トーンの低い声で問いかける。

「……うん、知ってるよ、知らない訳ないじゃん……

……つつかさ、センサーこそ、どーしてそんなにヴェルが気になるわけ

「？」

『真面目に答えないと怒る』と目で訴えかけてくるミラ。

普段はおつちやらけて不真面目極まりない彼女が時折見せる真剣な瞳はとても頼もしく、今の彼女にならどんな本心を明かしても良い、秘密にしてくれる——そう思わせる。

「あいつは何かに縛られてる——【自分のせい】だと思って自分を苦しめてる

……似てるんだ、以前の俺に
だから他人事とは思えなくなつてさ、何かがあいつを縛ってるんならそこから解放してやりたいんだ」

俯いた顔は雪のように白い前髪に遮られ、震える声で言葉を紡いだ
その口が見えない。

それでも、パフエが盛られていたグラスを握る、血の気が完全に引くほどの力がこもった指先を見逃すミラではない。

「……無理だよ。
いくらセンサーでも」

『なんで』俯せた顔をあげるカランの額に硬い感触が当たり——

「いたっ！」

乾いた音が頭蓋骨を伝って鼓膜を揺るがすと同時にヒリヒリとした
感触が額に広がった。

視界の中央には人差し指をこちらに突き出したまま悪戯が成功したような顔をしたミラが映っていた。

「よっしゃー！ クリーンヒット！

あ、これさっきの仕返しね。

「つか、回りくどいコト言っちゃって、結局センサーも同志って事じゃん？」

「おま『まー、センサーが本気でヴェルの事心配してるって解かったし、あたしは満足かな』」

うーん、と背伸びをし、バン、とテーブルを叩く要領で立ち上がったミラは目を丸くして見上げてくるカランの手を取ると、そのままひよい、と引っ張って立たせ、

「強いて言えばセンサーとヴェルで両手に花を狙ってたりしたんだけど」

カランのおデコを弾いた指を顎に当てて考え事する仕草をし、真顔でふざけた台詞を吐いた。

「何だよ両手に花って！

人が真剣に話してんのに——シット！ 俺の感動を返せー！！」

口元をニタアと緩ませ、明らかにいかかわしい事を脳内でシュミレートしているミラに、先程のシリアスな雰囲気完全に吹っ飛ばされたカランは樹木の上で羽を休めていた小鳥達が驚いて飛び出すほどの大音量で力いっぱい叫んだ。

S i d e : ? ? ? ?

「【アイソージュラ山脈の飛竜討伐 ランクB】ですか……
請け負った冒険者は……思い出しました！」

ミラ・ヴェネストウーラというエルフの少女です」

「その少女に何か特徴は？」

「すみません、お客様。

それ以上の個人情報をお教える訳にはいきません、そう言う決まりです。

……これは私の独り言ですけど、白い髪の毛の女の子だったような……」

ショートカットで眼鏡をかけたハーフエルフの受付嬢はそっぽを向き、わざとらしく独り言を呟く。

「かたじけぬ」

長い枯葉色の髪を後ろで一束に纏めた長身の青年はそういつて一礼し、踵を返す。

「そ、そんな！」

礼には及ばないですよ！」

青年の謝礼に受付嬢は赤らめや頬を両手で押さえ、恥ずかしそうに身をよじる。

そしてもう一度青年の姿を見ようとギルド内を見回すが、彼の姿はどこにもなかった。

11・時代はオーダーメイド（後書き）

突然ですが少しアンケートを取りたいと思います——他の作者様達が投稿したt s小説は大抵途中から、ないしは最初から主人公の口調が女口調になりますよね？

ですが今のカランはもっぱら野狼口調です。

これで発展していくと、後で男性キャラとフラグを立てる際文面を読む限り純BLになりそうで怖いのですが、やっぱり女口調へシフトさせるべきでしょうか？

ちなみに書いてる人の計らいではシフトした後は一人称が「わたし」のボーイッシュな娘です。

12・ラッキーガール

Side: カラン

「……え？ どうしてこうなった？」

「センサーのせいに決まってるでしょーが！」

渡された何やら請求書らしき羊皮紙に首を傾げたカランの耳元でミラが声を張り上げた。

ツーンとする耳を押さえ『どう言う意味だ？』と本気で解からないと言わんばかりの視線を送ると、ミラの中で何かが切れる音がした

「だーかーら！」

センサーが勝手にあたし達まで巻き込んで帰ったせいでクエスト失敗になったわけ！

そこに書かれた違約金は全部、ゼーんぶ払ったよ？

うん、それもあたし一人で！」

「え？ でもクエストの期限は明日だろ？」

「そりゃー、カンバルが逃げて、貸し出した商業ギルドが冒険者ギルドに直接文句言いつけたから、早まったわけ。

……ああ、そうだよ！ そうですよ！ あそこで吼えたあたしが悪かったよ！

でも弁償金に続いて違約金まで払わせるってどうよ！？
12金貨だよ！？ 錬金術師1ヶ月分の給料だよ！？」

サラリーマン

ミラはそういつて頭よりも長い耳を滅茶苦茶に引つ張ったり抓ったり折ったりして悶絶しはじめる。

オーケー、大体の事は解かったぞ、つまりお前が変に挙動不審だからカンバルが逃げ出して、その弁償金を払って金銭面でアウチな打撃を受けたって事か。

それが私と何の関係がある

……じゃなくって！ こうなったのも俺のせいだよ……だからあそこまで躍起になって取材して来たのか——というかあいつが書いた記事、売れるのか？

「ちょっと落ち着けミラ。

日が沈みかけてたし、こんな季節に山の中に残して置けなかったから送り返したんだけど、こう成るとは思わなかったんだよ。

だから、その……悪い。

かわりに今からクエスト手伝うから、もう耳弄るのやめろよ——もげそうで怖いから！」

カランに言われ一瞬落ち着きを取りも出したミラだが、【クエスト】という単語を聞いた途端再び耳への虐待行為を開始した。

「クエスト言うなー！

違約したせいで三日位クエスト請けられないんだけど！

もーお先真っ暗だ！

ああ、あたしは餓死するわけね、そーゆーわけね！」

「だからもうやめろ！
それに——っ！」

慌ててミラを制するカランだが、いかんせん、エルフと発育不全ハーフエルフでは身長差が有りすぎる。

ミラの自虐まがいな行為を制するため背伸びしたカランが、彼女の口がニタアと緩んだのに気付く時には全てが遅かった。

突然肉食植物のようにガバツと手を広げたミラはそのままカランを抱き寄せ、綿羽の様なもっふもふの髪の毛に自分の頬を埋め込んだ。

「なっ……っ！」

「本気で心配してくれてるんだセンサー！」

あーもう可愛い！ だからこのままハグらせてねー

それと、さっきのは嘘だから、あたしが12金貨ぐらいで家計が傾くほど苦学生なわけないじゃん」

ちょうど顔がミラの豊富な胸に埋まったカランは突然の事にパニックを起こし、密着した身体を引き剥がそうと死に物狂いに成っていて、耳元で囁かれたその言葉の意味を理解する余裕などない。

スレンダーな身体のどこにそんな力があるのか、生半可な力ではミラはビクともしない。

かといって全力で引き剥がそうとすればレベル255からくる絶望的なSTRによってミラの身体が肉塊に変わってしまう。

結局されるがままに抱きつかれるカランと幸せそうに頬を擦り付け

るミラという、傍から見れば鼻から血がジェット噴射するような構図が出来上がる。

「ばかもん!!」

若い娘が昼間から何やつとるがな!!」

ダンッ、青輝石が敷き詰められた石畳の地面が踏み鳴らされると同時に何かが宙を切り、ミラの頭を引っ叩いた!

「いつてー!

何なのさ、いきなり!」

「どうしたもこうしたも無いがな!

こんな水辺で昼間堂々と、恥という物をしらんのか!」

引っ叩かれた額を手でスリスリしながら声の主に振り向いたミラが不満に声を張り上げると、その隙を突いてカランは彼女の抱擁から抜け出す。

「ぜえは……ぜえは……ありがとう、爺さん

お陰で助かった」

色々な意味で危ない香りを吸い込まないように息を止めていたカランは肩を大きく上下させ、目の前で手にした細長い木の棒――釣竿を掲げ、もう一回引っ叩くために手首を捻っていた老人に感謝の言葉を告げる、が

「礼を言われる筋合いはないわ!

ワシからすればおのれも共犯だな！」

「ひあつ！？」

こちらの言い分を聞く気が微塵も無い体格のいい老人は麦わら帽子の縁から覗く鋭い視線でカランを睨みつけ、

ヒュン！

何の前触れも無く釣竿を振った！

が、本能レベルで危険と判断したカランは目にも留まらぬ速さで迫る釣竿を紙一重でかわす

無意識の内に取った行動に思考がついて行けず、鼻先を掠めそうになった釣竿に冷や汗をかいてると、老人は手首を捻り、3メートルはある釣竿で空中に∞の様な軌道を描き、再びカランをしばく

遠心力を利用して加速したそれはしかし、再度空を振った。

「小癩だな……！」

更に手首を捻る老人、空気を切る竿はどんどん速度を上げていき、ヒュンヒュンヒュン、と丸でチェーンを振り回すような速度で不規則な軌道を描きだす！

次々と迫りくる打撃の嵐をかわしていく内にカランの姿勢が物理常識を無視した滅茶苦茶なものになっていくが、それでも掠りもしない

腰を落とした姿勢で片手を突き出し、手首だけで竿を操る筋肉質な

老人と丸で羽毛のようにひらひらと舞うカラン、見かねたミラは腰に挿した白銀のナイフを抜き取り、老人の方に突き立てた

「幼女虐待も大概にしろ、この変態ジジイ！」

“揺らめく光は無慈悲な心が零した虚ろな願い” 【闇呪言：仮初】

ズオオオオオオオン

ゾツとなるような冷たい空気が身を包んだと思うと、さっきまで元気に鞭を振り回していた老人の動きが鈍る。

すかさずカランと老人の間に割り込んだミラは動きが鈍った竿を掴むと、そのまま奪い取って地面に投げ捨てた。

相手の魔力を消費して発動する秘術【呪言】、その中で相手に不利な現象を引き起こす物を【闇呪言】と呼び、ミラが発動したのは対象が自身に【弱体化】の魔法を掛けるという物だ。

滅茶苦茶な回避運動を続けたせいで流石のカランも息が上がり、『誰が幼女だ』と途切れ途切れに抗議しながら両膝に手を付け、貪欲に空気を頬張っていた。

ミラはそんなカランを労うように背中をさすりながら、肩膝を地に着け息を整えてる老人に振り向く。

「ただのけしからん小娘だと思ったがな、中々やるではないか」

「そーゆー変態ジジイこそただの漁夫には見えないんだけど？」

「漁夫？ 漁夫か、それもいいがな！」

ところがおのれ等、中々腕が立つがな。

「どうじゃ、ワシに雇われてみる気はないか？」

開き直ったのか、豪快に笑い出す老人。

彼からカランを守るように前に立ったミラは腰に手を当てたまま不機嫌に眉を顰め、訝しげに老人を観察する。

焦げ茶色のオーバーオールを着た目の前の人間は、リンエプトンの黒人でも無いのに日焼けして黒く、目深に被った麦わら帽子から覗く褐色の瞳は色黒の肌のせいで一層鋭く見える。

そして何より老人にしては余りにも良すぎる体格に刻まれた無数の傷痕が、彼が元々冒険者か何かである事を物語る。

「絶対、嫌。

見た目からして怪しいし、何よりレディに手を上げるような野蛮人に雇われるなんてゴメンだから。

人手が欲しいんだったらギルドにでも行けば？」

よほど後ろめいた事じゃない限り受理してくれるんじゃない？」

今までインヴェルノ達と話す時の口調とは明らかに違う、冷たい口調でキツパリ言い切ったミラはカランの手を引き、その場を後にした。

いや、しようとしたが、両足を真っ直ぐ伸ばして立ち尽くすカランは丸でその地面に引き摺ったロープの裏に接着剤が付けられたように、その場からピクリとも動かない。

「一つ聞いて良いか？」

俺らみたいな子供を雇ってどうするんだ？」

「センサー？」

『こんな変態ジジイの言う事聞く必要も無いし、さっさと行こ』と暗に告げたミラにカランは首を振って見せ、

「聞くだけだから。」

——この人悪い人には見えないから」

と言ってもう一度老人の方に振り向く。

「ふむ……確かに後ろめたい事では有るがな『って自分で言ってるし！ ほら、面倒ごとに巻き込まれる前に行こ』」

『放っておいてもいいがな、衛兵が動く前に何人か死ぬ事に成るだろうがな』ボソリと呟かれた言葉に、ミラに引かれるがままに歩き出したカランは再び足を止めた。

「ちょっと待って、人が死ぬってどう言う事だよ？」

自身より数十センチ高い少女に手を引かれたまま振り向いてきた、顰めた眉さえ愛らしく思える妖精の様な少女。

余りにも純粹すぎて直視するのも辛い蒼空の瞳を真っ直ぐ覗き込んだ日焼けの老人はフツ、と鼻で笑うと、地面に投げ捨てられた釣竿を足で掬い上げ、その先端を運河につき立てた。

「なあに、下水道にワニがいるってだけの話だな。」

——ちいっとばかり育ちすぎた、ただっ子のワニがな」

ニヤリと、髪の毛同様にくすんだ茶色をした髭に覆われた口元を緩める老人。

その目に宿る悲しげな感情に、カランは思考をめぐらせる。

「わかった、手伝うよ」

「はぁー！？ 何言ってるわけセンサー！？

絶対騙されてるって！

人気の少ないところに着いた瞬間襲ってくるとかそーゆーのだよ、絶対！

お人よしにも程があるっての！」

「ミラは来なくてもいいぞ？

……俺のおせっかいだからな」

キラキラと太陽の光を反射する水面を目を細めて見つめながら呟くカラン。

長い前髪の間から覗くサファイアの瞳に陰がさしたような気がして、両手でカランを引っ張っていたミラの動きが止まる。

「……放って置ける訳ないじゃん？

センサーみたいなドM女」

無限の塔と同様、ベオルイルの町は多層構造である。
オエムリヒエト

そそり立つ丘を中心に円形の城壁で囲んだ平地は4等分され、南西北東がそれぞれ貿易区、工業区、教会区、居住区となっており、丘の上には空中庭園が、さらにその頂上に無限の塔が鎮座する——これが魔導都市の地上の構造である。
オエムリヒエト

そして魔導都市の地下には地下区画^{アンダーグラウンド}とよばれる、巨大な排水機構を利用した不法者の巣窟が広がっていた。

入り組んだ地形の為に警備が行き届かず、町から排出される錬金術関連の廃棄物によって生じた瘴気や魔物が徘徊するこの区画は天然の迷宮となっていて、不法者が身を隠すにはもってこいの場所というわけだ。

そんな不法地帯を、先程から黒いロープを地面に引き摺った幼いハーフエルフの少女と、長身で褐色のエルフの少女、そして釣竿を背負った体格のいい老人という、奇妙な組み合わせのパーティーが突き進んでいた。

直径4メートルは有りそうな排水管の中は錬金術の廃棄物が放つ蛍光に照らされて仄かに明るく、鼻を突くような悪臭さえなければ七彩に輝く神秘的な空間に見いれてられただろう。

時折肥大化した蝙蝠などが飛来するが、こちらが戦闘態勢を取る前に勝手に逃げ出して行く。

その光景に首を傾げるカランは自分がこの現象を引き起こした張本人である事に気付かない。

「……もともとは貴族のガキが我俥言つて持ち込んだワニの子だったがな、そだったワニが可愛くないと、そいつが運河に放したのが始まりだった。

一口にワニと言っても種類は多種多様な、例のワニの子はよりによってザンダラクロコダイルという極めて凶暴なワニでな、放っておけばその内死人が出るのは明らかだな」

時々立ち止まっては耳を澄まし、壁越しに伝ってくる声を聞き分けながらクエストの詳細を説明する日焼けの老人——マーフィー。

うんうん、と頷くミラの傍でカランはさっきから顔を俯せて歩いていた。

「どしたの、センサー？」

何か元気ないけどさ」

「……いや、何でもない。

何でアンタはそんなに詳しく知ってるんだ？」

「なに、簡単な事だがな……」

ワシの仕事は町の結界に引つ掛かるようなケガレ物を運ぶ事だったんだがな、運んだのだよ、そいつを」

「それってつまり【密輸者】バンディエーラってわけ？」

「……後ろめたすぎじゃん、だからギルドに顔出せなかったってわけか」

でもあたしには関係ないね、と首を振るミラにマーフィーは『そうだろうがな』と肩を竦めて見せた。

「そのワニを見つけたら……どうするんだ？」

「その場で仕留めるがな」

先程から口数が少ない、珍しく大人しいカランの質問にマーマーフィーは何の躊躇いもなく、さも当然のように答えを返した。

「そうか、」

マーマーフィーの返事に力なく頷くと、カランは再び顔を俯せ、歩き出す。

「つ、つかさ、どこから捕ってきたわけ？」

そのザン……ザン……『ザンダラクロコダイルだがな』

そ！ ザンダラクロコダイル！ どこから捕らえて来たわけ？」

「知らんがな、ワシの仕事はブツを結界の外から中に持ち込む事だ
がな。」

憶測だがな、ゾドムスワンプあたりだろうがな

……それでも現地民かいな、おのれは？」

「悪かったね、あたしは世界樹^{とかい}育ちなわけ

ってかそんな物騒なもん町に持ち込むとかどんな神経してるわけ？

…… ああ、あんたの事言ってるわけじゃないから！

あたしが言ってるのはそのブルジョワクソガキ」

ピタリと足を止めたマーマーフィー。

自分の言葉で気を害したと悟ったミラは慌てて解釈するが、マーマーフィーは取り合わずに姿勢を低くし、

「おのれ等の仕事だ……来るがな！」

仄暗い七彩の蛍光に照らされた通路の向こうからバジャバジャと水を掻き散らすを立てながら迫り来る光り輝く巨体を見据えた。

S i d e : レオニダ

「はぁ？ 知らねえよ」

久々の休日に貿易区まで買出しに出ていたレオニダはぶっきらぼうに吐き捨てると、目の前の奇妙な衣装を纏った青年を避けるように再び歩き出す。

「そうか、かたじけぬ」

青年はそれ以上追及する事無く広い袖口を胸の前であわせ、吹き抜ける風に一束に纏められた髪を揺らされる事を意に介さず、目を瞑った。

腰に挿した、反れた黒い木の棒から微かに漂う血錆の匂いにレオニダは歩きながら眉間を寄せる。

何だってんだ、あの野狼……白い髪を持つ褐色のエルフ——それっ

てミラの事じゃねえか

……またアラシヤトの刺客か！？

でも待てよ、あいつはハーフエルフじゃねえか、エルフと手を組める筈がねえ……

いや、裏をかいて油断させるためか？

タマクソ、嫌な予感しかしねえ……！

懐からトーテムを彫る時に使う彫刻刀を取り出したレオニダは、彫刻刀を胸の高さまで持ち上げて磨くフリをして後ろの様子を窺う。

鋭い光を放つ彫刻刀が映した背後の風景——白い石製の建物と道路脇一杯に並んだ露店は相変わらずだが、このベオルイルで一際目立つ異邦の格好をしたハーフエルフの男だけが消えていた。

慌てて振り向くレオニダだが、やはり、路地の先にある噴水以外視界を遮る物は何もなかった。

「逃げ足だけは速えな、タマクソが！
だがな、俺の鼻から逃げられると思うな！」

鼻先に神経を集中させ、空気中に漂う血錆の匂いを嗅ぎ分けたレオニダは先程の男がいた場所のすぐ傍、裏路地に続く横道に駆け込んだ。

S i d e : カ ラ ン

ギャオオオオオ!!

けたたましい咆哮と共に巨大な顎が迫り、とつさに飛び退ったカラ
ンがついさっきまで立っていた地面を噛み砕く。

「大丈夫、センサー!?!」

「……ああ、何とかな」

飛来した石礫を手にした1メートル強の鎖付きの鍵、ベ・イルダンテ絶望の鍵で弾
き飛ばしたカランは立ちのぼった土煙の向こうで咆哮を上げる、背
中にクリスタルの鱗が生えた6本足のワニを見据える。

「……もともとは貴族のガキが我侭言って持ち込んだワニの子だっ
たがな、そだったワニが可愛くないと、そいつが運河に放したのが
始まりだった」

ペットにする為だけに生活ぶち壊して、強引に拉致って来て、可愛
くないから捨てた?

ふざけるな

咆哮と共に迫りくる顎を踏み台にして跳び上がり、空中で器用に身を捻らせたカランは両足で天井を蹴る事で落下速度を上げ、噛み付いた反動で地面にめり込んだ巨大鰐の顎に鍵の先端を突き立てた

「絞まれ！」

その言葉をトリガーに、何も無いはずの空間からどす黒い穴が^{ホール}無数に現れ、金属同士が擦れる無機質な音と共に数え切れないほどの鎖が凄まじい勢いで射出される！

ジャジャギャギンギギャギャリリリリ！！！！

抵抗は無意味、反抗などおこがましい、逆らい続けた先に辿り着ける未来はどこにも無い——生きる事を何よりも望む自由な獣に絡みつく、逆らう意義すら跡形もなく碎き壊す絶望的な量を誇る鎖雪崩^{なだれ}。20メートルもあるクロコダイルの巨体が、次々と射出される鎖に絡み込まれていく。

ベ・イルダンテ
「絶望しろ」

発動トリガーとなる台詞と共に鍵を回して施錠したカランの目の前には物理反射・魔力無効の、鎖の繭が出来上がった。^{まゆ}

「……………！」

……………おのれ、何者だがな？」

「呪文詠唱が出来ない魔導師^{メイジ}」

信じられない、と目を見開くマーフイーに、カランは素っ気無い声

を返す。

幾重の鎖に絡まれた白銀の鍵はその役目を終えると一瞬で砕け散り、無数の欠片は地面に堕ち、軽い音を立ててバウンドした瞬間――消えた。

その儚いほど虚しい光景を寂しそうに見つめていたカランはおもむろに声を絞り出す

「……本当にこいつを殺すしか方法はないのか？」

こいつに歩いて辿り着ける未来は……どこにも……無いのか？」

まるで救いを求めるようにすがり付いてくる蒼空の瞳にマ―フィーは溜息を付く。

「無いだろうがな。」

こいつを野放しにすれば多くの人が死ぬがな

かといって町から出すには余りにも大きく育ちすぎた

どの道こいつの存在を知った例の貴族が黙ってる筈が無いがな」

「……その貴族があんたを雇ってこいつを始末しに来たのか？」

「そうだ、と言ったらどうするがな？」

かわりにワシを殺すか？ それでこいつを弔うか？」

「殺さないに決まってるんだろ……！」

……それに、何も出来ない。

こいつの運命を理不尽な理由で滅茶苦茶にしたあんたを、あんたらを呪う事ぐらいしかない！」

「すきにするがいいがな。」

だが、それなら世界中の生き物を呪う覚悟をする事だ」

生かすなり殺すなり好きにしろ、と言わんばかりに踵を返すマーフィーに『どういう意味だ』と問いかけるカラン。

マーフィーは肩を竦めてせると、再び歩き出す

「生き物は皆、他者の不幸の上に自分の幸せを築いてるがな。不幸なのは皆同じだ、その不幸を他人に押し付けて、何も感じないやからが本物の幸せ者だがな」

『だからおのれは悪くない、幸せすぎただけだがな』排水管の壁に反射して響くしゃがれた声を最後に、老人の姿は蛍光に照らされた通路の奥に消えていった。

12・ラッキークール（後書き）

何やら安っぽい哲学を振り回すシリアスな雰囲気の話

ちなみに絶望の鍵の振り仮名を変えてみました、クロニカ戦ではフォルテオンでしたが、《絶望しろ》という意味の《ベ・イルダンテ》が中二っぽくて気に入りましたので、改竄しました（おい）

キーワード一つで縛り付けプレイが出来るSMグッズ！ ただいまダフオクで競売中！（嘘）

というかドM属性のカランにs属性のアイテム渡していいのか？

アンケートの結果カランの口調は「内面まで女に引っ張られてるが、意地で漢を貫き通そうと努力するも無意識にどこか女の子っぽい口調になってしまう口調」に決まりました（長えよ兄貴）

13・仄暗い地下水道で（R15）

Side：カラン

「……センサー」

『どーすんの、コレ？』続くべき言葉が喉につつかえて出てこない。

目の前に横たわる、ピクリとも動かない銀の繭。まゆ

鎖の隙間から漏れる弱々しい呼吸音は自由を求める無辜な命の嗚咽にも聞え、自然と哀れみの感情が湧きあがる。

カランはというと、その哀しい嗚咽から逃げ出すように細長い耳を垂らし、何時の間にか取り出した、表紙に黒い宝石ダークマターが嵌め込まれた魔導書の上で切り落とした人間の指の様な不気味なペンを走らせていた。

また古代神界魔法を使う気じゃないだろうか、と心配しながら覗き込むミラだが、微かに光を放つ紙面に赤い血で書かれたのは魔術用語イングリッシュでも、古代神界語でもなく、垂直に交差した二本の直線と所々に書かれた数字だった。

ゾドムスワンプはアラシャトの南の方にあつた筈だからY軸から300引いて……

それに沼地だから海拔は低い…… - 23、と

訝しげに首を傾げるミラの傍で、カランは最上級の魔導書をメモ帳代わりにして座標の演算をしていた。

ほとんどのGMは仕事の都合上、首都の座標を暗記している。

カランも例に漏れず、ベオルイルを始め、アラシャトやイストネアガードなど主な都市の座標は一通り覚えていて、彼女は今、アラシヤトの座標を元にゾドムスワンプの場所を逆算していた。

同類相憐れむとはこの事だろうか、幼い頃に起きた事故で両親を失って以来、親戚の間でたらいまわしにされたカランは身勝手な都合で捨てられたこのクロコダイルに同情にも似た感情を抱いていた。

それはただの独り善がりだ、と彼女自身でも良くわかっている。

『それでも放っておけない』

よく言えば純粹、悪く言えばただ単に甘いだけ——カランはそう言う人間なのだ。

「ミラ

悪いけど先に帰って」

「……いきなり何言ってるわけ？

こんな所にセンサーを一人で残して置ける訳ないじゃん」

「今からこいつを始末するから

見ない方がいいぞ、吐くから」

十字線の上で数字を書き足しながらトーンの低い声で呟くカラン。

その視線は手に広げた魔導書に向けたままで、綿羽のようにもふもふの髪の間から覗く横顔は、普段怒ったり笑ったり焦ったりと表情豊かな彼女からは想像も付かないほど無表情だった。

そんなカランにつられて、ミラの顔からも普段の軽い笑みが消え、眉間を寄せた真剣な表情になる。

「はい、それ嘘。

センサーにそんな事できるわけないじゃん」

「……何でそう思うんだ？

昨日のワイバーンだって、何の躊躇いもなく分解したんだぞ？」

「それはそれ、これはこれ。

……センサーって単純だからねーどうせ『こいつを助きたい』とか思ってるっしょ？

あたしも賛成だから、手伝うよ」

そういつてウィンクしてみせるミラ、元気を押し売りしてくるその笑顔にカランは『邪魔だ』とは言えず、さっきから絶えず演算していた結果を手握った、ひんやりと冷たい、グニャンとした誰かの指で【世界の終わりの顔】に書き足した。

エンドオブザワールド

「誰が単純だ！

……もういい、好きにしろ」

カランはそういつてボタン、と魔導書を閉じると、視線を鎖の繭まゆに向けて焦点を定め、裏技バックアップを唱えた。

「Modify Scale 0.01」

詠唱を終えると同時に、20メートルもあつた巨大な銀色の塊は一瞬で消え、かわりに20センチ程度の銀色の物体が転がっていた。

エフェクトも過程も何も無い、結果だけを引き起こすGMコマンド。

カランはサイズ調整のコマンドでクロコダイルを持ちやすい大きさに変えたのだ。

「な、何今の……これも古代神界魔法なわけ？」

「違っただけど……いや、そうらしい」

目の前で起きた光景に信じられない、と口に手を当てたミラだが、カランの曖昧な返事に眉間を寄せた。

「なにそれ、意味不明なんだけど」

「俺に聞くなよ」

自分でも良く分からないんだからさ」

カランはそう言つと、身を屈め、サイズの割には重みのある銀の繭まゆを抱き上げた。

「それは【かりもの仮物の力】——この世なならぬモノを呼び出す力だ」

背後から響く、凜とした男の声に弾かれるように振り向くと、ミラのすぐ傍にその声の主は居た。

名前：ノスラ

種族：イエロードラゴン

レベル：85

職業：ソードマスター

- - - GM info - - -

Creature type：NPC

Spawn time：—

Model id：11321/274

Flag：3

Rep：68

Faction：Amber Wing

Class：Guardian of the chronicle

視界の端に表示されたログに映る内容に、カランの眉間に力がこもる。

イエロードラゴン
琥珀竜族……！

何で、こんな所にいるんだよ？

まさか、俺が無限竜エターナルドラゴンだってバレたのか？

いや——そんな事よりも、ミラが危ない！

「ア、アンタ誰……よ？」

気配もなく自分の隣に立つ青年にミラは反射的に声を張り上げるが、凜としたその横顔を見た瞬間頬が朱に染まってしまい、言葉が途切れる。

枯葉色の髪を後ろで一束に纏めた青年はそんな彼女と全く取り合わず、ゆつくりとした歩調で何時でもミラの元に掛けつけられるよう、身構えていたカランに歩み寄る。

「アイーンジユラ山脈の飛竜を殺めたのはそなたか？」

「……ああ、そうだよ、クエストだったから倒した。
……悪いか？」

自分と目を合わせようとせず、仄かな光を放つ通路の奥をじっと見つめたまま呟くカランに、ノスラの表情は渋い物に変わる。

「ならば何故そやつを殺めぬ？
同じクエストであろう？」

「それは……」

「答えずとも構わぬ……ここで斬る事に変わりはない。
だが、いくら時の流れを乱した罪人と言えど、丸腰の娘を斬るのは
某の流儀に反する。
武器を構えよ」

瞬きする一瞬の内に姿を消したノスラの声まはたが背後から響く。

余りにも突然の出来事にゾツとするカランだが、振り向いた先にいた黒い袴の男は、手を組んだまま目を瞑っており、攻めに転じる様子はない。

武器を構えるまで待つって事か……

そんな事よりこのままじゃミラも巻き込まれる、何とかしないと――

「ミラ!？」

目の前に佇む侍の様な男の挙動に警戒しつつ、後ろにいるであろうミラに振り向いたカランは地に伏した彼女の姿に思わず絶叫した。

「案ずるな

その少女にはしばし眠って貰うだけだ。

……彼女が眼を覚ます時には全てを終わらせる」

片手を日本刀の柄に添え、姿勢を低くしたノスラはもう一度目でカランを促す。

鳩尾を柄で突かれたのか、倒れたまま動かないミラを気に掛けながらカランはノスラに向き直る。

「というか、何？」

【トキノナガレヲミダシタザイニン】とか、訳解かんないんだけどいきなり戦えとか、何考えてるんだ、オッサン？」

「理由も知らずに死ぬのは酷か……」

よかろう、某の名はノスラ、時の流れを守護する琥珀竜族イエロードラゴンの一人だ。そなたが殺めた飛竜は本来死ぬべきでない者だった。

どんな手段を用いたのか詮索はせぬが、歴史を歪めたそなたの存在は世界にとって危険だ。

故にそなたの時を止めに来た……悪く思うな」

「思わないわけないだろ！

大体なんだよ、殺しちゃいけないって注意書きでも張ってあんのかよ？

何も知らないのにいきなり殺しに来るとか、もう詐欺の領域に達してるぞ」

「人を呪わば穴二つ、某が敵討ちに来たと思えばよい」

シット、やっぱ誤魔化せないか……

というか琥珀^{イエロー}竜の癖に何で正々堂々宣戦布告して来てるんだよ？
単に戦闘^{バトルマニア}狂だからか？

……いや、むしろ変態だな。

こんな――

だめだ、言ったら負けだ。

とにかくこいつを何とかしないと

「Add Item 371 【絶望の鍵】^{ベ・イルダンテ}」

相手が取ったのは居合いの構え、速度と威力を兼ね備えた一撃必殺の構えである。

先程の瞬間移動から見ても恐らく相手の武器は素早さであると判断したカランは動きを封じる事に特化した武器、鎖^{カサネ}が幾重に巻き付い

た巨大な鍵を再び生成した。

それを柄に手を添えたまま出方を窺ってくるノスラに突き立て、

「絞ま——『遅い』」

発動トリガーの台詞を口にした瞬間、目の前に佇む敵の姿が消え、カランの傍を質量を持った金色の風が通り過ぎた！

カツーンジャラジャラジャラ

何が起こったのか、突き出した絶望の鍵は真つ二つに分断され、鎖の束が硬い地面に落ちて乾いた音を立てる。

【アームブレイク】——相手の武器を破壊するソードマスターの秘技。

攻撃の真意に気付いた瞬間、意識に関係なく足が地を蹴り、身体が宙に浮いた

ヒュンッ！！

揺れる視界の中、鼻先を掠めていった白い刃の持ち主が何故か自分の真後ろにいる事を確認したカランは肘打ちをかまそうと身体を捻る、が

「どこを見ている」

耳元で呟かれたノスラの声と共に横腹に激痛が走った！

何時の間にかカランの真下にいたノスラは回し蹴りの領分でカランを蹴り飛ばしたのだ

しかしノスラの攻撃はこれだけでは終わらない。

水平に蹴り飛ばされたカランよりも早く走って着地点に着いたノスラは、飛来したカランの身体をそのまま袈裟切りで切り飛ばした！

ザシュツ！！

冷たい何かが身体の中を通り抜けた不快な感覚

宙を舞う白く細い腕

ポトツ

放物線を描いたその腕が軽い音を立てて地面に叩きつけられた瞬間

「——っ！

うあああああ！！」

ワンテンポ遅れて噴き出した鮮血と共に耐え難い痛みがカランの身体を駆け巡った！

右肩から左腰にかけてザツクリと切り裂かれたカランは壁に寄りかかり、元々不健康な程に白い顔を更に青白くして大粒の汗を流していた

そんなカランを哀れみのこもった視線で見つめるノスラは刀を回転させて血を払うと、鞘に納めたまま彼女の前に立ち、柄に手を添え

る。

「あの一撃でそなたの命を断つ心算だった……すまぬ。
これ以上苦しめよう一瞬で——」

しかしノスラは言葉を最後まで発せず、後ろに二、三步跳び退さる。
何故なら切り裂かれたカランの傷口から流れ出る鮮血が白く変色して
いくからだ。

白く染まっていく傷口に応じるように辺り一面に飛び散った血飛沫
も白化していき、乾いた音と共に碎け散り、眩い光の粒子と成って
カランの元集っていく。

光が収まる頃にはカランの身体は切り落とされた右肩も含め完全に
再生していた。

奇跡としか言いようがない、目の前の光景にノスラは忌々しそうに
目を細める。

エターナルドラゴン
「無限竜……まだ残党が残っていたか」

トーンの低い声で呟かれた言葉がカランの耳に届くと同時にノスラ
の姿が揺らぎ、次の瞬間

ザシュザシュザシュザシュ!!

金色の霧と共に現れた四本の刀がカランの身体を貫き、小さな身体
を壁に貼り付けた

「……かはっ」

「苦しいか？」

そなたが殺した者達にも痛みを感じる資格があれば同様に苦しんでいた筈だ」

「……お、おれが殺した、者達？」

「生きるべき命を殺めばその命が関わる未来の命は全て消える事となる——そなたは数え切れぬ生霊を殺めた」

「……ごぼっ……！」

「……いた仕方あるまい

E・la Garigione Della Luce、【時流遡行】クロノヒーリング

」

何かを言いかけたカランだが、口から吐き出される巨大な血塊によつて揉み消された。

見かねたノスラは時空魔法を唱えると、カランの身体を金色の霧が包み——何も起こさずに消えた。

「……時の流れから外れた存在であるそなたに某の魔法は意味を成さぬ。
ヴェルマンユ

【凝砂の牢獄】が完成するまでいままの辛抱だ。

そなたには気の毒だが、全ての生霊の未来の為犠牲になって貰おう」

身体が動かない……シット、ここで豚箱入りかよ

あの中に入れられたら幾らGMチートでも抜け出せないだろうな……

これでタケミナカタの面目丸潰れ、か

計画通り。

……何言っただか、どう聞いても強がりだよな

でも

このままぶち込まれるのは性に合わない

「……ざけるな」

「むう?」

「ふざけるな……!」

何が全ての生霊の未来だ、決められた運命に従って、魔王に滅ぼされろってのかよ!

……ごふっ

……ああ、そうさ、俺は我侂だ、自分が幸せに成る為に平気で不幸を他人に押し付けるサイテー野郎さ、だけどな、俺はともかく、時の流れを乱したやつらをバンバン殺してんじゃねえよ!

アンタからすれば時間を乱してる風にしか見えないだろうが、あいつらはそうやってもっと幸せな未来を築こうって思っただよ! 居辛くなったら時間を渡って逃げられるアンタらと違って、あいつらは今しか生きられねえんだよ!

ノスフェラドムス

金箔漆塗り糞爺に伝えておけ!

【独り善がってんじゃねえぞこの金箔漆塗り糞爺】ってな!」

血を吐き飛ばしながら叫ぶカラン。

自分の袴に赤い血が付着しては白化して消える事を意にも介さず、ノスラはカランを睨みつける。

「現実を見る、時を歪める程の力を持った者達が行き着く先を私欲に満ちた歴史の改竄、犠牲の上に成り立つ汚れた地位人はそなたが思う程美しくはない」

「それでもな」

キツ、とノスラの瞳を睨み返し、一呼吸置いて

「一千万歩譲って人が全部悪人だったとしてもアンタらに指図される筋合いはないんだよ！

未来が怖いんだったら過去にでも引き簞もってろ、人様の自由を奪ってまで安泰してんじゃねえよ！

それに俺は信じてる、そういうドM野郎が世界のどこかにいるんだってな！」

蒼空をそのまま切り取った様な蒼い瞳に映るエメラルドグリーンの瞳が一瞬揺らぐ。

しかしそれはすぐにいつも通りの平静さを取り戻し、カランの視界から離れたと思うと一瞬でカランのすぐ目の前まで近づいた。

グジャッ

鮮血が、勢い良く噴き出す。

グジャツグジャツグジャツ

枯葉色の髪と、色白の肌が血に赤く染まり、おびただしい量の血がその尖った頬を伝って滴る——そして白化し、光に変わってゆく。

「口先なら何とも言える

その思いを現実に変える力がそなたにはあるのか？

……あるというのなら、某を倒して見せよ」

ノスラが手を放すと同時に四本の刀が金色の霧に包まれて霧散した。

ついさっきまで刀が突き刺さり、血を流していた傷口は眩い光を放ちながら見る見る塞がっていき、ザックリと切り裂かれたローブの間から覗く白い素肌に傷の痕は無かった。

——ノスラはカランを戒めから解放したのだ。

まだ少し痛むのか、カランは先程まで刀が突き刺さった肩や太ももを手でほぐすと、目の前で姿勢を低くし、片手を柄に添えたサムライに向き直る。

「わかった……だけど、今は無理だな。

少し待っててくれないか？

……逃げるんじゃない、ほら、こういう決闘ってちゃんと果し状を送って時間と場所を決めておくもんだろ？」

そういつて口元を吊り上げ、愛らしい笑みを——いや、本人曰くキザな笑みを浮かべたカランに、ノスラは暫らく思考をめぐらせ、

「……よかるう、日が沈むまで待つとしよう」

同様に口元を緩めた。

その気に成れば過去・今・未来の全ての自分を召集できる琥珀竜イェロートドラゴンの情報網はとてつもなく広く、一度でも彼ら睨まれば決して逃げられない。

その事を目の前の無限竜エターナルドラゴンが知らない筈がない。

それに、この少女なら約束を破るような事はしないだろう、確信は無いが、万年単位の時間を生きて来たノスラは本能レベルで確信を持てた。

「また合おう——」

先程までの殺意に満ちた声ではなく、最初に会った時のような、落ち着き払った声を最後に、ノスラの姿が消えた。

「ああ、また、な」

誰もいなくなった仄暗い通路の先を見つめていたカランはそう呟くと、ミラを起こすべく踵を返した。

Side:レオニダ

「タマクソ！ 普通に迷っちゃった！」

三つに枝分かれした地下水道の排水管の前でレオニダは立ち往生していた。

異邦男の持つ変な木の棒にこびり付いた血の匂いを元にここまで辿ってきたが、清浄な地上と違い、地下水道は悪臭に満ちていた。

鼻が人の3万倍効く獣人にとってこういった悪臭は天敵であり、下手に吸い込めば気絶する恐れもあるのだ。

選択肢は三つ、確立は三分の一……どうする？

これはかなりの難題だぜ……何故なら俺は……！

……じゃんけんで勝った事が一度もねえ……

最早そういう星の下に生まれたとしか言いようが無い不幸少年であるレオニダはこういった運任せの所では決まって問題を起こす。

どうしたものかと真剣に悩んでいると

「キャー……！！！」

「この声は……ミラ！？」

タマクソ、遅かったか！」

中央の排水管の奥から突如木霊した悲鳴。

レオニダはそこ等辺に吐き捨てると、地面に前足を着けて全速力で駆け出す！

下り坂を駆け抜け、砕けた地面に差し掛かった、その時――

「あーもー、センサー、何で隠すわけ？」

「だからっ！

――」

「間違つて破いたとかそんな嘘バレバレだっつーの」

「――ちよつ、放せ！ 放せよ！」

「あーもー、シャイぶらなくても良いって、センサーって見かけによらず大胆なんだからさー」

「だから違つて！――そこ触るな！」

「初めては誰でも怖いからね、解かるよ、うんうん――あたしが優しくリードしたげる！」

「――っ！

やめろ！ やめろおー！！」

後日談

あ、ありのままあの時起きた事を話すぜ！

『俺が百合を見たと思ったら

ミラが百合で担任も百合で目の前が花畑だった』

な……何を言ってるのかわからねーと思うが

俺も何を見たのか解からなかった……

頭がどうにか成りそうだった……

絶景だとか秘境だとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと素晴らしいものの片鱗を味わったぜ……

13・仄暗い地下水道で（R15）（後書き）

やべえ……手が暴走してうふふでむふふな内容になってしまった
こついうのってR指定受けたりしないだろうか、かなり心配です。

ちなみにカランのロープは修復不可な程破けていて、かなりけし
らん状態だったのですが、それを見ても顔色一つ変えないノスラッ
て流石にサムライですなー

うーん、そろそろノスラのイラストを描いて幻想をブチ殺さねば…
…（え）

14・魔導都市・結界崩壊事件！？

Side：カラン

最悪だ……ミラならまだしもレオニダにまで裸を見られるなんて…

…もうお嫁に行けない……

……って待て待て！

何言っただよ、俺は男だぞ、嫁なんか行っただまるか！

そつだよ、何気にしてんだよ、俺は男だ、裸を見られた程度でパニクッってんじゃねえ！

いや、一応俺も女だし気にしないって訳にも——って何言っただよ！

見た目だけだ、外見上だけが女だ

……危ない危ない、危つく大事な物を見失うところだったぜ

——あの後レオニダの出現によりミラの気がそれた、その一瞬の隙を突いて全力疾走で逃げ出したカラン。

本当は座標移動で二人を安全な城門前に飛ばす心算だったが、ベオルイル全体を覆う魔力無効結界のせいで失敗に終わった。

「Look Up Item 麻のローブ」

—	亜麻のロープ（白）	23	—
—	亜麻のロープ（黒）	24	—
—	亜麻のロープ（赤）	25	—
—	亜麻のロープ（青）	26	—
—	亜麻のロープ（緑）	27	—
—	亜麻のロープ（黄）	28	—
—	亜麻のロープ（ピンク）	29	—

「Add Item 24 【亜麻のロープ（黒）】」

視界の端に浮き上がったログから目当てのアイテムのIDを見つけ出し、再びGMコマンドを発動したカランの手にドサツ、と重みがある漆黒のロープが生成される。

ボロボロに成った亜麻のロープを脱ぎ捨て、新しい物に着替えたカランは幸せが尻尾を巻いて逃げ出すほどの深い溜息を着くと、足元に転がっていた銀色の繭まゆを抱き上げた。

このまま結界を突き破ってもいいけど、そうしたら騒さわぎが起きる。

胸の中で弱々しい息音を上げる銀色の繭まゆを見つめ、カランは思考を巡らせる。

バレストへの嫌がらせには丁度良いけど、余り迷惑はかけたくないんだよね

一応居候なんだからさ

「こういう事はプロに任せた方がいい、か」

誰に言うでもなく呟くと、カランは無限虚空から黒き聖書を取り出し、最後のページにメモった常用コマンドの数々に視線を流す。

「Cast Spell 619 【人間感知^{サチヒューマン}】」

パタン、と黒き聖書を閉じると同時にカランの視界がぼやく。

まるでサーモグラフィのフィルターが掛かったような、深い青を基調とした視界の中に浮き上がる人の形をしたオレンジ色のオーラ達。

この視覚魔法は壁越しに対象を見るので、今カランが見えているほとんどのオーラは地上、つまり頭上の方に浮いていた。

その中で馴染みのある、この魔導都市では珍しい、筋肉マッチョなシルエットを探しながらカランはゆっくりと歩き出した。

「外に持ち出したい物がある？」

……見せてみるがいいかな」

城壁の内側を流れる運河の畔でひっくり返した水筒に腰を掛け、次

々と魚を釣り上げていたマーフィーは水面をじつと睨んだままカランに言葉を返した。

サイズは縮小しても重みはそのままの繭をここまで抱いてきたカランは流石に疲れたのか、よいしょ、と彼の隣にしゃがみ込むと、それを地面に置いた。

「これなんだけど」

「……………」

「……どう？ 持ち出せそうか？」
釣竿を持ったまま空いた方の手で繭に触れ、途端に顔を顰めるマーフィー。

何か問題があるのか、それとも気が乗らないのか——断られるのが怖く、無意識に丁寧な声で問いかけたカランにマーフィーは見向きもせず、餌袋からミミズを取り出して釣り針に付けていく。

その行動を拒絶の意味だと受け取って立ち上がるうとするカランに、マーフィーはしわがれた声で言う。

「引つ掛かる様なもんじゃねえがな、堂々と持ち出せばいいがな」

本当にそうなのか、それともただ単に関わるのが面倒臭いから適当に言ってるのか、それっきり水面を凝視したまま何も話さないマーフィーに思考をめぐらせながら、足元に置いた鎖の繭を観察していると、風に乗って吹いてきた砂粒が表面にあたった。

物理法則を無視して正反対の方向に弾き返された砂粒にカランは思

わず目を見開く。

……！
ラゼ・イルタンテ
そっか、絶望の鎖って物理反射と魔力無効の効果を持ってたんだ。

町の結界も魔法の一種だから無効にしてしまえば問題ない、そう言う意味か

「ありがとな、爺さん！」

「ワシは何もとらんがな」

しゃがみ込んでいた姿勢からぴょんと飛び上がり、感激の言葉と共に走り出すカランにマーフィーは独り言のように呟くと、釣竿を捻って新たな獲物を吊り上げた。

「……おのれだったら全て変わってたがな
ふん、過ぎた事を嘆いても意味無いがな」

魚籠びくの中でぴちぴちと暴れる川魚をしばらく凝視すると、マーフィーはおもむろに立ち上がり、傾きつつある冬の陽に目を細めた。

見上げると首が痛むほど高い、直径2メートル位のブロックが積み上げられて出来た白い城壁。

一面に刻まれた歴代大賢者の顔面像はその口から水をゲロの如く、止め処なく吐き出していた。

運河に隔てられた外界と魔導都市を繋ぐ石造りの跳ね橋の中央でカランは立ち止り、薄っすらとピンク色を帯びた、目の前の結界を凝視していた。

マーフィーが言った事が本当ならこのまま進んでいいんだよね？

それでも、万が一予想外の事態が起きて結界が作動したらどうすればいいのだろうか？

考えを振り切るように頭を振ると、カランは目の前の障壁に向って歩き出した。

ピシッ……

銀の鎖が巻きついて出来た繭まゆが結界に触れた途端響いた不吉な音に、思わず立ち止るカラン。

次の瞬間

パリイイイイン！！

ベオルイル全体を覆う魔力の結界が、まるでガラスのように、音を立てて碎け散った。

「おい、どうした、何が起きた！？」

「解からん、侵入者かもしれん！　おい、そこのお前、何をした！？」

何処からともなく聞える荒げた男達の声、目を凝らしてみると透明^{フル}の魔法で姿を隠した衛兵達がこちらに向って来ていた。

シット、居たのかよ、門番……！

「G o T a r g e t A 3 X : - 7 2 1 Y : 2 2 4 Z : - 2 7」

衛兵達の声から彼らが集結しつつある事を知ったカランは小さく舌を打つと、慌てて座標移動の裏技^{G M M F}を発動した。

「どうした？　誰も居ないぞ？」

「いや、さっきまで確かに居た筈なんだが……
気のせいかな……？」

フツと姿を消したカラン。

ワンテンポ遅れて姿を現した、裾の無い戦闘用ローブを着た衛兵達は何が起きたのか理解できず、顔を見合わせた。

全く違う二つの映画のフィルムを途中から強引に繋ぎ合せて放映した時のような、不自然で関連性の無い目の前の光景を目に映しながらカランは小さく息を付いた。

下半身が地中に埋まったりしてるが、座標の演算は結果的に言うところ成功したらしい。

抱いたままの繭^{まゆ}を傍に置くと、カランは先程の座標のZ軸に“1”を足してもう一度GMコマンドを唱えた。

「G O T a r g e t A 3 X : - 7 2 1 Y : 2 2 4 Z : - 2 6」

またしても何の関連性も無く視界が変わり、フワッした感覚に自分がクリスタルの森の上空にいる事に気付く。

「つて、高っ!?!」

余りにも突然の状況に身体をじたばたするカラン。だがそんな事をしても落下速度が下がる筈も無く、

ドスッ!

グワシャッ!!

自身の骨が粉々に砕ける音が耳に響いた。

続いて脳部を鈍い感触が伝い、頭蓋骨が割れ、頭皮が破け、鮮やか

なピンク色をした脳味噌が宙を舞い、飛び出した目玉が自身の姿を映した。

目の前のグロテスクな肉塊が自分だとは信じられず、目を疑った次の瞬間視界を眩い光が覆い尽くし、カランの意識は闇に沈んだ。

じめじめと冷たい、気持ち悪い感触に眼を覚ますと、自分が固い氷の床に仰向けに成っている事に気づく。

ローブを着ているのにも関わらず、肌に纏わりつき、じめじめと気持ち悪い感触と共に体温を奪っていく湿った空気に眉間を寄せるカラシ。

グロテスクな光景を目の当たりにし、ショックの余り意識が吹っ飛んだ彼女が眼を覚ました時には、水から生えたクリスタルのような半透明の木々の間からオレンジ色の夕日が差し込んでいた。

炎に続くトラウマに成りそうな光景を成るべく思い出さないように辺りを見回す、が、他に人間の気配はしない——当たり前だ、カラシにとっては“じめじめと冷たい”程度で済むが、この季節のゾドムスワンプは気温が零度に近く、生身の人間なら空気中を漂う【浮き水】が身体に纏わりつき、あっという間に体温を奪われて昏迷する。

勿論それは亜人も含み、現地のエルフ達もこの季節だけは他の場所に移り住む。

時折地面から重力に逆らって浮上する雪のような白い発光体——【ウィラムチャラスカ 蛍光樹の種】とクリスタルの枝を通して射し込むオレンジの陽光に照らされた神秘的な森の風景に幾分落ち着いたカランはふと、動かし続けていた足を止めた。

「……着いた」

目の前に広がる巨大な湖の岸边で、ひんやりと冷たいこの季節を物ともせず日光浴をする、背中から結晶の鱗を生やした六本足の爬虫類——ザンダラクロコダイルの群れ。

全体的に冷色系統のクリスタルの森と木々から射し込む暖色系統の陽光が織り成すコントラストは息を呑むほど美しく、空気中を漂う【浮き水】に散乱された光が薄いベールとなつて辺りを包み、幻想的な風景を醸し出す。

「Modify Scale 1」

ベ・ネルディー
「赦免」

一気に数十メートル後ろに跳んだカランの目の前で音を立てながら崩れていく鎖の繭。^{まゆ}

束縛から解放された生命は夢にまで見た自由を謳歌するかの如く天をも轟かす雄叫びを上げた。

夢も希望も微塵もない仄暗い地底をただ漠然と生き続けた生霊は繭^{まゆ}から羽化し、もう誰にも縛られる事のない新なる生を得たのだ。

「……慣れないかもしれないけど、しぶとく生きろよ
じゃあな」

カランは四つの瞳で見つめてくる目の前のクロコダイルに手を振り、

「Go Target A9 X:330 Y:741 Z:12」

雪解け水が滴るような澄んだ声で呟くと、一瞬で姿を消した。

ベオルイルの城門は凄まじい事に成っていた。

外界に繋がる跳ね橋は文字通り跳ね上がっており、そびえ立つ城壁の前では無数の丸い球体が宙に浮いていた。

目を凝らしてみると城壁の上には三日月を模した縦長の盾やら矢の変わりに風魔手裏剣のような刃物を打ち出す巨大なボウガンバトルメイジを構えた魔導衛兵がズラリと並んでいた。

ラゼ・イルダンテ幻想殺しによって結界をぶち壊された事を敵襲だと勘違いしたようだ。

魔導都市が誇る最高の防御結界を、跡形も無く砕かれただけに、魔バトルメイジ導衛兵達は皆最終決戦並みに張り詰めた表情をして城壁の外に広がる広大な森を監視していた。

「どうしてこうなった……」

見つからないように木の蔭に身を隠したカランは両手で顔を押さえ、深い溜息を付くと、ゆっくりと立ち上がった。

「Cast Spell 27 【透明化】」インビシブル

城壁を守護するのはベオルイルが誇る最精鋭部隊。

透明化した事により彼らの視界から消えたカランは10メートルほど下がると

全力で突っ走った！

50メートルもある運河を軽々と飛び越え、そのまま垂直に壁を駆け上がるカラン。

足元に無限虚空を局地召喚して重力を歪めた事により大地の束縛から解放されたカランは80メートルもある城壁の頂上まで駆け上がると、更に数十メートル上空に飛び上がり、前方に一瞬だけ無限虚空ブラックホールを出現させてその吸引力で自分のベクトルを変えると、目の前に広がる白と青の大地にダイブした。

Side：バレスト

「た、大変ですバレスト様！

何者かが防衛線を突破しました！」

ノックも無しに開け放たれた扉から雪崩れ込んだ、裾の無い戦闘用ローブに身を包んだ魔導衛兵バトルメイジの小隊。

慌てて姿勢を正す彼らに目を向ける事無く、本日78杯目のコーヒ
ーを喉に流しこんだバレストは手元の書類に視線を向ける。

「……バ、バレスト様？」

「防衛線？」

何の事だかさっぱり解からんな」

「じ、実は数刻前、街の防御結界が何者かに破壊されたようでした、
それで——」

「ほう？」

数刻前の出来事を今になって私に伝えるか？

七賢者の許可も無しに防衛線を張った訳ではあるまいな？」

「——！」

い、いえ、自分達は大魔術師ルドガー様の命を受けてバレスト様に
救援を求めに参りました。

他の七賢者達はすでに会合しておられます！」

「私は忙しいのだ。

そんな下らぬ事に割る時間は微塵も無い」

「し、しかし……！！」

「侵入者は一人だったな？

精々七賢者が暗殺される程度だ。

好きなように殺らせておけ、代わりなど幾らでもいる。

何、大した事には成るまい、戦争が起こるだけだ」

「は、はい……？」

「報告はそれだけか？」

下がって宜しい。

……それとも、私の実験材料に成りたいと？」

「……し、失礼しましたー！！」

眼鏡越しに鋭い眼光を放つバレスト。

室内を圧迫する圧倒的な威圧に耐え切れず、魔導都市が誇る最高の
バトルメイジ戦闘部隊達は一礼すると、慌てて部屋から飛び出した。

再び静寂に支配された空間の中でベルトに固定した魔導書を手に取ったバレストは片手でページを捲ると、血濡れの竜皮紙に記された呪文を読み上げた

「Porta Della Reincarnazione EDI
o Gettando Via Il Pigro Sento, Lavo
o Serio Di Morte Dare Un Senso Di Port
are L'anima, Il Bambino Primat
ore Nel Mondo Sotterraneo Notto A Tut
ti Senza Benedizione、グロントデーマ【召喚：鮮血の担い手】」

バレストの口から紡がれる呪いの言葉と共に魔導書のページがひとりでパラパラと捲られ、赤い幾何学の模様が空中に浮き上がる。

高速で回転し始めた魔法陣から凄まじい量の魔力が迸り、室内の書類を巻き上げて渦を作り出す——次の瞬間

ピシャアアアアン！！

まるで雷が落ちたような轟音が響き、魔法で強化された地面を抉って形成されたクレーターの中心に二つの影が佇んでいた。

フードを目深に被ってるためにその素顔を窺う事は出来ず、身体を覆い隠す黒いローブから覗く干からびた手は鮮血に濡れていた。

「「お呼びでしょうか、マスター？」」

片手を胸の前に置き、腰を曲げた姿勢のまま喉を酸で解かされたような擦れた声で主人に問いかける双子の死神。バレスト
グロンドデイマ

「リアを護衛しろ、危害を加える者がいれば誰であろうとその場で殺せ。」

……ついでにカランも見張っておけ、悪意を持って近づく者がいれば同様に殺せ」

「「御意」」

グロンドデイマ
鮮血の担い手達は頷くと、足元から黒い霧と成って空气中に霧散した。

それを視界の端で確認したバレストは無言で席を立つと

「VenggoEvado」

赤い霧となって霧散した。

S i d e : カ ラ ン

重力に従って加速し続ける身体が地面に叩きつけられ、赤いシミと成った次の瞬間、白い光と共に身体が再構築される——なんてグロテスクな事態を二度も起こすわけがない。

地面に着く直前に一度無限虚空に渡り、速度をゼロに戻してからエウルースに戻る、通称ネサティック・キャンセルというテクニクで着陸したカランは空气中を漂う煙硝の匂いに思わず眉間を寄せる。慣れるという方が無理がある、身体に纏わり付くぬめぬめとした感触を振り切るように走り出したカランは、黒ずんだ城壁のすぐ傍に建てられた一階建て——ドワーフ曰く2階建ての建物の前に着くと、おもむろに扉をノックした。

「うだーっ！

誰だってんだ！

この歴史的瞬間に水をさす空気が読めん馬鹿もんは！」

重い音を立てて開かれた扉の向こうに立っていた毛むくじやらの小人は鉄槌を振り上げながらぷんぷんと怒鳴り散らす——と思ったら、カランの姿を認めるや否や怒りの気配が一瞬で消えた。

「おおっ！ おめえか！

ちようどいい所に来たな！

例の武器が完成したってんでそろそろ赤目に呼ばせようと思ったところだ！」

マグレインはそう言うのと、相手に声を発する閑も与えず、手を掴んで工房の奥に引きずり込んだ。

まだ余熱が消えない、水蒸気がたち込める工房の中、鋼鉄製のテーブルの上に載せられた1メートル強の鋼鉄メタルの刀にカランの視線が自然と吸い寄せられる。

一般の刃物よりも太く、溝が穿たれた刀身の先には小さな穴が複数開いており、柄の部分は捻る事ができるスロットル状のグリップと、ブレーキバーの様な金属の部分から成り立っており、ゴムの変わりに黒く染めた鮫肌でコーティングされたその部分だけを見ればバイクのハンドルそのものである。

手に持ってみると予想通りズッシリと重量があり、グリップを捻ってみると刀身と柄の繋ぎ目の部分に嵌め込まれた黒い魔晶石が微かに光を帯びた。

「凄い、凄いよオッサン！」

「がっはは！ あつたりめえだつてんだ！」

何だつて秘蔵のアダマタイトをありつたけぶち込んだ最高傑作だからな！

革命の第一発にやふさわしいだろ！」

アクセルを捻ったり、ブレーキの形をしたトリガーを押したりして剣の調子を試しているカラんにマグレインは腰に手を当て、誇らしげに言う。

この剣の原理はグリップを捻る事によって刀身に嵌めこんだ魔晶石に使い手の魔力を溜め、ブレーキバーならぬアクセルバーを握る事

で刀の先端に空いたジェット孔から魔導エンジンで変換した高圧ガスを噴き出し、その反動で相手を斬り付けるというものだ。

要するにデビルも泣かせるスタイリッシュなお兄ちゃんが暴れまわるアクションゲームの第四弾で登場した機械剣のアイデアをそのままパクったものだが、やった本人は全く反省していない。

「ところでおめえよ、この刀に付ける名前、ちゃんと考えてんだろうな？」

「レッドクイ——いや、考えてない」

「ああん!？」

名前も考えてねえとはおめえ、それでも革命の先導者が——っ!？」

「いや、色々あつてさ、考える時間なかったんだ。

マグレーンさんなら何って付けるんだ？」

「お、俺か？」

「……うゝむ」

カランに言われ、うゝむ、と真剣に考え込むマグレーン。

鍛冶師にとって自分の作品は息子も当然であり、思いを込めて鍛え上げた物なら尚更だ。

もじやもじやの髭の中に手をつ込み——顎に手を当てて思考するマグレーンの姿に職人の心という、懐かしき日本の文化を思い出したカランは思わず頬を緩める

「おおっ！ それだあつ！

こいつの名前が決まったぞ！

いいか、おめえよ、耳糞かっばじってよく聞け！
この刀の名はズバリ

ブラッククイーンでやーっ！！」

「ぶーっ！！」

一呼吸おいて大音声で宣言されたその名前にカランは思わず噴き出した

「ちょっと待った異議あり！

何でよりによってブラッククイーンなんだよ！？

ガ。ブレードとかの方がまだマシだ！」

「ちつつち、嬢ちゃん解かってねえな！

よく見る、この黒光するしなやかな刀身、ブラッククイーン漆黒の皇女と名乗らず何

という！？

おめえそれでも革命軍か！？」

「なんだよ革命軍って！？

というかそんな名前——」

言いかけたカランの言葉が途中で途切れる。

何故なら彼女の視界の端に現れたログにはこう書かれていたからだ

——アップデート情報：【ブラッククイーン】 ID：14727

0508 が追加されました——

「……もういい、わかった、わかったよ、わかりましたよ！
ブラッククイーンで良いんだろ？」

両手で頭を抱きこみ、地に蹲って悶絶するカランにドワーフの鍛冶師は何が起きたのか訳が解からなかったとありのまま述べた。

14・魔導都市・結界崩壊事件！？（後書き）

登場人物でも書いてるように人間捨ててるカランですが、今まで流
れるに人外行事をしていないので、この際一気にやらせて見ました。

というか前話に続いてグロシーン描写続出ですね（汗）

スタイリッシュ喧嘩をさせたくて書いてる人自身が好きなデビルメ
イクライからあの武器を登場させましたが、果たして俺の乏しい文
章力でどこまで表現出来るのか……

その答えは近日公開予定のカランVSノスラで明らかになると思い
ます

15・GMを舐めんな

Side：カラン

今夜のベオルイルはいつもと違ってピリピリとした空気が漂っていた。

いつもなら一日の仕事を終えた魔導師達で賑わうメインストリートに店舗の影は無く、変わりに重装備を施した魔導衛兵達バトルメイジが徘徊している。

町を照らす神秘的なオーロラも今日は見当たらず、空中に鋼鉄のリングに囲まれた、白い発光体が無数に浮いているだけだった。

防御結界の再動まで1日の時間を要する。

その間ベオルイルは完全に無防備となる——といっても元々城塞都市だ、衛兵に見張られた、天に届くような高い城壁を乗り越えるのは至難の技で、精々騎竜兵が不意を突いて突入できる位だろう。

もつとも

ヴィイイイイイイン！！

ボファッ！！

「【アレーティアの乙女】が何か捕らえたぞ！ 侵入者か！？」

「いや、ただの鳥のようだ！」

炎を纏いながら落下する鳥の形をした何か。

もうすでに息絶えたそれに対し、空中に浮くおびただしい量の球体は容赦なくビームを浴びせ続けた。

燃える塊に破滅の光線を浴びせるおびただしい数の球体は、標的が跡形も無く消え去って初めてその攻撃を止める。

滞空型魔導兵器【アレーティアの乙女】による殲滅攻撃——それが、迂闊にベオルイルへの侵入を企んだ者の末路である。

何かが頭に触れた気がして、夜空を見上げたカランは星空のように瞬く【アレーティアの乙女】の群れに思考をめぐらせる。

こんな警備で入って来れるのか、あいつ？

……入れないからって見逃してくれるような奴じゃないのは確かだな

『やはり逃げ遂せたか、そなたには失望したぞ』……何て言われて豚箱送りにされないように、行くだけ行ってみるか。

インビシブル
透明化の魔法を発動したまま夜町を歩き出すカラン。

足元で青い光を放つ石畳の街道を通り過ぎ、運河の兩岸を繋ぐ石橋を渡り、天に続くような壮観な階段を登り切って、丘の周りで土星

の環のように浮いた空中庭園に辿り着く。

月の光をも通さない小さな密林の中を歩いてると、突然森が割れ、月明かりに照らされた広場の中央で小さな教会がひっそりと佇んでいた。

どれだけ長い間人が訪れていないのだろうか、ゴシック調の教会を飾る石像には蜘蛛の巣が張り巡らされており、手を掛けた取っ手には薄っすらと埃が積もっていた。

と言う事はやはり、ノスラは来てないのか——カランは思わず小さな胸を撫で下ろすと、おもむろに扉を開けた。

ギギイイイイイ

錆びついた金具が発する不吉な音と共に開け放たれた木製の扉。

ステンドグラスから射し込む月光に照らされた教会の中は、予想以上に明るく、朽ちた長椅子や天使のレリーフが冷たい月光に照らされ長い影を落とす。

身の毛のよだつような不気味な光景にカランは無意識の内に背中に背負った漆黒の皇女に手をかける。
ブラッククイーン

「来たか」

何時からそこに居たのか、朽ちかけた石像に背をもたれ、腕を組んでいたノスラは目を閉じたままそう告げた。

「——居たのかよ！」

じやなくって、……待たせたか？」

「案ずるな、某が早まっただけの事。

そなたの用事とは、かの生霊を居すべき場所へ送還する事か

……その行為が数え切れぬ死に繋がると知っての事か？」

驚きの余り尻餅を着いてしまいそうなカランにノスラは表情も変えずに淡々とした口調で問いかける。

「知るかよ、そんなドミノ思考

俺は気が遠くなるような未来云々よりも、目の前の事しか考えられない浅はかな人間なんでね」

「呆れたものだ、所詮は時を乱す罪人に過ぎぬか」

溜息と共に貶みの言葉を吐き出すと、ノスラは腰にさした刀に片手を添え、凭れていた石像から身を起こす。

「意味ピラフな屁理屈で人を殺しまくってるアンタには言われたくないね

未来の為、とか言って殺した奴からだって無数の命が生まれるんじゃないのか？

それを殺したって事はアンタらも同じ【トキヲミダスザイニン】だろ？」

「……何とても言うがいい

そなたが正しいと証明したくば――

某の屍を踏み越えて行けっ！」

ヴォヒュン！！

居合いの構えを取ったノスラの姿が一瞬で消えると同時にカランの身体が横に飛んだ。

空気をも切り裂いた剣の余波を肌で感じる間もなく、前屈みになった頭上を冷たい刃が横切る。

先程の地下水道とは違い、十分な回避スペースを確保できる教会の中で飛び上がって回避する必要はなく、次々と死角に現れては放たれる、ノスラの斬撃をカランは全て紙一重で回避していった。

S i d e : バ レ ス ト

綿羽のように白く軽やかな髪を左右の長さが違う奇妙なツインテールに束ねた小さな少女が石橋の上で立ち尽くしている。

と思っただけにもむろに進みだし、彼女の胸に抱かれた銀色の球体が結界に触れた瞬間、

サアアアアア

一箇所に集まって光景を再現していた砂の粒子が風に乗って飛散した。

「それが視界結界が記憶した最後の映像じゃ、ワシが見るに……問

題はその銀色の球体に有るようじゃな」

町の上空に浮かぶ、ピラミッドを逆さにしたような構造物の上で、手すり越しに町を見下ろしていたドワーフの老人が落ち着いた声で説明する。

地平線まで続く暗闇に飛散した砂粒が完全に吸い込まれるのを見送ると、黒い鬣の獅子——バレストは、長い髭を三本の三つ編みにしたドワーフの老人・大鍛冶師ルアルフを視界の端で捉える。

「それを持ち出したこの少女は不問か」

「言った所でおぬしに否定されるだけじゃろう？」

……何もんだい、この少女は——ただのハーフェルフという誤魔化しはもう効かんぞ」

「誤魔化す心算はない、揉み消すだけだ」

ルアルフの質問に耳も貸さず、バレストは背後に控えている衛兵隊長に振り向く。

瞬き一つで首を切り落とされそうな圧倒的なプレッシャーに足元がぐら付く隊長にバレストは鋭い視線を向けたままおもむろに口を開く。

「宴会の用意をしろ、客人にはローデス、アラシャト、ストールヴイガの国王でも呼んでおけ。」

いいか、このベオルイルを目の釘にしている勢力は多い……決して弱みを見せるな」

「はっ！」

「……イストネアガードに招待状を送らんとは、相変わらず同族思いじゃのう」

踵を返して去っていく衛兵隊長を見送りながらルアルフは独り言のように呟く

「必要となれば奴らにも盛る。

勝手な想像は控えて頂こうか、ルアルフ卿」

意味ありげにククツ、と笑うルアルフに背を向けると、バレストは指に嵌めた陽炎石フォーケオの指輪、【エディゲツフェ・滅びをもたらす暴虐の炎】に魔力を溜め込む。

「VengoeVado」

バレストの体が血霧と成って霧散すると、空中に浮かぶ小さな庭園には誰も居なくなった。

Side:カラン

闇の中から何の前触れも無く放たれる致命的な一閃。

しかしそれは獲物を捕らえる事無く、凄まじい衝撃波を残して虚しく空を振る。

「……やるな、しかし！」

酔拳とは違うが、不規則な動きで攻撃をかわし続けるカランから3、4歩跳びずさったノスラは刀を中段に構え、身を翻すと、その残影が実体を持った分身となり、前後左右上下から一斉にカランに切りかかった！

「くっ！」

とつさにブラッククイーンを抜き出したカランはそのままアクセルバーを握り、ジェット噴射によって勢いが付いた刀身をノスラのうち一人に叩き付ける！

が、

「どこを見ている」

アダマントタイトの塊がノスラを掠める、その瞬間、全てのノスラが一瞬で消え、ジェット噴射の勢いに引っ張られて宙に浮いたカランの背後から凜とした声が響く。

ザシュツ　ガツ　パキイイイイン！！

亜麻の生地が切り裂かれる音に続いて響く、金属が砕け散る甲高い音。

何が起こったのか解からず砕け散った刀の破片を目で追うノスラ。

すかさずアクセルバーを握り締めたカランが空中で放った回転切りが見事彼の腹部に決まり、ベキッ、という鈍い音と共にその身体を

数メートルぶっ飛ばした！

「クッ……何故だ？

何故某の攻撃が通じぬ？」

ドスツと音を立てて地面にバウンドすると思っただら次の瞬間には教壇の前に立っていたノスラは腹を押さえながらもった声でカラに訊ねる。

事前に刀身を潰しておいたため、腹を裂く事こそ無かったものの、90レベル相当の威力で叩き込まれた打撃は結構効いてるようだ。

肩を上下させて息を整えるノスラに向き直ったカランはローブの袖を捲り上げ、

「こう言う事だ」

腕に幾重に巻きつかれた、月明かりに照らされ白銀の光を放つ鎖――
ラゼ・イルタンデ
――絶望の鎖を見せ付けた。

「時間を止めて瞬間移動のように見せかけてる所悪いけどさ、時を止めたまま攻撃して来ないのは身体が耐えられないからだろ？」

「……………」

手首だけでなく、体中に巻きつけた鎖をジャラジャラと鳴らしながら問いかけて来るカラんにノスラは無言で応える。

その通りだ。

時間が止まった状態で物質同士が衝突すればその反動に耐え切れず、

両方共粉々に碎け散る。

イエロードラゴン琥珀竜族が最強に成れず、エーシェントドラゴン五大竜族の一柱にとどまっているのもこのためだ。

「武器は壊れたし、アンタ自身も怪我してる
これで俺の勝ちだな」

「……なぜ本気を出さぬ？」

強者の余裕か？ それがし弱者への哀れみか？

……まだ勝負は付いておらぬ、某はまだ生きている！

I l D i o D e l l a C r o n i c a D a r m i l a S t r e n z
a P e r C o n q u i s t a r e L e P e r s o n e C h i S t a
C o n t r a t t o C o n M e、ディベルドラゴ【半竜化】」

カッと目を見開いたノスラの口から呟かれる、複数の音節が入り乱れた呪文。

ノスラを中心に集まっていく金色の霧から溢れ出た眩い光が暗い教会を照らす、神々しくもどこか虚しいその光景は、沈み行く夕日に照らされた黄昏の雲海を連想させる。

やがて詠唱が終わり、霧散した金色の霧の中央には琥珀色の鱗を生やした半竜人ドラゴンユニットが佇んでいた。

細長い体型は変わらないが、所々から突き出した鋭い骨格によって着物は破れ、二本の角が生えた、仮面を付けたような顔はその形相も相まって鬼のように見える。

人間と竜の中間にあたる形態、ドラゴンユニット半竜人。

全身から発せられるただよらぬ気配にカランが思わず身構えた瞬間、

ゴキッ

まるで座標移動した時の様に、何の前触れもなく目の前の風景が変わった。

視界の上半分を覆う黒い闇とズキズキ痛む身体から自分が壁の中に叩き込まれた事を理解したカランは、胸の部分だけくり貫かれた口―ブに白い光の粒子が集まっていき、白く小さな胸を再構築するのを視界の端で確認すると、視線を目の前の金鬼に向けた。

「力なさを恨むがいい」

何時の間にか奪い取ったのか、防具として体に巻きつけた鎖をそこから辺に投げ捨てたノスラの手に金色の霧が集まり、新しい刀を形成する。

半竜化して時間を止めたまま攻撃してきたのか？

何なんだよこいつ……ノスフェラドムスと同じ能力を持つてんのか？

だったら何で……

「如何なる理想を抱いた所で、それを現実に変える力が無ければ誰も救えぬ。

……某も踏み越えてゆけぬそなたに救える未来はない」

「だったら何でアンタが救わない？」

ガラガラと壁を崩しながら立ち上がったカランに、刀を掲げた姿勢のままノスラの動きが止まる。

「変だと思ったよ、琥珀^{イエロー}竜の癖に正々堂々勝負してきて、【勝てば見逃す】宣言するなんてな。」

……おかしいって思ってたんだろ、ノスフェラドムスの言ってる【来るべき未来】って奴が——もっといい未来が有るって信じてるんだろ？

なに变えない、変えようとしなない、自分から言ってる【理想を現実に変える力】を自分で持ってるってのに」

「……何を抜かすと思えば、時の守護者たる某がそんな事を考えるとても思つか？」

「思うな、だからこうして俺の話を大人しく聞いてるんだろ？」

「これは……！」

……武士の情けだ、最後に言い残す事はそれだけか？」

明らかに動揺しているノスラに ニイ、と口元を緩めると、何の前触れも無くカランの身体を白い霧が包み、同時に擦れた女の声が耳元で囁きだす。

「最後の言葉？」

何でそうなるんだよ、勝負は付いてないんだろ？」

何時の間にか鎖と強化用プレートを繋ぎ合せたような黒いローブを身に纏ったカランは首を傾げると、柄の部分に金属の握り手が付いた黒い怪剣を肩に担いだ。

「GMを舐めんな」

ノスフェラード

【空白領域】

可愛く——いや、キザっぽい笑みを浮かべると同時にカランの回りに集っていた蒼白の霧が一気に拡散し、その場の全てを飲み込んでいった……

S i d e : リア

「どうしました？」

先程から元気が無いですね」

「え？ あ、ごめんなさい、クロニカ先生。

せつかく来て頂いたのに対したおもてなしも出来ずに」

クロニカに言われ、慌ててティーポットに手を伸ばすリア。

そんな彼女にクロニカは『ふふっ』とその袖に忍ばせたカンペに書かれた文字を読み上げたような声を出すと、自らティーポットを手に取り、

「そんな、悪いですよ！ 私に淹れさせて下さい！」

とアタフタするリアに顔の表皮だけ動かして微笑むと、洗練された手つきでリアの分の紅茶も一緒に淹れ、どうぞ、と彼女に差し出す。

「あ、ありがとうございます」

差し出されたティーカップを両手で受け取り、視線で促すがままに口を付けるリアにクロニカは労うように優しい言葉を掛ける

「大丈夫ですよ、カランさんも、バレスト様もきっと帰ってきます。それまでゆっくり待ちましょう？」

「え、ええ」

それは解かってるわ……カランちゃんはきっと帰って来る。

でも、本当にここはあの子にとっての【帰るべき場所】なのかしら？

……違うわ。私が無理やり引き止めてるだけよ。

あの子にとって私達は自身を縛り付ける枷以外の何でも無いわ。

やっぱり、やっぱりあの子には――

「カランさんも、素直じゃないですよね。

本当は家族が出来て嬉しいのにそれを隠そうとあんな事まで言うてしまうのですから。

誰かさんと一緒ですね？」

自分の心を素読みにした言動にリアは一瞬キョトンとなるが、真っ直ぐ見つめてくる透き通った氷の様な目に思わず頬を緩める。

「ええ、そうね……本当に、誰かさんと似ちゃって、困るんだから」

S i d e : ノ ス ラ

耳元で絶えず囁かれる擦れた女の声にノスラが目を開くと、もう昼間に成ったのか、ステンドグラスから白い寒光が射し込んでいた。

正面には先程と同様、奇妙な剣を肩に担ぎ、鎖と鉄片を繋ぎ合せた頑丈そうなローブを着た小柄の少女が片手を腰に当てて立っていた。

何時の間にこんなに時間が経ったのだ？

それよりもあの無限竜、今まで某を待っていたと言っ事か？

某が気を失っている間に寝首を搔けば良かったものを……この無限竜は余りにも純粹すぎる——それこそ、眩しいほどに

だが

「甘さだけでは何も救えん」

ガット・ギラツィア
【時間遮断】

刀を鞘に納め、柄に手を添えたまま突進するノスラ。

彫刻のように固まったまま、瞬き一つしない目の前の少女が間合いに入るや否や、鞘に収められていた刃を抜き取り、居合いの一撃を放つ！

時間は止まったまま、目の前の少女に避ける術は無い。

このまま、何が起きたのかも解からずに首が身体を離れる事だろう。

鋭い光を放つ刀身が少女の首を掠める、その瞬間――

「いきなり首討ちとか非道いな」

質量を持った白い疾風が通り抜けたかと思うと、刀を握っていた手に鈍い感覚が走る！

硬質の鱗越しに効く十分な威力を持った一撃に思わず刀を手放しそうになるのを歯を食いしばって堪え、背後に回り込むべく姿勢を低めたノスラの背中から　ゴッ、と鈍い音が装甲の様な鱗を伝って耳に響く！

後からるだと……！？

何時の間に？

前屈みに倒れこむ寸前刀の鞘を地面に突きたて体制を直したノスラは背後で怪剣の柄の部分を捻る少女にそのまま抜き打ちの一閃を放つ、が

ドスッ

音速を超えて振り出された一閃は空を振り、又しても背中から鈍い音が響く。

「ふっ！」

急所を突いたその一撃に背中の鱗が砕け、ノスラの口から赤い血塊が吐き出される！

どう言う事だ？

狙いは定めた筈だ、なのにこれでは――

「まるで時を止められたようだ……だろ？」

何時の間にか目の前に立っていた妖精と見紛うほど愛らしい少女は怪剣を肩に担ぎ、一端の剣士であれば立派に見えたであろう構えでこちらを見下ろしていた。

「……何をした」

「ふっふっふ、よくぞ聞いてくれた！

この目はな、全ての術を看破し、真似る事が出来る【万華鏡写輪眼】
っていう特別な目なんだ。

アンタが使ってた【時間遮断】ガット・ギラッピアもこの目で写しさせて貰った」

そういつて自分の目を指差してみせるカラン。

蒼空をそのまま切り取ったような青く澄んだ瞳にそんな秘密があったのか、と目を見開くノスラにカランは感情を宿さない冷たい顔を近づける。

「何てな！」

仮面を付けた様な少女の表情がいきなり綻んだ。

「……まあ原理は似たような物だけど、この空間、というか魔法で繋げて来た異世界の一部なんだけど、この中に居るアンタが取った行動は全部ログに表示——とにかく、解かるんだ。」

「……なるほど、だが——ッ!？」

起き上がるうと足に力を込めたノスラだが、下半身の感覚が無くなっている事に気付く。

「悪いけど背骨折ったよ……こうでもしないと負けだって認めてくれそうに無いからな」

『アンタなら背骨ぐらい自力で直せるだろ』と付け足したカランにノスラは眉間を寄せる。

「何故とどめを刺さぬ？」

「琥珀竜^{イェロ}經典では命を殺せば無数の命を殺した事に成るだろ？
アンタも生きてるんだから、自分の命ぐらい大切にしろよな」

そういつてカランが目を瞑ると、辺りから羽毛を撒き散らす白い霧

が彼女の身体に集まり、明るかった教会の中が再び闇に染まる。

「たわけ！

某を殺めぬ限り勝負は付かん！」

漆黒の怪剣を背中に背負い直し、踵を返して歩き出すカランにノスラは声を張り上げた。

「解かつた、ならば死ネ」

声を返したのは目の前の少女ではない——背中から響くトーンが低い、擦れた声。

次の瞬間

ザシュッ！！

驚きの表情を浮かべて振り向く少女の姿を最後に、ノスラの意識は闇に堕ちた。

15・GMを舐めんな（後書き）

何とかスタイリッシュ戦闘を書こうと頑張りましたが、konozamaです。

というか戦闘中にレポートばっかしてスタイリッシュも糞もないな、自分で言うのもなんですが。

強敵^{とも}として設定した筈のノスラでさえこんな感じでは、カランと渡り合える奴なんて居ないのでは……

仕方ない、今度はカランに戦闘力5の人を護らせなが戦って貰おう（おい）

16・俺たちの愛は腐敗ドリ안의如く

Side：カラン

「解かつタ、ならば死ネ」

風化して朽ちかけた石壁の間を吹きぬける隙間風の様な、擦れた声。

寂寞とした教会の中に反響する、血飛沫が飛び散る生々しい音。

弾かれるように振り向いたカランの目の前には、黒いローブを纏い、ミイラのような干からびた両手で血濡れの大鎌を構える、文字通りの死神が佇んでいた。

「……なんだよ、お前……」

「……何でノスラを殺した!？」

「……………」

まるで金縛りに遭ったように体が動かないカランは、脳内でカンカンと鳴り響く警報を振り切って、声を絞り出す。

だが彼女の声が届かないのか、死神はこちらに背を向けたまま、足元から黒い霧となって霧散し、身の毛がよだつようなおぞましい風と成ってカランの体を掠めていった。

体中から血の気が引いていくような感覚が過ぎたあと、やっと金縛りから解放されたカランは爆ぜるようにノスラの元に駆けつけた。

「ノスラ！
生きてるんだろ、ノスラ！
返事しろよ

——「っ！」

地に付けた膝から伝わる、ぬめぬめと冷たい感触にカランは声に成らない悲鳴を上げる。

血だ。

月明かりに照らされて、辺り一帯を紫に染める血の海。

右肩から左腰にかけて両断されたノスラの身体からおびただしい量の血が流れ出ていた。

「くそつ、何で、何でこいつを殺さないといけないんだよ！？」
イエロードラゴン
確かに琥珀竜らしく頑固な人だった。

「けど、それでも、エーシェントドラゴン五大竜族と魔王に弄ばされ、いたずらに殺される運命にある生き物の死に悲んで、悩める、そんな優しい竜人だ。」

そんな彼が何故死ななければならぬ？

「答えるよ死神！

何でこいつが死なないといけないんだよ！？」

「こいつには成し遂げたい事が山ほどあったのに！」

両手を地に着け、力の限り叫ぶカラン。

切り裂かれた胴体から止め処なく溢れ出す鮮血が白く小さな手を赤く染める。

「それが定めだからだ」

頭上から響く、落ち着き払った青年の声。

弾かれるように顔をあげたカランの目の前には、闇の中で腕組したまま静かに佇むの一人の侍が立っていた。

流れるような枯葉色の髪、暗闇の中で微かに光を放つエメラルドの瞳、すらりとした鼻筋にきりりとした口元——間違いない、ノスラその人だ。

「何が、定めだよ……というか何気取ってんだ？
時代劇に出て来る侍じゃあるまいし」

真顔で告げられたどこかクサイ台詞に、何よりノスラが生きているという事実にかランは思わず口元が緩みそうになるのを堪え、素っ気無い返事を返す。

「某の死は某の力不足ゆえ」

背後から響く、ノスラの声——だが、声を発すべきノスラは確かに目の前に居る。

最悪の予想が脳裏を過ぎる。

その予想を全力で否定するように振り向いたカランの視界には、地面に横たわったままの半竜人^{フラットフット}の亡骸と、その向こうに佇む数人のノスラが映っていた。

「そなたに非は無い」

「某の時はここで途切れる——そなたは先に進め」

だがその予想は残酷にも現実となった。

暗闇の中、金色の霧——時間流——の中から現れた無数のノスラ達が、次々と肩から血を噴き出し、風に屠られた砂の城のように、脆く崩れ去っていく。

「……何だよ、これ」

まるで同じ映像を繋ぎ合せたフィルムを延々と投影されているような目の前の光景にカランは絶句した。

「今この場に居合わせるのは全て未来の某だ」

「今という時が途切れた以上、全ての未来はここで終焉を迎える」

「案ずるな、某以外にそなたの正体を知る者はいない」

「そなたはおのれが信念を貫き通せ……」

一言だけ残して崩れ去っていくノスラ達にカランは ぎゅっ、と血がべつとりと付いた拳を握り締める。

「……ざけんな」

未来がどうのこうのって、命がどうのこうのって

「一丁前に格好だけ付けて消えてんじゃねえよ！

自分の理想を人に押し付けて自己完結して消えてんじゃねえよ！

変えたい未来があつたら、救いたい命があつたら、自分でやれよ！

侍の癖に逃げてんじゃねえよ！！

C a s t S p e l l 1 3 8 【救済のルーツィア】ウィジャ・ペ」

ホウワアアア

天井を突き破って射し込む、13枚の羽を持つ長髪の天使のレプリカが刻まれた光の柱。

質量を持った光柱の先端がノスラに触れた瞬間――

夜空を貫く光の奔流が周囲の森ごと教会を呑み込んだ。

S i d e : ハウエルグイ

「ああん!?

衛兵を引き上げて跳ね橋を降ろせだと!?

……てめえ、このファッキン寒い中で脳味噌がシャーベットに成ったんじゃないだろうな?」

「い、いえ……! じ、自分は大隠居者バレスト様の伝令をそのまま伝えただけであります!」

血のように赤い髪をオールバックにした眼帯の大男、大魔術師ルドガーは胸倉を掴んだ衛兵から搾り出した返事に顔を顰めると、荒々しい動作でそれを投げ飛ばした。

空中で【浮遊】フロートの魔法を発動し、何とか穏やかに着地した衛兵を眺

めながら、波打つブロンドの髪を背中であなめた美青年、大宣教師ハウエルグイは司令部まで持参したウィングラスを傾ける。

「なるほどね、あえて警備を解き、各国の首脳を招き入れる事で今回の結界消失事件が僕達魔導都市側が意図的に起こした物だと思わせる——という訳だね。

さすがバレスト、空城の計を使うなんてね」

「ハンツ、そんなしみたれたコマンドしか取れねえのか、あの引き籠もりは。

まあいい、開けてやれ、この程度のアクシデントで傾くほどベオルイルは弱くねえ」

『聞いてんのかファツキン野郎！？』と怒鳴られ、衛兵達は慌てて伝令に駆け出す。

「ちょうど慣例の宴会も近いしね

まあ、僕だったらあんな回りくどい事せずに宴会の場で国王達を刺殺するけどね」

警護の衛兵以外誰も居なくなった司令部の中でハウエルグイはさり気無く呟く。

「相変わらずデンジャラスな事を考えるもんだ、まあ、俺だったらもっとダイレクトに火山をブラストさせるがな。

……軽いジョークだ、このベオルイルの存在意義を忘れるな。人間のてめえにヘヴィーな荷を負わせる気はないが、俺らと同じポジションにつく以上それくらい弁えておけ」

「そうだね、一介の人間である以上僕も自重しないとね」

指導者同士が交わす正気のさだとは思えない問題発言の数々に衛兵達がどよめく。

神木の枝をミスリルで強化した杖で地面を砕いて場を鎮めたルドガーにハウエルグイはその吟遊詩人の様な美しい声で『ふふ』と微笑むと、優雅な仕草で先程から何度も口に付けた筈なのに一向に減らないワインを口に流し込む。

その舐めたような態度にルドガーは重々しく息を吐き出し、拳に力を込めて怒鳴り飛ばそうとしたその矢先、

ボタン、と司令部の扉が開かれ、息を切らした衛兵が駆け込んで来た。

「た、大変です！ 空中庭園にて測定不能な膨大な量の魔力の放出を確認しました！」

「はい、
はい、
はい？」

「そ、それも、視覚可能で、憶測に過ぎませんが、竜脈の破損かと……」

「何だと！？ 竜脈がイカレタつてのか？
ガッテム！ このファツキン忙しい時に」

報告をしていた衛兵を突き飛ばすと、ルドガーは羽織ったコートの袖を揺らし、風を巻き上げながら部屋から出て行った。

『やれやれ』と肩を竦めたハウエルグイは報告した衛兵を一瞥すると、慌てて頭を下げる衛兵を横目にルドガーの後に続いた。

この衛兵も余計な事を言うね……あのまま黙ってくれば多少は動きやすくなったと言うのに。

まあ、こんな大規模な魔法を行使する存在に誰にも気付かれず接触するのは無理だろうね。

特に……この1人と5匹には、ね。

S i d e : カ ラ ン

心をも融かすような暖かい光が一筋の光の束にまで収束し、消えた頃、一面に広がっていた血は跡形も無く消え去り、かわりに片手で額を押さえたまま身を起こそうとするノスラが横たわっていた。

「何故某を助けた？

……某はそなたの敵なのだぞ？」

「敵だからって見殺しにしていって軍法、どこにも無いだろう？
それより——っ!？」

視線だけしか使えなくともそなたを射殺しないと気がすまない、と言わんばかりに睨みつけてくる不機嫌この上なしのノスラ。

そんな彼にカランは肩を竦めて見せると、傷の治り具合を確認すべく視線を彼の体に向け――慌てて目をそらした。

いやいやいや、ちょっと待て！

確かにこいつスー。ーサイア人の戦闘後並みに服が破けてるけど！

男なんだから別に見ても問題ないだろ？

何で目をそらすんだよ、俺！？

考えとは関係なく、体が勝手に取った行動に悶絶するカランにノスラは更なる打撃を与える。

「傷なら全て癒えている。

……かたじけぬ、治療の為とは言え女子^{おなじ}であるそなたに見苦しい物を見せた」

「な、な、な訳ねーだろ馬鹿！

た、単に真に受けなかったから目をそらしたんだよ！」

そう言つてノスラに向き直るカランだが、体は正直というか、その顔は真っ赤に染まっていた。

虫が苦手な女の子が強がつて虫に触る時の様な、微笑ましい光景にノスラの口元が無意識の内に緩む。

「そういう事にしよう、だが無理はするな」

「してねーよ！」

「つか何ニヤけてんだよ！」

「むう？」

「ニヤけてはいないのだが……」

「……………！」

「時が近いが、無限竜——名は何という？」

急に改まったノスラにカランは一瞬啞然となり、

「カラン・フェミス……いや、クロワールだ」

「クロワール——信頼、か。
いい名前だ。」

「……もうじき奴が来る、某は行かねば成らぬ。」

「この恩義は何時か必ず返す、それまで達者でな」

『それはどう言う意味だ』と問いかけるカランに答える事無く、ノスラの体を金色の霧が包み込み、霧散して消えた。

寂寞とした礼拝堂の中に一人取り残されたカランはノスラが最後に言った言葉を思い出し、眉を顰める。

「奴が来るって、誰が？」

「私だ。」

NumeroMagicoDipersoneperrilTrasferimento
「」

背後から伝わる空気をも震わす雄々しい声。

その声の主に振り向く時間も与えられず、カランの視界は暗転した。

視界が再び光を取り戻した時、カランは見覚えがあって親しみのない広間に立っていた。

「……何でアンタがあそこにいるんだよ、バレスト」

「発問権は私にある。」

警戒令が出ているにも拘らず、何故貴様がそんな所にいる？」

腕組したままカランを睨みつけるバレストと、そんな彼を負けじと見上げるカラン。

別にやましい事でも何でも無いのだが、ここで琥珀竜と接触した事を言ってしまったらバレストから色々と尋問されるのは目に見えている——バレストの場合むしろ拷問して来そうだが。

朝からインヴェルノとの遭遇、ミラとのエンカウントに極道爺さん発のクエスト、そしてノスラとの戦闘が続いてやたらとハードスケジュールの一日を終えたカランが今望む物はふかふかなベッドだけだ。

だから面倒な話を避けようと、カランは素っ気無い声で

「別に、夜の散策だ」

と返し、そのまま自室に繋がる螺旋階段に向って歩き出す。

リアが出張先で買って来たという、貝殻を繋ぎ合せて出来た民族風味漂う垂れ幕をくぐり、【海の香りがするお香】が置かれた台座を通り抜け、手すりの無い螺旋階段に差し掛かった、その時

「夜の散策にしては大きすぎる花火でしたね」

「——え？」

しに、じゃなくって、クロニカ！？

……何で、アンタがここにいるんだよ？」

隔壁の向こう側で椅子に腰をかけ、優雅に紅茶を啜っているクロニカ。

露骨に嫌そうなカランにやれやれと首を振ると、クロニカは空いていた方の手で椅子を引っ張り出し、座るように促す。

そのままスルーしようと足に力を込めた矢先、カランの頭を硬くて大きいバレストの手がガツチリと掴んだ。

「座れ」

「はい……」

「さて、尋問の続きだ。」

琥珀竜との接触を黙っていた理由を簡潔明瞭に説明して貰おうか」

「な、知ってたのか!？」

「貴様の吃驚面を拝みに来たのではない、質問に答える」

有無を言わさぬ圧倒的な威圧を放つ目の前の極道面ハーフエルフから目をそらし、そのすぐ隣でどう見ても作り物にしか見えない笑顔を浮かべる包帯女に助けを求めるカランだが、『続けてください』と目で促してくるクロニカに思わず溜息が漏れる。

ノスラとの接触を知られた以上、どの道質問責めは逃れられない。ならばいっそ全ての罪状を潔く認めてさっさと寢室という名の牢獄にぶち込んでもらおう——精魂尽き果てる寸前のカランは目の前の仁義無き二人組みを見上げ、おもむろに口を開いた。

「その琥珀竜に決闘を申し込んだんだ、勝ったら見逃せて条件でさつき教会に行ったのも決闘するためだ」

「ほう、古代神界魔法を発動したのはその竜を葬るためか？
これだけの騒ぎを起こしたのだ、葬れなかった……などと抜かすまい？」

顎に手を当て、猛禽類の様な鋭い目で覗き込んでくるバレスト。

予想を裏切って壮大なスケールを誇った蘇生魔法がバレスト達にばれないはずが無いとそれなりに覚悟をしていたカランだが、ここでノスラを救うために使った、なんて明かしたら目の前の気違いがどんな暴挙に出るのか——

「ああ……殺せなかったよ。」

蘇生魔法だからな

古代神界魔法を使ったのはあいつを殺すためじゃない——助けるためだ」

「……どうやら貴様の脳は見た目どおりめでたい構造しかしてないようだな。

殺しに来た敵を救うなど……

不死身だから問題ないとも思ってるのか!？」

カツと目を見開いて睨んでくるバレスト。 てつきり嘲笑と攻撃魔法が飛んでくると思ってた身構えていたカランは冷徹な彼らしからぬ感情のこもった怒りに面食らって言葉を失ってしまう。

「で、でも！

敵だから助けちゃいけないって法律は無いだろ？

それにあいつは悪いヤツじゃないし!」

「……そうか、ならば奴が琥珀竜の軍勢を引き連れて貴様に報復に来たとしても私は黙って傍観すればいいのだな？

貴様が奴等を感じ化するのだな？

結構。 貴様は一人で世界を救う気満々の様だ、では私は全ての業務を放り出し、高みの見物といくべきか？」

「ああ、そうだよ！

俺が全部終わらせるから、アンタの出番はないんだよ、自爆テロ何か企んでないでリアと一緒に平穩に引き籠もってるよ!」

片手をテーブルにかけ、顔を突き出すバレストと両手をテーブルに叩きつけ、身を乗り出すカラン。

二人の間に見えない火花が散る。

「……仲睦まじく親子喧嘩してる所申し訳ありませんが、お二人様の言葉を要約すると、バレスト様は【もっと私を頼れ、さあさあ！】
カランさんは【お父さん無茶しないで！】……と仰ってる事になりますね」

「んなわけあるか！」

「部外者が何をほざく！」

激化の一途を辿る二人の会話を完全に傍聴していたクロニカが、それまで保っていた沈黙を破り、紅茶を啜りながら投下した爆弾発言にカランとバレストは一斉に声を張り上げた。

「そうですか？」

私から見ればそうなりますけどね？

カランさんもバレスト様も全ての問題を一人で背負い込むような人ですから」

「何でそうなるんだよ？」

「……それはそうと、カランさんは自分の名前の意味を知っていますか？」

「クロワールの事？ たしか【信頼】って、ノスラが言ってたな」

突然自分の名前に話題を振られ、その真意に思考をめぐらせながら答えるカラン。

「いえ、そちらではなく『ゴホン』……そのクロワールという名前ですが、名付け親が誰かは知りませんが、きっとその人はカランさんが仲間と信じあえる強い子に育って欲しい、そう願って付けたんじゃないでしょうか？」

何か言いかけたクロニカだが、バレストの咳払いに揉み消されよく聞えず、クロニカが言い直した【名付け親】という言葉をきっかけに、カランの記憶の奥底に眠っていた言葉が蘇る

『H A H A H A、やっと気づいたか、明智君。俺様の器のでかさに震えやがれ』

この体の名付け親と言えばあのふざけた軍神だろう。

「でも結局それって付けた奴の勝手な押し売りに過ぎないだろ？」

……付けた奴がそこまで頭回転させてるのかさえも危しいけど

「拗ねってるんですか、カランさん？」

大人気ないですよ……まあ、子供ですけど」

「はあ！？ 何でそうなるんだよ？」

「そこで悩むのは名前を押し付けられて不満に感じてるからでしょう？」

もつといい名前をつけて欲しかった、とか、結局は誰かに甘えていたいと言っ事じゃないですか？」

「……何その強弁」

「強弁じゃないと思いますよ、その証拠にカランさんの耳が先程から垂れてますし。」

エルフもそうですけど、ハーフェルフの感情というのは割と耳に出るものなんですよ」

そんな事、と言おうとして、自分の耳が力なく頂垂れている事に気付く。

普段気にしていないのでどんな時に耳が垂れるのか解からないが、それが寂しいと言う感情を表すのなら、確かにそういう事になる。

しかし、それだとかかしい輩がこの場に少なくとも一人はいる。

「じゃあバレストはどうなんだよ？」

どんな時も耳は突っ立ったままだけど？」

「私の耳は神経を全て切断してある」

誇るわけでも、恥じるわけでもなく、ただ淡々と事実を告げるバレスト。

切断という単語にこの世界の医療技術を連想させられるカランだが、魔法が発達したこの世界で外科という概念は無く、それではどんな方法で切断したのか、と思うと背筋がゾクツとなる。

「私も一時そうしていた時がありました。

でも時間が経てば勝手に治ってしまいきますので、こうしてフードで覆い隠してます。

それにしてもカランさん、よくそんな細かい所に気付きますね、観察眼には自信が有ったんですけど……

親子の愛には敵いませんね」

「はあ！？ 何だよ親子の愛って、俺とバレストの関係を物で例えたらカビが生えた腐敗ドリアンだぞ？

愛情なんて微塵もナツシング！」

「そういう事だ——ドリアンが何かは知らんがな。

あらかたの情報は搾り出した、もう今の貴様に用はない。

……永眠するのなら紅茶を飲み干してから行け、カップに染みが付いては困る」

両手を胸の前で交差させ×を作るカランに フツ、と鼻を鳴らしたバレストは席を立つと、自分に続いて立ち上がるうとするカランの前に置かれたティーカップを指差す。

このまま染みが付いたら一番困るのは洗う人——リアだと考えたカランは言われるままに紅茶を口に運んだ。

「ところで、警戒令を破ってまで夜町をぶらつくこととする放浪癖の養女に普通ならどうお仕置きすると思うかね？」

口元を緩ませ、妖艶な笑みを浮かべて問いかけるバレスト。

意識に関係なく体の温度が急劇に上昇し、耐え切れなくなったカランの鼻から血が噴き出す。

「飲んでる紅茶に毒を盛る……今アンタがしてるように」

「ほう、良く分かってるではないか。

それは公共設備を破壊した罰だ、私の島で勝手な行動は控えて貰おう……是非とも私の実験材料に成りたいと言うのであれば止めはし

ないがな」

体を屈め、血の塊を吐き出しては白い光に包まれるカランに気違い
はいつも通りの高圧的な声で言い放った。

16・俺たちの愛は腐敗ドリアンの如く（後書き）

カランがついにデレ期突入！？

「んなわけあるか！」byカラン

魔導都市編の基本は人脈づくりですが、それ以前にカラン自身が乗り越えないといけない問題が山ほどありますね

逆ハーのメンバーもそんなカランに集うアクティブ派とカランからフラグを立てないといけないパッシブ派に分かれます。

17・女三人寄れば姦しい

Side：カラン

カランの朝は寒い。

開け放たれた窓から遠慮なく侵入してくる冷たい風に眼を覚ますカラ
ン。

顔に張り付いた霜を拭き払い、カチカチに凍った髪の毛を手で解し
ながらベッドから身を起こすと、うーん、と背筋を伸ばすと同時に
小さな口を一杯に開けてあくびをした。

「Cast Spell 662 【エターナルフォースブリザー
ド】」

眠たそうな声で呟かれた呪文と共に周りの空気が凍り、マイナス2
75 の氷の棺の中に閉じ込められるカラン。

しかしそれはほんの一瞬で、ピシッ、と氷の表面にひびが走ると、
次の瞬間氷の棺は粉々に砕け散り、白雪の妖精は何事も無かった
かのように髪の毛を束ね始める。

未だに自分の裸体に慣れないカランは、お風呂に入らず体を清める
方法としてこの体に氷を纏わりつかせて汚れを落とす、名付けて【
低温洗浄法】を思いついた。

竜というのは総じて氷に弱い筈なのだが、それに強いと言う事は―
鱗の変わりにふわふわの羽毛が生えてる時点で何となく気付いて

いたが——この体の【種別】はどうやら【スノードラゴン】らしい。
エターナルドラゴン・エロードラゴン
無限竜や琥珀竜といった【種族】は竜の能力を基準に分類したもので、人間に置き換えれば【血族】に当たる。

そして竜の生態を基準に分類したものを【種別】と呼び、この場合は【種族】に関係無くアースドラゴンやウォータードラゴン、ウィンドドラゴンと言った感じに分別される。

なので炎のイメージが強い紅玉竜の中にも水属性のウォータードラゴンレッドドラゴンの個体があったり、逆に水のイメージが強い蒼穹竜ブルードラゴンが実は炎属性のヒートドラゴンであったりするのだ。

ちなみにスノードラゴンは最北の大陸・ノーゼライズにしか生息しない種別で、ゲーム内では魔王軍によって全部ドラゴンゾンビに変えられており、実質上絶滅している。

ゾンビ化により弱体化した状態でさえ他の竜族を圧倒する【スノードラゴン】、竜族唯一の弱点である氷を物ともせず、むしろ武器とする彼らは最強の種別と呼ぶに相応しい。

これも転生者特権かな、と独り言を言いつつカーテンのレールに掛けた亜麻のローブG M（黒）を手に取り、頭からすっぽりと被ったカランは【空白領域ノスフェライド】を発動してローブの下に着たままのネグリジェを無限虚空に仕舞う。

今日も礼拝日なので学校に行く必要は無く、色々疲れてるから今日一日家でんびりしようと思ひ込んだカランだが、そうも行かなかった。

何故かという、近々ベオルイルで各国の国王を招いた宴会が開かれるとの事で、七賢者の親族と言う理由でリアは勿論、カランも出席する事に成っているのだ。

そんな面倒臭そうな所に行く気は無い、とカランは断ったのだが、リアはすっかりその気に成っていて、今日という休日を利用してカランのドレスを用意すると張り切っていた。

ドレス程度ならGMコマンドで調達できる、とその場で月光布の最高級ドレス【エヴァンジェーラ・群星が魅せし刹那の夢】を生成して見せたが、心がこもってないから駄目、とリアに一蹴にされた。

ルーンストップア

「あーもー、面倒臭いな！」

綿羽の様なもふもふの髪の毛を左右長さが違う奇妙なツインテールに纏めると、カランはバン、とベッドを叩いてから部屋を出た。

S i d e : レオニダ

ぽちゃん ぽちゃん ぽちゃん ぽちゃん

捻りを付けて投げ出した平べったい石は水面の上で4回跳ねてから重なる波紋を残して水底に沈んだ。

それにしても——噴水の中央に佇む雄々しい石像を見上げ、レオニダは嫌な物を見たと言わんばかりにゲツソリとした表情になる。

片手で魔導書を抱え、もう片方の手で天を指差すハゲ頭の老人、ベオルイルの創設者・大魔導師クリオヘドルフをなぞらえた石像。

台詞を当てたら『YO！ みんな、あれを見るHEY！』が妥当なそのポーズもさる事ながら、誇張されたとは思えない逞しい両足の間を――強いて言えば股間を絶えず打ち付ける噴水が卑猥さを醸し出し、威厳と言える威厳が微塵も無い。

「なーんだ、4回か、大した事ないじゃん。
あたしだったら7回は余裕でいけるし」

相当恨まれてるんだな、と今は土の下で永遠の眠りに着いてるであろう御先代様に哀れみの念を沸かせるレオニダの背後から少しダルけた陽気な少女の声が響く。

誰なのか振り向いて確認するまでも無い、休日の男子寮にまで朝早く押しかけて来て強引に自分を引っ張り出した旁若無人なエルフ、歩く人間盗聴器ことミラ・ヴェネストウーラだ。

「ケツ、そうかよ！」

人様の睡眠を妨害しただけでは飽き足らずこんな場所まで連れて来やがって……

何か恨みでもあんのかよ！？」

「んーにや、無いけど？」

ぶつちやけ言つと、今日オープンしたばかりの洋服屋があんだけどさ、その取材をするにあたってタキシードとか着る役がないから、手頃なあんたを引っ張り出したわけ」

要するに着せ替え人形が欲しいからつべこべ言わずに着いて来いや、と悪びれる様子も無くケロッとした声で述べるお下げのエルフ。

思わず額に青筋を浮かべて振り向いたレオニダの視界に入ったのは

手を繋げた二人の少女だった。

「……嘘くせえな、おい。

タキシードはともかくドレスはお前が着ればいいだろうが。
インヴェルノまで巻き込んでんじゃねえよ！」

「何でそうなるわけ？」

「つてか、もしかしてあたしのドレス姿見たいわけ？」

「……へー、そーなんだ……嬉しくも何とも無いんですけど、つつか
キモイ！」

「はあっ!？」

「つざけんじゃねえ、てめえのドレス姿なんか目の毒以外の何でもね
えよ！」

「おい、インヴェルノも黙ってねえで何か言っでやれ！」

ブルツと体を震わせ、本当に鳥肌が立つてるように自分の肩を擦る
ミラに堪忍袋が切れたレオニダは先程からぼんやりと空を眺めてい
たインヴェルノに抗議を呼びかける。

が

「それが私と何の関係がある？」

「話が終わったのなら——行くのなら、早くして」

レオニダの叫びを一蹴したインヴェルノはそのままミラの袖を引っ
張って歩き出す。

「もーヴェルったら、そう急かさなくたっていいじゃん

……っ—か部屋に引き籠もって木像彫ってるだけのアンタを外の世

界に誘い出してやったあたしの優しさに涙流して感謝して欲しいんだけど？

ま、アンタみたいなガサツな男じゃ、ねえ」

「ケツ、そーかいそーかい、それは余計なお世話をどうもありがとう。」

「まったく、最悪だぜ……！」

インヴェルノに袖を引つ張られ上機嫌なミラにケツ、と悪態を付くと、レオニダは石を拾い上げて噴水に投げつけ、それを見届ける事無くミラ達の後に続いた。

「……一つ確認しとくが、本当にこの店に入るのか？
いや、入る覚悟があんのか？」

貿易区の中でも特にセレブな店が集まるルツシエレヴ通り、『本日開店』という看板を下げ、ブラウンのカーテンを垂らした洒落た感じの洋服店の前に並んだ豪華な飾りが付いた馬車を見比べながら真剣な面構えでミラに尋ねるレオニダ。

「「うん、そうだけど？」」

そんな彼に前を歩いていた美少女二人は一斉に振り返り、涼しい顔でさも当然のように声を返す。

これで多数決を取っても2対1、神経が太いミラはともかく、面倒

事を嫌うインヴェルノなら自分側に立つてくれると信じていたレオニダは、無表情のままだがすっかり乗り気の彼女に裏切られたような気がして、ガクツと肩を落とした。

どうしてこうなった……、と溜息を付いてると、いつの間にか店内に入ったミラに急かされ、レオニダは慌てて店内に駆け込んだ。

「いらつしやいのですの！」

見習い姫の館、ジェラツィアへようこそですの！」

ゴシック調の装飾が施された煌びやかな門をくぐり抜けると、待ち構えていたかのように声を掛けられ、驚いたレオニダが振り向いた先にはフリルがふんだんに付けられた丈の短い黒のドレスに恐らく純金のティアラを被った、ハーフエルフの店員が満面の営業スマイルを浮かべて控えていた。

ちよつと待てゴルァ！

見習い姫ってなんだよ、お姫様に見習いもタマクソもねえだろ！？

と反射的に声を張り上げそうになったレオニダだが、一步店内に踏み入れればそんなツツコミが馬鹿らしく思えるほど、異常な空間が広がっていた。

2、3階分に渡って天井をくり貫いた広い店内は白と黒をベースにしたゴシック調の装飾が施され、売り物の洋服が魔法で宙にぶかぶ

かと浮いている。

目の前を横切った、包帯でぐるぐる巻きにされた熊の人形に『魔物か！？』と反射的に腰に掛けたダガーを構えたレオニダは、お下げエルフに横腹をど突かれる羽目になった。

「ガルルウ……もう駄目だ、見てるだけで頭が痛てえ……
……インヴェルノの奴、こういうのが趣味だったのか？」

宙に浮かぶ黒を基調としたドレス達を興味津々に見回し、ときどき触れてみようと手を伸ばしては触れる寸前で引つ込めるインヴェルノ。

普段の彼女らしからぬ愛嬌のある動作を呆れた目で眺め、こめかみを押さえたレオニダは溜息混じりに音を上げる。

「んー、そーゆー事、あんま言わない方がいいよ、ハーフエルフ達に失礼だから。

……ここで売ってんの、全部本場イストネアガードの服装なんだからさ」

「言われてみりやあ全員ハーフエルフだな、ここの客ども。それに担任もこんな感じの服着てたし、よ……」

……………」

そついつて奥の方でフワフワ浮いてる黒いローブに近づき、値札を覗き込んだレオニダはそのまま固まった。

「どしたの、レオニダ？
値札なんか睨んじゃってさ？」

「おい、お前。」

……本気でここで買い物する気か？

とてもじゃねえけど学生の俺らが気軽に手を出せる値段じゃねえぞ……」

血の気が引いた顔を向けていた値札には「たったの」という太い文字に続いて0が5つ付いた数字が書かれていた。

この世界の通貨は小さい順から銅貨、銀貨、金貨とあり、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚となる。

即ち目の前のこの白い刺繍が施されただけの素朴なローブは1金貨もすると言つ事であり、一般的なベオルイル市民の月給の1割にも当たるわけで、レオニダやインヴェルノは勿論、ミラにもそんな大金があるわけが無い。

「あのさ、このあたしが何の下準備もなしに取材に出かけると思うわけ？

ほら、手だして」

そついつて掌を上にして見せるミラ。

言われるままに手を伸ばすと、ポン、とミラの手が重なってきて、冷たい感覚が掌に広がる。

それは半透明のコインで、目を凝らしてみると表面にはこの店と同じマークが刻まれていた。

「何だよ、これ？」

「見ての通りの割引コイン。

因みに5割引ね、これで心置きなく買えるっしょ？」

「それでも高えよ！

っ！か俺に買わせる気だったのかよ！？」

……もういい、こんなタマクソな取材に付き合ってられっか！

先にかえ『え、マジ！？』」

ケロツとした顔であくどい取引を押し付けてくる目の前のお下げエルフにレオニダは顔を顰め、声を張り上げる。

が、その声をミラの歓声が制した。

その視線の先には季節錯誤した涼しげなワンピースを着た、あっけらかんとした感じのお嬢様と、彼女に手を引っ張られて店に入った、黒いローブの裾を地面に引き摺っているゲツソリとした蒼白の少女がいた。

『担任！？』思わず声を上げたレオニダの口をミラの手が制する。

（センサーが買い物に来るなんてナイスタイミング！

……レオニダ、今回は特別に見逃したげる。

センサーの買い物にあたし達も付き合うよ）

（はー！？ 何でんな面倒臭え事を――）

口元をニタアと緩めたミラにレオニダは抗議しようと思を吸い込む、
が

「“さすらいの童^{わらへ}はさざりに踏み紛う”【闇呪言：傀儡】」

直接心に響くミラの声と共に意識に関係なく体が動き出す。

「やあやあー！ こんな所で会うなんて奇遇だねーリアさん！
おやーその可愛らしいお嬢ちゃんはもしか妹さんかなー？」

な、何言ってたんだ俺！？

……そうか、ミラの言霊術か！

あのタマクソ、何言わせてんだ、こんなの俺じゃねえ……！

「うわ、なんてエンカウント率」

「いやーこの前のクエストは世話になったよー
所でリアさんは妹さんと一緒に買い物かなー？」

奇遇だなー実は僕も友達と一緒に買い物に来てるんだよー」

「うざったいキャラ作りに余念が無い所悪いけどさ、何か変なもん
拾って食った？」

ピシッ、と敬礼を決めて朗らかに微笑むレオニダ、余りにもクサス
ぎるその動作にカランは訝しげに目を細め、可哀想な物を見る目で
レオニダを見つめる。

違えよ！

「いやいや、何言ってるのかなー？
僕はいつもこんな感じじゃないかー」

タマクソ、ミラの奴後でぶっ滅^{ほろ}す！

「そっだー僕の友達を紹介するよー
ほら、出ておいでー」

そう言って腰を曲げ、両手を横に突き出すレオニダ——の身体。

物影からひよっこり頭を覗かせたのは、艶の良い銀髪を三つ編みにしたエルフの少女と、黒い髪と赤い瞳が印象的なハーフエルフの少女、平たく言えばミラと引っ張られたインヴェルノだった。

「こちらの方はエルフのミラ・ヴェネストウーラ」

「よ、よろしくね？」

そういつて黄色いウィンターコートの裾を摘まみ、優雅に一礼して
見せるミラ。

うぜえ……

「こちらの美しく素敵でかつ可憐なハーフエルフのお嬢様はインヴェルノ・カラヴェーナ」

「…………それは、嫌がらせ？
——撃つよ、レオニダ」

撃つのなら隣の長い奴を撃つてくれ、今直ぐ。

「え、えーと……個性的なお友達ね、レオニダ君」

「ええ、それはもうー

みんなイストネアンファッションにぞっこんですよー
良かったら一緒に妹さんの服を選びましょうか？

みんなで選べばきつと似合うのが見つかりますよー」

「え？ でも、皆さんの迷惑になるんじゃない……」

「迷惑なんてとんでもありませんー

僕達はこう見えても一日三食にそれぞれ3時間ずつ、合計で9時間
もかけるほどの暇人ですからー」

お前がな

「そ、そうなの？

わかったわ、是非、お願いするわね」

そういつてペコリと頭を下げるリア、その隣に立つカランは最早哀れみを通り越して哀憐の目を向けて来ていた。

「うん、あたしにむうあかせなさい!!」

喜びの余りドンツ、と自分の胸を叩くミラ、その拍子にレオニダに掛かっていた暗示が消え、やっと体の主導権を取り戻した一匹狼は大きく息を吸い込み、

「っざけんじゃねえ、タマクソミラアアアア!!!!!!」

大地をも揺るがす咆哮を上げたという。

女三人寄れば姦しい、と言うことわざはまさに目の前の光景を現すものだろう。

先程から自称見習い姫の店員と耳打ちを交わしながら如何^いわしい視線をカランに送るリアとミラ。

そんな三人とは別に、単独行動を取っているインヴェルノも割と乗り気で、宙に浮くドレスとカランを見比べている。

「おつ、いーねいーね、絶対イケルって、それ!」

「でしょ?

じゃリルディさんこれとこれ、お願いしまーす」

「かしこまりましたです」

何やら結論を出した三人はドス暗い笑みを浮かべたまま状況を把握できずキョトンと見上げてくるカランを囲い、半ば強引に更衣室に誘導した。

何かを言いかけたインヴェルノだが、ザッ、と降ろされた更衣室のカーテンに口を噤む。

それはまるで処刑台に送られる娘を黙って見送る事しか出来ない親のように切なく、カーテンの間から漏れるカランの壮絶な叫びもそんな感傷的な雰囲気一拍車をかけていた。

レオニダはというと、そんなか弱い少女の悲痛の叫びに体が反射的に動き、殴りこんで救出しようとする衝動を邪気眼を封印するが如く必死に押さえていた。

時々溢れ出す悲壮な効果音に、下ろされたカーテンの向こうで現在進行形で行われている行為が本当にただの着せ替えなのかと本気で疑う事約十五分。

サーッ

とカーテンが捲られ、手術が終わったばかりの病室に駆けつける親族の如く飛び込んだレオニダの目の前には暴れまくったせいか髪の毛がピヨコンピヨコンと跳ねてゲッソリとしている担任と、一仕事を終えた職人のような、満足の笑みを浮かべる女三人が立っていた。

その仕事の成果とも言える今のカランは、黒を基調にした、白いフリルがふんだんに付いた裾の短いドレスにスラリと伸びた足を包む

黒のニーソックス、そして白い造花がワンポイントの革靴を身に着けていた。

普通の女の子がこんな格好をすればかなりアレだが、それをカランが着ると、生気を感じさせない白い肌と端正な顔も相まって、彼女という存在自体が歴代の人形師が精魂込めて作り上げた傑作にしか見えない。

元々ハーフェルフ向けのファッションなんだから当然だろうと、自己完結したレオニダはニツコリと笑顔を浮かべたまま見てくる女三人が評価を求めている事に気付き、ゴホン、と咳払いをしてから一言。

「かわ……変わってるな」

ありのまま『可愛い』とコメントする心算だったが、今にも泣き出しそうなカランをこれ以上傷付けては成らないと悟ったレオニダはとっさに台詞を摩り替えた。

しかし何を間違えたのか、それまで辛うじてせき止められていたカランの涙のダムが一気に決壊した！

「俺は今までお前の事を誤解してたかもしれない……！俺の苦しみを分かち合ってくれるのはお前だけだ！」

孤立無援で孤軍奮戦している戦士に援軍が駆けつけた時のような希望に満ちた目で見つめてくるカラン。

そして間入れずに突き刺さる、殺意がこもった女達の視線。

すまねえ、担任……どうやら勇者を気取るのに必要なのは勇氣だけじゃねえみてえだ

「……変わってるけど、似合ってるぜ」

その言葉にドサツと地に俯せるカラン。

悪いが不可抗力おんな三人相手に担任を守りきる自信はねえ……

保身のためにも、一応目の保養のためにも、漢らしくねえが、是非売らせてもらおう。

「ふふふ……ねえ、お姉さん、これって苛め？
……怒っていい？」

地面に俯せたまま妙に女の子らしい口調で肩を震わせながら呟くカラン。

長い前髪に隠れ、その表情は窺い知れない。

小さな口から囁ささられる陰鬱な笑い声に余りにも白すぎて生気すら感じさせない肌も相まって壊れかけた機械仕掛けの人形の様にしか見えない。

そんななか、彼女が最後に呟いた人間らしい言葉にレオニダは思考をめぐらせる。

つてえか、誰だ姉って？

……年齢的に担任の先生なのは……この場にいる女全員か……

まさか！？

インヴェルノか！？

言われて見りゃあ確かに似てるぜ……顔の彫りが浅い所とか、特徴を通り越して一種の人種じゃねえのか？

「こつちの方が似合ってる——」

地に俯せてすすり泣くカランに我を忘れ、ただ見入っていた4人を他所に、カランの肩をつつこつと指を伸ばし、しかしすぐに引つ込めたインヴェルノは変わりに鈴を転がすような澄んだ声で呼びかける。

その先にあるのは——

「……本当にそう思う？」

「わからない——多分、そう思う」

袖や裾の部分が白く脱色した、ケープの付いた黒いローブだった。

17・女三人寄れば姦しい（後書き）

久しぶりに改正前のシーンです。

一度読んだ方でも飽きないように改竄しまくった結果、かなり違う方向に話が進んでしまいますが……

でも人物紹介のイラストにも描いたように、例のイベントを変える心算はありませんので、ご安心ください。

18・悪魔と誓いし少女

Side：カラン

「もう……」

カランちゃん、こういう服は宴会まで大切に仕舞っておく物なのよ？」

ルツシエレヴ通りに店舗を構える高級レストラン、【傾いた鍋】。

細かいレースの装飾が施されたカーテンが外界の光を遮る一番奥の席で、心なしに嬉しそうなカランに頼付きしたリアはどこか呆れた表情で声を掛ける。

カランが今身に纏っているのはインヴェルノが選んだ、袖と裾が白く脱色した、黒い生地のカープの付いたローブである。

エンチャントも何も無いただの亜麻のローブでさえ金貨1枚したのだ、【エールミアレーテ・終わり無き夜の衣】という名前が付いたゲーム内で言うレア装備に当たるこのローブの値段はそれこそ凄まじく、ミラの割引コインを使っても金貨15枚は要した。

一般的な魔導師の二ヶ月分の給料に当たる金額をさも当然に差し出すカランにリアを含め、その場に居た苦学生三人が度肝を抜かれたのは言うまでもない。

——といっても、カランにとっての金貨15枚は『Modify Money 150000』という単語でしかなく、通貨膨張したゲーム内の価値観も相まって本人はかなりお得な買い物をした、と

かなりご機嫌だった。

「うーん、ヴェルの選んだ奴もいいけどさ、やっぱ最初のアレも捨てがたいよなあ……」

握りの部分が陶磁製のフォークを指先でくるくると回しながら残念そうに本音を漏らすミラ。

「ってえか、食堂に来たんだからさっさと注文しまおうぜ？
……で、メニューはどこに貼り出されてんだ？」

カランからどす黒いオーラが再び立ち昇るのをいち早く感知したレオニダは慌てて話題をそらし、シャンデリア越しにキッチンの方を覗き込む。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

そんなレオニダにまるで待ち構えていたかのようなタイミングで声を掛ける細身の、人間のウェイター。

流石に高級レストランだけあってその身嗜みもそこら辺のレストランとは比べ物に成らず、どこで手に入れたのかは謎だが、ミラの食券が無ければカランやリアはともかく、レオニダ達にはまず縁の無い場所だっただろう。

突然声をかけられたレオニダは首を伸ばした姿勢で『うおっ！？』と声を出し、無言のまま差し出された羊皮紙のメニューをワントンポ遅れて受け取る。

「どれどれ？」

薄切り肉の盛り合わせ、ソーセージにダウンプリンだあ？

……何だよ、このオードブルって奴、もっと量の多い奴、例えば定食とかねえのかよ？」

「あのさ、学校の食堂じゃないから、ここ。

こーゆーのってオードブルから始まってスープにメインディッシュ、サラダにデザートって順にオーダーしていくんだよ。

はらメニュー貸した貸した、見本みせたげる」

まるで解かってないレオニダにミラは溜息混じりに説明すると、彼の手からメニューを引たくり、先ほどから口元をヒクつかせているウェイターに向き直って常連の如く料理名をすらすらと読み上げていく。

「……で、デザートはこのレヴィルフロートの生き血のシャーベツトね」

頼んでる物はともかく、ミラにも意外な面つてあるんだな、と素直に感心するカラン。

その隣では、お節介好きというか、あんぐりと口を開いたレオニダにリアが間に合わせのテーブルマナーをレクチャーしていた。

一方インヴェルノはというと、休日問わずに行った過酷労働の反動が出たのか、席に付いた途端テーブルに俯せて眠ってしまったている。

このまま起こすのも酷だと思ったカランは彼女にメニューが回るまでこのまま寝かせておこうと思った。

「おう、大体解かったぜ！

じゃあ俺はオートブルにこのドゥームバイソンの厚切りステーキを、スープにこのスカイフィッシュの塩焼きを、メインディッシュにこのククルドンの激渋ソテーを、サラダにこのコンゴラのマスタード激盛を、デザートにこの厚揚げのグリンプスステーキを頼むぜ！」

「何よその注文、全部メインディッシュじゃない!?」

「食堂と同じだろうが、要するに5つの料理で一人分なんだろう？」

「全然違うわよ、人の話聞いてなかったの？」

「聞いてたぜ！」

「難しくてさっぱりだったけどな！」

「さも自分は悪くない、と言わんばかりに胸を張るレオニダに今までの努力は何だったのかとこめかみを押さえるリア。」

「あーもー、レオニダはお子様ランチでいいっしょ、はい決定」

「待てやゴルア！」

咆哮を上げるレオニダを意にも介さず、スツとメニューをかつさらったミラはそれをリアに渡し、満面の営業スマイルを浮かべたまま額に青筋を浮かべるウェイターにニッコリと笑顔を向ける。

人懐っこい笑みを向けられたウェイターは恥ずかしそうに咳払いすると、慌ててそっぽを向いた。

流石現役ジャーナリスト、こういう場の沈め方を熟知してるなあ、と思わず感心していると、目の前に羊皮紙のメニューが差し出された。

「はい、カランちゃんどうぞ」

思考をめぐらせてる間に注文を終えたらしく、メニューを回してるリア。

しかしどこか寂しそうなその目はこちらを向いておらず、カランの向かい側——つまりインヴェルノに向けられていた。

先ほどからずっとこの調子だが、お人よしのリアだからきつと俯せたままのインヴェルノを気に掛けているのだろっ、そう納得したカランはズッシリ重みのあるメニューを開くと、
文字と値段だけが書かれた素朴な紙面が目の前に広がった。

イメージ付きのメニューに慣れた現代人のカランにとっては何気に新鮮なのだが、目を凝らさないと文字変換機能は発動しないらしく、ミミズの様な文字がびっしりと書き込まれた羊皮紙にカランは早くも解読を放棄した。

「リアと同じヤツを頼む」

「私はいらない」

まるで待ち構えていたかのように、俯せたままキツパリと注文を断るインヴェルノ。

「でも、インヴェルノちゃん　せっかく『さつき食べて来たから』」

それでも、と続けて説得しようとしたリアだが、インヴェルノの隣で首を横に振るミラを見て、残念そうに口を噤んだ。

「っざけんじゃねえ！」

「んだよこの一口サイズミニマム昼ごはんご飯は！」

丸みを帯びた食器の上にもちの様に積み重なった二つのミートボール、その上でひらひらとはためく、さり気無く風魔法が掛かった小さな三角旗に堪えかねたレオニダは声を張り上げる。

「何って、お子様ランチに決まってんじゃん
ん〜これおいしー」

そんなレオニダを挑発するように、ミラはメディウムレアのククルドンのステーキをナイフで切り刻み、見せ付けるようにしてから口に運ぶ。

今回のランチは食券を持つミラのおごりなので、おごられた身であるレオニダはそれ以上言えず、全ての怒りを目の前の小さなミートボールにぶつけた。

レオニダの事を不憫に思いながら、自分自身が直面しなければいけない、敢えて目をそらして来た目の前の料理にカランは視線を戻す。

リッドカプラの丸焼き——それが平べったい皿の上に盛られた、豚の蹄ひづめの様なコラーゲンたっぷりのぬめぬめ物質に与えられた名称だ。

美容に効果的で女性には嬉しい一品らしいが、味付けが薄くまるで

嘔吐物でも食べているような気分思わず吐き出しそうに成るカラン。

頼んだ張本人である姉も隣の席で顔を歪めてる所から、自分の味覚の問題ではない事が窺える。

これを食べれば世の中の女性の苦勞が身に滲みて解かるだろう――
不老不死不変で世界中の女性に（無意識の内に）喧嘩を売ってる力ランはそんな事を考えながら6杯目の水を飲み干した。

S i d e : インヴェルノ

「インヴェルノちゃん、さっきからずっと俯いてるけど、
もしかして具合が悪い？

……大丈夫？」

食事も終盤に差し掛かり、とうの昔にお子様ランチを完食してるレオニダから願望の眼差しを送られ、デザートを口に運ぶなか、俯きっぱなしのインヴェルノを気にかけたリアが心配そうに手を伸ばした、その刹那

「リア、やめ――」

「わたしに、触るな」

リアの真意を悟り、慌ててミラが制止するも虚しく、弾かれるように身を起こしたインヴェルノは、目前に迫ったリアの手から逃れるように、テーブルをひっくり返す。

その細い腕のどこにそんな力があるのか、ひっくり返されたテールは彼女の手が触れたところからひび割れ、砕け散った破片がリアの顔面を直撃した。

突然の出来事に騒然となる店内、目の前で顔を押さえ、指の隙間からぽたぽたと血を垂らすリアから2、3歩後ずさるインヴェルノ。

救いを求めるように、隣の少女に無意識に触れたインヴェルノは応じるように『大丈夫』と目で訴えてくるミラからも遠ざかる。

何で？ どうして？

——何故こんなわたしに構うの？

この前、魔導書店で会った時のように、ありのままに怒りを、険悪感をぶつけて来ればいい。

そうすれば少なくともあなたが傷つく事は無かったのに。

わたしはどうすればいいの？

あなたがこれ以上傷つき、苦しむ事を望めばいいの？

——無理だよ、そんな事、心の底から望める訳がない

じゃなければこうしてあなたを傷つける事は無かったのだから

傷ついて欲しくないがために傷付けたい、そんな矛盾した思いに、湧きあがる罪悪感に震えるインヴェルノの耳に、雪解け水が滴るよ

うな澄んだ声が響く。

「Cast Spell 920 【時流逆行】」

クロノヒーリング

ピシッ、パリイイイイン

空間がまるで鏡のように割れ、次々と溢れ出す金色の霧が俯いたりアの顔に集まっていく。

まるで教会のパイプオルガンを奏でた時の様な、重々しい音が心を震わす、目の前の、あまりにも神々しい光景にインヴェルノは思わず目を細める。

金色の霧が消え去り、重々しい旋律が途切れると共に、それまでリアの顔を覆っていた手から血の痕が消え、おもむろに上げた顔には傷一つ見あたら無かった。

一体どういう事だろうか。

キャストスペルナイントゥーオー

思考をめぐらせた脳裏に浮上した、不思議な旋律の呪文にインヴェルノはその切れ長の目を更に細める。

古代神界魔法——奇跡の代償に命を、あるいは命に匹敵する物を奪い去る神が遺した最悪の遺産。

それを先生が使った——わたしが使わせた。

何で？ どうして？

これもわたしが望んではならない物を望んだから？

——全てはわたしが招いた因果

「もうわたしに関わらないで」

ガタツ、と音を立てて倒れる椅子。

『ヴェル！』、と耳に響く聞き親しんだ少女の声。

それらを振り切るように、インヴェルノは我を忘れて逃げ出した。

S i d e : カ ラ ン

真つ二つに割れたテーブルと、その巻き添えを喰らって玉砕した食器等の弁償代、合計で金貨4枚を支払い、居辛くなった店内から運河に掛かる石造の橋の上に場所を変えたカラン一同。

「「代償を受けない体質？」」

「ああ、そうだよ」

リアの口から伝えられた事実、信じられない、と目を見開くミラとレオニダに、カランは首を縦に振って肯定する。

「悪いな、ずっと黙ってて」

「ううん、平気平気、知られたくない事の二つや三つ、誰にだってあるからさ」

てつきりもつと食い付かれると思ってたカランはあっさりしたミラ達の反応に肩透かしを喰らった気分になり、風に揺れる運河の水面をしばらくぼんやりと眺め、誰に言うでもなく呟く。

「そう、か。」

……じゃあ、インヴェルノの事情もその【知られたくない事】なんだな」

知ってるけど、言うつもりはないんだな？ と暗に尋ねてくるカランを先ほどからじっと凝視していたミラは やれやれ と首を振ると、吐き出す息と共に声を発する。

「……そんなトコ。」

あいつは――ヴェルは、リアを傷付けなくなかったせいで、傷付けたんだよ」

どう言う意味だよ、と水面から目をそらし、ミラに向き直るカランとリア。

予想した通りの反応にミラはレオニダの方に目をやり、彼が同じように訝しげな視線を自分に向けて来ているのを確認すると、観念したように肩を竦め、溜息をつく、ゆっくりと口を開いた。

「本当はさ、誰にも言わないって、ヴェルと約束したんだけどさ。」

……もう耐えられないよ、あいつが全部一人で背負い込むなんてさ。だから、これから言うのは独り言なんかじゃない、あたしが、あんな達にあいつの事理解して欲しくってわざと漏らした、あたしとヴェルだけの秘密」

厚手のウィンターコードの袖が食い込むほどぎゅっ、と握り締めたミラは大きく息を吐いて呼吸を整えると、水面の一点を凝視していた目をカラン達に戻し、真剣な声で告げた。

「ヴェルは、^{ハイレント}契約者なんだよ」

S i d e : イ ン ヴ ェ ル ノ

「さて、何と仰ったのか、よく聞えませんでした……」

眼鏡の端をクイと押し上げ、値踏みするように目を細めてくる、エルフの青年。

「古代神界魔法の代償を抑える薬が——エリクサーが、あるのでしよう？」

——いくら？」

金糸の飾りが縫い付けられた、黒い制服に身を包んだ青年の背後、無数に積み上げられた商品の山を見据え、抑揚の無い声で尋ねる黒髪赤眼の少女。

一文字一文字明確に告げられた言葉にエルフの青年は目を細め、目

の前の、ボロ雑巾のようなローブに身を包んだハーフエルフの少女をもう一度見定める。

「……ここは商業ギルドですよ？」

支払い能力の無い者に慈悲の施しをする教会ではないのです」

「幾らだ、言え」

少女が発した、トーンの低い、殺意のこもった言葉に倉庫の管理人は何かを言いかけた口を噤み、体の中から湧きあがる得体の知れないおぞましい感覚に汗粒を浮かべながら、何とか平静を装って、業務的な声で返す。

「100ゴールドです」

Side: カラン

「ヴェルは、^{ハレント}契約者なんだよ」

「ハ―……なんだよ、それ？」

レオニダと同様に首を傾げるリアとは違い、その単語の意味を理解するカランは思考をめぐらせた。

悪魔召喚系の魔法を極めた魔導師^{メイジ}が転職できる上位職悪魔術師^{ワーロック}。

その悪魔術師^{ワーロック}を更に極め、上級悪魔を呼び出して血の契約を交わした者を契約者と呼ぶ。^{ハレント}

その難易度は半端なく、ゲーム内ではカランが管理していたサーバーでさえ一人しか居なかった、それこそ一日28時間プレイしてるようなゲーム廃人だけが辿り着けるプレイヤーの最終形態だ。

何故インヴェルノがそんな職に？

思わず眉を顰めるカランにミラは溜息をつき、何かを否定するように首を横に振る。

「多分、センサーが思ってる様な状況じゃないよ。

無理やり契約させられたんだからさ、ヴェルの場合は」

させられた。

その一言に、カランの中から形容し難い怒りが湧き上がってくる。

したのではなく、させられた。

誰が？ —— いや、こんな事するのは人間じゃない、何が？

声が、震える

「……何と、契約したんだよ？」

「聞いて、どうするわけ？」

言っとくけど、ヴェルに契約のさいをかけたのは一匹じゃない、二匹だから……いくらセンサーでも、どうこう出来る相手じゃ、ないわけ」

そういつて悔しそうに俯くミラ。

彼女が今まで見みせた事の無い、思い詰めた表情にカランは思わず口噤んだ。

S i d e : ジーク

魔法により全てが管轄された秩序の都、その裏側に潜むのは光が届かぬ無法の世界。

錆付いた鉄格子に囲まれた血生臭い檻の中で、顔の半分が醜く焼け爛れた隻眼の剣士は自分の背の丈もある、鋭く尖ったカルシウムの塊を、戦斧を振り上げ突進してくる巨漢の心臓に目掛けて、躊躇いも無く突き刺した。

ブシャツ！！

暗い照明に照らされた鉄格子の折に付着する赤黒い液体。
何が起きたのかわからず目を見開いて絶命した狂戦士。
バーサーカー

剣士はその亡骸が突き刺さったままの、竜牙を加工して作られた大剣【アグラツィア・死神竜の牙】を軽々と掲げると、鉄格子に凭れ、わなわなと震える口で呪文を紡いでいた魔導師メイジの男に向き直り、

「何逃げてやがんだ、オラアツ！」

勢い良く振り下ろした！

遠心力によって投げ出された、大質量の飛び道具バーサーカーはそのメイジに激

突し、

グジャツ

と生々しい音を立ててその肉体を押し潰した。

『ワアアアアア』

湧きあがる完成に隻眼の剣士は忌々しそうに舌を打ち、あたり一面に散らばる惨たらしい屍の山の向こうで鉄格子にすがり付き、『開けてくれえ!!』と声を裏返して泣き喚く哀れな重装騎士に恐怖を煽るように地面を踏み鳴らしながら、ゆっくりと近づく。

「おいおいおいおい、何逃げてやがんだあ？

まだオモテナシはすんでやがらねえんだぜ？

クレイジーなパーティーを続けようじゃ、ねえかつ!!」

ゴシャン、轟音を立てて石畳の地面を突き破る竜牙の大剣。
アケラツィア

弾かれるように振り向いた騎士の目に映ったものは、薄暗い魔法灯の照明をバツクに佇む、返り血に赤く染まった、鬼人。

「あ、あんたが強いのは十分解かった……!

な、なあ……! 見逃してくれよ……!」

「はあん？

喧嘩吹っかけてきやがって負けそうになったら仲間を見捨てて逃げやがんのか？

気に入りやがったぜ……その人間味溢れる考えがな!」

「な、なら——っ!？」

そういつてニヤリと口元を歪める隻眼の剣士、『気に入った』の一言に希望を見出した騎士はその顔を見上げ、絶望した。

笑顔を浮かべてはいるものの、目の前の鬼人からは――火傷した自分の顔に埋まった死んだ魚の様な目からは、明らかな殺意が放出されていたのだ。

「く、く、来るなあっ!!」

ゆっくりと歩き出す隻眼の剣士に重装戦士は無我夢中で獲物を投げつけた。

ガーディアン

宙を切つて凄まじい勢いで迫る、両刃の戦斧をしかし、隻眼の剣士は避けようとも、防ごうともせず、それどころか ひゅう、と口笛を吹いて驚いて見せる。

ヴオオオン!!

ガキッ、ガタッ……

岩壁をも軽々と砕く戦斧は、コートを羽織っただけの無防備な鬼人の体を切り裂く事無く、まるで城壁に投げつけた枝のようにあっけなく弾かれ、地面に落ちた。

斧の一撃を受けた腹部を擦り、わざとらしく痛がって見せる目の前の鬼人に、辛うじて保っていた騎士の精神が崩壊した。

「ああ……ああ……!!」

『良く頑張ったな、だが惜しいぜ』と言わんばかりに人差し指を揺

らした隻眼の剣士は地面に突き刺さった竜牙の大剣を片手で抜き取ると、

「一つ言い忘れやがったが、俺の趣味は気に入った人間をぶっ滅^{ほろ}す事なんだぜ？」

聞く者を心の底から震え上がらせる、トーンの低い声で死刑宣告をし、直径30センチのカルシウムの塊で騎士の頭部をヘルムごと貫通した。

『ワアアアアア！！』

再び湧きあがる歓声、獲物を高速で回転させ、血を払った隻眼の剣士は鉄格子の向こう側で歓声をあげる、人間味溢れる観客どもにサムズアップした指を下に向けて見せる。

『勝ったああ！ またまた勝ったああ！！』

圧倒的な戦闘力で敵を蹂躪していく自称『人間嫌い』の竜殺^{ドラグーン}し、ジーク・ハイドおお！！

たったの半日で百人抜きを達成し、まだまだ余裕の笑みを浮かべるその姿はまさに殺戮マシーン！！

その勢いは留まる事を知らないのか！？

果たして彼を打ち倒し、名誉と財産を手にする者は現れるのか！？

否、否、否！ 三重否定！

当然だ、こんな化け物に叶う強者がいる筈がない！！

どこに居るか、いるものかああ！！ いるなら今直ぐでてこおおおおおい！！！！』

薄暗い地下闘技場に響き渡る、煽り立てるような司会の声、だが一向に名乗りを上げる者は居ない。

それでも延々と続く司会者の煽りに隻眼の剣士、ジーク・ハイドはフン、と鼻で笑うと、そのまま踵を返した。

「待つて——」

凜とした少女の声に、騒然としていた地下闘技場が一瞬で静まり返る。

反吐が出るような、悪意に満ちた視線が集まる中、反対側の鉄格子の扉が開かれ、鏡のような仮面を付けた、まだ女ですらない、ハーフェルフの少女がゆっくりと入場してくる。

「おいおいおいおい、ガキの遊び場じゃねえんだぜ、ここはよお！？……聞いてんのか、クソガキ、ここはてめえのような迷子が来やがる場所じゃねえ、おとといきやがれ！」

「聞いている——でも違う、わたしは戦いに来た」

鈴を転がすような澄んだ声で呟くと、少女は魔導書を構え、ジークに向き直る。

鏡の様な仮面に映った自分の姿に　ハッ、と鼻で笑うと、少女を挑発するように　ダラッ、と両手の力を抜いて前屈みになり、まるでゾンビの様な姿勢を取って見せる。

「退きやがる気はねえようだな……イカレてるぜ」

無言のまま魔導書を構えた目の前の少女に、脅しは無意味だと悟っ

たジークは苛立たしげに背負った獲物を抜き取った。

「気に入らねえな、てめえみてえな人間味がしやがらねえクソガキは！」

18・悪魔と誓いし少女（後書き）

さて日常パート（になるのか？）も終了し、再び事件パートに突入しました。

そろそろ休暇も終わりますので、一日一更新は難しくなると思われます（2、3日一更新のペースなら何とか成るかもしれませんが）

書いてる人の弦き（読まなくていいと思われる）

一人で悶々と書いてるのがそこはかとなく寂しい今日この頃です、感想叩き指摘大歓迎です、後近日中に新シリーズ（小説）を立ち上げる予定があったりなかったりby内臓が破裂してる人

19・絶望という名の力

S i d e : インヴェルノ

「気に入りがらねえな、てめえみてえな人間味がしやがらねえクソガキは！」

死んだ魚の様な目に殺意を宿らせ、インヴェルノを睨み付けた隻眼の剣士——ジークは苛立たしげに吐き捨てると、背負っていたカルシウムの塊を抜き取り、そのまま地面に叩きつける。

岩を砕く轟音が鉄格子を通して地下闘技場に反響するなか、ジークは勢い良く身を翻し、衝撃で砕け散った地面の破片を目の前に佇む、仮面の少女に向って蹴り飛ばした！

荒々しい動作で蹴り飛ばされたにもかかわらず正確に自分を捉える石塊を身を屈めてかわし、距離を取るべく足に力を込めたインヴェルノだが、その隙を逃すほどジークは甘くない。

「だったらここで面白おかしく死にやがれ！」

一瞬でインヴェルノとの間合いを詰めたジークは勢いのままに足払いを繰り出し、フェイントに引っ掛かって反射的にジャンプで交わしたインヴェルノの首を掴むと、そのまま地面に叩き付けた！

とつさに体を丸め、受身を取った事で致命傷は免れたが、勢いまでは殺しきれず、インヴェルノの細い体は何回もバウンドし、先ほどジークが倒した冒険者の残骸にぶつかってやっと止まった。

『ワアアアアア』

湧きあがる歓声にジークは不機嫌そうに顔を顰めると、目の前で仰向けに倒れている、ボロ雑巾のようなローブを着たハーフェルフの少女に近づく。

「おいおいおいおい、一撃でこのザマかよ
本気で殺^やるきありやがんのかよ、雑魚は邪魔だからさっさと消えや
がってくんねえか？」

「何を言っているの？
痛くも痒くも無い——その剣は飾り？
勿体ぶらないで使ったら？」

腰に手を当てて上半身を突き出し、からかうように挑発するジークだが、無表情のまま、抑揚のない音色で挑発し返してくるインヴェルノに顔を顰める。

「ハン、何ほざいてやがんだ？
どうも頭がおかしいと思いやがったが、こいつでミンチに変えられ
やがるのがお望みな根っからのマゾヒストかあ？
だったら場所を間違ってやがるぜおチビちゃん、痛みつけやがられ
てえんだったら奴隷商んトコ行きやがれ！
お似合いの首輪を付けて貰いやがって、泣いて喜ぶほど痛ぶられて
きやがれ！」

「あなたには似合いそうね、そういう首輪」

冗談にしては言葉が平べったく、挑発にしては感情に欠ける音声で、
さも事実を述べるように発せられる少女の声。

鏡の様な仮面のせいで表情は窺い知れないが、抑揚の無い声による嘲笑に、鏡に映る火傷した顔が醜く歪む。

「ハッ、イカスファッションの提案をどうも有り難うよ！
お礼に竜牙剣^{こいつ}で叩き潰しやがってやるよ！」

ズゴオオオオオオン！！

荒げた声と共に音速を置き去りにして振り落るされたカルシウムの塊は、まるで隕石が落下した時のような、壮絶な音を立てて地面を砕き、四散した肉片と土煙を巻き上げる。

顔にベツチャリと付着した返り血をコートの袖で拭い去り、無様に潰れた少女の亡骸を目に映さぬよう、天井を仰いだジークはやれやれ、と肩を竦めた。

「でもわたしは断るわ、せつかく外して貰ったのだから」

歓声が治るのを見計らったようなタイミングで、響く凜とした声。

弾かれるように振り向いたその先には、先程剣を地面に叩き付けた衝撃で崩れ落ちた天井で出来た瓦礫の上で足組みをして見下ろしてくる、仮面の少女がいた。

「……なるほどな、てめえも元・奴隷だったってクチか。

こんなイカレタ場所に来やがる様な頭の中身がクソミソごっちゃ混ぜしやがった奴を解放しやがるとは、そいつ本気で病んでやがるな……てめえがこんな所に来やがるのを知って解放しやがったって事だろうが、どうしようもなく屑で下衆なヒトの出来損ないだな、そいつは」

ジークはその言葉に少女の黒髪から覗く細長い耳がピクリと震えた事に気付かないまま、竜牙剣を抜き取ると、

「どの道死に急ぐんだっただらここで望みどおり地獄への片道切符を送り付けやがってやるよ！」

荒げた声と共に竜牙剣を振り下ろし、瓦礫の上に腰を掛けた少女に向って衝撃波を飛ばした！

ズゴオオオオオン！！

まるで大砲を打ち込まれたかのように煙を立ち昇らせ、四散する瓦礫の山。

「まだまだあつー！！」

今度こそ完全に息の根を止めるべく、ジークは物理法則を無視した動きで立て続けに剣を振るい、瓦礫の山に連続で衝撃波を叩き込む。

これでまだ生きていたら、正真正銘の化け物と呼ぶに相応しい——だが、少女の命を絶とうという彼の望みを裏切って、澄んではいるが抑揚のない音声が頭上から響く。

「ミラを悪く言った事は絶対に許せない。

——でも良かった、どうやらわたしは本気であなたを殺したいみたい」

S i d e : カラン

「おいっ！

……二人だけで話進めてんじゃねえ、そのハ―何とかと契約って何なんだよ？」

真剣な顔で理解の範囲を超える会話を交わすカランとミラ。

そんな彼女達を邪魔しちやいけない、と沈黙を保っていたリアとは違い、仲間の事なのに蚊帳の外にされたレオニダは二人の話を断ち切り、カランの肩を掴んで自分に向き直させた。

「それは……」

カランはレオニダ達を無視して話を進めていた事を脳内で詫びながらも、ミラやインヴェルノが今まで守ってきた秘密を自分が明かしているのか、と視線でミラに問いかける。

その質問にミラは小さく頷いて肯定すると、口を開いたカランを制して自から説明し始める。

「平たく言えば、力の代償に感情を捨てたヒト……捨てさせる呪い……そんなトコ」

「感情を……捨てる？」

馴染みの無い魔法概念に表情を陰しくするリアにミラは首を縦に振ると、説明を続ける。

「うん、負の感情を司る悪魔達に特定の感情だけ残して他の感情を代償で渡し、残した感情を【力】に変える……契約って言うのは、そういうモノ」

「全然解からねえ……」

そういつて髪を掻き上げるレオニダは当然理解しておらず、隣で耳を垂らしているリアも理解しているかどうか微妙だ。

それも仕方のない事だ、もともと極一部の高等悪魔術師しか知りえないような知識で、ミラでさえオールの中央魔導図書館に半ヶ月通い詰めてやっと把握出来た物なのだから。

「例を挙げた方が早いかな、例えばとある魔導師が【憤怒】の悪魔と契約して契約者に成ったとする。^{ハイレント}

そうなるとそいつは怒るだけでどんどん強くなれる」

「怒るだけでか？」

「そいつぁ便利じゃねえのか？」

妙な所で感心し、思わず感想を口走ったレオニダにその場の全員が顔を顰めた。

スマン、と掌を合わせたレオニダに深い溜息を付くと、ミラは説明を再開する。

「何の努力も無しにただ怒るだけで力が手に入るんだから便利そうだどさ……そんな都合のいい話本当にあると思う？」

……あるわけがない。

さっきも言ったけど、契約の代償は他の感情全部。

どんな時も感じるのには契約した感情だけ、死ぬまでずっと、怒りに

支配され続ける——喜ぶべき時に喜べず、悲しむべき時に悲しめず、愛する者をその手で傷付けても、守るべきものをその手で壊しても、悲しみも罪悪感も無く、感じるのは怒りだけ。
……もうヒトじゃないよ、それって」

いつも明るい声でそんな暗い雰囲気吹き飛ばしてくれたミラの口から紡がれる、唐突過ぎる、残酷な事実に、思わず息が詰まる。

「インヴェルノと契約した悪魔って何なの？」

「【^{ダイアン}欲死】と【^{イルダン}絶望】……だよ」

S i d e : インヴェルノ

「ハア？」

本気で俺を殺したいみたい？
ふざけてやがるのか、てめえ」

魔力によって構築された足場の上に腰を掛けたインヴェルノは大袈裟に首を傾げながら見上げてくる隻眼の剣士をぼんやりと見つめたまま、鈴を転がすような声で呪文を唱える。

「S c a r d a i l F u o c o , 【ファイアボール】」

熟練した発音に一瞬身構えるジークだが、短い詠唱に続いて宣言された術名に思わず「ハッ」と嘲笑を漏らす。

インヴェルノが唱えた魔法はファイアボール、その名の通り火の玉

で、魔導師を志す者が最初に学ぶ、基本中の基本で、最下級の攻撃魔法である。

掌サイズの火の玉を作り出すだけでその威力は極めて低く、踏み付けるだけで倒せる最弱の魔物、ビッグビーでさえ2、3発ぶち込まないと倒せない——まさかそんな子供騙しの小火^{ほや}を自分に向けて来るとは。

色々な意味で予想を裏切られたジークは構えを解き、竜牙剣を地面に突き刺した。

頭がイカレタ相手のささやかな抵抗を正面から平然と受け止め、嘲笑ってやるう、そう思ったのだ。

——そう、そう思った。

「おいおいおいおい、冗談抜かしやがってんじゃねえぞ……！」

目の前に広がる、端の見えない炎の壁に、浮かべていた余裕の表情が崩れ落ちる。

薄暗く冷たい地下闘技場を活火山口のような灼熱地獄に変える程の、ファイアボールの群れ。

そう、ファイアボールだ。 ただのファイアボールだ。 たかがファイアボールだ。

ただ単に、その量が圧倒的に多いだけ。

魔導書も使わずにワンスペルで魔法を起動したインヴェルノの周り

に展開されたのは、逆らう事に何の意味も見出せない、絶望的な量のファイアボールの大群。

メラメラと燃える火の玉は触れた鉄格子を一瞬で気体に変え、闘技場全体を包み込む強固な魔法結界をいとも簡単に瓦解させる——普通のファイアボールとは比べ物に成らない程温度が高く、練り込まれた魔力の量もまた絶望的に高いのだ。

先ほどまで浮かべていた余裕の笑みが完全に消え去り、防ぐ心算なのかカルシウムの塊を掲げた剣士にインヴェルノはただ淡々と告げる、

「死ね」

٧٠

抑揚のないその音声を合図に、彼女を中心に展開していた業火の壁が、つり天井のように落下し、仮面の少女の眼下に広がる全てを呑み込んだ。

ゴゴゴオオオオオ.....

頬を焼くような凄まじい熱風を巻き上げながら燃え続ける地獄の業火。

湧きあがる　歓声とも悲鳴とも取れる音に鼓膜を震わされながら、足元に広がる炎の海をぼんやりと眺めていたインヴェルノはおもむろに手を振り、魔法を解除する。

高温で熱せられ、溶解され、赤黒く変色したフィードに目を泳が

せ、何も残ってない事に思わず目を細めるインヴェルノの視界の端で何かが動いた。

目を開けているのも辛い熱気の中、その何かは白い塊を片手で担ぎ、空いた方の手で身に纏ったコートをパタパタさせている。

「おいおいおいおい、もう終わりやがったか？

中途半端に焼きやがって、おかげでコート焦げやがったじゃねえか」

そういつてコートに付着した炭を全て叩き落とした隻眼の剣士はその端を摘まみ、かすかに焦げた部分を見せ付けてくる。

そんな彼に無言の返答を送ると、インヴェルノはその肩に担がれた奇妙なカルシウムの塊に目を凝らす。

「ドラグーン竜殺し、か」

炎竜が吐く、幾千度にも及ぶブレスを耐え抜き、必殺の一撃でその命を絶つ最強の戦士、ドラグーン竜殺し。

魔力とは似て異なるエネルギー、生命の力・気力の扱いに精通した彼らは生身で剣を弾き、魔法を防ぐ。

「どうしやがった、さっきのもうつ回やって見やがれよ！

……まあ、出来やがらねえだろうがな、あんな使い方しやがって、

魔力はもう残ってやがらねえんじゃねえか！？

オラアッ！！ こっちから行きやがるぜ！」

プスプスと煙立つ地面を蹴り、宙高く跳びあがったジークは勢い良く気力を放出し、空中で加速してインヴェルノに迫る。

高速で迫るドラグーンにインヴェルノは表情一つ変えず、淡々と呟く。

「なら気力が尽きるまで続ければいい。」

ScardaiIfuoco,【ファイアボール】」

ヴオゴオオオオオン！！ ドガガガガガガガガガガ……

……！！！！！！

ジークの渾身の一突きがインヴェルノに刺さる、その直前、虚より現れた、無数のファイアボールが寄り集まった直径5メートルの巨大な火の玉が彼に激突し、地面に叩き落した。

そして追い討ちを掛けるように、仰向けに倒れた竜殺しきせこしに向って魔法防御結界をぶちやぶった、地下闘技場を埋め尽くす絶望的な量のファイアボールが流星群の如く延々と降り注ぐ。

夢も希望も微塵もない、絶望だけが全てを塗り潰すその光景に、残酷な観客達でさえ言葉を完全に失い、絶望した。

Side:ミラ

「ダイイン【欲死】とイルダン【絶望】……だよ」

感情を宿さない、抑揚の無い声でただ淡々と事実を述べるミラ。

「それって……インヴェルノには、死にてえ衝動と、絶望の感情しか残ってねえって——そういう事なのか？」

「……うん、そういうわけ」

敢えて口にしなかった、認めたくなかった事実を言葉にされ、改めてそれが変わりようのない現実だと思い知らされたミラはそう呟くと、自分の無力さを恨むように　ぎゅっ、と唇を噛む。

「じゃあ、その契約って奴を解けばいいんじゃないのか？
例えば悪魔を倒すとかさ」

「無理だよ——出来るんだつたらとつくにやってるつての。
……でも無理なんだよ！」

そう、無理なのだ、不可能なのだ、希望などないのだ。

次々と湧きあがる絶望の代名詞に親友を苦しめる存在を連想させられ、振り切るようにミラは声を荒げた。

自分の浅はかな言動のせいで友人を追い詰めた事に後悔し、口噤んだレオニダに叫んだ事で幾分平静を取り戻したミラは『ごめん』とだけ呟くと、顔を俯せ、震える声で続ける

「……今のヴェルは欲死ダイインの影響で心の底から死にたいけど、絶望イルダンがストッパーに成って逆に死ねない——天秤がギリギリでバランスを取ってるような状態なわけ。

欲死ダイインと絶望イルダンの内の一つでも欠ければ、牽制しあってた感情が消えて——わざわざ言わせなくても解かるよね？

……だから殺やるなら一緒に殺やらないといけない。

でも相手は、触れたモノを一方的に殺ダイインす欲死と諦めるしかない圧倒的な力で捻じ伏せる絶望イルダンを司る悪魔なんだよ？

そんなのどうやって倒せっていうわけ？

出来る訳ないじゃん、あいつが苦しんでるのを黙って見守るしかないじゃん!？」

知っていながらも、ずっと目を背き続けた事実を止め処なく溢れ出す涙と共に口にしてしまったミラ、今まで辛うじて保っていた希望が跡形も無く崩れ去り、同様に体も崩れ落ちる。

その場に泣き崩れるミラにリアは慌てて駆け寄り、重心を少しずつただけで本当に崩れ落ちてしまいそうな少女を優しく支えた。

「諦めないで、ミラちゃん——ミラちゃんはインヴェルノちゃんに触れても平気だったでしょ？」

それならきつと何か方法があるはずよ。

だからね？ 諦めないで、ここにいるみんなもインヴェルノちゃんを助けたいって、心のそこから思ってるから」

「……無理だよ、助けたいって願ったからどうにかなる問題じゃないんだよ」

止め処なく溢れ出す涙を拭い去ってくれるリアの手を振り払い、コートで自分で拭う。

「あのさ」

涙に歪んだ視界は最早その意味を果たさず、宙を彷徨わせた視線に映る白い精霊に顔を向け、『何』と返す

「インヴェルノを助けたいって言ってる本人がこんな所で泣いてどうすんだよ？」

しかもなんだよ、どうしようもないって、お前が諦めてどうすんだ

よ？ …… 全然お前らしくないぞ」

じゃあどうすれば良いわけ！？ と怒鳴り散らそうとした矢先、振り向いたカランと目が合う。

逃げようとせず、真っ直ぐ覗き込んでくるその瞳に、ミラは思わず口を噤んだ。

「確かに契約を解くのは難しい——少なくとも今直ぐ解くのは無理だな。

でもさ、だからって何も出来ないってわけじゃないだろ？

別に死ぬような病に掛かったわけじゃないし、欲死^{ダイイン}だからって人を殺そうと年中目をギラつかせてる訳でもないよな？

むしろあいつは人を傷付けないために自分から孤立してる——あんな状態でもちゃんと人の事を考えてる。

だから諦めんなよ、感情が無いからって死んだわけじゃない、愛想悪くでスカしててその上口悪くて拳句の果てにムカつく奴だけど、そんな妙に人間臭い奴なら助ける方法なんて幾らでもあるだろ？」

「そんな事…… あるわけ」

「…… 無い、っていうのかよ？」

…… あいつが一番心を開いてるお前が無いって、諦めんのかよ！？」

じゃあ何があるわけ？

ヴェルを幸せにするには契約を解くしかないじゃん、それ以外の方法がある訳ないじゃん、こんなあたしに出来る事なんて——

「ど、どこ行くの、カランちゃん？」

「インヴェルノを探してくる」

振り向く事無く告げられたその言葉に、ミラは思わず張り上げそうになった声を抑える。

ヴェルが一番心を開いてるあたしに、出来る事……

S i d e : インヴェルノ

「……こ、これは……！」

「ベオルイル中央銀行発の水晶貨、金貨100枚と同じよ」

複雑な魔法陣が積み重なって刻み込まれた透明の硬貨と、目の前のボロ雑巾のような少女を何度も見比べ、絶句するエルフの青年。

この水晶貨はベオルイル中央銀行でしか製造されない特別品で、正当な取引以外の方法で手にすると、刻み込まれた術式が発動して自壊するように設計されている、だから今手渡された金貨が偽者の筈は無い。

商業ギルドの上層部の間でしか取り扱われないこの水晶貨を持つ目

の前のハーフェルフ、服装はともかくその佇まい——実は貴族の娘ではないのか？

「エリクサーは？」

そうであれば是非とも機嫌を取り、今後の商売に役立てたい——先ほどの見下したような態度が180°変わり、やれ高貴だの、やれ美しいだの心無い言葉を口にするエルフの青年。

そんな見え透いた嘘にインヴェルノが耳を傾ける筈も無く、抑揚の無い声で呟く。

「はい、こちらに成ります」

差し出された金の装飾が施された黒い箱を開け、そのなかに納められた青白い液体が入ったクリスタルの瓶を取り出すと、自分売り込もうと躍起になっている商売人を無視し、インヴェルノは踵を返して店を出た。

店内から一步でた途端体に纏わり付く冬の冷氣に少女は足を止め、思考をめぐらせる。

あのドラグーンは今どうしている？

別に気になるわけじゃないけれど、わたしが彼を殺したいと望んだ以上、彼は生きているはず。

その為にわざと彼を怒らせ、あんな事を喋らせたのだから。

——それは彼の問題、わたしとは何の関係もない。

それよりも、今は先生を見つけないと。

アイボリーホワイトの町並みをオレンジ色に染める残陽をしばらく眩しそうに見つめると、インヴェルノはおもむろに歩き出す

「今なら家にいるはずね、先生の家がどこか知らないけれど、あの校長なら解かる」

低い住宅街の向こうにそびえ立つ、天を突き刺すような尖塔の群れに。

S i d e : ノ ス ラ

上も下も左も右も解からない、緋色のクリスタルが無数に突き刺さった溪谷に地をも揺るがす獣の様な咆哮が絶え間なく木霊する。

「……その飛竜の消失と異常な魔力の歪みは時列錯誤パラダイムロスによって起こされた自然現象、と述べるのか」

螺旋状に捻じ曲がった溪谷の隙間から射し込む夕日に照らされて金色に輝く巨大な竜。

蛇の様な細長い躯体を器用に捻らせ、クリスタルの間に収めたその竜は顎を地面に付け、目の前に佇む枯葉色の髪を持つハーフェルフ

に問いかける。

「……そうだ」

自分の体の倍もある、縦に割れた蛇の様な目に怯む事無く、ノスラは依然とした態度で応える。

キツパリと言い切ったノスラだが、その目が一瞬だけ浮いた事を見逃すほど彼の主、時の王・ノスフェラドムスは甘くは無い。

金色の竜はその蛇の様な、見る者を竦ませる双眸を閉じ、周囲の小石を巻き上げるほどの深い溜息を付くと、おもむろに目を開く。

「お主がそう述べるのなら我はそれを信じるでしょう。」

……だが忘却するな、我らの使命はエウルースを来たるべき未来に導く事、小の為に大を投棄するような行為は行うな」

「……………」

無言で頭を下げるノスラに目もくれず、ノスフェラドムスは溪谷内をビッシリと覆い尽くす、まるで鱗のような――腸内を覆い茂る絨毛と言った方がしっくり来るが――大量のクリスタルを一つ一つ確認していく。

時の流失を意味する夕日に照らされ、緋色の光を放つそれらのクリスタルの内、一つだけ異彩を放つクリスタルに目をとめたノスフェラドムスは隣で同じように眉を顰めているであろう異国の剣士に語りかける

「またしてもベオルイルで魔力の乱れが確認されたようだな。」

本来ならば蒼穹竜族達に一任すべきであるが、一連の事件の関連性を思考すれば彼らがもたらす情報はあながち信憑性に欠如する」

「では某が偵察に」

ノスフェラドムスの返事を待たずにノスラの体を金色の霧が包み、鏡を砕いた時の様な破砕音と共に姿が消えた。

永遠の夕日に照らされた時の溪谷の中で老いた竜は金色の鱗で覆われた首を横に振ると、深い溜息について瞼を閉じた。

19・絶望という名の力（後書き）

何か中二っぽい内容になってしまいました……

カラン達の会話が痛い方向に進まないようにかなり苦戦したのに……

自分の壊滅的な文章力のせいで

「インヴェルノの能力って結局何なんだよ!？」

と全文読んでも意味ピラフな人は沢山いると思うので、ここで少し痛い設定を公開します。

——痛解説に付き閲覧注意——

欲死【ダーイン】

触れたモノ全てを殺す。相手は死ぬ。

リスクは年中死にたい衝動に駆けられる。

絶望【イルダン】

夢も希望も微塵もない圧倒的な力で敵を捻じ伏せる。ゲーム風に説明すると戦闘時だけレベルが相手のレベル+30に成る。場合によつては相手は死なない。

リスクは「望み」が強ければ強いほど叶わなくなる。

これがストッパーに成って死にたい盛りのインヴェルノが死ねなくなったり、触れただけで相手を殺す能力が若干弱体化させられたりするるので、ある意味救済処置とも言える。

契約の仕掛け人はその内公開。

20・狙われた生徒

Side：ジーク

体中の気力を足に集中し、地を蹴る

体の表面に纏わり付かせた気力の鎧で摂氏2000の熱風を弾き返しながら、空中に展開された魔法陣に腰をかける鏡の様な奇妙な仮面を付けた少女に迫る

数え切れぬ戦場を共に渡り歩いた相棒を握り締め、渾身の一撃でその華奢な体を貫くべく——この灼炎地獄から開放されるべく——振りかぶった刹那、

「なら気力が尽きるまで続ければいい。

ScardalIfuoco、【ファイアボール】」

高温にイカレタ耳が脳に伝えた幻聴かと疑うほど小さな声で淡々と告げられた絶望の言霊。

次の瞬間、再び目の前が炎の海に覆い尽くされ、飛来した隕石の様な火玉に高温で液体化した地面に叩き落された。

燃え続ける体の炎を振り払おうと、ジークは両手で胸を掻き毟った。

だがそんな事で消える筈も無く、炎は両手にも燃え移った。

ジークは歯を食いしばり、灼ける身体を地面に擦り付ける。

ぐにゃん、ドロドロに熔解した地面は炎を消しはしたが、変わりにその体を呑み込み、更なる苦痛を与えた。

抜け出そうともがく哀れな剣士に、掌サイズのファイアボールが暴雨のように降り注ぎ、辛うじて地面から抜け出した身体を再び叩き沈めた。

目が焼ける。

耳にドロドロとした、熔解した鉄の様な赤い液体が入り込む。

脳が熔解される――

「……はっ!!」

ジークは眼を覚ました。

炎に焼かれ、死んだ魚の様な澱んだ色に変色した瞳を一杯に見開き、弾かれるように体を起こす。

体を溶かされるような激痛はもうない。

その代わりというべきか、べつとりと体に纏わり付く不快な感触に隻眼の剣士は体に掛かったシートに目を落とす。

長い間使われてないのか――今まで一度も使われた事が無いのか、本来の質は良かったであろう白いシートにはシミ一つ無く、だが新品とは程遠い湿った、かび臭い匂いを放っていた。

身を起こした事によって滑り落ちたシートの間から覗く身体は不思議

議な事に傷一つ無く、炎魔法の集中砲火を受けたのはただの悪夢ではないのか、とさえ思わされる。

だが体中に巻きつけられた包帯が自分が確かに何者かと戦い、傷を負った事を示してくる。

「どうなってやがるんだ？」

一人ぼやくように呟くが、先ほどの悪夢では完全に溶かされた筈の喉も何ら問題なく音声を発している。

部屋の中を見回すと自然光から程遠い、暖かく、しかし暗い光が視界の端で揺れていた。

目を泳がせると、それは床一面に並べられたおびただしい量の蠟燭が発する光である事がわかった。

天井まで届くような高い本棚に囲まれた部屋は寝室というよりも、書齋に近い——いや、蔵書庫と言っべきか。

「……ここはどこだ？」

施療院のはずはない。

壁を黒塗りにする施療院などあるはずもない。

無造作に巻かれた包帯が医療知識のある人間による手当てとは到底思えない。

そしてこのシート、さわり心地からして遺跡や迷宮で見かけた死体

が羽織っている布切れ——つまり風化した布と大差はない。

だからと言って本当に遺跡と言う事は無いだろう、この空間は片付きすぎている、遺跡のような湿ったさもない。

何故自分がこんな奇怪な場所で眠っていたのだろうか？

そして誰が傷の手当をしてくれたのだろうか？

辺りの状況を探ろうと神経を研ぎ澄ませたジークの耳に、壁越しに会話する音が入ってくる。

「……さん、どうしたんですか、こんな時間に？」

「先生の——カラン・フェミスの家はどこ？ 教えて」

雪解け水が滴るような、冷たくも美しい声と、鈴を転がすような澄んだ声。

「カランさん、ですか？」

「すみません、私も知らないのです」

「嘘。」

「目が泳いだ、知っているのでしょうか？」

「ええ、ですが、教える事はできません。」

「……伝えたい事や、渡したい物があるのでしたら私が代わりに渡しますよ？」

しかしどちらも感情の抑揚に乏しく、まるで紙面に書かれた台詞を

読み合ってるような錯覚を覚え、ジークは思わず眉間を寄せる。

「だめ、今直ぐ先生に合わせて

——わたしの心を読んでいるのでしょうか？

ならあなたも解かっているはず、こうなったのは全部わたしのせいなのだと」

「……解かりました。

イーヴンブルック通り13番地です……くれぐれも、気をつけてください」

「？」

「いいえ、気にしないで下さい」

「——うん、ありがとう」

「本当に、似てますね……親子だから、でしょうか」

扉が無造作に閉まる音の後、少し間を置いてから呟かれた女の独り言を最後に、声は止み、同時に気配も消えた。

二人とも出て行きやがったか？

にしてもあの声、聞き覚えがありやがるな……どこでだ？

チツ、こんな状況じゃおちおち考えやがってられねえか。

心の中でぼやくと、ジークはベッドから身を起こし、ドアの傍まで音を立てずに移動し、向こうに気配が無いのをもう一度確認してからゆっくりと取っ手を回した。

ガチャ

開かれた扉の先には無数のアーチが連なった回廊の様な空間が続いていた。

サツと目を流したジークは途端に身構える。

「チツ、やっぱり遺跡か、魔物まで出てきやがって!!」

目の前に佇むのは黒衣の死神。

こちらに気付いたのか、ゆっくりと振り向いたその顔は包帯に覆われていた。

気配を確かめたはずなのにまさかすぐ近くに魔物が居やがったとは、ジークは心中毒づく。と地を蹴って死神から間合いを取り、背中の獲物に手を伸ばす。

だがいつも肌身離さず背負っていた竜牙剣はどこにもなく、極当然に伸ばした手は虚しく空を振った。

……………!

どこに行きやがった、俺の剣！？

「剣、ですか？

運河を漂っていた貴方を見つけた時にそのような物はありませんでしたか……」

「し、死神が喋りやがった！？」

しかも心を読みやがった……

チツ、かなりの上級モンスターだぜ、こいつは……どうする？

「まだ休んでいた方がいいですよ？」

地に足は付いてやがるな……実体化してやがる、だったらギリギリまで引き付けて気功弾をぶち込みやがるか？

「あの……」

地平線に沈んだ残陽が遣す一筋の光に照らされた、凍て付くような青い瞳にどこか困惑の色を浮かべながら死神はゆっくりと近づいてくる。

ゆったりとしたロープ越しでも解かる細長いその体軀が間合いに入った瞬間

「喰らいやがれ、螺旋破掌！！」

体中を駆け巡る気の力を掌に集め、螺旋の如く小型のサイクロンを形成させ、目の前の死神に打ち出す！

地面に散乱した羊皮紙を巻き上げて突き進む破壊の気功弾はしかし、死神の体に触れた途端その勢いを失い、優しいそよ風に成って腰まで伸ばした、艶の良い銀髪を掠めて消えた。

な、何が起きやがった！？

気力が足りなかったか、と考え、再び掌に気力を集め始めたジークに、黒衣の死神は　ふう、と溜息を付き

「そんなに死神に見えますか、私？」

諦めたように首を振ると、その白く繊細な指で顔を覆い隠していた包帯に手を掛ける

「黙りやがれ！

言葉で俺を惑わしやがる心算だろうがそうもいきやがらねえ……ぜ

……？」

相手を否定するその言葉は途中で引つ込められた。

「安心してください、私はれっきとしたエルフですよ。

貴方の身に何が起こったのか、ゆっくりお話ししましょう？」

「あ、ああ……」

機械的で、ぎこちない笑いを浮かべながら感情の無い声で訪ねてくる目の前の絶世の美女に、ジークはただただ頷くだけだった。

S i d e : カ ラ ン

「インヴェルノ、様……ですか？
さあ、私は知りませんね……」

小太りの男はそう言うのと片手でループを直し、申し訳無さそうに笑顔を浮かべてくる。

「そつか……ありがとな」

笑顔に笑顔で返すと、店長が何故か頬を赤らめた。

お酒の飲みすぎか？

つていうか、営業中に飲酒かよ……

自分の笑顔が原因だと知る余地も無いカランはジト目で店長を睨むと、もう用は無いとばかりに踵を返し、アイルンボッド魔導書店か

ら外に出た。

「ここにもいないなんて、どこ行っただよ……インヴェルノ」

溜息混じりに呟くカランの頬を、冷たい冬の風が掠める。

その先を追うように目を向けると、何時の間にか空の色はオレンジから紫に変わっていた。

もうこんな時間か……マグレーンさんの所にも居なかったし、もしかしたら行き違いになって今は時計塔に戻ってるかもしれないな

とにかくリアが大丈夫だつて教えないと、思い詰めて自殺——は出来ないんだっけ、呪いの代償で。

でもあの性格だとどこまでも自分を追い詰めそうだ。

……あいつのせいじゃないのに

日が沈むと同時に浮上するはずのオーロラは今日も無く、地面からの青い光だけで照らされたベオルイルの町並みに以前のような賑わいぶりはない。

外界から守ってくれる防御壁が消失した事で市民の安全感も同時に崩れ落ちたのだろう。

いつもならこれからの商売に備え、露天席を設け始めるレストランも今は慌しく閉店の準備を進めていた。

あと半刻もすれば衛兵達が徘徊し始め、町は静まり返る。

帰途を急ぐ人々とすれ違いながらカランは貿易区と居住区の間にもびえ立つ古びた時計塔に向う。

ベオルイル建設以来住民達のために黙々と時を刻み続けてきたその塔は雨風を凌ぐべくインヴェルノが身を寄せる屋根でもあり、ミラからその話を聞いた時に心を締め付けられるような気持ちになったのは記憶に新しい。

城門から賢者の大階段まで続く大通りを横切り、売れ残った商品を倉庫に回収すべく忙走する商業ギルドの馬車の傍を通り抜け、町全体に掛かっていた保温魔法が消えたせいで一気に枯れ始めた並木が並ぶ住宅街の路地を過ぎると、ベオルイルの建築風味にそぐわない、どこか古めかしい時計塔が目の前に立ちはだかった。

入り口らしき鉄の扉は硬く閉じられているものの、鍵は掛かっていない。

カランが軽く押しただけでその扉は難なく開いた。

「暗いな……」

C a s t S p e l l 6 3 4 【光霊】
「ウィルオウイスプ

目の前に広がる、五指も見えないような漆黒の闇にカランは本能的に身構え、照明魔法の役割も果たせる防衛魔法、【光霊】ウィルオウイスプを発動した。

ポケットに仕舞った金貨コインを核にして生み出された、暖かい光を放つ光の精霊はカランの周りをクルクルと回りながら上昇して行き、最終的にカランの肩の高さで止まった。

これからカランに害を成そうとする者が現ればこの光の球体は問答無用で殲滅に出るだろう——もっともこんな街中に魔物がいるわけがない。

そんな確信から発動した術なのだが、召喚された光の精霊はその予想を裏切って彼女の元を離れ、塔の頂上に向って一直線に突進し始めた。

「魔物が居るって事が……どんな物件に目付けてるんだよ、インヴェルノのやつ」

脇目も振らずに突進していく光の精霊をジト目で眺めていたカランだが、その向う先が時計塔の頂上である事に気付き、顔色を変えた。勘の鋭いインヴェルノなら近くに魔物が居る事ぐらい気付く。

まさか、インヴェルノの身に何か起こったと言っのか？

ネツイウメラハ
【虚空光柱】

念じると共にカランの足元を白い霧が浸食し、どこからとも無く囁かれる擦れた女の声と巻き上がる白い羽毛が漆黒の闇を白く脱色させた、その刹那

フゴオオオオオオン

足元のポータルから凄まじい勢いで虚空の空気が噴出され、小さな体が宙高く打ち上げられる。

攻撃用魔法を自分にかけて宙に飛んだカランは空中で漆黒皇女を捻ブラッククイーンり、刀身からのジェット噴射を利用して体勢を立て直すと、軽い音

を立てて屋上に着地した。

冷たい夜風が吹きぬけ、寒さに強い筈のカランでさえ思わず身震いする塔の頂にはすでに先客が居た。

「やはりそなたであつたか……」

どこからとも無く響く凜とした声。

弾かれるように声の方に振り向くと、そこには柱に背を凭れ、腕組みした細身の侍——ノスラが居た。

暗闇の中でも仄かに光を放つエメラルドの瞳は真つ直ぐこちらを見据えている、しかし敵意は感じ取れない。

「ノスラ……何で、お前がここに居るんだよ？」

「それは某の台詞だ。

なにゆえ

何故に此の時期に此处を訪れるのだ？

拳句の果てに蒼穹竜族が目を光らせている此の場所で此程の魔力を放出するなど……」

露骨に怒りを露にした言葉と共にかざしたノスラの手から金色の霧が溢れ出し、仄かに光を放つ小さなコイン——先ほど召喚した光の精霊の灰燼が零れ落ちた。
かいじん

光霊が捉えた標的とはノスラの事だったのか——

なにゆえ

「何故につて、友達を探しに來ただけだけど、悪い？」

「というか何でそこで蒼穹竜ブルーの名前が出てくるんだよ？」

恐らく媒介に付与した魔力が切れるまで時間流に幽閉されていたであろう光霊、そんな事が出来るのはこの場ではノスラしかない。

そう思うと無意識に声が陰しくなる。

しかしそれすらも予想内だったのかノスラは表情を変えず、やれやれと肩を竦めて見せた。

「その友人と言うのはインヴェルノ・カラヴェーナという名のハーフェルフの少女ではないのか？」

コクリ、と頷き、肯定の意を示すと、無意識に首を傾げたカランの疑問を読み取ったノスラは続ける。

「先ほど竜脈級の魔力の放出が此のベオルイルで確認された。具体的に言うならば地下闘技場とか言う場所で彼女から放れた魔力であるが、

彼女の過去を覗いたところそれが悪魔との契約によって得た力だと解かった。

故に某ら琥珀竜族の管轄外ではあるが、蒼穹竜族はそうも行くまい……狙われているぞ、そなたの生徒が」

付け足したノスラに、カランの表情が強張る。

「じゃあ あいつは……！」

「案ずるな、未だやつらに見つかってはいまい。彼女もまたそなたを探している。

そなたに古代神界魔法を使わせた事を悔恨しているのだろう」

はっ、とした表情になるカランに、ノスラは目を閉じ、

「彼女が蒼穹竜の手に落ちる事は某らに取っても非でしかない。
……急げ、時が迫っている」

時計塔から飛び降りるカランの気配を感じながら淡々と告げた。

S i d e : イ ン ヴ ェ ル ノ

「「待てえー!!」」

呼吸を乱しながらも走り続ける少女の後ろを、裾の無い戦闘用ロ―ブに身を包んだ衛兵の二人組みが声を張り上げながら追う。

どつりでクロニカが教えないわけだ、カランの家がまさかあの大隠居者バレストの豪邸だったとは。

【透明化^{インビシブル}】の魔法で門番を掻い潜ろうとしたインヴェルノだが、相手が悪かった。

精鋭衛兵^{ロイヤルガード}だけあって魔法の対策は万全だったらしく、魔法を解除されたインヴェルノは制止を振り解いて邸内に駆け込み、今の様な状態に成った。

体力はもう限界、か。

騒ぎは起こしたくなかったけれど、これ以上時間を無駄にする訳にはいかない。

だから、恨まないで

「もう逃げられないぞ、観念しろ！」

壁の一角に追い込まれ、足を止めたインヴェルノを警戒しながら、衛兵たちはゆつくりと包囲網を狭めていく。

「……S e n z a G u a r d a r e、【ブラインド】」

背後から近づいてくる衛兵たちに聞き取れない程度の小さな声で詠唱を完成させたインヴェルノは振り向くと同時に衛兵たちに向って右手を突き出す。

ボロボロのロープの間から覗く、黒曜石のプレスレットが妖しく光を帯び、次の瞬間

キィィィィン！！

夜の闇を白で塗り潰すほどの凄まじい閃光と、浮遊していた【アレイティアの乙女】達が揺れるほどの爆音が迸った。

相手の視覚と聴覚を同時に奪う魔法、ブラインド。

平たく言えばスタングレネードの魔法バージョンだが、インヴェルノの【絶望】の力に

よって強化されたそれは敵対する者の視力と聴覚を永久に奪う凶悪

な魔法と化していた。

「へあああああ!!」

目があ！ 目があああああ!!」

両目や耳を押さえ、喚き苦しむ衛兵達を気の毒に思いながら、予想以上の威力を誇ったブラインドに引き付けられた他の衛兵たちに見つかる前に撤退すべくインヴェルノは素早く身を翻した。

庭園の中央の噴水を通り抜け、正門に着く、その前にふと、インヴェルノは足を止め、身構えた。

「ここから出して」

「……なんだ、もう人払いの結界に気付いたのか？
小賢しい事に勘だけはいいいようだな、定命種族の癖に」

「お願いだから、出して——わたしは急いでいるの」

背後に居るであろう、皮肉めいた声の主に振り返る事無くインヴェルノは抑揚の無い声で告げる。

「急いでる？」

それはお前の都合だろう？ 俺と何の関係があるんだ？

研究材料の都合など俺には関係ない話なのだが。

むしろわざわざ出向いてやった俺の都合を考えて大人しく捕まってくれと嬉しいのだが」

「——わたしを捕まえに来たの？」

衛兵じゃ無いのは確か、あなたは何者なの？」

「エイヘイ？ …… ああ、衛兵か。
この俺がそんな定命種族の下衆に見えるか？」

相変わらず皮肉めいた声を発し続ける背後の存在にインヴェルノは
切れ長の目を更に細めた。

「質問に答えて」

「…… 人の話し聞いてないのか？」

ああ、定命種族だから知恵が足りないのか。

実験材料何かと話してあげてるだけでも身に余る光栄だって知らないのか？

まあいい、特別に教えてやろう。

俺は蒼穹竜ブルードラゴンクリラファエル、竜脈に匹敵する魔力を放つお前を捕らえに来た」

竜ドラゴンという単語に相手の格を理解したインヴェルノが振り向くと、そこには背中から爬虫類の翼を生やした人間の少年が、その青い髪を風に靡かせながら佇んでいた。

——そういう事、か

でも、わたしはここで止まるわけにはいかない

先生が待っているのだから

上半身だけ振り返ったインヴェルノは完全に振り返り、心なしか口

元を歪める目の前の竜人を正面から見据えた。

20・狙われた生徒（後書き）

久しぶりの更新です

試験戦争もどきに巻き込まれ、何とか生還しました。

途中でインヴェルノのイラストを更新したりもしてますが――
ジーク「んな事してる暇あったら小説更新しやがれ」

後悔はしてないと言っておきましょう（ニヤ）

21・嵐の夜のデスマッチ

Side：インヴェルノ

音と光を遮断し、外界を隔てる結界の中で静かに対峙する者達が出た。

「愚かな、この俺から逃げられるとも思ってるのか？」

先に言葉を発したのは伸ばした蒼い髪で顔の半分を隠した少年だった。

片手を腰に当て、目を閉じて溜息を付いて見せるその言動こそ傲慢だが、ゆっくりと開かれたダークブルーの瞳には殺意が宿っていた。殺意を隠す事無く正面からぶつけてくる蒼穹竜の少年、クリラファエルに怖気づく事無く、インヴェルノはその紅玉の様な透き通った、しかしどこか虚ろな真紅の瞳で睨み返す。

「うっん、そうは思わない。」

——逃げる心算はない、でも少しだけ時間が欲しい。
薬を届けないといけないから」

「ふん、良い訳ならもっと上手い物を考えるんだな、この歩に及んで他者を思いやる？」

断じてありえない。

自らの利益の為に平気で他者を犠牲にしてこそその定命種族だ——だからこそ愚かな生き物なんだ」

トーンの低い声で言い切ったクリラファエル。

その目は俯いており、インヴェルノを映さない。

相手に伝えるところよりも、自分に言い聞かせているような素振りにインヴェルノは切れ長の目を更に細める。

「そうね。

人は、平然と他人を傷付ける。

——そうやって、他人の不幸を目の当たりにする事でしか自分の幸せを測れないから」

鈴を転がすような澄んだ声は感情を宿しておらず、ぼんやりと前を見据えるその瞳から言葉に宿る感情を読み取る事は出来ない。

唯一、ぎゅっ、と握り締めた小さな手を除いては。

「でも、それがわたしと何の関係がある？

こんなわたしに幸せに甘える資格は無い。

人の不幸を嘲笑う事しか出来ない奴らと同じには成りたくない、ただそれだけ」

なのにわたしは傷つけた。

こんなわたしに構ってくれた、優しい赤の他人を。

だから

スツと突き出した右手、ぼろぼろのローブの袖から覗く黒曜石の腕

輪が妖しい光を帯びる。

「Dea Della Argentotroto Via Lattea
a Guerriglia Cacciatore Fu
lmini Torna Il Giudizio Prender si G
io co Di Tutta La Polvere、【サジタリアの狩乙
女】」

わたしのせいで彼女をこれ以上傷つけない。

たとえあなたが竜人でも、邪魔をするのなら——容赦しない。

抑揚のない声で読み上げられた呪文。

雲ひとつ無い晴れ渡った夜空は月の光をも通さぬ分厚い雷雲に一瞬にして覆われ、獣の唸り声にも似た雷鳴が大地を震わす。

ぽつん、と地面に当たった最初の雨粒を機に、銃弾の様な大粒の雨粒が止め処なく降り注ぐ。

「……ふん」

髪を、服を、肌を濡らし、体温を奪っていく零度の暴雨を避けるように、クリラファエルが翼を広げた刹那——

ピシャアアアアン！！

不健康な光を放つ雷の槍が彼を飲み込む。

ピシシシシシヤアアアアアアアアン!!!!!!

無数の落雷が雨水を伝い、クリラファエルを捕らえ延々と降り注ぐ絶え間なく落ちる雷に漆黒の夜の色は不健康な白に固定され、ゲーム機がフリーズした時の様な耳障りな音が超大ボリュームで鳴り響く。

辺り一体の石畳の地面をガラスの様に変化させてなお一点だけを捉え、降り注ぎ続ける豪雷の嵐。

幸いというべきか皮肉というべきか、クリラファエルが事前に張り巡らした結界のお蔭で今起きている事は外には漏れない、逆に言えばこの一方的な暴虐を止めに入るものはいないだろう。

幾千幾万と降り注ぎ、終わる兆しが一向に見えない目の前の絶望的な自然災害から興味無さそうに目をそらしたインヴェルノは眩い電光に照らされた尖塔状の豪邸に向つて走り出す。

しかしその行く手を雷の刃が切り裂いた。

弾かれるように雷が飛来した方向に目だけを向けると、ジューウジューと煙立つ液体化した地面から浮いた半竜人が青白い光を放つ双翼と同様に竜化した右手を天にかざしてこちらを向いていた。

「愚かな……」

蒼穹竜に魔法が効くとも思ってるのか？

ああ、そうか、ちつぽけな利益のせめぎ合いに明け暮れる定命種族は世界の真理を知ろうとは断じて思わないのか」

不透明な鱗の間から覗く青白い光がその強さを増した瞬間、絶え間なく雷を落とした雷雲は瞬く間に霧散した。

そして降り注いだ最後の雷槍も、広げた双翼に吸い込まれるように消え、応じるようにその翼は光を増した。

「――魔力を吸収した、か」

「ふん、定命種族にしては頭が回るな。
そうだ、魔力を司る蒼穹竜には如何なる魔法も通じない、やるだけ無駄だ」

別段驚いた様子も無く蒼穹竜の特性をただありのまま聞き入れるインヴェルノ。

吸収した魔力を咀嚼するように翼を明滅させたクリラファエルは忌々しげに目を開く。

「……この魔力、貴様自身の物ではないな。
そもそもこの世の物ですらない――貴様は何者だ？」

その問いかけにインヴェルノはぼんやりと宙を漂っていた視線をクリラファエルに戻すが、答える心算はないのか、答えを知らないのか、それ以上の反応を示さない。

そんな彼女にクリラファエルは ふん、と鼻を鳴らす。

「己の欲望を満たすためだけに世界の調和を乱す……やはり定命種族とは欲深いものだ。」

まあいい、その力の由来が異界であると解かった以上研究で力の由来を探る必要もなくなった。

世界の調和をこれ以上乱さないようこの場で貴様を滅ぼす！」

クリラファエルの周囲に純粋な魔力の球体が幾つも浮き上がる。

青白い光を放つそれらの球体はゆらゆらと宙を漂いながら拡散していき、パチン、と鳴らされたクリラファエルの指を合図に一齐にインヴェルノに迫った！

「——っ！」

不規則な軌道を描きながら迫る大量の青白い光弾を、身を翻して避けるインヴェルノ。

最初の数発は辛うじて見切ったものの、絶え間なく迫り来る光弾を避けるのは不可能と判断すると、被弾する前提で体の要所——顔と胸部を守る事に専念した。

「くうっ！」

被弾した所から神経をヤスリで削がれるような痛みが伝わってくる。

白くキメ細かい肌に所々痣ができる、それでも何とか踏ん張っていたインヴェルノだが、腰と顔面を目掛けて同時に飛来した二発の光弾に目を細める。

回避は間に合わない、腰——ウェストポーチにはエリクサーが入っている。

これだけの威力の光弾を受ければ確実に割れる。

そして頭部——目を狙った光弾、ポーチの中身を守れば確実に被弾し、失明するだろう。

嘲笑うように空中で回転した光弾が迫るなか、インヴェルノは何の躊躇いもなくウェストポーチを両手で押さえた。

ぷちゅっ、凄まじい量の光を最後に、葡萄が潰れるような音が右目から頭蓋骨を伝って鼓膜を震わす。

脳を握り潰されるような痛みを意識が飛びそうに成るのを歯を食いしばって耐え切ると、頬を伝う赤が混じった半透明のゼリー状の液体を手で拭い取り、目の前で目を見開く少年を正面から睨みつける。

「……貴様、命が惜しくないのか？」

「こんな命が惜しいと思った事は今まで一度もない。
殺したいのなら、そうすればいい」

強がりでも、気が触れたわけでもない。

ただありのままの事実を述べているような客観的なその口ぶりにクリラファエルは眉間を寄せる。

そんな彼に興味を失ったように視線をそらしたインヴェルノは、彼の背後にそびえ立つ尖塔状の建物に目を向けた。

「ただ、償いたい事がある。
わたしのせいで傷ついたヒトに償いをしたい。」

——少しだけでいい、時間を『やはり言い逃れだな！』」

予想外の彼女の言動に啞然としていたクリラファエルだが、時間を稼ぐような彼女の言動を無理やり曲解し、憎しみに満ちた言葉で己を隠すと、翼を広げ、巨大な魔弾を形成する。

「ああ、そうだ、間違いない！

貴様ら定命種族が死を恐れないはずがない！

己の為なら他者を平気で犠牲にする醜い生き物なのだからな！！」

勢い良く放たれた魔弾の威力は凄まじいがしかし、射線は直線的で、とっさに身を屈めるとあっさり避けれた。

「死を恐れないのなら何故交わす？

答えは明白だ、死が怖いからだ！

もっと言ってみろ、己の身可愛さに他者を犠牲にして口実を並べる醜態を晒せ！」

「それなら、お願いがある。

——これを、この館の住人に渡して」

ほんの少しでも気を緩めばそれだけで意識が飛んでしまいそうな激痛を、爪を掌に食い込ませる事で無理矢理繋ぎ止めたインヴェルノはウエストポーチに大切に仕舞っていたエリクサーを取り出す。

相変わらずどこか虚ろだが、強い意志を感じる目で真っ直ぐ見つめてくる少女とその手に握り締められた青白い液体が入ったクリスタルの薬瓶をクリラファエルは交互に見比べ、言葉を失う。

どうしたの？ と片方だけ残った、紅玉の様な美しい目で訴えてく

る少女から後ずさると、後ずさった分だけ彼女は迫る。

「……違うつー!!」

任務の遂行に疑問を抱かぬよう、敢えて定義して来た定命種族の認識を完全に覆す目の前の少女をなぎ払うべく振りかぶった右手は小さな手に握り締められた薬瓶を張り飛ばした。

「そんな筈はない！

貴様ら定命種族が他者を思いやるなど、断じてありえない！

そうだ、間違いない、これは貴様の演技だ、この俺を掻き乱すための演技に違いない！」

あつ、と小さな悲鳴を漏らしたインヴェルノの手から離れたクリスタルの小瓶は空中で放物線を描いて地面に当たり、粉々に砕け散った。

ピシャン、と四散した青白い光を放つ液体を虚ろな目でぼんやりと見つめるインヴェルノに、声を荒げたクリラファエルの言葉は届かない。

まるで締め付けられるように、心が苦しい。

何故？

——酷く懐かしい感じ、こんな気持ちに成った事が、こんなわたしにもあったの？

「……貴様、演技の癖に何故泣く？」

「——泣いてなんか、ない。

これは痛みから来る本能的な涙。

ヒトから幸せを奪い取る事でしか自分の存在を感じられない、醜いわたしに相応しい、醜い液体だ——」

目の前で大粒の涙を止め処なく流す可憐な少女に言葉を失ったクリラファエル。

相手に伝えるためではなく、自分に言い聞かせるために口を動かした言葉を紡いだインヴェルノは俯せた顔をゆっくりと上げた——

「だから、あなたのすべてを、わたしは壊す」

感情という感情が一切消え失せたインヴェルノはまるで呪術師に操られた殺人人形のように機械的で規則正しい歩幅で目の前の蒼穹竜に向って歩き出す。

「……貴様、何故近づく？」

逃げる、命乞いをしろ、これ以上俺を乱すな！」

なぎ払った手から発せられた魔力の飛礫は目の前の幽鬼のような少女を捉える。

だが、それらの魔弾は彼女の体に触れた瞬間蒸発して消え、彼女が歩いた道もまるで色素が抜けたように白い灰燼と成り、風に吹かれて消えた。

「本性を表したな……！」

触れたモノ全てに滅びを与える、得体の知れない目の前の存在に本能的に慄いたクリラファエルは翼を扇ぎ、数十メートル離れると、腰にさしたサーベルを彼女に突き出し、翼に溜め込んだ膨大な量の魔力を集中させる。

「Sc on f i t t a O n o r e v o l e I l N e m i c o D i F
r o n t e A l C a s o S i T a g l i a n o T u t t i I F u l
m i n i D i v i d e r e S c o n f i t t a O n o r e v o l e、
【エルメストの雷槍】」

虚から生み出される雷電が血のように赤いサーベルにまとわり付き、三つ叉の槍を形成する。

それを目の前でぼんやり見上げてくる幽鬼の様な少女に向って振り下ろした刹那――

「ぐあはっ!？」

結界が砕け散る破砕音と共に残影を遺して過ぎ^よった白い幻影がクリラファエルの腹部にめり込み、くの字に折り曲げて吹き飛ばした。

ワンテンポ遅れて響く、高速の余り置き去りにされたジャラジャラという金属が擦れるような音の元を辿るとそこには雪のような白い髪を左右長さが違う奇妙なツインテールに纏めた妖精と見紛う小さな少女が立ち尽していた。

「俺の仲間に手を出すな!」

「先生——」

控えめだが、微かに震える声の主を安心させようと笑みを浮かべて振り向いたカランは、変わり果てた少女の姿に言葉を失った。

「ごめんなさい」

その原因が赤い血を止め処なく流す自身の右目と悟ったインヴェルノは慌てて顔を背け、地面に散った青白い液体に視線を留める。

カランはその視線の先を追う事無く、慌ててインヴェルノに駆け寄る。

「お前、その目……！」

大丈夫か!？」

「近寄らないで！」

グラツとなって、倒れそうになるインヴェルノを慌てて抱きとめようとするカランだが、発せられた鋭い声に伸ばした手が宙で固まる。

何とか踏ん張ったインヴェルノだが、その足元はおぼつかない。

そんな彼女を見ていられず、反射的に【トータルヒーリング】を掛けそうになるが、目の前でこちらを窺っている蒼穹竜の事を思い出し、ギツ、と歯を食いしばって詠唱を中断した。

「……ごめんなさい、じゃねえよ！」

何でこんなに成ってまで助けを呼ばないんだよ……！」

「あなたとは関係ない、これはわたしが招いた因果。だから、巻き込まれる前に颯爽と立ち去って。」

「——じゃないと、たとえ先生でも——撃つよ」

そう言ってインヴェルノは近づくカランから後ずさって手をかざし、威嚇じゃない、と言わんばかりに黒曜石のブレスレットに魔力を込めてみせる。

先ほどの雷雨に匹敵する魔力を込めたのだが、目の前の妖精は怖気付く事無くその透き通ったサファイアの様な瞳で真っ直ぐ見上げてくる。

「因果って、何格好つけてんだよ……」

ミラから聞いたぞ、呪いの事……リアの事、守るために仕方なく傷付けたんだろ？

だからあれはお前のせいじゃない、むしろ胸を張って良いんだぞ」

「——放って置けばいいのに、こんなわたし」

ボソリと呟いたその言葉に、カランは盛大に眉間を寄せる。

「勘違いするな！

……ミラが余りにめそめそするから来てやったただだからな。

それにテールブルの弁償代、割りカンで一人1Gだからな、勝手に拉致られると困るんだよ」

「——解かった

でも、彼に魔法は通用しない。

だから先生じゃ手も足も出ない」

心配してるのか、クリラファエルと対峙しようとするカランを呼び

とめる。

そんなインヴェルノにカランはニイと口元を吊り上げ、甘い笑顔——もといキザな笑み——を浮かべる。

「大丈夫、戦闘力^{レベル}85のやつに負ける気はないから」

可愛い——いや、何を考えているの、わたし。

先生と言ってもまだこんな小さな子供なのに——

止めないと

その表情に一瞬だけ見入ったインヴェルノだが、頭を振って雑念を吹き払い、呼び止める言葉を搜して思考を巡らせると、背中に担いだ二本の機械剣^{ブラッククイーン}を抜き取ったカランはすでに数十メートル離れたところでクリラファエルト対峙していた。

> i 3 2 6 5 9 — 3 5 4 6 <

「最後の挨拶は交わしたか、定命種族の女。

……聞いているだけで鳥肌が立つ様な内容だったがな」

カランのタツクル攻撃を警戒してか、空中で旋回しているクリラファエルは嘲笑うような言葉とは裏腹にいつでも向い打てるよう赤き血のサーベルを竜化した右手で構えていた。

目の前の蒼穹竜がインヴェルノの右目を潰した張本人だと容易に想像が付いたカランは無言のまま彼を睨み、機械剣のグリップを捻り、魔力を溜め込んでいく。

「あつそ、寿命短くつて悪うございましたよ！
ただどな、寿命が短いからってアンタに運命を滅茶苦茶にされる筋
合いはないんだよ」

インヴェルノに見せた笑顔が嘘の様な、凜とした表情でクリラファ
エルと対峙するカラン。

そのただよらぬ気迫に押されたクリラファエルは羽ばたく事を一瞬
忘れ、危うく墮ちそうになり慌てて翼を扇いだ。

「威勢だけはいいようだな、だがそれも何時まで持つ事か
FullminidivisoInTreeCoppieDiFrecc
eCelcius、トライアングルスパーク！」

「うわなんて死亡フラグ」

迫り来る三束の雷電を余裕たつぷりにジト目で見つめ、わざとらし
い声を発するカランだが、意識に関係なく回避運動を取る体を抑え
るのに敢えて気をそらしていると言う事は本人だけが知る。

ギリギリまで迫った電撃をカランはアダマタイトの双剣を地面に
突き刺して避雷針代わりにする事で受け流す。

電気系は駄目だと悟ったクリラファエルは間入れずに手に水のエネ
ルギーを溜めはじめるが、それこそがカランの狙いだった。

地面に付き立てた機械剣を抜き取ったカランはすかさずバイクのア
クセルの様なバーを握り、剣身からジェット噴射される魔力を動力
源に宙を飛び、遙か上空にいたクリラファエルとの間合いを一気に

詰めた。

クリラファエルは接近を許すまいと完成した水弾をカランに向けて撃ちだすが、追尾性と速度に秀でる電気魔法とは違い、物理的打撃に重心を置いた水弾はほぼ直線にしか撃ち出せない。

二本の機械剣を器用に操り、空中でアクロバティックな方向転換をこなしたカランはそれらの凶弾を全てかわしきった。

「くっ……厄介な武器だな」

「……喰らえっ！」

ブフオオオオオオン！！

アクセルバーを限界まで握り、ありったけの魔力を放出して放たれるカラン流剣法。

自身が力を込めている訳ではないので、刀筋が不規則な二閃はまるでギロチンのように上下二方向からとっさに竜化した右手でガードしようと思ったクリラファエルに迫る。

ズシャツズシャツ！

刀身を潰していたにもかかわらずガードしていた右手を貫いた自分の剣に目を見開くカランだが、剣が貫通した青白い光を放つエネルギー体の部分を覆う硬質の鱗が凝縮し、刃を挟んだ事で初めてクリラファエルの真意に気付く。

「魔法が使えない以上その剣だけが頼りだろうか？」

ならこれでどうだ!？」

そう言って高速で右手を振り回しはじめるクリラファエル。

柄を握っていたカランの小さな体もそれに連られ、滅茶苦茶に宙を舞う。

遠心力で投げ飛ばされるその一瞬前まで刀身に膨大な量の魔力を注ぎ込んだが、アクセルバーを握る前に手が柄から離れ、小さな体が宙を舞った。

「……くっ!!」

この状況で虚空魔法なりGMコマンドなりを発動すれば理に反する術として蒼穹竜である目の前の少年に目を付けられる事になる。

何とか地面すれすれでネサティックキャンセルを使おうと決め、重力に従って成す術もなく落下してみせるカラン。

しかし、

パイイイイイン

結界に当たった時の様な効果音と共に、加速しながら落下していた筈の体が宙に止まる。

「させない——」

頭上から静かに響く凜とした声、尻餅を付いた手元を見ると複雑な幾何学模様の魔法陣が規則正しく回転しえいた。

「またしても下らない演技か……！」
これ以上俺を掻き乱すな！」

事態が掴めず、キョトンとした顔のカランの背後、背中合わせで魔法陣に腰を掛けていたインヴェルノにクリラファエルは忌々しそうに声を荒げ、双剣が突き刺さったままの右手を掲げた。

勝ち誇ったような笑みを浮かべるクリラファエルに応えるように光を増す右手——魔法陣を形成する魔力を吸収しているのだ。

この高さから落下すれば命はまずない、カランの身を案じて振り向いたインヴェルノの目に映ったのは、悪戯が成功したようにニイと口元を吊り上げた幼いハーフェルフの少女だった。

その視線の先にあるのは、クリラファエルの右手に突き刺さったままの二本の機械剣。

予めパンク寸前まで魔力を注ぎ込んだ機械剣にクリラファエルが吸収した魔力が注ぎ込まれるとどうなるか——

ボカアアアアアン！！

答えは簡単、魔圧に耐え切れず、爆発を起こす。

アダマンタイトの破甲手榴弾が体内で爆発を起こす。

肉体が魔力によって構築された蒼穹竜であるクリラファエルは手を覆う鱗こそ跡形もなく吹き飛んだものの、右手を失う事は何とか免れた。

だが爆発の威力は彼の意識を吹き飛ばすには十分だった。

ヒュウウウウウ、と重力に従って加速しながら落下するクリラフ
アエル。

「あつ」

暗闇に青白い光のラインを引きながら落下するその光景をぼんやり
と眺めていたインヴェルノは不意に声を漏らす。

「どうした？」

「――魔力が、足りない」

振り向いたカランから目をそらし、眼下に広がる闇を見つめながら
呟いた刹那

ピシッ、魔力の枯渇により固体化が難しくなった魔法陣に亀裂が走
る。

「ごめんなさい、やっぱりわたしは先生を巻き込んで不幸にするだ
けね」

そういつて魔法陣の縁に手を掛け、飛び降りようとしたインヴェル
ノの手にひんやりとした柔らかな感触が触れる。

「触らないでっ――え？」

反射的に声を張り上げたインヴェルノだが、白く脱色した袖から伸
びた白く繊細な5本の指は確実に自分の手を握り締めていた。

ハッ、としてカランの顔を見上げるが、蒼空をそのまま切り取ってきたような蒼い瞳は真っ直ぐ自分に向けられており、精気を吸い尽くされ倒れる素振りはない。

「そんな訳ないだろ、この魔法陣が無かったら俺はとつくに死んでたかもしれないしな」

「でも、もう長く持たない——やっぱり私のせいだ、どうしてこんなわたしに構うの？」

「どうしてって、お前が心配だからに決まってるだろ？」

当たり前のように帰って来た返事にインヴェルノは目を見開く。

なんで——？

わたしが心配だから？ ミラだけで十分なのに、なんで？

パライイイイン

むなしく響く破砕音に続き、頬を掠める冷たい風の音。

こんなわたしに構うから、こうなる。

繋がれた手を振り解こうとするインヴェルノだが、痛みを感じない程度の強さで握り締められた手はまるで万力のように幾ら力を込めても引き剥がす事が出来ない。

「離して、最後の魔力であなたを地面に転送するから。
わたしの魔力ではもう一人が限界なの、だから手を——っ!？」

心なしか頷いたように見えたカラン、てっきり放してくれると思っ
たインヴェルノだが、握り締められた手に力がこもり、次の瞬間自
分はカランに抱き寄せられていた。

どうして、と呟くインヴェルノにカランは風に吹かれ滅茶苦茶にな
った前髪から覗く瞳を向ける

「死にたい盛りで大変なのは解かるけど、本当に死んじゃうとミラ
が落ち込むから、勝手に死ぬな。」

Cast Spell 10032 【召喚：愛のプチ天使（バ
レインディー仕様）】

呟かれた禁断の魔法と共に天から無数の光柱が降り注ぎ、緑色の皮
膚に不釣り合いな白い天使の翼を持ち、【PEACE & amp; MO
NEY】と書かれた法被を纏ったインプ達が舞い降りた。

『『いよお姉貴！ 世の中はマナーですぜ!!』』

21・嵐の夜のデスマッチ（後書き）

ども、連載を始めて早2ヶ月、今頃になって活動報告という機能の存在に気付いた書いてる人こと内臓破裂です。

更新が遅いなーと思ったらポチッと押してみてください、執筆状況を載せていきます。

ちなみに今回更新が遅いのはゲームに嵌まっていたからだぁ！（おい）

バレストとのやり取りから何となくツンデレ伏線をしていたカランが今話に成ってはつきりとツンデレ発言を！

時代がそろそろ動き出しますかね兄貴

22・咎みを償う男

Side: カラン

古代神界魔法によって召喚された、天使の翼が生えた小さなインプ達は呆然とするインヴェルノを抱いたまま落下するカランを空中で引き止め、穏やかに着地させると チャリン、と金貨を弾くような音を残して消えた。

何が起きたのか解からず、金色の光となつて消え急ぐ天使と未だ自分を抱きしめている蒼白な少女を見比べるインヴェルノ。

「先生——離して」

素っ気無く呟かれたその言葉に『え?』と返してしたカランはインヴェルノの背中に手を回し抱擁している自分の動作に気付きくと、

「……え!? ご、ごめん!」

ズザと擬音がするほどの勢いで慌てて後ずさった。

目の前で顔を真っ赤にしてアタフタする小さな女の子。

訳がわからず目を細めるインヴェルノだが、それを軽蔑の意味と受け取ったカランはさらに掌を合わせて頭を下げ始める。

「——なんで、謝るの?」

「何でって、勝手に抱いた事怒ってるんだろ?」

「うっん、怒ってない。」

だからもうやめて——あやまらないといけないのは、わたしの方だから」

そう言つて頭を下げようとするインヴェルノだが、辛うじて立てる力も残つておらず、その場に崩れるように倒れこむ。

「大丈夫か!？」

「——平気」

弾かれるように駆け出すカラン、そんな彼女の助けを拒むように首を振ると、インヴェルノは視線を地に落とす。

「またわたしのせいで古代神界魔法を使つてしまったのね。

——やっぱり、わたしに関わらないで」

「それとこれは関係ないだろ？」

……あの時使わなかったら俺も死んでたかもしれない——だからこれはお前のせいじゃない、そんなに自分を責めるな」

『でも、』そう言いかたインヴェルノだが、辛うじて体を支えていた手から力が抜け、軽い音を立てて暴雨に濡れた石畳の地面に倒れた。

——もう限界なのだ、ぼろぼろの身体も、繋ぎ止めた精神も。

去り際にミラから言われた言葉が脳裏に蘇る。

『どんなに辛くても、ヴェルの前で暗い顔だけはしないで
何でもかんでも自分のせいだって思い込むから、あいつ』

『——センサーを信じないわけじゃない、けどこれ以上あいつを悲しませないで

……お願いだから』

「『私さえいなければ誰も傷つかずに済んだ』、か」

その考えは痛いほどに良く解かる——悪気が有った訳じゃないのに、ただ単にその場に居合わせたから起きた、それだけの悲劇。

そして一番悲しい事は、その悲劇が『運が無かった』の一言で片付くと言う事だ。

「だけど」

インヴェルノの背中と膝裏に手を回し、所謂お姫様抱っこで抱き上げたカランは誰に言うでもなく呟く。

「不幸なのは誰のせいでもない。

だけど、不幸を不幸で諦めたらそれはお前のせいだろ」

「止めを刺さぬのか？」

所々落雷の衝撃によってガラス化した前庭を通り過ぎ、噴水に隔てられた玄関に差し掛かったその時、背後から響く凜とした声にふと、

足を止める。

「うん、もう勝負は付いたからな」

「仕返しに来るかも知れぬぞ？」

警告するように告げられたノスラの言葉にカランは『やっぱり』と言った感じに溜息を付いた。

そして訝しげに眉間を寄せているであろう背後の琥珀竜に上半身だけで振り返り、同情とも憐憫とも取れる表情を向ける。

「仕返しに来るって決まった訳じゃないからな

……それでも懲りずに来たらその時はまたぶっ飛ばすだけだ」

そう言って前に向き直り、傷ついた少女を抱き抱えたまま足早に立ち去るカラン。

敵を敵とも思わぬ傲慢な言動にしかし、一瞬だけ先走ったあの憂いの表情が彼女自身に向けられた物のように感じれたノスラは瞼を閉じ、深く溜息をつく。

（考え有つての事が、単に甘い^{ひとえ}が故にか……それとただの強がりか。

……そなたは言った、彼らは今しか生きられぬ、故に己の未来をより良き方向に導く資格があると。

それが真に正しき事か……幼きよ、そなたが思い描く理想が行き着く先を今は黙して見届ける事としよう）

振り返る事無く進み続ける無限竜の少女が夜の暗闇に吸い込まれるのを見届けると、それに続いてノスラの姿も金色の霧に包まれて消えた。

「Cast Spell 920 【時流遡行】クロノヒーリング」

空間に亀裂が走り、ガラスのように砕け散る。

繋がれた時の狭間から止め処なく溢れ出る金色の霧と、パイプオルガンを奏でた時の様な荘厳な響きが心臓をも震わす。

過去と現在を繋ぐ時の粒子がインヴェルノの体を包み込み、傷ついた体を癒す――筈だった。

しかし金色の霧がやがて霧散し、再び静寂が室内を支配しても、硬く閉じたインヴェルノの右目は不自然に凹んだままだった。

予想を裏切った目の前の光景にカランの額に一筋の汗が流れる。

リアの時は成功していたため、こうして無効化されると返って焦りを掻きたてる。

「シット！ 何で治らないんだよ！？」

グッと拳を握り締め、地面を殴りつけると、硬い石製の床がゴキゴキと音を立てて崩れた。

その先に覗くガランとした広間をぼんやりと見つめ、カランは思考を巡らせる。

リアの時だって、ノスラの時だってちゃんと治せた。

なのに何で、何で治らないんだよ……

いや、諦めちゃ駄目だ、きっと何か方法があるはずだ。

そう自分に言い聞かせ、無限虚空からの魔力を体に纏わせながら立ち上がった矢先、扉が勢い良く開け放たれる音が背後から響いた。

「動くな！ カランをどう――

……………」

その存在だけで場の空気をも凝結させた声の主。

威嚇するような言葉はしかし最後まで発しえず、突如現れた黒き獅子は目の前の光景に絶句した。

Side：バレスト

コンコン

控えめにドアをノックする音が豪華な装飾が施された、息苦しさを覚えるような荘厳な雰囲気漂う室内に響く。

衛兵のように力強い物ではなく、かといって文官のように形式に拘った物でもない。

「……リアか、入れ」

そういつて手元の書類を閉じるとほぼ同時に両開きの扉が開かれ、季節違いの涼しげなワンピースを着込んだハーフエルフの少女が流れるようなブロンドの髪を揺らし、紫の毛布に包まれた何かを抱えながら入ってきた。

「お父様、夕食を持って参りましたわ、冷めない内にどうぞ召し上がってくださいまし」

「……もう良いと言ったはずだが。
食事位自分で済ませる」

「いいえ、なりませんわ、父上様はご自分で食事をなさると魔法パ
ンしか食べないのは知っておりますよ」

わざとらしい娘の声にバレストは一層不機嫌そうになるが、パチンと指を鳴らし、デスクの向かい側に椅子を召喚する。

「何時までそのそぐわぬ語調を続ける心算なのだ？」

「だって……宴会が近いでしょ？
父上様の名に恥じない振る舞いをしないとって、だから……」

「だから何なのだ？
いいか、お前の頭は誰に下げる必要もない。」

——お前が奴等に頭をさげると言う事は即ちこの私が奴等に屈すると言う事に他ならないからな」

自分の言葉に養女の表情が綻ぶのを見たバレストは眉間を寄せ、言葉を付け足した。

「それはいい。

明後日の予定だったが今は急ぐべき事務もない。

お前が自ら来たのなら今夜済ませるとしよう」

「私はまだ大丈夫よ、それよりも父上様の体の方が心配だわ——父上様が張っていらしたのでしょう、あの結界」

結界を維持する魔力を持続的に注ぎ込めるように大抵の結界魔法は術者の魔脈と繋がっている。

そのため、突然結界が破られると繋がれた魔脈が破れ、そこから魔力が流出すると言うリスクが有るのだ。

そんなリアの心配を察してか、バレストはフツ、と表情を緩める。

「この私を誰だと思っている？

魔導都市の頂点に立つ男なのだぞ、これしきの事で倒れるようなやわではないわ」

傲慢とも取れるその言動にリアは『それもそうね』と安堵の息を付き、デスクに乱雑に置かれた書類を片付け終わると毛布を解き、山積みの弁当箱に入った料理を慣れた手つきで並べていく。

その過程を無言のまま睨むように眺めていたバレストだが、ふと不

満の声を漏らす。

「コーヒー豆は無いのか？」

「ええ、だってお父様は一日に何十杯とコーヒーを飲じゃうもの、健康の為にこれからは持ち込まない事にしたわ」

「待て、それは困る」

「だめよ、眠くなったら寝るの」

寝てる暇などない、と言い掛けたバレストだが、毅然とした娘の態度に何を言っても無駄だと悟り、喉の奥まで出た言葉を呑み込む。

リアが私に口を利く事など今まで一度も無かったのだが……カランに影響されたのか、クロニカの入れ知恵か

……全く、女と言う生き物は厄介だな。

豪華とは言い難いが、どれもが心の籠った料理を口に運びつつ、デスクの向かい側に座る娘が楽しそうに話す日々の出来事からカランやクロニカ——無限竜関連の情報だけを拾い上げていると、扉が叩かれる慌しい音が室内に響いた。

「入れ」

突然のノック音に弾かれるように振り向いたリア、その背後から威

圧の籠った黒獅子の声が響く。

まるで待ちわびていたかのように扉は開かれ、裾の短いローブを着た衛兵が入ってきた。

上級魔導師である事を示すケープを羽織ったその衛兵は一礼すると、どこか切羽詰った表情でバレストの顔を見上げる。

「大変です、バレスト様！」

何者かがバレスト邸に侵入、門番の2人が負傷しました！」

「負傷？」

……「生きているのか？」

「はっ、どちらも失明・失聴に陥っており、会話がままなりません！」

その報告にバレストは無言のまま席を立ち、エディゲツフェ媒介の指輪に魔力を込めていく。

殺害したのであれば財宝か復讐目当ての民草魔導師という事である。
う。

不殺という事はベオルイルの戦力低下を望まない上層部の仕業という事に他ならない。

動機など見え透いている——カラン無限竜だな。

「父上様……」

「すぐに終わらせる、先に行って待っている。」

coordinare Il Movimento、【トランスファー】

心配そうに見上げてくる養女の言葉を鋭い視線で遮り、転送魔法で遠くへ飛ばすと、バレストは視線を目の前の衛兵に戻す。

睨まれたと勘違いした衛兵の体が遠目でも解かるほどに震えあがるが、そんな部下の反応を気にも留めず、すれ違い様に命令を下すバレスト。

「現場を封鎖しろ。」

……許可無く立ち入る者の命は無き物と思え」

真紅のマントを靡かせたバレストが通路の奥に消えて初めて金縛りから解放された衛兵は今更のように「はっ！」と返事すると、主の命令を遂行すべく急いで踵を返した。

まるで暴雨が降った後の様な庭と、その中心でガラス状に変化した石畳の地面を視界の端で捉えながら前庭を通り過ぎ、3メートルは有りそうな豪華な扉をくぐると、ドアの傍に仕込まれた魔石に魔力を流し込む。

豪邸と言うよりも尖塔と呼ぶに相応しい建物だが、10階建ての塔の内8階は侵入者を防ぐ為の迷宮と成っている。

正門と居住区を繋ぐ空間魔法は緊急時に自動で解除するように仕組まれているのだが、それが作動したままとは一体どう言う事か。

疑問を抱きながらも警戒を怠わらないバレストは広間に目を流し、気配を探る。

特に変わった気配はない——そう判断し、警戒を解いた瞬間

バゴツ!!

何の前触れも無く天井が砕かれ、小さな穴が空いた。

術式強化されたこの屋敷の壁は並大抵の攻撃ではビクともしない——それがこつもあつさり砕けると言う事は敵の^{アークメイジ}実力が大魔導師に迫ると言う事に他ならない。

掌程度の大きさしかない小さな穴に再び警戒心を呼び起こされたバレストは何時戦闘に成つても良いようにベルトのホルダーに固定した魔道書を構えると、手すりの無い螺旋階段を一気に駆け上り、白塗りにされた木製の扉の前で立ち止った。

部屋の中に動きは無い、だが逃げられたという事は無いだろう、この屋敷全体は転送遮断結界に覆われているのだからな。

そしてこの高さから外に飛び出るのは自殺行為に等しい——幾らあの五人と言えど、この町で騒ぎを起こしたくは無いはずだ。

という事はこちらを待ち構えているという事か。

陽炎石の指輪が魔力を帯び、真紅の光を放ちながら不規則に明滅し始める。

取っ手を捻り、勢い良く開け放つと同時に魔道書を構えた。

「動くな、カランをどう――

……………！」

目の前の光景にバレストは目を疑った。

蒼白の霧に両手を包んだ雪の妖精の様な少女ではなく、その先の、飾り気のない素朴なベッドに寝かされた黒髪のハーフェルフの少女に。

「…………誰だ、その娘は」

「―― i f y m o d ……はうあつ！？ バ、バレスト！？」

何かの呪文を詠唱していたらしいカランは突然掛けられた声に驚き、素っ頓狂な声を上げる

そんな彼女を他所に、ベッドの上に横たわる少女を射抜かんばかりの鋭い視線観察するバレスト。

その視線に気付いたカランは視線を俯せ、インヴェルノを凝視したままのバレストの問いに答える

「…………ただの知り合いだ」

いつもは反抗的で強気な少女の弱気な反応にバレストはインヴェルノに目を向けたまま眉間を寄せる。

芸術品のように整った、彫りの薄い顔に、艶の良い漆黒の髪。

今は亡き妻の面影を持つ目の前の少女。

「う……サクヤ、お母様——」

寢言なのか、今にも消え入りそうな小さな声で少女の口から呟かれた妻の名にバレストは目を見開く。

間違いない——間違えるはずがない

「……ノザリー！ ノザリーなのか！」

気付いた時には体が勝手に動き、黒い髪の少女の間近まで移動してその体を覆うように身を屈めていた。

魔されているのか微かに身を擦らせる少女を見ると、まるで針金で心臓を締め上げられるような痛みが——過去に捨てて来たはずの感情が心を震わした。

ふとその右目が不自然に凹んでいる事に気付き、息も出来ないような苦しい感情がギシギシと悲鳴を上げる心臓から湧きあがる。

「……彼女に何が起きた、答えろ」

空気をも凝結させ、その場の全てを押し潰さんとする黒獅子の威圧に俯せたまま答えようとしないカランをバレストは無意識の内に胸倉を掴んで自分に向けさせた。

「聞こえてるのか？」

答えると言っている」

幾ら正気とは思えない言動を取っても、暴挙には決して出ないバレスタの異常な拳動にカランは目を見開く。

その瞳を潤す透明な液体と、触れた所から感じる、驚くほどに冷たい体温に、遠い日に自分の手の中で冷たくなっていくノザリーの姿が重なり、振り払うようにカランを突き放したバレスタは震える手を握り締めた。

待て、何故私は彼女に対して怒りを感じるのだ？

……そうする事で弱い自分を覆い隠すためなのか？

私はまた逃げると言うのか？

責任を他人に押し付け、現実から目を背け、日を追うたびに衰弱していくノザリーに自分の不幸を嘆いたあの頃のように、目の前で傷ついたノザリーから目を背けるのか？

……違う、あの時の弱い私は死んだ。

そして今の私は――

未だ目覚めぬ人形の様な少女を両手で抱えるバレスタ。

予想外の拳動にカランは思わず声を張り上げて制しようとするが、真っ直ぐインヴェルノを見据える彼の瞳に宿る決意に口噤む。

「彼女を救ってくれた事に礼を言う……これから私が償う番だ」

Side：カラン

「Numeromagicodipersoneperriltra
sferimento」

バレストの転送魔法によって飛ばされた先は、得体の知れない液体がつまった試験管が乱雑に積み上げられた空間だった。

眠り続ける人形の少女をその手に抱き、躊躇う事無く突き進む黒獅子の後ろを小走りで追いかけるカラン。

こんな所で何をする心算なのか。

骨だけに成っても生きながらえている骨竜^{トランシエン}や、死体を縫い合わせた

——平たく言えばフランケンシュタイナーの様な人造人間に眉を顰める。

本当に彼にインヴェルノを任せていいのだろうか？

そんな疑問が脳裏を過ぎつては決意を宿した彼の瞳が浮かび、不安を拭い去っていく。

不意に視界の端に映る赤いゼリー状の物体。

ぶにゆぶにゆと揺れるそれにカランは一瞬だけ気を取られるが、すぐにバレストの後を小走りで追う。

しかし他の人造生命体達と違い、赤いそれはぶにゆぶにゆと体を揺らし、後を付いてくる。

「いま少し待て。」

振り向く事無く言い放たれたその言葉を理解したようにレッドスライムはその場に留まった。

「……インヴェルノをどうする気なんだよ」

トーンを落としたカランの問いかけを完全に無視し、無言で歩き続けるバレスト。

それにあわせて揺れる真紅のマントがまるで自分とインヴェルノを隔てる壁のように感じて、小さな胸の中で膨れ上がる不安を吹き払うようにカランは声を張り上げた

「聞いてんのかよバレスト！」

「彼女にこの世界の回復魔法は通用しない。」

……これから私の目を彼女に移植する、もし私に何かが起きた場合、お前が術式を続ける。

……解かったか？」

言葉に合わせて心臓が震わされる様な低い声で宣言されたその言葉にカランは一瞬耳を疑った。

「……何、言ってたんだよ……？」

「戯言を交わす暇はない」

吐き捨てると抱えていたインヴェルノを手術台のような台座にそつと降ろし、錬金術によって作られた青白い液体——エリクサーが入った樽ほどの大きさもある試験管や、カランがいた世界と殆ど変わらないメスや縫合用の糸と言った医療用具を用意していくバレスト。

訳がわからず、思考を巡らせるカランの顔に生ぬるい液体が当たった。

弾かれるようにその元を目で追うと、そこには寒光を放つメスで自らのまぶたを裂き、魔力で眼球を吸引しているバレストの姿があった。

思わず小さな悲鳴を漏らすカランを気にも留めず、歯茎から血が滲み出るほど強く歯を食いしばったバレストは赤い神経を引き摺った血濡れの眼球をエリクサーで清める。

そして同じくエリクサーで清められたピンセットで硬く閉ざされたインヴェルノの瞼を押し開き、エリクサーを流し込みながら呪文を唱え始めた。

「UniversalmementeComeUnaProposta
DiChiedereAllaGenteAnimalegata,
AscoltoLaVerità?DellaTruffaArti
sticheMettonoIndubbioIlSensode
llaVitaMi,
IndipendentementedelleScrittur
eSiComprendeIlFattoDiContraddi

z i o n e E D i M e t t e r e
Ind i s c u s s i o n、【生命付与】
イエルヴァメント

青白い液体で満たされた赤い洞から無数の神経が意識ある生き物のようにうねり出し、バレストの手から眼球を奪うように絡め取っていく。

それに逆らう事無くバレストが手を離すと、手元を離れた黒い眼球は辺りを見回すようにクルリと回転してから吸い込まれるようにインヴェルノの目に収り、不自然に凹んでいた右目も元の形を取り戻した。

おぞましく禍々しいその光景にしかし、カランは形容し難い感動を覚え、不意に視界が霞む。

そんな彼女に空洞になった右目から血を流しながら振り向いたバレストは一瞬だけ困ったような表情を見せるが、それを紛らわすように鼻で嘲笑う。

「涙もろい小娘には刺激が強すぎたか。
それはいい、祝え、新たな禁術の誕生だ」

人を小馬鹿にしたような言動と狂気に染め上げた心算の瞳を正面から見据えるカラン。

いつもなら頭に血が上って反射的に罵詈雑言を浴びせていただろう、だが人を突き放すその言動にインヴェルノと似た物を見出した今のカランはそんなバレストに怒りよりも憐れみ感情を抱いていた。

「……強がってんじゃねえよ」

実験なら俺の目を使えばいいのに、何でアンタは自分の目を使ったんだよ？

「何を勘違いしている？

マジック・アイ

術式の目を試すのに右目が邪魔に成っただけだ。

次からは遠慮なく貴様の目をもぎ取る」

「……それは無理だな」

訝しげに眉を顰めるバレストを視界の端で捉え、手術台の上で静かな寝息を立てる黒髪の少女に視線を落とす。

「決めたからさ、もう二度と傷付けさせないって」

22・咎みを償う男（後書き）

やっと事件編終わったー

シリアスな描写ってやっぱり難しいですね（盛大な溜息）

どうも、最近絵やゲームにハマって更新が疎かに成りがちな内臓破裂です。

ぶっちゃけ言う文章自体は4日ほど前に書き終えているのですが、バレストやカランの台詞でかなり時間を費やした結果軽いスランプを起こしてこんな事に成っちゃいました。

使う予定ある・無いに関わらず絵の方は活動報告のところに載せて置きますので、イマジンブレイク（笑い）されたい方はどうぞ覗いて見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227u/>

Ist Kalan ~ 虚空に羽ばたく少女 ~

2011年10月16日21時30分発行